西表島総合調査報告書

―自然・考古・歴史・民俗・美術工芸―

2001年

沖縄県立博物館

西表島総合調査報告書

ー自然・考古・歴史・民俗・美術工芸ー

2001年

沖縄県立博物館

ま　え　が　き

沖縄県は、その地理的条件をいかし日本本土や中国、あるいは東南アジア諸国と盛んに交易を行ってきました。そして、これらの諸国の影響を受け、琉球王国時代から独自の文化を育み、数多くの貴重な文化遺産が今日に残されています。

県立博物館においては、これらの貴重な沖縄の文化遺産や、自然、歴史、文化に関する調査研究、資料の収集・整理保管、及び公開展示等を行うことにより、県民はじめ多くの方々に、本県の文化に対する関心と理解を深めていただくための活動をしております。

今回の西表島総合調査は、県立博物館の調査研究活動の一環として、平成10年度から平成11年度までの２年間にわたり実施した特別事業であります。

調査の内容については、特に、西表島の亜熱帯特有の自然や地域独特の歴史および伝統文化等を中心に、自然、考古、歴史、民俗、美術工芸の５分野にわたり、可能な限り詳細に調査を実施しました。

西表島については、これまでにも自然（野生生物相、地質・地形等）、社会、文化等に関する調査が実施され、その成果が報告書としてまとめられていますが、未調査の分野があり、基礎資料は十分とはいえませんでした。

したがって、今回の総合調査により、これまでの未調査分野の基礎資料が少なからず、整理されたのではないかと考えております。

今回の西表島総合調査を実施するにあたり、多大なご協力を頂きました竹富町役場・同教育委員会、西表島の皆様及び関係各位に深く感謝を申し上げますとともに、この西表島総合調査報告書が活用され、そのことによって多くの方々が西表島に対する関心と理解を深めていただくことを願っております。

平成13（2001）年３月

沖縄県立博物館
館長　平　田　與　進

西表島総合調査報告目次

まえがき……館長　平　田　與　進
西表島総合調査にあたって……石　垣　金　星　1

自　然

西表島の地形と地質－露頭の紹介を中心として－……神　谷　厚　昭　3
西表島の鳥類調査……与那城　義　春　21
西表島・鳩間島及び新城島における動植物の方言名について
……石　垣　金　星・嵩　原　建　二
花　城　良　廣・加　治　工真市　35

考　古

西表島の遺跡……大　城　　慧　61

歴　史

船浮湾の戦争遺跡……大　城　将　保　81
西表島癩村設置構想……前　田　真　之　89
西表島における戦後宿泊施設の概略史……園　原　　謙　101

民　俗

西表島祖納・星立の節祭（シイチイ）……當　間　一　郎　121
西表島におけるカキィ（魚垣）について……仲　底　善　章　131

美術工芸

節祭の衣装考……伊　波　悦　子　149
戦前期（大正期～昭和初期）における西表島の織物（聞き書き）
……與那嶺　一　子　169
西表島のパナリ焼……瑞慶山　　昇　183

沖縄県立博物館　西表島総合調査　調査員

総　論	石垣金星	(西表をほりおこす会)
自　然	神谷厚昭	(沖縄県立博物館指導主事)
	与那城義春	(沖縄県立博物館指導主事)
	嵩原建二	(沖縄県立博物館指導主事)
考　古	大城　慧	(沖縄県立博物館学芸課長)
歴　史	大城将保	(沖縄県立博物館．前館長)
	前田真之	(沖縄県立博物館教育普及課長)
	園原　謙	(沖縄県立博物館主任(学芸員))
民　俗	當間一郎	(沖縄県立博物館．元館長)
	仲底善章	(沖縄県立博物館指導主事)
美術工芸	與那嶺一子	(沖縄県立博物館主任学芸員)
	伊波悦子	(沖縄県立博物館指導主事)
	瑞慶山　昇	(沖縄県立博物館指導主事)

西表島総合調査にあたって

西表をほりおこす会：石　垣　金　星

平成10年より始まった西表島総合調査は自然、考古、歴史、民俗、美術工芸等の幅広い分野にわたり西表島の全体像を初めて浮き彫りにした、これまでにない大変意味のある調査と言えます。各分野専門の研究者が島を歩き記録された、この報告書が将来若い研究者たちにより、奥の深い西表島の研究を更に深めていく為に大いに活用される事を期待します。

最近、学問を志す今の若い研究者と話していながら大変気になる事があります。
ある日突然、見た事もない、聞いた事もない学生、研究者から調査アンケートがファックス、メール等で届き、びっくりします。急速に流行りだしたインターネット時代はこれまでの調査方法とはがらりと変わりつつありますが、自分の足で島々を、山々を歩き回るという調査の基本をもっと大切にすべきというのが実感です。人の顔も見えない調査や学問が一体誰の為に役に立つであろうか？

1999年、突然起きた台湾大震災の時、西表島もゆれ動きました。台湾の友人たちへ電話を廻しつづけ、３日目に偶然にも電話がつながり大変な惨像を知りました。特に災害のひどかった台湾原住民族の支援活動に参加し、研究者として災害に直面し様々なことに出会った人類学者黄智慧氏からこのようなメッセージが送られて来ました。「学問がどれ程人々の為に役に立つか今こそ学問の真価が問われている！」・・と、瓦礫の中に立ち自問自答と苦悩する人類学者に私は「本当の学問」を見ました。

これまで研究とは他所からきた研究者や大学の先生方がするもので、島に住む私達は調査の対象とばかり思っていたのは私の大きな誤解でした。島に住む人が自らペンを執り歴史と文化を掘り起こし、研究する目的から花井正光氏（文化庁記念物課／動物生態学）、安渓遊地（山口女子大学／文化人類学）氏が産婆役となり、1985年「西表をほりおこす会」を発足しました。そして高良倉吉氏（琉球大学／歴史学）へ話を持ちかけ、沖縄歴史研究会の 若手研究者らが３カ年に及び西表島現地を歩き回り勉強した事が沢山の西表情報の蓄積となり、1988年から県文化課による祖納上村遺跡発掘調査への誘い水となりました。

仲間第二貝塚、仲間第一貝塚で知られるように四千年以上も前から西表島では人々の暮らしがあり、さらに貝斧（シャコ貝で作った斧）が発見され、先史時代に「貝斧文化」をもった人々が東南アジアの島々から移動して来た事も分かって来ました。奥深い自然と人

がどのようにつき合って来たかを理解する為に記録したのが「西表島の動植物名」です。そして西表島の人々が何処から来たのか？キーワードが三つあります。西表島で唯一南の島から漂着して出来たと伝承される鹿川村（カヌカ／カノー）、稲作儀礼で用いられる「ジッチャーン(ダンチクで作った笛)」そして「カマイ(猪)」の名称です。私の住む祖納部落ではカマイ捕り名人が多い事から「スネカマイ／祖納の猪」という愛称がついています。ところが、何故か「カマイ」の由来が不明です。2000年11月28日南太平洋諸国からやって来た皆さん方へ「カマイ」について聞いた所、ポリネシアで「カマイ」という言葉があり、「イルカ、シャチ」である事を知りました。昔々、西表ではカマイは海にいて、イルカは山にいたと伝えられます。猟を終えると最後はカマイの頭を海へ持っていき、海へ帰し、また来年も来るようにという祈願をします。はるか昔、南の国々との交流等はこれからの研究の課題とされる事でしょう。

西表島の地形と地質
－露頭の紹介を中心として－

Geography and Geology of Iriomote island, Okinawa Prefecture, Japan.

神　谷　厚　昭

Koshou KAMIYA

はじめに

西表島の地質については、古くは脇水（1913）による断片的な研究とHANZAWA（1935）の総括的研究がある。太平洋戦争後は、米軍の資源調査（WILLIAM and WARREN, 1960）に始まり、佐々木・市川（1964）、松本（1964）、SAITO et al（1973）、荒木・中川（1978）となされてきた。今回の筆者の調査は、調査日程が短かく全域的な地質調査が困難なため、主な地域の代表的な露頭に対象をしぼって実施してきた。この報告書は、過去の研究の概要と、今回の調査結果と調査結果をもとに検討してしてわかったことを総括してまとめたものである。現地の調査に当たっては、西表島在の石垣金星氏にはたいへんお世話になった。深く感謝いたします。

Ⅰ　西表島の地形

1．準平原

琉球列島のいくつかの島じまには、頂上付近が比較的平らで、小さな起伏をもった山地が見られる。例えば、奄美大島本茶峠付近では標高300mぐらいの平らな地形が南北に連なり、沖縄島本部半島の八重岳周辺では高度400～450mの地形が、慶良間諸島の渡嘉敷島国立青年の家付近では200m程度の平坦面が見られる。このような地形を「準平原」または「侵食小起伏面」という（河名、1988）。ここでは、河名（1988）に従って西表島の準平原について述べる。

西表島は、琉球列島の中で準平原の地形がもっとも発達している島の１つである。島の大部分は、山頂付近が平らな地形で、標高が300～400mぐらいのよくそろった高度を示す。この準平原を構成する地層は、後述の八重山層群（前期中新世）である。従って、準平原の形成は前期中新世以前より新しいことがわかる。また、島の周辺には標高が一段と低い数10mの高度に第四紀に形成された段丘が存在する。準平原はこの段丘より高い位置に分布しているので、段丘より古いことが推定できる。つまり、準平原は、第四紀以前

～前期中新世の間のある時期に形成されたことが考えられる。

河名（1988）は、地形が平らになるまでの準平原の形成機構について検討し、侵食にかかる時間の長さの推定から、海水による侵食の可能性よりも、陸水による可能性が高いことを示唆している。そして、いくつかの説について述べているが、陸上での様々な作用の結果、最終的にどのようにして平らになったかについては、いまの段階では結論が出せないことを述べている。

ところで、西表島の東の石垣島では、八重山層群堆積時に地下で花崗岩の貫入が認められる。現在この花崗岩は於茂登岳の頂上付近に分布するから、当然地下で貫入のした後に現在の位置まで上昇したことが考えられる。その時期に八重山層群も一緒に上昇し、準平原が形成されたのではなかろうか。では、その時期がいつかというと、琉球列島が大きく陸化した中新世後期がまず考えられる。西表島は祖納礫岩が堆積する時代まで基本的にはずっと陸の時代である。祖納礫岩の堆積時期についてはいまだに明らかでないが、構成する礫質がすべて八重山層群に由来する岩石であること、また、構成礫が２m以上にもなる巨礫が含まれることなどから、祖納礫岩は八重山層群が急激に上昇する時期に侵食を受けて堆積したものであることが推定できる。つまり、祖納礫岩は島尻海が大きく陸化し、琉球列島が大陸の一部になった鮮新世末に堆積したのではなかろうか。これらのことから西表島の準平原の形成を考えると、中新世後期から鮮新世にかけて隆起を始めて原初準平原化した西表島が、鮮新世末から更新世初期にかけての琉球列島が広く陸化した時期に、大きく高度を増し、現在に近い島の現地形ができたと推定される。

一方、西表島の河川には滝が多い。中でもヒナイ川の海に面した高い崖にできたピナイサーラは落差が50mもある見事な滝である。このように、海に面して滝がかかるような地形が発達しているのも西表島が急激に上昇してできた島であることを伺わせる。

２．起伏量ー谷密度相関図から見た西表島

起伏量ー谷密度相関図から地域の地形的特徴や地質と地形の関連等を考察するのは有効である（神谷、2000）。起伏量ー谷密度相関図から見た西表島の地形的特徴を捉えるために、西表島と同様に主に先中新世基盤岩類からなる他地域（石垣島、沖縄島北部）と比較した（図１～３）。

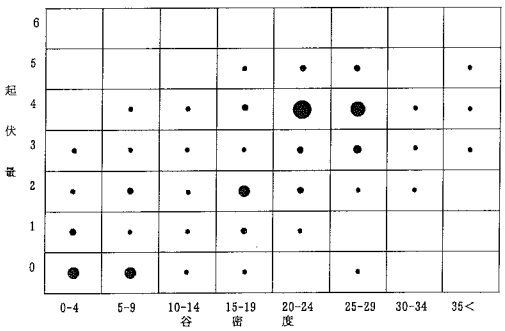


図１　起伏量ー谷密度相関図（北部）

西表島の起伏量と谷密度の相関係数を求めてみると、＋0.733で、石垣島の＋0.673、沖縄島北部の＋0.619に対して大きく相関関

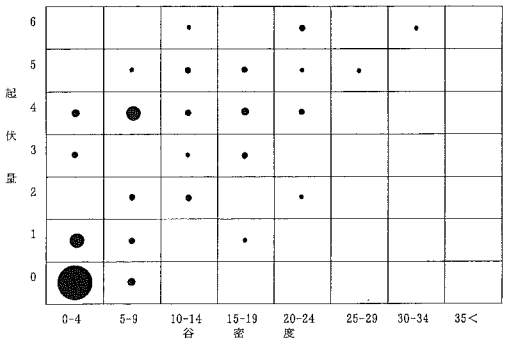


図２　起伏量ー谷密度相関図（石垣）

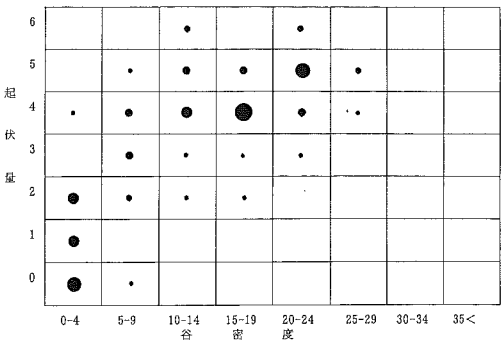


図３　起伏量ー谷密度相関図（西表）

係が強い。これは、一の相関関係要素である琉球石灰岩と段丘砂礫層の分布がほとんど認められないことと深い関係がある。図２から明らかなように、石垣島では琉球石灰岩の分布のため、谷密度の小さい割りに起伏が大きい所があり、沖縄島では砂礫層の分布のため、起伏の小さい割りに谷密度が大きい地域が多いため、両者では相関係数が低くなっていると推定される。また、西表島と石垣島は、沖縄島北部地域と比較すると、相対的に起伏量ー谷密度相関図の中のプロットが左上にずれている。これは前者地域が後者より起伏が大きい割りに谷の数が少ないことを示している。これは西表島と石垣島の間に、地質の違いはあっても共通の地形形成が進んでいることを示している。見方を変えれば、沖縄島北部地域に比べると、西表島や石垣島の谷は、数（谷密度）は少ないが１つ１つの谷は深く急峻であることを示しているわけである。つまり、遠望すれば、山肌全体はなめらかな感じに見えるが、１つ１つの谷は彫りが深いといったところである。

３．熱帯河川〈エスチュアリ〉

目崎（1985）は、他府県の地形と沖縄の地形の相違点を見るためには、気候地形学の視点の重要性を指摘している。つまり、他府県と比較して、沖縄では熱帯的な要素が各種地形に強く現れているのである。西表島に目を向けてみると、熱帯的な要素は浦内川や仲間川といった河川に強く現れている。つまり、両河川をはじめ、西表島の河川は熱帯河川の特徴を持っているといえるのである。

浦内川を例に説明すると、河口に近い船乗り場から観光船に乗ると、しばらくの間、船は川を遡っているというより、湖面を進んでいる感じで上流に向かう。川の水面は潮の満

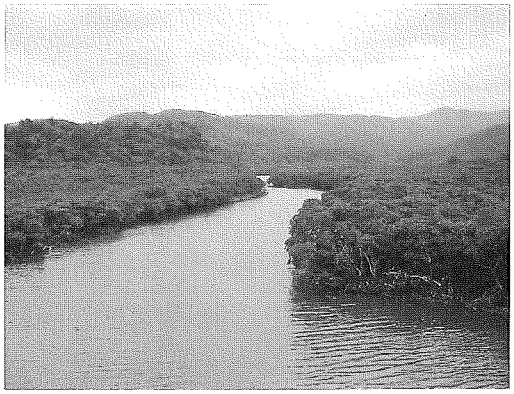


図４　後良川の河口部（エスチュアリ）

ち引きによって変化し、川の中の砂礫堆積物の形も時々刻々変化している。つまり、河床形態が河川と海の流れ、両者の複合によって形成される。このような河川は日本本土では見られず、熱帯特有の特徴といえる。熱帯では化学的風化が物理的風化よりも顕著であるため、礫の生産量がほとんどなく、砂や泥などの細粒物質だけが河川に供給されるためにこのような特徴をもった河川ができるわけである。熱帯的特徴をもったこのような河川をエスチュアリーという。潮の干満で汽水域となった河口部にはマングローブ林が発達し、熱帯河川に彩りを与えている（図４）。

II　西表島の地質

西表島に分布する地層は、下部から順に、①石垣層群トムル層、②宮良層および野底層、③八重山層群、④祖納礫岩、⑤琉球層群住吉層、⑥海浜および低地堆積層に区分される。ここでは①～⑤の概要について、主に荒木他（1978）の報告を基に述べ、筆者の調査した結果を加えて記述する。

1．トムル層

トムル層は西表島に分布する地層の中で最も古く、島の北東部の野原崎一帯に分布する。模式地の石垣島平久保半島トムル崎に分布するものと共通の岩相を示し、野原崎付近では、緑色片岩、黒色片岩および藍閃石片岩が分布している。鉱物組み合わせを見ると、野原崎で藍閃石－陽起石－絹雲母－緑泥石－緑簾石－石英片岩、藍閃石－緑簾石－緑泥石片岩などが認められ、ヨナラ川上流では，藍閃石－緑簾石－緑泥石－方解石－石英片岩あるいは絹雲母－緑泥石－陽起石片が確認されている。また、野原崎には片理の発達した剥離性に富む片岩類と、塊状の変ハンレイ岩とが認められる。変成度は東側がより高い。今回の調査では、野原崎南方には主に緑色片岩が分布し、同西方には藍閃石片岩が認められる。前者には幅１m以下の流紋岩岩脈が貫入しているのが２本観察できる。この流紋岩質岩脈は、後述の野底層とほぼ同時代に貫入した岩脈類の１つと推定される。

一般走行はNE－SWで、傾斜は北西または南東を示し、分布範囲内で何回か褶曲を繰り返していることが推定される。

2．宮良層と野底層

宮良層相当の大型有孔虫を含む石灰岩をはじめて西表島で認めたのはSaito etal（1973）で、与那良川の上流に小範囲に分布するのみである。大型有孔虫の種類は*Nummulites saipanensis*（Core）と*Asterocyclina aff. speighti*（Chapman）が報告されている。宮良層の上には整合の関係で火山岩類からなる野底層が見られる。下部は安山岩質の火山角礫岩～凝

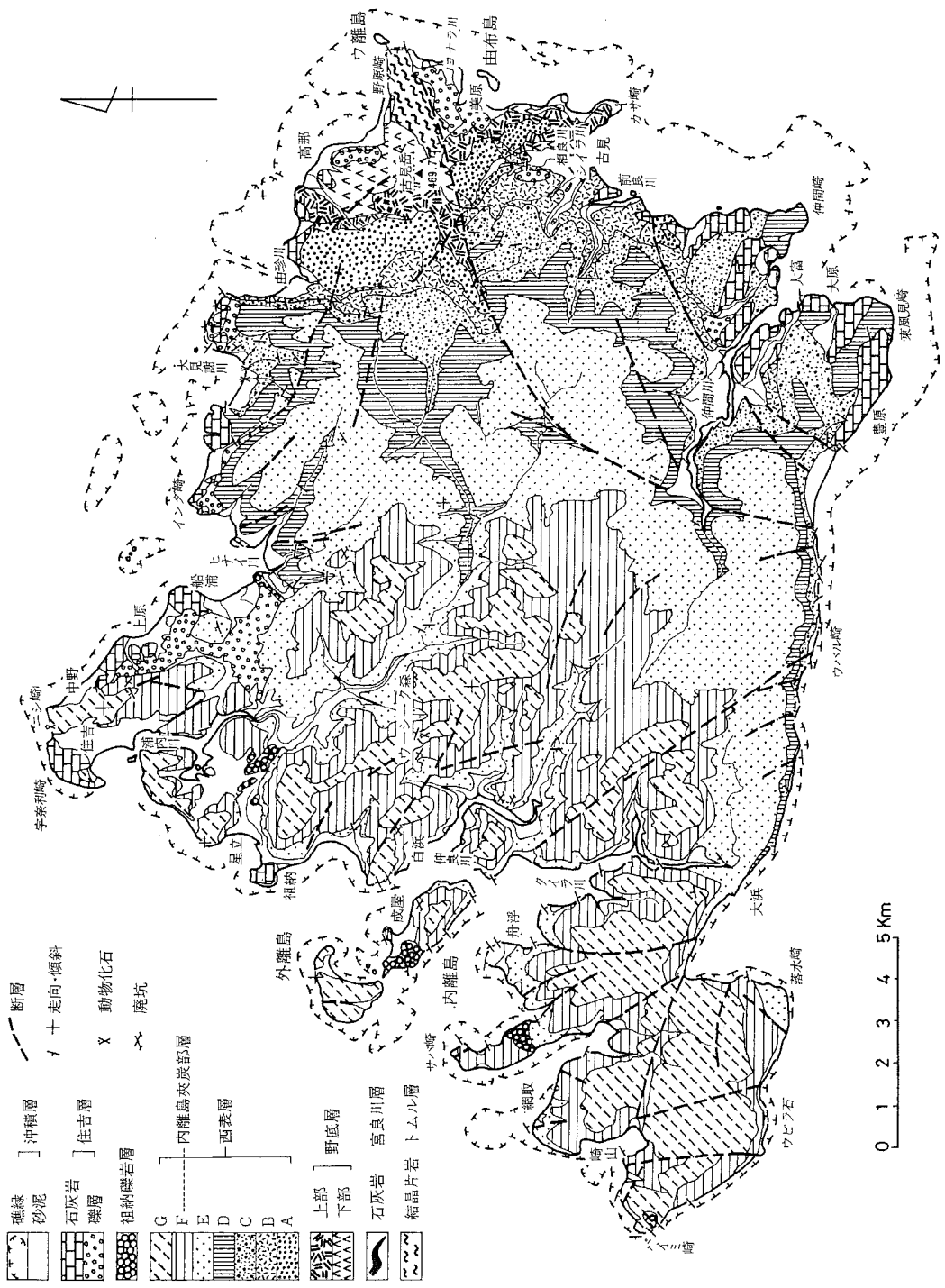


図５　西表島の地質図（荒木他、1978より）

灰角礫岩および同質溶岩からなり、上部は石英安山岩質火山角礫岩～凝灰角礫岩および同質溶岩または流紋岩質火山角礫岩～凝灰角礫岩および同質溶岩からなる。野底層には最後の噴出時期の産物である玄武岩岩脈や石英安山岩岩脈が認められる。かつて、美原南西方500mの地点で確認できた玄武岩岩脈は、今回の調査では露頭の風化が激しく確認できなかった。野底層の火山岩類はカルクアルカリ岩系に属し，SiO_2含有量は53～74％の幅で変化する。

今回、野原崎西方約750m地点で工事のためできた露頭において、２～３mの未露出部を挟んでトムル層の変成岩と野底層の火山角礫岩が分布するのが認められた。その境界は、荒木他（1978）による地質図の位置より東側に約700mずれた位置である。野底層の部分には基底礫岩は認められなかった。また、両者の間に宮良層が挟在する可能性もなかった。直接トムル層と野底層が接触しているものと推定される。

３．西表層

西表島にもっとも広く分布する地層である。HANZAWA（1935）が八重山夾炭層（Yaeyama Coal-bearing Beds）とした地層である。荒木他（1978）は、これをWILLIAM and WARREN（1960）に準じて八重山層群西表層として記載し、北海岸の由珍川の東からニシ崎までの一帯を模式地として下部よりA層～G層までの７層に区分している。八重山層群に対比される地層は、西表島以外にも小浜島・鳩間島・仲の神島・与那国島・尖閣諸島等に分布している。相互の正確な対比作業は行われていない。

荒木他（1978）の区分を基に、表１に各層の分布・岩質・層の特徴・層厚などの概要を掲げる。

４．祖納礫岩

西表島西部、祖納の海岸を模式地とし、ヒナイ川河口付近・干立東方・内離島・舟浮と網取の中間のサバ崎基部等に分布するする礫岩をいう。分布の様子に特徴があり、祖納・内離島・サバ崎基部の礫岩が一直線上に並ぶこと、また、いずれの露出も基盤の八重山層群西表層にできた谷間を埋めるような形態で分布しているのが観察できる。これらの特徴は、祖納礫岩の分布がが断層に規定されていることを示す。

一般に、礫の大きさは数cm～30cm程度の円礫が多いが、ときに、径２m以上の巨礫も認められる。礫質は砂岩・石灰質砂岩・石灰岩等で、いずれも西表層に由来するものである。石灰質砂岩礫は西表層のG層に由来する礫で、西部に分布する礫岩ほどその割合が多く、ヒナイ川河口付近ではほとんどが砂岩礫である。石灰岩礫からは、二枚貝類や大型有孔虫の*Lepidocyclina taiwanensis* YABE and HANZAWA, *Miogypsina inflata* YABE and

表１　西表層の特徴

層名	分　　布	岩　質　・　層　の　特　徴	層厚
A層	由珍川の東側から古見岳中腹一帯．姶良川沿岸	基底礫岩．礫径２～20cmの球形円礫，岩質はチャート，変成岩．下部に青灰色のシルト．	160 m
B層	由珍川西岸～古見岳山頂およびその南西方，姶良川下流～前良川～仲間川下流，ウバル崎西方南岸	砂岩，砂岩・シルト岩互層，異常堆積を示す砂岩よりなる．シルト岩は炭質物を多く含み，レンズ状を呈し，砂岩と指交する．北部では中部に６～８ｍの無層理砂岩が発達．	50-70m
C層	大見謝川河口付近，B層の西側，大富付近	礫岩，砂岩シルト岩互層，植物片を含むシルト岩．下部に礫岩が卓越．A層の礫岩より球形度が低く，基質が多い．石灰分で膠結され硬い．上方へ礫質砂岩となる．大見謝川河口で貝化石を産出．中部のシルト岩には植物片とCorbicula sp.を産出．	70-90m
D層	ヒナイ川河口より東側，浦内川上流部，仲間川中流沿岸，大浜（ウフバマ）東側	下部は淡黄色砂岩，上部は砂岩シルト岩互層．互層は厚さ30－60cmの暗灰色シルト岩と明灰色砂岩がほぼ等量に重なる．シルト岩にはslump ball, load deformationなどの堆積構造がある．	70-100 m
E層	ヒナイ川・浦内川・仲間川・クイラ川上流部，西部・南西部海岸	斜交葉理の発達する中～粗粒の淡黄色～淡橙色砂岩．内陸部では造瀑層を形成（ヒナイ滝，カンピレーの滝，マリウドの滝など）．	100-150 m
F層	模式地は内離島北東海岸．	砂岩シルト岩薄互層，砂岩，石炭，炭質シルト岩よりなる．石炭は５層準に認められ，最大層厚30cm．	60-140 m
G層	西部の山頂から北西海岸にかけて分布．	下部は砂岩シルト岩互層，中部は砂岩，上部は一部で斜交葉理を示す砂岩．G層の下底は数cm～２－30cmの起伏があり，下位層を削りこんだ状態を示す．最下部の砂岩には漣痕や級化層理が発達，中部の砂岩には貝・蘚虫類・有孔虫などを含む．	150 m

HANZAWA 等が発見されている。

いままでのところ、祖納礫岩から堆積時代を決定するような化石は発見されていない。しかし、前述した準平原地形の形成とあわせて考えると、島尻海が大きく陸化し、琉球列島が大陸の一部となった鮮新世末～更新世初期にかけての時期、西表層上部層のG層が急激に上昇することによって礫が供給され、形成されたものと推定される。

5．琉球層群住吉層

県内に広く分布する琉球層群相当の地層で、石灰岩と非石灰質礫層からなる。模式地の住吉では、下部から順に、非石灰質砂岩・砂質石灰岩・サンゴ石灰岩・含サンゴ砕屑性石灰岩・層状石灰藻石灰岩の順序で重なっている。石灰岩層は、住吉地区以外に、上原から高那にかけての北海岸沿い・干立～祖納海岸・古見・大富・大原等に点々と分布する。

一方、礫部層は上原集落の山手を中心に標高40m前後のところに分布する。径５～20cmの砂岩円礫を含む固結度の低い礫層である。今回の調査では、北海岸沿いや祖納岳山麓等に道路工事で現れた新しい露頭に、径が２mを越す巨礫を含む礫層が確認された。礫種は西表層に由来する砂岩で、径の小さい礫は円礫であるが、径が数10cmを越える礫はほとんどが角礫～亜角礫である。前者が祖納礫岩から供給された再堆積の円礫である可能性があるのに対し、後者は供給地が堆積の場に近接していたことが推定できる。いわゆる崖錐性の堆積物である。つまり、住吉層の堆積時に、祖納礫岩の形成時と同様に島の急激な隆起があったものと考えられる。

III　西表島の主な露頭

1．南風見在竹富町立交流センター裏の露頭

荒木他（1978）のD層に相当する露頭。交流センター裏に見られる露頭は、高さが３mほどの小さな露頭で、全体として泥岩優勢の泥岩砂岩互層である。下部から順に灰色泥岩層（30cm）、淡褐色砂岩（90cm）、チョコレート色泥岩層（30cm）、淡褐色砂岩（10cm）、チョコレート色泥岩層（10cm）、淡褐色砂岩（20cm）、灰色泥岩層（20cm）、淡褐色砂岩（20cm）、暗灰色泥岩（1m）からなる。下位から３枚目の泥岩は、細かい炭化物片を多数含んでおり、花粉化石が検出されることが期待できる。最上位の泥岩層には、厚さ約40cmの砂岩層が切れ切れになって含まれており、明らかなスランプ構造（Slump Ball）を示している。また、上位から２番目の砂岩層は、厚さが20cm～10cmの範囲で変化しており、荷重痕が観察できる。

図６　スランプ構造の見られる露頭

2．野原崎の露頭

野原崎付近に、東側に面した海岸約600m、北側に面した約500mの範囲に、変成岩が分布している。石垣島に分布するトムル層に相当する地層で、ここでは泥質片岩、緑色片

岩および藍閃石片岩が認められる。泥質片岩と緑色片岩は主に東側に面した海岸の南側に分布し、藍閃石片岩は、野原崎から北側の海岸に沿って分布している。緑色片岩には、一部に塊状岩体も含まれる。走向傾斜は南側の緑色片岩で、N－S、45°E、N10°E、30°E、野原崎付近の藍閃石片岩でN34°W、42°W北海岸の西側に分布する藍閃石片岩でN38°E、80°E、走向は北西－南東～北東－南西まで、傾斜は東～西へと変化し、波長が数10m～数100mの褶曲構造を形成していると考えられる。

図７　塊状岩体を含む緑色片岩

野原崎において、変成岩の中に流紋岩岩脈が貫入している。１本は厚さが約２ｍで、N20°E、垂直を示し、他はN45°E、80°Sで厚さが数10cm程度で、さらに複雑に枝分かれした形態を示す。

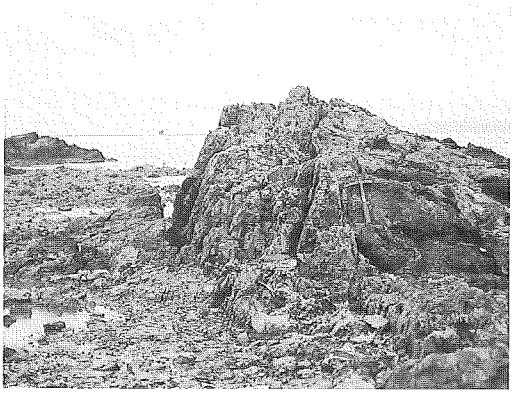


図８　岩脈の貫入した緑色片岩

東海岸南部にはビーチロックが見られ、離水して鍋底状の侵食地形（Solution Bassin）が形成されている。

３．高那の露頭

高那には、野底層相当層の火山砕屑岩および溶岩が分布する。ほぼホーラ川を境に東側に安山岩質岩石を主とする下部層が、西側にデイサイト～流紋岩質岩石からなる上部層が分布している。高那に分布する野底層に伴って温泉が形成され利用されている。

高那の銅鉱床は、下部層中に形成されている(図9)。道路沿いに見られる鉱床の露頭は、高さが約５ｍ、幅が10mである。上部には不整合で琉球石灰岩がのっている。琉球石灰岩には砂岩やチャートの細礫が多く含まれる。下部が火山砕屑岩で、安山岩質の凝灰角礫岩である。凝灰角礫岩の露頭は、鉱床形成に伴う鉱化作用による変質で、全体的に白色に変色し、また、露頭の下部の方では著しく粘土

図９　高那の銅鉱床

化している。露頭の中央部にフィッシャー（割れ目）があり、その割れ目に沿って鉱床が形成されている。採取できる鉱物には黄鉄鉱があり、２～３mmの立方体の結晶を形づくっている。以前は黄銅鉱、ハンドウ鉱などの結晶も採取できたがいまでは難しい。しかし、フィッシャーに沿って緑青が生じていることから、かつて黄銅鉱が産出したことが確認できる。現在、この露頭は崩落防止のため金網で保護され、近づいて詳しく観察することは困難である。

ホーラ川西側では、道路沿いに変質した流紋岩質火山岩類が広く露出する。また、海岸では比較的新鮮な流紋岩溶岩が容易に観察できる。

４．星砂の浜～ニシ崎の露頭

①星砂の浜から東側のニシ崎にかけて、いろいろな地質現象が観察される。まず、「星砂の浜」の砂粒であるが、その多くは刺のついたバキュロジプシナと呼ばれる有孔虫の遺骸からなる。有孔虫全体の形が星形になっていることから、一般に「星砂」と呼ばれている。沖縄の海浜砂には至る所で「星砂」のような有孔虫は含まれているが、ここの砂のように量の多い所は珍しい。星砂の浜のすぐ東側には離水したビーチロックが発達し、その表面には無数の鍋底状の侵食地形（Solution Basin）が形成されている（図10）。このSolution Basinの発達は、ここのビーチロックがすでに離水した過去のビーチロックであることを示している。

②さらに東側に進むと荒木他（1978）の西表層G層に相当する地層群が露出する。海岸でまず最初に露出する層準は中部層のクロスラミナ・貝類・ウニ・ノジュール状の礫等を含む石灰質砂岩層とその上位の砂岩泥岩互層、下位の泥岩層が見られる。石灰質砂岩と泥岩は陸側に分布し、砂岩泥岩互層は海側に分布する。泥岩と砂岩泥岩互層部は干潮の時しか観察できない。干潮時には、泥岩砂岩互層が見事な洗濯板状になっているのが観察され、宮崎県青島の「鬼の洗濯板」を思わせる（図11）。石灰質砂岩層は、後述のような特異な侵食模様を呈するほか、現在の海水による影響で、化石密集部の下部にノッチが形成されている。

石灰質砂岩の上部は侵食により無数の溝状模様が形成され、亀甲状の珍しい侵食模様を呈している（図12）。同じような亀甲状の侵食現象は「星砂の浜」の西方でも観察できる。そこでは、上位に琉球石灰岩相当の住吉層が乗っている。亀甲状に見えるのは、節理のような砂岩の中の弱線に沿って侵食が進み、比較的硬い中心核の部分が亀の甲羅状に残っているからである。ニシ崎の手前で砂の中から出てくる湧水で、西表層の砂岩が侵食されているのが観察される。このような陸水による砂岩の侵食現象は西表島の砂浜の各所で観察される。このような侵食が進むと亀甲状の侵食になるもと推定できる。また、「星砂の浜」

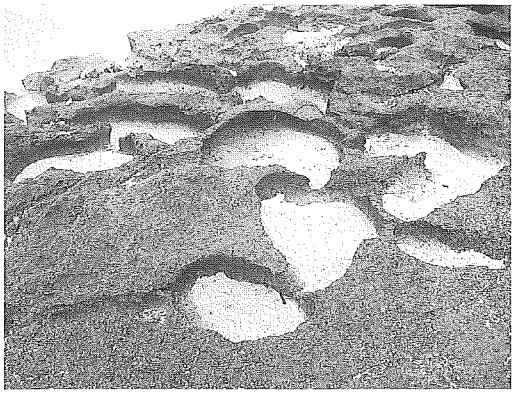


図10　Solution basin

図11　鬼の洗濯板状泥岩砂岩互層

図12　亀甲状の石灰質砂岩

図13　石灰質砂岩中のウニ

図14　ニシ崎の生痕化石

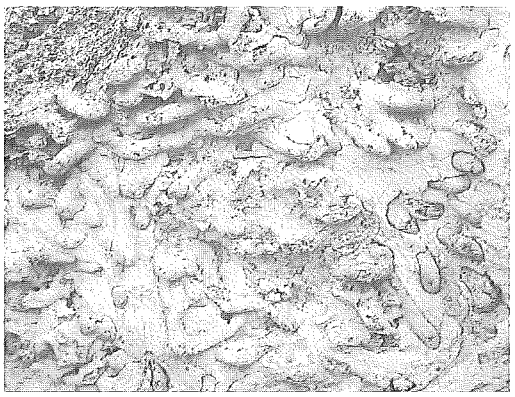


図15　不整合面の生痕化石

西側で観察される亀甲状侵食模様は、現在満潮で海水面下になる高さから、海抜約２mの地点まで分布している。従って、少なくとも亀甲状侵食模様が現在の海水の影響で形成されたとは思えない。それ故、石灰質砂岩の表面が亀甲状になっている主な原因は陸水による侵食作用の結果であると考えられる。そして、透水層である住吉層の下位にもその現象が認められることから、住吉層が陸化した後のある時期に形成されたものであることが推定される。亀甲石の下部は化石層で、*Chlamys sp.*や*Amussiopecten aff.kankoensis* TAN

などの二枚貝やウニの化石などが密集する（図13）。

③しばらく亀甲石状砂岩の転石が続いたあと、ニシ崎にかけて厚い砂岩層が分布する。上部には径数mm～数cmのノジュール状の物質が多く観察される。一見火山豆石状であるが、これと同じ現象は「星砂の浜」西側でも観察できる。そこでは径が数mmの大きさで揃い、火山豆石に酷似している。しかし、両者とも砂岩の表面に侵食によってできたもので、砂岩の成分がわずかに違う結果侵食に差ができて形成されたものと思われる。中位には小型の生痕化石・スランプボール・クロスラミナが発達している。そして、下位にあたる層準には大型のパイプ状生痕化石が多量に含まれている（図14）。

④「星砂の浜」の西側の露頭では、西表層と住吉層のきれいな不整合関係が観察できる。上位の石灰岩は現地性のサンゴ化石が豊富な石灰岩である。不整合面下位の西表層が侵食されているため石灰岩の下面がきれいに現れており、そこにはU字形のみごとな生痕化石が観察できる（図15）。砂岩の上位は砂と泥が複雑に細かく入り混じった外観を示す砂岩で、下位に前述の火山豆石状物質を含む砂岩が認められる。

5．浦内川のマリウド、カンピレーの滝

浦内川は、西表島の中央部の山系に源をもち、島の北西部に流入する。流路延長は約17.5km、河口付近で河幅が500mもある県内最大の河川である。河口から数kmの下流部は、マングローブ林が発達し、河川勾配が非常に小さく潮の干満が観察され、いわゆる熱帯河川特有のエスチュアリを形成している。軍艦岩より上流側では河川勾配が急に大きくなり、早瀬や滝が発達し、浦内川はいっきに上流部の特徴を有するようになる。流路を構成する地質は荒木他（1978）のいうE層の砂岩層である。一般に斜交層理がよく発達する中～粗粒の淡黄色～淡橙色砂岩である。西表島における主な滝はほとんどがE層に形成されており、代表的な造瀑層である。地形の項で説明した西表島一の落差をもつヒナイ滝（落差50m）もこの層にできている。一方、浦内川における代表的な滝がマリウドの滝と

図16　マリウドの滝

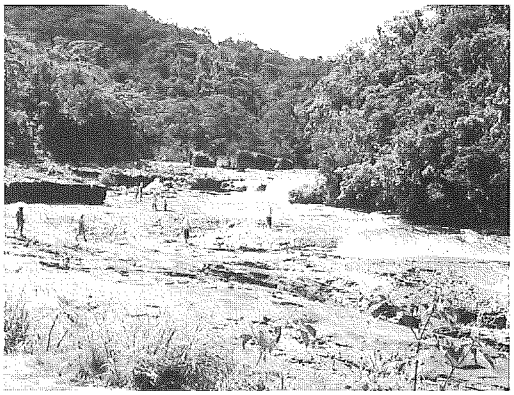


図17　カンピレーの滝

カンピレーの滝である（図16，17）。そのうち、カンピレーの滝は河床勾配が緩やかな早瀬の中に幾つも小さな落差を有した滝の集合体でマリウドの滝は落差が約16m、幅が20mのみごとな滝である。

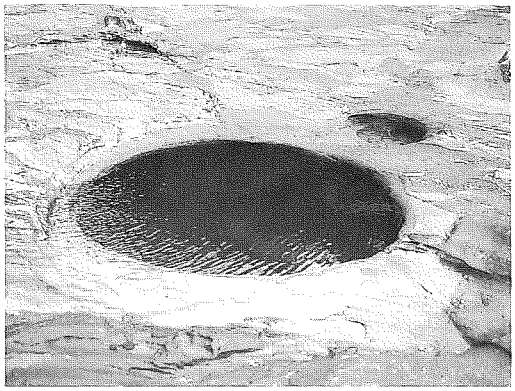


図18　ポットホール

これらの滝の上流部の河床に、ポットホールまたは甌穴（かめ穴）と呼ばれる円形の深い穴が数多く見られる。ポットホールは、砂岩や花崗岩等のように、侵食に強い岩石からなる川底や河岸にできる垂直方向の穴で、河床の岩石に割れ目や節理があると、それに沿って河川による選択的侵食が起こり、弱い部分が速く削れてくぼみができ、その穴に小石が入り込んで円形の穴を次第に拡大してできるものである。マリウドの滝やカンピレーの滝で見られるポットホールは、径が数cmのものから約60cmのものまであり、特にカンピレーの滝には大型のものが多い（図18）。また、種々の形態のものが見られると同時に、節理に沿って数珠状に発達したものも多く、ポットホールの形成過程を観察するのに適した場所である。

6．干立海岸の露頭

西表島を構成する八重山層群西表層F～G層と琉球石灰岩相当の住吉層からなる海岸である。八重山層群は全体として西に緩く傾斜する単斜構造を示す地層であるが、ここの海岸では、北に5°以下の値をもってゆるく傾斜している。そのために、海水の侵食により、ほぼ水平層に見える波食台が広く発達し、干潮になると棚状の海底面が露出する。そして、その面にみごとなリップルマークが発達している（図19）。ここでは荒木他（1978）のF層からG層にかけて観察することができる。次ぎに主な観察事項を南から北

図19　リップルマーク

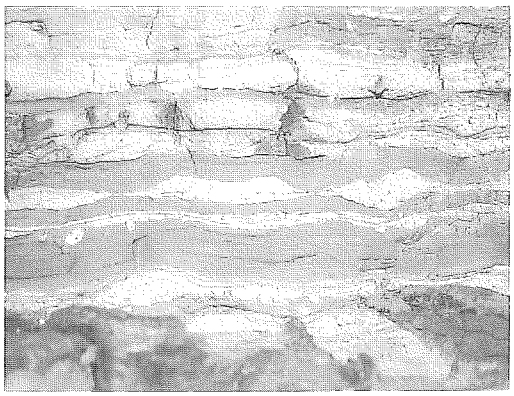


図20　波状を呈する砂岩層

図21　泥岩の玉ねぎ状風化

図22 鈴石の露頭（上原）

に向かって記述する。

①防波堤が尽きるところから琉球石灰岩が現れる。クサビライシや現地性サンゴが含まれる石灰岩である。模式地の住吉層のほぼ中部に位置する層準である。

②西表層F層の露頭。下部は泥岩勝ちの砂岩・泥岩互層、中部は砂岩勝ちの砂岩・泥岩互層、上部になるとクロスラミナの見られる厚い砂岩からなる。中部層の砂岩は、断面において層の厚さが変化し、波状の断面を示すものが多い（図20）。これは砂岩の表面にリップルマークが発達していることを示す。また、泥岩中の薄層の砂岩は、切れ切れになっていることが多く、全体として堆積時に動いたことを示す。また、泥岩中には垂直方向にパイプ状に砂岩のつまった生痕化石が多く見られる。砂岩の割れ目に沿っては褐鉄鉱がしばしば見られる。また、泥岩と砂岩の境目に沿って褐鉄鉱が層状に挟まれている場合もある。

砂岩は厚いものは塊状のものが多く、薄いものはラミナが顕著なものが多い。最上部の厚い砂岩にはクロスラミナが見られる。

③岬の近くのF層～G層。岬に近い海岸で、波食台上にはリップルマークの発達した砂岩泥岩互層が、鳥居近くにはその上位にあたる厚さ約20cmの石炭層を挟む泥岩層が見られる。石炭層を挟んで上下位数10cmの範囲は有機質な泥岩層からなり、炭化した植物片を多量に含んでいる。さらに上位は厚さ約60cmの灰色の泥岩層で、露頭の左側で玉ねぎ状風化が発達した泥岩に変化するのが観察できる（図21）。海岸には、下位の砂岩泥岩互層と有機質泥岩層との境界部の層準に、赤鉄鉱ノジュールの発達した泥岩層が認められる。かつて上原付近で、鈴石と呼ばれる石の塊がパイン畑造成工事中に数多く産出した（図22）。振ってみるとカラカラと音がするのでその名がある。鈴石は、ここで見られるような赤鉄鉱ノジュールのあるものが中空になったもので、中に泥の塊が入っているために鳴るものである。空洞の壁は同心円状の赤鉄鉱からできている。しかし、今回の調査では、干立海岸において鈴石になった赤鉄鉱ノジュールを確認することはできなかった。干立海岸の大部分のノジュールは植物化石片を核として形成されている。一方、この海岸で

は、砂岩の割れ目に沿って褐鉄鉱が壁状に発達しているのも数多く観察される。波食台に分布する砂岩泥岩互層に見られるリップルマークの走向は、上部から順にN8° E、N4° E、N10° W、N10° Eと変化している。これらの変化から、当時の海岸線が変化したことが推定できる。さらに下部の泥岩砂岩互層にもリップルマークが見られるので、大潮の干潮時に調査が必要である。

岬の北東部では、泥岩の上位に泥岩砂岩互層部を経て、最上部に厚い砂岩層が乗ってくる。泥岩砂岩互層部の砂岩は、境界面がうねり、リップルマークを形成しているのがわかる。上位の砂岩にはクロスラミナが発達している。この砂岩層には、比較的塊状の砂岩層がクロスラミナの発達した砂岩層との間に波打つような境界を持ち、塊状砂岩の形態が河川中にできた中州の堆積物（Sand mound sediments）の様相を呈しているのが観察できる。

7．祖納海岸の露頭

祖納集落の西側に張り出した半島部で、西表層上部のG層（荒木・中川、1978）からなる露頭。北側の海岸から西側にの海岸にかけて、高さが20～30mの海食崖が発達し、その崖をつくって砂岩優勢の砂泥互層G層が分布している。単層の厚さが数10cm～数m単位で、黄褐色の粗粒～中粒砂岩層には、顕著なクロスラミナが発達している。クロスラミナの横の広がりは数m～10m以上にもなり、その規模の大きさから浅海または沖合の中州（Sand mound）を構成していた砂であることが推定できる。ラミナの部分は差別侵食を受けて凹凸をなしている。ラミナの走向傾斜はE－W、20° S。また、塊状の砂岩層が砂泥互層中にめり込んだ形で荷重痕（ロードキャスト）も形成されている。

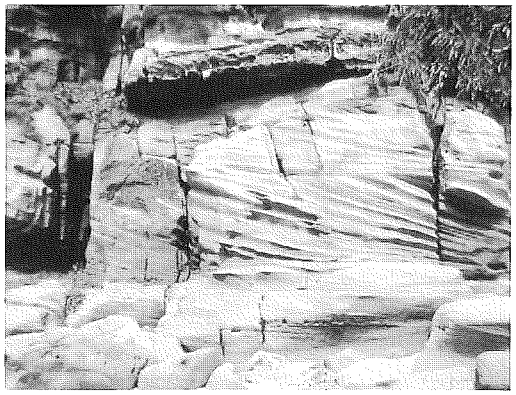


図23　クロスラミナ

海岸にはビーチロックが発達し、砂岩の巨礫やサンゴ礫が多量に含まれている。いずれも離水し、鍋底状の侵食地形（Solution Basin）が形成されている。また、半島部から降りたところの海岸では、住吉層の石灰岩にヤシ林状容食孔が観察される。

8．白浜林道の露頭

西表層上部のＦ層（荒木他、1978）に相当する砂岩と砂泥互層からなる露頭。F層は炭層を含む層準で、西表島西海岸に沿って広く分布するが、とくに内離島において炭層の

図24　白浜林道の石炭層

図25　西表島群発地震でできた地割れ

産出が知られている。ここ白浜林道の露頭は、林道入口から約２kmの位置にあり、高さが約６m、上部が塊状の砂岩層で下部が厚さ数cmの砂岩泥岩互層である。上部の砂岩層の崖の上部に近いところに、厚さが25cmほどの石炭層が挟まれており、落差の小さな正断層によりずれている（図24)。西表層F層中には、５層準において石炭層が観察でき、最大層厚30cmといわれているが、本露頭の石炭層は比較的厚い部類に属する。下部の砂泥互層中にも薄いが石炭層が含まれる。西表層の石炭は、明治末期から昭和20年ごろまで、内離島を中心に、北は中野付近から、浦内川河岸、祖納南東の美由良、白浜北東の赤崎、モトナリヤ、仲良川河岸、そして南は網取を越えて崎山まで採鉱されていた。炭質はレキ青炭～亜レキ青炭で良質であるが、埋蔵量が少ない。

なお、本露頭に行く途中の林道に、先年発生した西表島西部群発地震によってできた地割れが観察できた（図25)。N70°E、垂直で、雁行状に複数本形成されていた。しかし、1999年の林道工事で埋め戻され、現在は観察できない。

９．その他の露頭

①祖納礫岩の露頭：今回の調査で確認した露頭は、内離島西岸、サバ崎南方、祖納、ヒナイ川河口部の４カ所である。前３カ所の露頭で観察する限り、近接する砂岩層とは急角度で接しており、基盤の凹部を埋めて急激に堆積した様相を示している。内離島や祖納では石灰質砂岩の礫が多く産出し、ミオジプシ

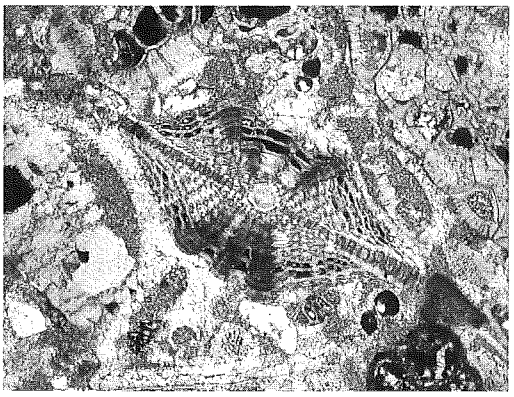


図26　ミオジプシナ

ナなどの有孔虫化石を産出する（図26）。

②段丘礫層：北海岸の一周線道路沿い、中野の道路脇、祖納集落の東側斜面等、標高が15～50mの位置に段丘礫層が見られる（図27）。西表層に由来する砂岩礫で、ほとんどが角礫で淘汰が悪く、径が数cm～2m大のものが乱雑に堆積している。また、礫はほとんど腐り礫化している。これらの特徴は、同礫層が崖錐性の堆積物であることを示し、荒木他（1978）の住吉層礫部層が径5～20cmの砂岩円礫からなるのとは大きく違っている。今回の調査では両者の関係が判明できなかった。便宜上同一層とする。

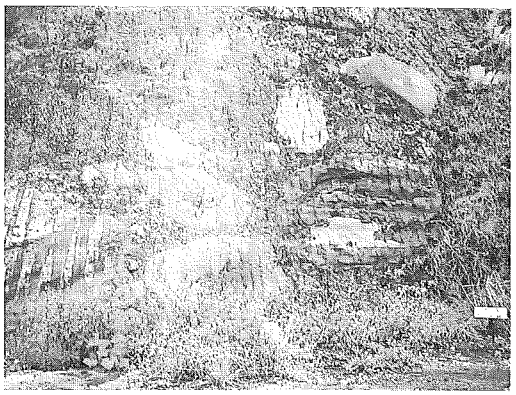


図27　段丘礫層

③南風見田の浜の露頭：南風見田の浜に隣接して「忘勿石の碑」付近や浜の西側にC層の砂岩層が見られる。これらの砂岩層には、写真のように風食による蜂の巣状の穴や風化侵食によってできた大規模な玉ねぎ状構造が発達している。

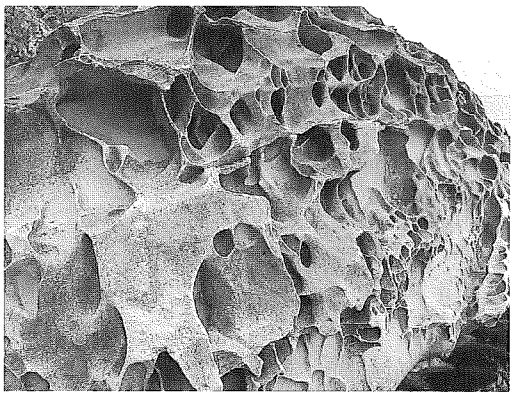


図28　風食

図29　玉ねぎ状構造

参考文献

荒川　裕・中川久夫（1978）: 琉球列島　西表島の地質．琉球列島の地質学研究，第3巻，53-60.

神谷厚昭（2000）: 東村の地形と地質について．地学教育研究会誌，p.7-12.

河名俊男（1988）: シリーズ沖縄の自然③ 琉球列島の地形．新星図書出版，127p.

目崎茂和（1985）: 琉球弧をさぐる．沖縄あき書房，253.

宮城宏之・大城逸朗・高安克巳（1974）: 西表島八重山層群中の新しい化石産地および祖納礫岩の新しい露頭について．地質雑，80，627-628.

SAITO, Y., TIBA, T., and MIYAGI, H.（1973）: Geology of Iriomotejima, Ryukyu Islands.

Mem. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 6, 9-22.

佐々木実・市川賢一 (1964): 琉球西表島炭田地質調査報告. 地質月報, 15, 477-492.

高橋　清・松本征夫 (1964): 八重山郡島西表島の八重山層群石炭の花粉分析. 八重山群島学術調査報告, No.2, 35-46.

TIBA, T. and SAITO, Y. (1973): A Note on the Volcanic Rocks of Iriomote-jima, Ryukyu Islands. *Mem. Nat. Sci. Mus. Tokyo*, 6, 9-22.

UJIIE, H. and MIYAGI, H. (1973): Upper Eocene Larger Foraminifra from Yaeyama-guntou, Ryukyu Islands. *Mem. Nat. Sci. Mus. Tokyo*, 6, 23-29.

西表島の鳥類調査

与那城　義　春
（沖縄県立博物館）

はじめに

西表島は八重山郡竹富町に所属し、主島である石垣島のほぼ南西部に位置（図．1）しており、島の面積は約284km^{2}である。主島の石垣港から西表島の南東部周縁にある大原までの距離は約30kmである。西表島の大部分は山地によって占められており、最高峰の古見岳（標高・約470m）は島内の北東部に位置しているが、御座岳（約421m）は島の中央部から南部寄り、テドウ山（約442m）は北部寄りであり、祖納岳（約294m）は北西部に位置している。広大な山地の森林は常緑広葉樹等によって形成されており、山林地域には多数の渓流がある。

西表島の地層は六群に大別されており、特に砂岩・礫岩・シルト岩で構成されるほか、石炭も含む八重山層群（西表層）が広範囲に分布していると言われている。

沖縄県立博物館の主要事業である総合調査は、1998（平成10）年度から1999（平成11）年度にかけて八重山諸島竹富町の西表島で実施された。総合調査で自然分野の鳥類調査を実施したので、調査時に西表島で観察・記録されている鳥類の生息状況を報告する。

1．調査地の概況

西表島の大部分を占めている山地には常緑広葉樹等の多様な植物群落によって広大な森林が発達している。この山林内に多数の渓流があり、大部分の河口域ではマングローブ林が形成されており、その付近の海岸にもマングローブが生育したりしている。

集落は海岸付近の平地部に在り、島内の東部から北部や北西部及び西部等にかけて散在している。

山麓や周辺の平地部には甘蔗畑やパイン畑、野菜畑、水田等の農地が在るほか、散在するススキ・チガヤ草原は牧場にも利用されている。

2．調査方法

今回の調査は、鳥類の生息地を山林地域、草原地帯（甘蔗・野菜畑も含む）、水田地帯、集落地域、河口域マングローブ林、海岸地帯に大別して実施した。各調査地の中で河口域

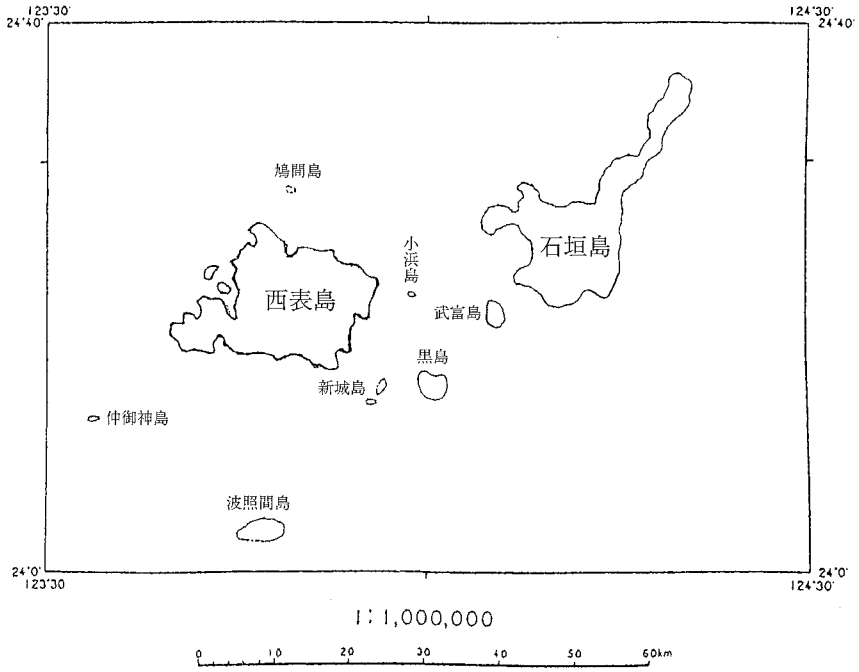


図１．西表島の位置

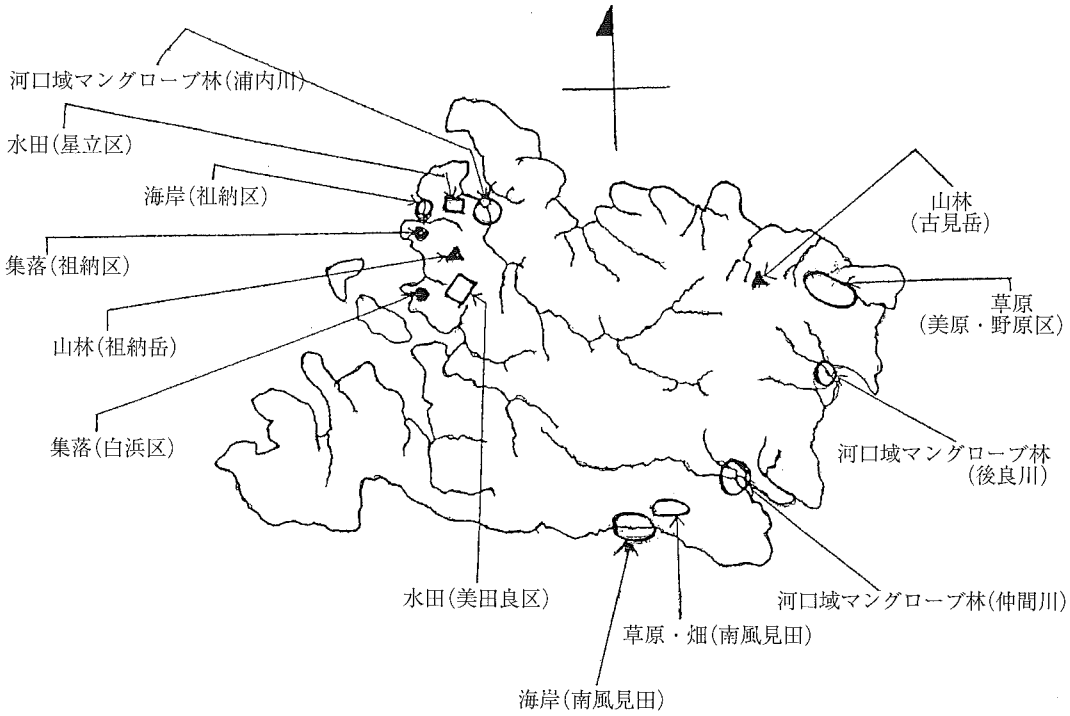


図２．西表島の調査地点

マングローブ林の鳥類調査は定点センサス法を適用し、山林や草原、水田、集落地域、海岸の鳥類調査は各地域の状況に応じて可能な限り踏査した（図２）。

鳥種の識別は調査時に鳥体の目撃、鳴き声に基づいて実施したが、双眼鏡（８×30）も使用し、観察・確認した。

なお、鳥類の調査期日は下記の通りである。

1998（平成10）年11月24～26日.　　2000（平成12）年３月１日～３日

３．調査結果と考察

西表島の鳥類調査結果は表1に示されている通りであり、調査中に観察・確認されている鳥類は43種である。

表１より調査地別に見ると、山林地域（祖納岳、古見岳）では20種の鳥類が記録されている。その内訳を見ると、留鳥はズグロミゾゴイ、カンムリワシ、シロハラクイナ、キジバト、ズアカアオバト、コノハズク、シロガシラ、ヒヨドリ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、ハシブトガラスの12種である。これらの留鳥の中で、山林内の調査（約40分）で鳥体出現等による目撃頻度の多数記録された鳥類はヒヨドリ（20個体）、メジロ（11個体）、ハシブトガラス（９個体）の３種類である。コノハズク（３個体）は夜間調査の時に祖納岳の山麓地域の森林内でコホツ、コホツと鳴き声を出していた。その他の留鳥の中でズグロミゾゴイ、キジバト、ズアカアオバト、シロガシラ、シジュウカラの観察個体数は５種とも１個体の記録であった。通常、シロハラクイナの生息地は主に水田や河川及び、その付近の湿地草原等であるが、西表島には渓流が多いので山林地域にも本種が生息しているようである。

山林地域で観察された渡り鳥は、サシバ、チョウゲンボウ、キセキレイ、ジョウビタキ、アカハラ、シロハラ、ツグミ、キマユムシクイの８種である。このうち、サシバとチョウゲンボウは山林の上空で鳴き声を出しながら飛翔中の各１個体及び林縁の樹木の先端部に止まっている両種の別個体も観察された。キセキレイ（１個体）は山林の明るい場所の地上で尾羽を上下に振りながら採餌しているが、時には飛翔して樹枝に止まることもあった。本種は秋冬期に県内の河口や海岸の干潟、水田等に生息するが、海岸付近や河川周辺の野菜畑等のほか、山林地域にも飛来して採餌する。ジョウビタキ（１個体）は林縁部の枯木の小枝で休息中のようであった。アカハラ（２個体）、シロハラ（11個体）、ツグミ（２個体）の３種は林床や林道で採餌したり、食餌を求めて林内を飛び回ったりしていた。キマユムシクイ（１個体）は林縁の樹枝から樹枝に移動しながら採餌したりしていた。

草原地帯（甘蔗・野菜畑も含む）では18種の鳥類が観察・記録されており、その内で

表１．鳥類の調査結果

○印：1998年11月22～24日の確認種／ ◎印：2000年３月１～３日の確認種

調査地 種　名	山林地域	草原地帯 (野菜畑等も含む)	水田地帯	集落地域	河口域マングローブ林	海岸地帯
カイツブリ					○	
ズグロミゾゴイ	○					
アマサギ		○ ◎	○ ◎		○	
ダイサギ		○ ◎	○ ◎		◎	○
チュウサギ			○ ◎		○	
コサギ		◎	○ ◎		○ ◎	
アオサギ			◎		○	
クロサギ						○
ムラサキサギ		○	◎		○	
カルガモ					○	
コガモ					○	
サシバ	○					
カンムリワシ	○ ◎	○ ◎	◎	◎		
チョウゲンボウ	○ ◎	○ ◎	◎			
シロハラクイナ	○ ◎		○ ◎		○ ◎	
バン			○ ◎			
シロチドリ						○ ◎
ムナグロ						○
アオアシシギ			◎			
イソシギ						◎
セイタカシギ			◎			
ウミネコ						◎
キジバト	○ ◎	◎	○	○ ◎		
ズアカアオバト	◎	◎				
コノハズク	◎			◎		
ツバメ		◎	◎			
キセキレイ	○		○ ◎	◎		○ ◎
ハクセキレイ		○ ◎	○			
シロガシラ	◎	◎				
ヒヨドリ	○ ◎	◎		○ ◎	○ ◎	
ジョウビタキ	○					
イソヒヨドリ		○		○ ◎		○ ◎
クロウタドリ				◎		
アカハラ	◎	○	○	○		○
シロハラ	○ ◎		◎	○	○	○
ツグミ	○	○ ◎	○ ◎	◎		
ウグイス	○ ◎			◎	○	
キマユムシクイ	○ ◎					
セッカ		◎	○			
シジュウカラ	○					
メジロ	○ ◎	◎		○ ◎	○ ◎	
スズメ				○ ◎		
ハシブトガラス	○ ◎	◎		○ ◎	○ ◎	○ ◎
計(43種)	20種	18種	20種	14種	15種	11種

留鳥が10種を占め、渡り鳥は８種である。10種の留鳥はムラサキサギ（１個体)、カンムリワシ（３個体)、キジバト（１個体)、ズアカアオバト（１個体)、シロガシラ（２個体)、ヒヨドリ（７個体)、イソヒヨドリ（２個体)、セッカ（２個体)、メジロ（５個体)、ハシブトガラス（３個体）である。このうち、セッカは草原・農耕地域等に周年生息・繁

殖している草原性の鳥類である。ムラサキサギは西表島や石垣島等で主に水田や河川等の湿地域に生息しており、イソヒヨドリは海岸地帯の留鳥であるが、両種とも単独で草原地帯に飛来して歩行しながら採餌していた。その他の留鳥でカンムリワシ、キジバト、ズアカアオバト、シロガシラ、ヒヨドリ、メジロ、ハシブトガラスの７種は森林を主生息地にしているが、各種とも採餌するために森林から草原地帯に飛来するようである。カンムリワシは山林から頻繁に草原地帯にも飛来しており、付近の野菜畑内でノネズミ等を捕食していた。

草原地帯で観察されている渡り鳥は、アマサギ、ダイサギ、コサギ、チョウゲンボウ、ツバメ、ハクセキレイ、アカハラ、ツグミの８種である。このうち、アマサギ（20個体)、ダイサギ（１個体)、コサギ（３個体)、ハクセキレイ（12個体)、アカハラ（３個体)、及びツグミ（２個体）の６種は主にチガヤ群落の別々の場所で採餌していた。密生するチガヤ群落内で、アマサギとダイサギ、コサギの３種は混群を形成しており、その場所で各個体とも採餌していた。ハクセキレイ群はチガヤ群落の一部分を刈り取った場所にある凸凹状態の狭小な湿地で歩行しながら採餌していた。アカハラとツグミの２種はチガヤ群落の周縁部で各個体とも警戒行動を呈しながら別々に採餌していた。チョウゲンボウ（１個体）は草原付近の電柱に止まっており、時には草原の上空を飛翔しながら餌を探しているようであった。なお、草原地帯の上空ではツバメ（４個体）が縦横無尽に低空飛翔中であった。

水田地帯では20種の鳥類が観察・記録されている。その内訳を見ると、留鳥はムラサキサギ、カンムリワシ、シロハラクイナ、バン、キジバト、セッカの６種である。この中で、ムラサキサギ、シロハラクイナ、バンの３種は水田内の湿地で絶えず動き回って採餌している。カンムリワシとキジバトの２種は森林の鳥類であるが、カンムリワシは水田付近の電柱に止まって周辺を見回しており、獲物を探しているようであった。また、キジバト（３個体）は水田の畦道を歩きながら採餌していた。

セッカ（４個体）はイネの生育している水田の上空でヒッヒッヒッヒッヒッ、チャチャッ、チャチャッ、チャチャッと鳴き声を出しながら飛翔していた。

水田地帯で観察・記録された渡り鳥は、サギ類５種（アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ)、シギ類２種（アオアシシギ、セイタカシギ)、セキレイ類２種（キセキレイ、ハクセキレイ)、ツグミ類３種（アカハラ、シロハラ、ツグミ）のほか、チョウゲンボウ、及びツバメを含めて14種である。このうち、水田内で冬鳥のアマサギ(27個体)、ダイサギ（５個体)、チュウサギ（２個体)、コサギ（７個体)、アオサギ（１個体)、アオアシシギ（１個体)、セイタカシギ（５個体)、キセキレイ（２個体)、ハクセキレイ（３個体）の９種が採餌していた。

水田の畦道で各個体とも適当な距離を保持しながら採餌したり、移動したりしているアカハラ（21個体)、シロハラ（２個体)、ツグミ（14個体）の３種は森林を主生息地にしている冬鳥である。水田付近の電柱の先端に冬鳥のチョウゲンボウ（２個体）が止まっており、獲物を探しているようであった。水田地域の上空では旅鳥のツバメ群（12個体）が自由自在に飛翔していた。

今回、西表島の鳥類調査時に水田地域では14種類の渡り鳥が観察・記録されており、他の調査地域よりも渡り鳥は多種類を占めている。この水田地域の鳥類の中で、美田良区の水田地帯では渡り鳥のアマサギ群（27個体）とアカハラ群（21個体）の２種は他種の鳥類よりも多数個体を観察・記録した。しかし、西表島の水田地帯では調査中にコチドリやシロチドリ、ムナグロ等のチドリ類は各種とも観察・記録されなかった。

1996年１月下旬に沖縄県版RDBカテゴリー区分未決定種等・鳥類調査を西表島で実施した時、大原区の水田地帯ではサギ類（チュウサギ)、チドリ類（ケリ、タゲリの２種)、シギ類（イソシギ、クサシギ、セイタカシギの３種）が観察・記録された。ところが、現在（2000年）の同区水田地帯は草原地帯に変化しており、その大部分にはススキ群落等が高々と生育しているので、これらの鳥類は各種とも観察・確認されなかった。その付近の森林ではカンムリワシ、ヒヨドリ、メジロ、ハシブトガラスの留鳥は確認された。

集落地域（祖納区・星立区）では14種の鳥類が観察・記録されている。そのうちで、留鳥はカンムリワシ、キジバト、コノハズク、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、ウグイス、メジロ、スズメ、ハシブトガラスの9種で大半を占めており、渡り鳥はキセキレイ、アカハラ、シロハラ、ツグミのほか、迷鳥のクロウタドリ（雄）を含めて５種である。

この集落地域の周辺には広大な山林が発達しているほか、海岸付近にはオオハマボウ・アダン群落やテリハボク、クロヨナ、アカギ等による樹林も形成されていた。大部分の住宅地の周縁にはフクギやガジュマル等の樹木が生育しているが、散在する空屋敷は野菜畑に利用されている場所もあった。

集落地域の９種の留鳥で、ヒヨドリ（９個体)、ウグイス（１個体)、メジロ（６個体)、スズメ（８個体)、ハシブトガラス（８個体）は屋敷内の樹枝から樹枝に移動しながら採餌したり、鳴き声を出したりしていた。カンムリワシ（１個体）は主に集落地域の上空で飛翔しているが、住宅付近の電柱の先端部に止まることもあった。キジバト（２個体）は集落地域に散在する空屋敷内の狭い野菜畑で地上を歩行しながら採餌していた。イソヒヨドリ（雄・１個体）は屋根に飛来したり、電柱や電線に止まったりするが、時には芝生地域に下降して採餌したりしていた。コノハズクは夜間調査で住宅付近の大木でコホツ、コホツと鳴いている２個体を確認した。

通常、スズメは住宅付近に生息しているが、秋期から多数個体群で採餌するために水田

地帯や甘蔗畑等に飛来することもある。しかし、西表島のスズメは集落地域だけで観察されているが、付近の水田地域や別の調査地域では１個体も観察されなかった。

集落地域で観察された渡り鳥のうち、キセキレイ（１個体）とツグミ（１個体）の２種は空屋敷の野菜畑で適当な距離を保持して地上を歩行しながら採餌していた。アカハラ（12個体）とシロハラ（９個体）は公民館敷地内の芝生地域や住宅地付近の雑草地で採餌していた。迷鳥のクロウタドリ（雄・１個体）は海岸付近の空屋敷内で鳴き声も全然出さずに歩行しながら採餌していた。空屋敷の北部周辺と海岸との境界地域にはフクギ、テリハボク、ガジュマル等の大木、オオハマボウ、アダン等で群落が形成されていた。クロウタドリの採餌場所である空屋敷の地表面は多数の落ち葉で殆ど被覆されており、雑草のオニタビラコ、オオバコのほか、イネ科の草本類等も随所に生育していた。そのような場所で単独のクロウタドリは警戒して歩行しながら採餌しているが、時には海岸側の樹木群落内に飛去したり、数分後には再度飛来して概ね同じ場所で採餌していた。

これまでに沖縄県内で迷鳥のクロウタドリ（ヒタキ科ツグミ亜科）は八重山諸島の与那国島（1982年）で２個体のほか、西表島でも観察・記録されている。

河口域マングローブ林では15種の鳥類が観察・記録されている。その内訳を見ると、留鳥はカイツブリ（２個体）、ムラサキサギ（１個体）、カルガモ（３個体）、シロハラクイナ（２個体）、ヒヨドリ（10個体）、ウグイス（４個体）、メジロ（６個体）、ハシブトガラス（４個体）の８種である。この中でヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ハシブトガラスの４種は殆ど採餌するために付近の山林から各種毎に少数個体群や単独でマングローブ林に飛来しているはずである。カイツブリとカルガモの２種は水面を泳ぎ回りながら採餌していた。ムラサキサギとシロハラクイナの２種は湿地を歩行しながら採餌していた。

渡り鳥はアマサギ（４個体）、ダイサギ（２個体）、チュウサギ（１個体）、コサギ（１個体）、アオサギ（１個体）、コガモ（13個体）、及びシロハラ（１個体）を含めて７種である。これらの渡り鳥でアマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギの５種はマングローブの散在する河口域の湿地で採餌していた。コガモ群は水面を泳ぎ回っており、時には水中に嘴を突っ込んだりする個体もいた。シロハラはマングローブ林縁の湿地で採餌していたが、数分後に別の場所に飛去してしまった。

1982年12月、西表島の河口域マングローブ林（後良川）で鳥類調査を定点センサス法で実施し、観察・記録された鳥類は31種であった。その中で留鳥は17種、渡り鳥は14種であり、今回の調査結果と比較して見ると、多種多様な鳥類がマングローブ林に飛来していると言える。多分、その頃のマングローブ林一帯は生息環境の良好な地域であり、留鳥や渡り鳥の各種鳥類によって採餌・休息場所や越冬場所等に利用されたのであろう。

沖縄本島北部の東村慶佐次マングローブ林の鳥類調査（1997年）で、付近の山林から

慶佐次川の河口域マングローブ林に飛来して採餌する多様な種類の留鳥が観察・確認されている。慶佐次川付近の山林から河口域マングローブ林内に飛来する留鳥の確認種はキジバト、ズアカアオバト、コゲラ、サンショウクイ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロおよびハシブトガラスを含めて10種である。その他の留鳥でクロサギは生息地の海岸から飛来しており、採餌した後で海岸に飛去した。カワセミの生息場所は河川流域や池沼周辺である。リュウキュウツバメは慶佐次川マングローブ林域の上空を飛翔している８個体の観察・記録である。

東村慶佐次川の河口域マングローブ林で渡り鳥の確認種はササゴイ、ダイサギ、ミサゴ、サシバ、シロチドリ、キアシシギ、イソシギ、ツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、シロハラ、キマユムシクイの12種である。

河口域マングローブ林に飛来する鳥類の確認種は、沖縄本島北部の東村慶佐次で25種、今回の西表島では15種の記録である。特に付近の山林から河口域マングローブ林に飛来する留鳥の確認種は、東村慶佐次では10種類だが、西表島では僅か４種である。

海岸地帯では11種の鳥類が観察・記録されている。その内訳を見ると、留鳥はクロサギ、イソヒヨドリ、ハシブトガラスの３種で、渡り鳥が大半を占めており、ダイサギ、シロチドリ、ムナグロ、イソシギ、ウミネコ、キセキレイ、アカハラ、シロハラの８種である。

３種の留鳥の中で、クロサギ（４個体）とイソヒヨドリ（３個体）の主生息地は海岸地帯であるが、イソヒヨドリは集落地域等にも飛来して採餌する。ハシブトガラス（３個体）は生息地の森林から海岸地帯に飛来し、砂浜で歩行しながら採餌していた。

渡り鳥の中で、海洋鳥のウミネコ（１個体）は集落付近の砂浜で歩行しながら採餌していた。また、シロチドリ（７個体）、ムナグロ（１個体）、イソシギ（２個体）の３種も砂浜で採餌したり、歩行したりしていた。

西表島の鳥類調査時にチドリ類は海岸で記録されているシロチドリとムナグロの２種だけであり、河口域や水田地帯及び別の調査地では全然どの種も観察されなかった。シギ類は海岸でイソシギ１種の記録であるが、水田地帯ではアオアシシギ、セイタカシギの２種が観察・記録された。

本調査は鳥類の生息環境を山林地域、草原地帯、水田地帯、集落地域、河口域マングーブ林、海岸地帯に大別して実施した。西表島の留鳥の中で、雑食性のハシブトガラスは水田地帯以外の生息環境の５区域で観察・確認されている。

野生生物種の多様性を保護するために、環境庁版（1991年）及び沖縄県版（1996年）の「絶滅のおそれのある野生生物・レッドデータブック」が作成されている。今回、西表島の鳥類調査で観察・記録された鳥類は43種であるが、そのうちで環境庁版と沖縄県版

のレッドデータブックでカテゴリー区分毎に掲載されている鳥類を以下に記述する。

国指定特別天然記念物のカンムリワシは環境庁版及び沖縄県版レッドデーターブックで絶滅危惧種に認定されている。ズグロミゾゴイはレッドデーターブックの環境庁版では希少種に、沖縄県版では危急種に認定されている。渡り鳥のチュウサギ、セイタカシギ、留鳥のシロガシラの３種は環境庁版及び沖縄県版レッドデーターブックで希少種に認定されている。留鳥のムラサキサギは沖縄県版レッドデーターブックで危急種に、留鳥のカイツブリ、コノハズク、シジュウカラ、渡り鳥のシロチドリを含む4種は沖縄県版で希少種に認定されている。

西表島の鳥類調査中の記録種は下記の通りである。

調査期日：1998年11月22～24日．　2000年３月１～３日

カイツブリ科 PODICIPITIDAE
1. カイツブリ *Podiceps ruficollis*
サギ科 ARDEIDAE
2. ズグロミゾゴイ *Gorsakius melanolophus*
3. アマサギ *Bubulcus ibis*
4. ダイサギ *Egretta alba*
5. チュウサギ *Egretta intermedia*
6. コサギ *Egretta garzetta*
7. クロサギ *Egretta sacra*
8. アオサギ *Ardea cinerea*
9. ムラサキサギ *Ardea purpurea*
ガンカモ科 ANATIDAE
10. カルガモ *Anas poecilorhyncha*
11. コガモ *Anas crecca*
ワシタカ科 ACCIPITRIDAE
12. サシバ *Butastur indicus*
13. カンムリワシ *Spilornis cheela*
ハヤブサ科 FALCONIDAE
14. チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*
クイナ科 RALLIDAE
15. シロハラクイナ *Amaurornis phoenicurus*
16. バン *Gallinula chloropus*
チドリ科 CHARADRIIDAE
17. シロチドリ *Charadrius alexandrinus*
18. ムナグロ *Pluvialis dominica*
シギ科 SCOLOPACIDAE
19. アオアシシギ *Tringa nebularia*
20. イソシギ *Tringa hypoleucos*
セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE
21. セイタカシギ *Himantopus himantopus*
カモメ科 LARIDAE
22. ウミネコ *Larus crassirostris*
ハト科 COLUMBIDAE
23. キジバト *Streptopelia orientalis*
24. ズアカアオバト *Sphenurus formosae*
フクロウ科 STRIGIDAE
25. コノハズク *Otus scops*
リュウキュウコノハズク *Otus scops elegans*
ツバメ科 HIRUNDINIDAE
26. ツバメ *Hirundo rustica*
セキレイ科 MOTACILLIDAE
27. キセキレイ *Motacilla cinerea*
28. ハクセキレイ *Motacilla alba*
ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE
29. シロガシラ *Pycnonotus sinensis*
30. ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*
イシガキヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis stejnegeri*
ヒタキ科 MUSCICAPIDAE
ツグミ亜科 TURDINAE
31. ジョウビタキ *Phoenicurus auroreus*
32. イソヒヨドリ *Monticola solitarius*
33. クロウタドリ *Turdus merula*
34. アカハラ *Turdus chrysolaus*
35. シロハラ *Turdus pallidus*
36. ツグミ *Turdus naumanni*
ウグイス亜科 SYLVIINAE
37. ウグイス *Cettia diphone*
38. キマユムシクイ *Phylloscopus inornatus*
39. セッカ *Cisticola juncidis*
シジュウカラ科 PARIDAE
40. シジュウカラ *Parus major*
メジロ科 ZOSTEROPIDAE
41. メジロ *Zosterops japonica*
ハタオリドリ科 PLOCEIDAE
42. スズメ *Passer montanus*
カラス科 CORVIDAE
43. ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos*

4．要　約

1998（平成10）年度から1999（平成11）年度までの２年間、沖縄県立博物館の主要事業である総合調査が八重山郡竹富町所属の西表島で実施された。総合調査の自然分野で西表島の鳥類調査を実施し、観察・記録された鳥類は９目20科34属43種である。

本調査は鳥類の生息環境を山林地域、草原地帯、水田地帯、集落地域、河口域マングローブ林、海岸地帯に大別して実施した。河口域マングローブ林の鳥類調査は定点センサス法を適用し、その他の調査地では可能な限り踏査した。

山林地域で20種の鳥類が観察・記録されており、留鳥は12種、渡り鳥は８種である。12種の留鳥はズグロミゾゴイ、カンムリワシ、シロハラクイナ、キジバト、ズアカアオバト、コノハズク、シロガシラ、ヒヨドリ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ及びハシブトガラスである。これらの留鳥のうちで、山林の調査中（約40分）に鳥体の目撃等で出現頻度の多数記録されている鳥類はヒヨドリ（20個体）、メジロ（11個体）、ハシブトガラス（９個体）の３種である。コノハズク（３個体）は夜間調査の時に祖納岳の山麓地域の森林内でコホツ、コホツと鳴き声を出していた。その他の留鳥で、ズグロミゾゴイ、キジバト、ズアカアオバト、シロガシラ、シジュウカラの観察個体数は5種とも１個体の記録であった。通常、シロハラクイナの生息地は主に水田や河川及び、その付近の湿地草原等であるが、西表島には渓流が多いので山林地域にも本種が生息しているようである。

山林地域で記録された8種の渡り鳥はサシバ、チョウゲンボウ、キセキレイ、ジョウビタキ、アカハラ、シロハラ、ツグミ、キマユムシクイである。これらの渡り鳥のうちで、サシバ（２個体）とチョウゲンボウ（２個体）は両種とも山林の上空で鳴き声を出しながら飛翔中の各１個体、及び林縁の樹木の先端部に止まっている両種の別個体も観察された。キセキレイ（１個体）は林内の明るい場所の地上で尾羽を上下に振りながら採餌しているが、時には飛翔して樹枝に止まることもあった。ジョウビタキ（雄・１個体）は林縁部の枯木の小枝で休息中のようであった。アカハラ（２個体）、シロハラ（11個体）、ツグミ（２個体）の３種は林内の落ち葉の多い場所で頻繁に採餌したり、餌を求めて林内を飛び回っていた。

草原地帯（甘蔗畑・野菜畑も含む）で観察された鳥類は18種であり、留鳥は10種、渡り鳥は８種の記録である。10種の留鳥はムラサキサギ、カンムリワシ、キジバト、ズアカアオバト、シロガシラ、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、セッカ、メジロ、ハシブトガラスである。このうち、セッカは草原や農耕地域等に周年生息・繁殖している草原地帯の鳥類である。ムラサキサギは主に水田や湿原、河川等に生息しているが、時には単独で草原地帯や付近の野菜畑等にも飛来して採餌する。イソヒヨドリは殆ど海岸地帯に生息しているが、草原地帯等にも単独で飛来して地上を歩行しながら採餌していた。その他の留鳥でカンム

リワシ、キジバト、ズアカアオバト、シロガシラ、ヒヨドリ、メジロ、ハシブトガラスの7種は森林地域を主生息地にしているが、各種とも草原地帯に飛来して随所で採餌していた。3個体のカンムリワシは林縁と草原地帯の上空を飛翔しながら旋回したりしているが、1個体の本種は草原付近の野菜畑内でノネズミ等を捕食していた。

草原地帯で記録されている8種の渡り鳥はサギ類のアマサギ、ダイサギ、コサギのほか、チョウゲンポウ、ツバメ、ハクセキレイ、アカハラ、ツグミである。このうち、サギ類の3種とハクセキレイ、アカハラ、ツグミはチガヤ群落の別々の場所で採餌していた。アカハラとツグミは採餌するために付近の森林から草原に飛来していると思われる。チョウゲンポウは草原周辺の電柱に止まっているが、時には草原の上空を飛翔することもあり、餌を探しているようであった。なお、草原地帯の上空ではツバメ（4個体）が絶えず縦横無尽に飛翔していた。

水田地帯では20種の鳥類が観察・記録されている。その内で、留鳥はムラサキサギ、カンムリワシ、シロハラクイナ、バン、キジバト、セッカの6種である。これらの留鳥の中でムラサキサギとシロハラクイナ、バンの3種は水田内の湿地を絶えず歩行しながら採餌していた。カンムリワシとキジバトの2種は森林を主生息地にしている鳥類であるが、カンムリワシは水田付近の電柱の先端部に止まって周辺を見回しており、餌を探しているようであった。キジバトは水田の畦道を歩行しながら採餌したりしていた。セッカはイネの生育している水田の上空でヒッヒッヒッヒッヒッ、チャチャッ、 チャチャッ、と鳴きながら飛翔していた。

水田地帯で記録されている渡り鳥はサギ類のアマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギの5種のほか、シギ類のアオアシシギ、セイタカシギの2種、セキレイ類のキセキレイ、ハクセキレイの2種、ツグミ類のアカハラ、シロハラ、ツグミの3種、及びチョウゲンボウ、ツバメの2種を含めて14種である。これらの渡り鳥の中で5種のサギ類と2種のシギ類及び2種のセキレイ類は水田内で歩行しながら採餌していた。アカハラ、シロハラ、ツグミの3種は水田の畦道で各個体とも適当な距離を保持して歩行しながら採餌しているが、このツグミ類は3種とも森林地域を主生息地にしている冬鳥である。水田付近の電柱の先端に冬鳥のチョウゲンボウが止まっているが、休息しながら獲物を探しているように思われた。水田地帯の上空ではツバメ群（12個体）が自由自在に低空飛翔中であった。

集落地域（祖納区・星立区）では14種の鳥類が観察・記録されている。その内で留鳥はカンムリワシ、キジバト、コノハズク、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、ウグイス、メジロ、スズメ、ハシブトガラスの9種である。これらの留鳥の中でヒヨドリ、ウグイス、メジロ、スズメ、ハシブトガラスの5種は屋敷内の樹枝から樹枝に移動しながら採餌したり、鳴き

声を出したりしていた。カンムリワシは集落地域の上空を飛翔しているが、時には住宅付近の電柱の先端部に止まることもあった。キジバトは集落地域に散在する空屋敷内の狭い野菜畑で地上を歩行しながら採餌していた。イソヒヨドリ（雄）は屋根に飛来したり、電柱や電線に止まったりするが、時には芝生地に下降して採餌したりしていた。集落地域のスズメ群（８個体）は電線や屋根のほか、住宅周辺のフクギ等の樹枝に止まったりしていた。通常、スズメは住宅地域に生息しているが、秋期から多数個体群で水田地帯や甘蔗畑等に飛来したりする。しかし、西表島のスズメは集落地域だけで記録されており、水田地帯ののほか、別の調査地等では1個体も観察されなかった。コノハズクは夜間調査時に住宅付近の大木でコホッ、コホッと鳴いている２個体を確認した。

集落地域で観察・記録されている５種の渡り鳥のうち、キセキレイとツグミの２種は空屋敷の野菜畑で適当な距離を保持して地上を歩行しながら採餌していた。アカハラ群（12個体）とシロハラ群（９個体）は公民館敷地内や住宅付近の芝生地域で採餌していた。迷鳥のクロウタドリ（雄）は海岸付近の空屋敷内の地上で歩行しながら採餌していた。本種が採餌している空屋敷内の地面は多数の落ち葉で殆ど被覆されており、雑草のオニタビラコ、オオバコのほか、イネ科の草本類等も随所に生育していた。

河口域マングローブ林で観察・記録されている15種の鳥類のうち、留鳥はカイツブリ、ムラサキサギ、カルガモ、シロハラクイナ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ハシブトガラスの８種である。これらの留鳥でヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ハシブトガラスの４種はマングローブ林内で鳴き声を出しながら採餌しているが、ハシブトガラスは時々マングローブ林の上空でもカアー、カアーと鳴きながら飛翔する個体もいた。この４種の留鳥は殆ど採餌するために付近の山林からマングローブ林に飛来しているのであろう。カイツブリとカルガモの２種は水面を泳ぎ回りながら採餌しており、ムラサキサギとシロハラクイナは湿地を歩行しながら採餌していた。

河口域マングローブ林で観察・記録されている渡り鳥はサギ類のアマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギのほか、コガモ及びシロハラを含めて７種である。この渡り鳥の中で、５種のサギ類はマングローブの樹枝で休息していたが、１個体のダイサギが飛翔してマングローブの散在する湿地に下降すると、サギ類各種の全個体も休息している樹枝上から湿地に移動して採餌を始めた。コガモ群は水面を泳ぎ回っており、時には嘴を水中に突っ込んだりする個体もいた。シロハラはマングローブ林縁の湿地で採餌していたが、数分後に別の場所に飛去してしまった。

海岸地帯で観察・記録されている11種の鳥類のうち、留鳥はクロサギ、イソヒヨドリ、ハシブトガラスの３種、渡り鳥がダイサギ、コチドリ、ムナグロ、イソシギ、ウミネコ、キセキレイ、アカハラ及びシロハラを含めて８種であり、大半を占めている。留鳥の中

でクロサギとイソヒヨドリの主生息地は海岸地帯であるが、イソヒヨドリは採餌するために集落地域等にも飛来していた。ハシブトガラスは主生息地の山林から砂浜等にも飛来し、採餌していた。渡り鳥のダイサギ、コチドリ、ムナグロ、イソシギ、海洋鳥のウミネコ、キセキレイは集落地域付近の砂浜で歩行しながら採餌しており、アカハラとシロハラは森林付近の砂浜に生育しているグンバイヒルガオ群落内で採餌していた。

今回、西表島の鳥類調査で観察・記録された鳥類は43種であり、そのうちで環境庁版と沖縄県版のレッドデータブックでカテゴリー区分毎に掲載されている鳥類を以下に記述する。

国指定特別天然記念物のカンムリワシは環境庁版及び沖縄県版レッドデーターブックで絶滅危惧種に認定されている。ズグロミゾゴイはレッドデーターブックの環境庁版では希少種に、沖縄県版では危急種に認定されている。渡り鳥のチュウサギ、セイタカシギ、留鳥のシロガシラの３種は環境庁版及び沖縄県版レッドデーターブックで希少種に認定されている。留鳥のムラサキサギは沖縄県版レッドデーターブックで危急種に、留鳥のカイツブリ、コノハズク、シジュウカラ、渡り鳥のシロチドリを含む4種は沖縄県版で希少種に認定されている。

参考文献

日本鳥学会編，1974．日本鳥類目録．P.1～105．学習研究社．東京．

荒木裕・中川久夫，1978．琉球列島 西表島の地質．琉球列島の地質学研究．第３巻P.53～60．琉球大学教養部地学研究室．

小　林　桂　助，1983．原色日本鳥類図鑑．P.182～183．(株)保育社．大坂．

与那城　義　春，1986．沖縄の野鳥観察．P.52～54．(株)新星図書出版．沖縄．

環境庁自然保護局野生生物課編，1991．日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－（脊椎動物編）．P.124～216．(財)日本野生生物研究センター．東京．

日本鳥類保護連盟編，1992．鳥630図鑑．P.246．(財)日本鳥類保護連盟．東京．

沖縄県環境保健部自然保護課，1996．沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータおきなわ－．P.297～325．沖縄県環境保健部自然保護課．沖縄．

与那城　義　春，1996．沖縄県版RDB区分未決定種等調査報告書－鳥類－「沖縄県版レッドデータブック未決定種等調査報告書」．P.60～61．沖縄県環境保健部自然保護課．

西表島、鳩間島及び新城島における動植物の方言名について

石垣　金星[1]・嵩原　建二[2]・花城　良廣[3]・加治工真市[4]

はじめに

自然に関する方言名を収集することは、消失の危機にある貴重な民俗文化財としての方言を記録し、残していくことと同時に、古来より自然と人間の関わりや人が自然をどう認識していたのかを理解する一つの方法でもある。時には今日では見ることができないが、より人為的改変の少ない自然状態で生息していたであろう動植物が識別されていることもある。例えば、尚（1918）によって報告された琉球産鳥類方言名の中には、現在では佐渡島にごく少数が保護飼育されているトキ *Nipponia nippon* が、琉球産鳥類として「コーナー」と言う方言名で紹介されている。

沖縄県内では天野（1975・1979・1980）などによって、奄美諸島以南の琉球列島における植物方言名が精力的に収集され、特に天野（1979）は約900種におよぶ植物の方言名を奄美諸島から八重山諸島までの各島で採録している。また、天野（1981）は宮古・八重山諸島の御嶽林調査の中で、西表島（星立）を含む先島諸島の植物方言名を採録し、山田（1992）は、かつての網取集落における生活に関わりの深い植物方言名について記録している。

一方、動物についての方言名は、古くは田代（1889）や黒岩（1893）によって若干の記録があり、また前述した尚（1918）によって、琉球産鳥類の方言名43種が採録されている。近年では当山（1883.1984.1987.1989）などによって沖縄島やその周辺離島から採集され、鳥類では沖縄野鳥研究会編（1986・1993）などによって若干の記述が見られる。また、言語学的手法を用いた方言名の採録は、宮古諸島で当山ら（1980）による両生爬虫類の方言名採録があり、他にいらぶの自然編集委員会編（1991）などが見られる。さらに、沖縄島では名護博物館編（1990）の鳥類方言や当山ら（1997）などにより動植物方言名が採録されている。

西表島を含む八重山諸島では、黒島（1972）、八重山野鳥の会編（1983）などにより鳥類方言名が採録されているが、その他に宮城（1972）、安間（1986）、西表島エコツー

（[1] 西表島をほりおこす会・[2] 沖縄県立博物館・[3] 海洋博記念公園都市緑化植物園・[4] 沖縄県立芸術大学）

リズム協会（1994）、山田（1992）などに断片的な動物方言名の記録が見られる。しかしながら、いずれも音声表記を伴なっておらず、言語学的な手法を採用した音声表記による方言の採録としては、久野（1988）によって、西表島祖納の方言が調査され、その一部に動植物の方言名が採録されている。また、加治工（1997）は竹富方言の基礎語彙としての観点から動物方言を採録し、嵩原ら（1998）は波照間島における鳥類方言名を採録している。さらに鳩間島においては、加治工（1990）によって住関係の語彙が採録されているが、動植物の方言名については少なく、野鳥の方言名として八重山野鳥の会編（1983）により17種の方言名（かな表記）が知られているにすぎないように思える。

今回西表島及びその周辺離島における動植物の方言名の採録を試み、十分ではないがこれまでで最も多いと思われる方言名の収集を行った。また、一部については音声表記を行い、方言名を記録することと同時に、人と自然の関わり等についても若干の解説を加えた。本報告が西表島及びその周辺地域における動植物の方言名と、自然と人間の関わりを理解する若干の資料になれば幸いである。

1．調査地概要

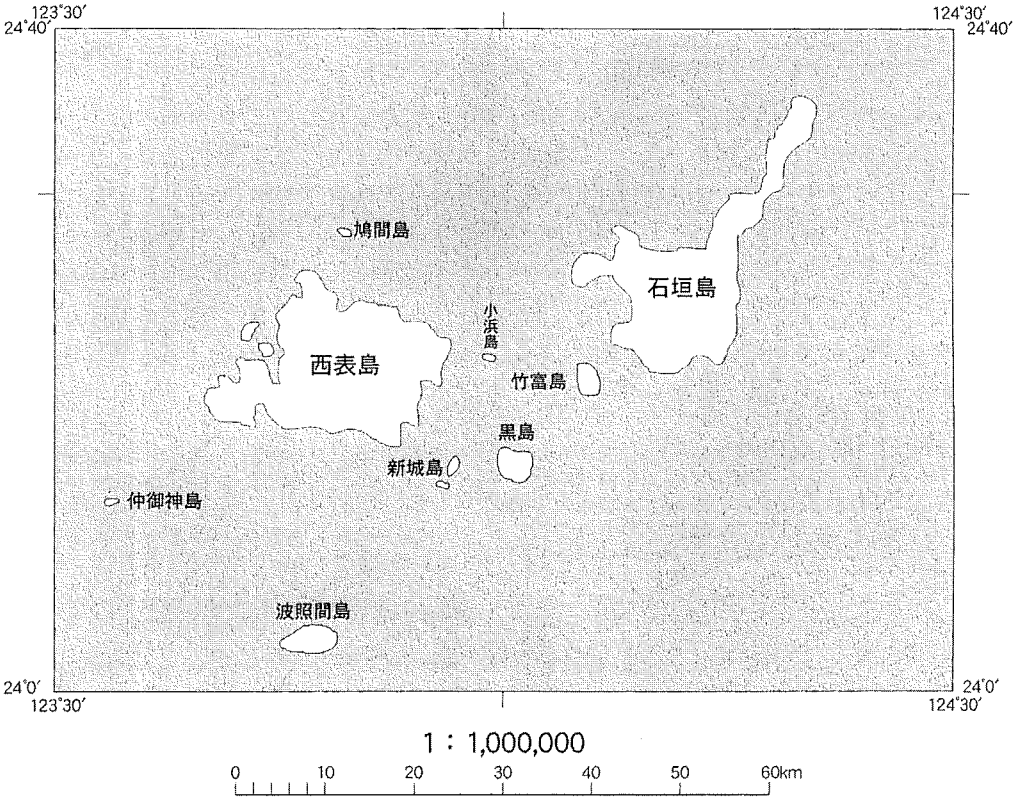
（1）西表島

西表島は図1に示したように、北緯24度15分から26分、東経123度39分から57分に位置している。降雨量は梅雨期と台風時に集中し、年間の降雨量は2000㎜を越えている。

同島は八重山諸島最大の島で、面積284.4km^2、周囲は約130kmにもなり、県下でも沖縄島に次ぐ大きさである。人口は777世帯1887人（平成7年度国勢調査）で、農業を基盤とする産業構造である。特に東部では土地改良事業による農耕地の整備がすすみ、作物は主としてサトウキビ栽培が行われている。一方、北西部ではパインナップル、西部では水稲栽培がその主な作物となっている。また、島の北東部や西部、南部の一部には肉用牛を生産する大規模な牧場も見られる。

集落は東部に南から豊原、大原、大富、古見の4集落、西部には陸路でたどれる船浦、上原、住吉、浦内、祖納、星立、白浜の集落がある。また、海路で渡る舟浮の集落が最も南に位置するが、その南西方向にある廃村跡の網取には東海大学の研究施設が置かれている。

森林地域は基本的にはイタジイやウラジロガシなど中心とする亜熱帯常緑広葉樹林が、その大部分を占め、御座岳（420m）や古見岳（469m）、波照間森（447m）、南風岸岳（425m）などの内陸丘陵地域を中心に広がっている。その山地域からは、東部に仲間川、前良川、後良川などの河川が、西部では浦内川や仲良川、クイラ川などの河川が流れ出るが、すべての河川護岸が人工構築物で改変されていない自然河川である。その河川河口付近には、両岸にヒルギ類を中心とした国内では規模の大きいマングローブ林がみられる。



位　置　図

図１．八重山諸島の位置と調査地(○)
(石垣島・西表島)

（２）新城（パナリ）島

図１に示したように、西表島南西の海上23kmに位置し、広さ1.76km^{2}の上地島と広さ1.58km^{2}の下地島の２島からなる。西表島大原からは舟で20分ほどかかる島で、平成７年度の国勢調査では、上地島は人口は２世帯３人、下地島は６世帯６人で、現在は島全体が肉用牛の牧場となっている。なお平成12年11月現在では上地島５人、下地島で１人と減少している。

かつて昭和初期には両島とも人口約500人を有する島で、西表島（大原）へ渡って日常的な米の耕作が行われていたが、昭和13年に沖縄県の移住計画に基づき西表島大原へ強制疎開させられため大部分が移住してきている。その結果、戦後急速に過疎化の一途をたどり、昭和33年（1958年）には下地島で４戸、上地島に26戸が残っているのみであったとされる。それに反して、当時の大原集落82戸のうちその３分２にあたる57戸が、新城島からの移住者で占められていた（本田　1962）。

（３）鳩間島

図１に示したように、西表島船浦の北方海上５kmに位置し、広さ0.96km^{2}の小島で船浦から舟で約20分ほどかかる。平成７年度の国勢調査では、人口は28世帯45人で、過疎化が著しく、半農半魚の島である。

集落は島の南側に形成され、口承によると船浦湾奥の髭川村から６人が移住し、村立てがされたとされ、その創建はかなり古いとされる。琉球王府当時、島民は貢納するため、西表島に渡り、米作を行った（沖縄大百科刊行事務局編　1983）。

２．調査概要及び調査方法

本調査は著者の一人である石垣によって、1972年から1995年にかけて西表島祖系内、古見、新城島における自然物に関する方言名が採録され、これを基本に、今回の沖縄県立博物館西表島総合調査の一環として、花城によって鳩間島の方言名が採集され、これに動植物の生息概要と関連してまとめ直したものである。特に西表島西部の祖納集落における方言については音声を録音し、これを著者の一人である加治工が言語学的な手法を用いて音声表記し、民俗学的な資料ともなるように配慮した。

西表（祖納・星立）方言の採録は1972年から開始し、古老からの聞き取りを行うのと同時に、石垣が個々の方言名を音声化（発音）し録音した。また、古見の方言は、古見集落在住の富里サカイ氏（明治44年生当時85歳）から直接聞き取りしたものである。さらに新城（パナリ）島の方言は、1995年に東京在住の民俗研究家海津ゆりえ氏によって、西大舛高壱氏（大正９年生当時75歳：新城島出身西表島大原在住）から直接聞き取りを

行ったものである。

鳩間島の方言に方言については、著者の一人である花城によって、2001年３月に実父の花城広助氏（鳩間島出身：名護市宇茂佐在住　大正15年生76歳）から直接聞き取りし、採録したものである。

なお、哺乳類の学名は阿部（1994）、鳥類の学名は日本鳥学会（2000）にしたがった。

３．調査結果の考察

表１に示したように、西表島及びその周辺離島である新城（パナリ）島と鳩間島に生息分布する植物について164個（総称的な呼称や作物、野菜、不明種等を含む）、哺乳類について11個（家畜や海産哺乳類等含む）、鳥類について51個（一般的な呼称や複数名称、卵、不明種等を含む）、爬虫類について15個（一般的な呼称や不明種含む）、両生類について２個、魚類について４個、昆虫類・多足類・その他の小動物について13個（昆虫の幼虫含む）、甲殻類について16個（一般的な呼称含む）、貝類について９個（一般的な呼称や不明種含む）藻類１個の合計286個におよぶ方言による呼称が得られた。その中でそれぞれ新城（パナリ）島から103個、西表島古見から159個、西表島祖納（星立含む）から338個、鳩間島から151個の４地域総計751個におよぶ動植物に関する方言名が得られた。その方言名で識別された種の同定も可能な限り行った。また、特に祖納集落における方言名については音声表記も行い、その言語学的な特徴についても後述するように若干の考察を行った。

以下にそれぞれの生物群に分け、その概要や特徴的なことと人との関わりなどについてまとめた。

１）動植物の方言について

（１）植物方言名について

天野鉄夫著（1979）「琉球列島-植物方言集」をみると、鳩間島や新城島の植物方言名は他の島に比べ意外に多いことが分かる。島に自生していない植物についての方言が多く、島民の生活範囲が植物の多い西表島まで及んでいたこと示している。

植物の方言名は、和名と同様、植物の特徴を表す語彙で綴られているが、一般に生活に係わった名が当てられていることが多い。則ち、植物方言名を聞くだけその植物の特徴や生活との係わりが分かる。方言名は単に紛らわしい植物を識別のするためにだけでは無く、先人達が経験した衣食住に関する情報でもある。

茅屋を葺きあげる時、鳩間島では屋根のユチリにはユチルダキを使うが、このユチルダキはリュウキュウチク、タイミンチク、ヤダケの複数の種類を示している。則ちユチリに

はこの３種が適しているのである。屋根にユチルタキを敷きその上に茅を載せた後、細長い茎を上から当て蔓縄で固定する。この茅を押さえる細長い茎の植物を総称してティーブクと言っている。中でも、直径が２～３センチで細く、３～４メートルの長さに成長し弾力性のあるダスカ（シマミサオノキ）が最もいいと言われている。細長く成長すること、弾力性が強いこと、長持ちすることなどのシマミサオノキのこの情報は、正に方言から得られるのである。

植物で各器官につて各々の方言名もある。最も生活に密着した植物に多く見られるが、その一つにアダンがある。鳩間島ではアダンのことをアダンブラという。雌株にはミーアダンブラ、雄株にはビキアダンブラである。おそらく果実（食用）が着くか否かを区別する必要があったからであろう。次に気根をアダナシといい、裂いて乾燥させ縄を編むなど、重要な繊維植物である。繊維の採れる植物は他にもあるが、アダンの気根から採れる繊維は強靱であるため広く利用されていた。さらに、同じくアダンについてカニアダンブラ（鳩間島）、カニアダム（祖納）という方言名がある。これは特別な種類のアダンを言っているのではなく、カニの足のように茎の外郭が堅くなったアダンのことである。茎は刀が断たないほど堅く、腐れにくいので、湿度の高い場所で建てる田小屋の柱に用いるという。これは稲作が盛んに行われた所だからこそ生まれた方言名であろう。

次に、食感を示した方言名に、ンガダビ（新城島）、ンガダキ（鳩間島、古見）、イガダイ（祖納）と呼び、ホウライチクのことを示している。語彙のンガ，イガは「苦い」は、即ち苦いタケのことであり、食すると苦くて食えない竹であることを示している。しかしながらンガタキとい名には、食味をすることで、ざるを編むための固体を選別することができるというのである。、

次に危険を表す方言名にミーフクラギ（鳩間島、祖納）、ミーシプキ（祖納）という植物がある。この植物はオキナワキョウチクトウ（近年ミーフクラギが和名となっている）のことで、その果実や茎葉から出る樹液を目に入れると腫れるとことを示している。ビロサンパ（鳩間島）、カサヌパ（祖納）、ビールサーヌパ（古見）は各地で微妙に異なるが、ビロ、ビールあるいはカサは「かゆい」の意があり、葉から出る液を体につけるとかゆくなることを示している。

各島に共通して用いられている薬草の方言名はほとんど同じ呼び名である。例えば、イリオモテアザミ（根を煎じて薬用とする）は各地ともハマグンボウと言い、また、俗にチョウメイグサと呼ばれているボタンボウフは各地ともサクナと呼んでいる。同じくカンゾウにはバンスウ、バンスー、トウガラシにはクースと言っている。

次に、用途を意味する方言名には、ミーカンガンキ（鳩間島）、ガンキョキ（祖納）があり、直訳すると「めがねの木」であるが、水中メガネが作れる木のことである。その植

物は海浜地に自生するモンパノキのことで、その材は軽く緻密であるため水深深く潜っても水漏れしないといわれる。同じく、カビキ（鳩間島、祖納）があり、紙の材料となる木のことで、海岸の岩礁地に生えているアオガンピのことを示している。アオガンオピは強靭で緻密な繊維があることから上質の紙ができる。

その他、ハスノハギリをビンドロマーキ（鳩間島）、ブーブーキ（祖納）、ビビキ（古見）といい、これら音声からハスノハギリの鈴状の種子を示し、種類を子供たちが振って音を鳴らして遊ぶことからこの名が付いたのであろう。ハマオモトをシダフカ（鳩間島）、サティフカ（祖納、古見）、フクル（祖納）といい、語尾の「フカ」は風船あるいは袋のことを示している。ハマオモトの茎を巻いている薄い膜を筒状にとり両端を縛って風船状にて鞠代わりにした。

以上のように、植物の方言名は、それぞれ島民の生活に密着した名前であり、また生活を営むためには知っていなければならない名前でもある。したがって、重要な植物には必ず方言名があり、あまり生活に係わりのない植物は身近にあっても方言名が無いものが多い。方言名を調査することによって植物の意外な特性を知ることができる。また、これら植物方言名に見られる情報は、先人達の多くの経験を積み重ねたものであり、それを失うことは植物そのものを失うことに等しい。方言名を知る人達が時間とともに少なくなっている今、早急に継続して調査を実施する必要がある。

（2）哺乳類の方言名

内田（1964）によると、西表島ではオオコウモリやカグラコウモリなど5種の哺乳類が生息し、3種の未記載種があることを指摘している。また、安間（1979）は家畜やジャコウネズミ、クマネズミなど自然帰化種と考えられる2種を含め11種を報告しているが、西表エコツーリズム協会編（1994）よると、家畜やクマネズミ、ドブネズミなどの自然帰化種を除き、哺乳類が7種が生息しているとしている。表2にこれまでの記録を総合して示すと11種の野生陸産哺乳類と2種の海産哺乳類が西表島およびその周辺地域で見られるものと思われる。

前述したように今回家畜や海産哺乳類も含め11種の方言名が採録されたが、この中にはイリオモテヤマネコ以外にオオヤマネコの存在が識別され、「ヤマピッカリャー（新城島）」、「クンズマヤー（祖納）」、「トウトウラー（古見）」と各地域で呼称されている。したがって、イリオモテヤマネコ以外に野生ネコの存在が識別されていて興味深い点がある。しかしながら、安間（1976．1990）はその存在を否定しており、今日でもその存在を証明する資料は得られていない。

哺乳類の中では特に生活との関わりの深い種として「ヤマシシ（リュウキュウイノシシ）」

と「ザン（ジュゴン）」などがあげられるであろう。

カマイは山の神からの恵みとしての貴重な食料である。「カマイ」の捕獲には、古来からイヌを使って追い出し槍でしとめる方法や、「チチヤマ」や「ピッタガシヤマ」と呼ばれ、イノシシの通り道に重しを仕掛け、落として押しつぶし捕獲する方法があった。今日ではワイヤーを用いたハネワナによる捕獲が主流とされる。

しかし、田植えの時にはカマイの肉は食べないようにと伝えられ、それはカマイの肉を食べると植えた稲の苗がカマイによって引き抜かれるからとされている。このようなカマイと人間の関わりが見られる。

また、農作物への被害を減らすため、18世紀の中頃から祖納では「シイ」と呼ばれる猪垣が建設された。それは村後方の山手に、集落を囲むようにテーブルサンゴや砂岩などを積み上げ高い石垣を造る工法で、現在でもほぼ完全な形で残っている。今日では土地改良区を囲う鋼鉄製のネット柵がその役割をはたしている。

「ザン」は特に新城（パナリ）島では「ザヌ」と称し、王府へ献上する不老長寿の妙薬としての上納品であり、島だけに捕獲が許された。つまり、年貢としての上納品であり、島の住民が食することはなかった。その霊を祭るザンの御嶽が島に所在し、その頭骨が祀られている。

「カスリヤーン（コキクガシラコウモリ）」は、後述するアカショウビンやコノハズク同様に神の使いとされ、人家に紛れ込むと保護し、翌朝に火の神の前に座らせ、グシ（泡盛）、花米、マス（塩）とお香を供えてお祈りしてから山に放す風習が見られる。

表２．西表島の哺乳類（家畜・海産哺乳類含む）と方言名

種　　名	方　言　名	備考・文献等
リュウキュウイノシシ *Sus riukiuanus*	ヤマシシ	
イリオモテヤマネコ *Felis iriomotensis*	ヤママユ、ヤママヤ、ヤママヤー	
オオヤマネコ？	ヤマピッカリャー、クンズマヤー、トウトウラー	生息状況不明
ヤエヤマオオコウモリ *Pteropus dasymallus yaeyamae*	カブリ	
ヤエヤマコキクガシラコウモリ *Rhinolophus cornutus perditus*	カスリヤン	
リュウキュウユビナガコウモリ *Miniopterus fuscus*	カスリヤン	
ヤエヤマカグラコウモリ *Hipposideros turpis*	カスリヤン	
リュウキュウジャコウネズミ *Suncus murinus temminckii*	オイザ	
ドブネズミ *Ratts norvegicus*	オイザ	内田（1964）

（続き）

ネズミグループの一種 *Rattus Group sp.*		内田（1964）
ネズミの一種 *Rattus sp.*		内田（1964）
ナンヨウネズミグループの一種 *Rattus exulans Group sp.*		内田（1964）
家ネコ	マヤー	家畜
野生化した家ネコ	ビンギマヤー	家畜
イヌ	イン	家畜
ウマ	ンマ	家畜
ヤキ	ピザ	家畜
ウシ	ウシャン	家畜
ジュゴン	ザノ	海産哺乳類
イルカ	ヒートウ	海産哺乳類
人間	ピトウ	

備考：西表島ではネズミを駆除する目的でニホンイタチが入れられたが、現在定着はしていないようである。
：鳩間島（ヤギ：ピビザー　ネコ：マヤ　ブタ：オ　イヌ：イン）

（3）鳥類

西表島における鳥類については、古くはKuroda（1925）によって標本に基づく研究があるが、近年では池原ら（1974）、池原ら（1985）、安間（1986）、西表島エコツーリズム協会編（1994）などの記録が見られる。一方、庄山（1984）はこれまでの記録を総合して、西表島で記録のある鳥類を304種としているが、最近ではコライアイサやクロジョウビタキなど新たな渡り鳥の記録（嵩原ら　2000）とリュウキュウガモの再確認記録等が見られる（時田賢一氏私信）。

前述したように西表島及びその周辺地域で鳥類の方言名は、総称や鳴き声での方言名を含み、祖納で47個、新城（パナリ）島から28個、古見から17個、鳩間から23個の合計115個が採録された。

表３に報告者や各地域ごとに比較対照して示したように、黒島（1972）は鳥類の西表名を38種（総称を含む）、八重山野鳥の会編（1983）では35種記録しているが、今回得られた方言名も一部重複しており、基本的にはほぼ同じである。しかしながら、一部に呼称の違いが見られ、例えばサギ類の総称を黒島（1972）は「ササ」としているが、新城島で「サン」、祖納で「シルサヤ（ʃirusaˈja）」、古見で「シスザイ」と地域により若干の違いが認められる（表２）。また、コノハズクについても黒島（1972）では「チコウ」としているが、新城島で「ツクホウ・ミンツクグル」、祖納で「チコホー（tʃˈkoho）」、古見で「チククル」とやはり地域性が見られる。ウグイスも黒島（1972）では「パチカイ」としているが、新城島で「ムクスタ」、祖納で「イツフクラマ、パチカイ、プトウクイク

イ」などと一部共通するものがあるものの複数名が採録され興味深い。

今回の調査では、これまでに西表島及びその周辺地域で記録されていない鳥類として、祖納方言で今日では特別天然記念物で絶滅危惧種であるアホウドリの方言名が「ウブドゥリャー（ʔubudurjaː）」として採録され、かつてこの鳥が西表島周辺で生息していたことを伺わせる。古老の話では「ナニワン：ナカノウガン島（仲の御願島）」に生息していたと言われているが、今日ではその生息確認はなされていない。

また、国指定天然記念物で絶滅危惧種であるアカヒゲ（？）*Erithacus komadori*と思われる方言名が祖納で「フシュル」として採録されており興味深い。本種は八重山諸島産亜種のウスアカヒゲ*Erithacus komadori subrufus*とも考えられるが、最近冬季に北方からのアカヒゲ*Erithacus komadori komadori*の渡りを示唆する研究が見られ（川路・樋口　1989)、八重山諸島には冬鳥としての渡来の可能性が高い。

野鳥と人間との関わりとして、西表西部の祖納地域の民謡である「まるまぼんさん」の中に、「まるまぼんさん」で塒をとるシラサギ類のコロニーとウ類の生態がうたわれていて、方言同様鳥類、鳥類と人間ののどかな関わりを示すものとして興味深いものがある。

また、ヤマダン（カンムリワシ）は稲作を行う西表島では、苗代や水田の「見張り番」として大切にされてきた。それは本種が英名で「Serpent Eagle」つまり、ヘビ食いワシと呼ばれるように、その餌となるカエル類、ネズミ類、ヘビ類（特にサキシマハブ）などが水田地域に多く、その稲作に有害なネズミ類と人間に害を与えるハブを捕獲してくれるために大切にされたのである。しかも、とまり木にじっととまり待ち伏せて餌を捕獲する習性のあるカンムリワシは、まるで苗代や水田の「見張り番」として写っていたのであろう。

一方、ゴッカル（アカショウビン）やチコホウ（コノハズク）などは神の使いとして認識されていたため、人家に入り込んで保護されると、翌朝に火の神前に座らせ、お供え物をし、三線（サンシン）をひいて歌を歌ってから放鳥したという。このことは、これらの鳥類が逆に不吉な鳥として畏れをいだかせたため、災いが起こらないようにとの配慮であったろう。他にも、人との関わりとして星（1981）は西表島の民話として「クイナ鳥」と「カラスとゴッカル」の２題を採録し、クイナ（オオクイナ）やカラス、ゴッカル（アカショウビン）は人との関わりがみられる。

なお、他の人との関わりとして、表３に示したように、今回の採録を含め、これまでに西表島とその周辺離島で記録されている鳥類の方言名は総称を含み総数が53個となり、県内で記録されている方言名では一地域で最も多い数になるものと思われる。さらにこの種数はこれまでに西表島で記録されている鳥類の約17％に当たり、この中で留鳥として生息する種が25種、渡り鳥と考えられる種が27種識別され、それぞれほぼ半数を占めた。

和　名	黒島（1972）	八重山野鳥の会（1983）祖納	新城（パナリ）島	祖納・星立（西表島）	古見（西表島）	鳩間島
スズメ			ミシュドウマ	カーラヤヌグーグアン	カーラヤヌトウラマ	リッパマ
ヒヨドリ	ピョウマ	ピヨマ	ノドブスケー	ピヨマ	ピイヤー	フォイダー
ウグイス	ニンゴチビルリャマ	ニンゴチビルリャマ				
ウグイス（鳴き声）	バチカイ	バチカイ	マクスタ	イツフクラマ・パチカイ・プトウクイクイ		
メジロ			ミルクアー	ミイシイシャアーン	ミシュトウル	
キジバト	パトナ	パトウコンザー	マミバト	ヤマバトウ		パトゥグザー
キジバト（鳴き声）			ストウドウーグーク			
ズアカアオバト	コッカラマ	エッカロマ	アウパトウ	アウパトウ		ベーカベー
キンバト	チバト		ヤマバト	ギンバト	キンパトウ	キンパトゥ
ハト全般				パトウナー	パトウ	パトグサー
カラスバト	ユウノウ	ユーノオ				
シジュウカラ	イツフクラマ	イツフクラマ				
セッカ			ゲーフケ	チュンチュン		チンチン
ミフウズラ	ウジラ	ウジラ	ウジラ	ウジラ		ウザ
コノハズク	チコウ	チコホー	ツクホウ・ミンツクグル	チコホー	チククル	チクグルー
コノハズク（鳴き声）			マユツクホウ	マヤチコー	マヤチククル	マヤスクグル
アオバズク	ユシピチコウ	ユシピチコー				
オオコノハズク	マヤチコウ					
イソヒヨドリ	イシピョウマ	イシピョーマ		イシピョマ		
ムシクイ類		パチカイ				
アカヒゲ？				フシュル		
シロハラ	アハブリ	ブッタマ		ブッタアン		
アカハラ	シスブリ					
ツグミ				ブッタアン		
ツグミ類の総称	ブッタマ					
セキレイ類	カラヤヌブフニャマ	カーラヤヌブフネマ				
キセキレイ				チビフヤアーン		
ツバメ		カジフカシフゴマ	マラアラ	マタブルシャーン		カシプトゥマラ
サンコウチョウ	ガラシヌマーブ	ガラシヌマーブ				
アカショウビン	ゴッカラマ	ゴッカラマ	オッカアロー・コカロー	ゴッカルー・ゴッカラアーン	コッカル	ゴッカロー
カワセミ	ミナトゴッカル	ミナトゴッカル				
サギ類	ササ					
シラサギ類	シルサヤ	シルサヤ	サン	シルサヤ	シスザイ	
ムラサキサギ		サヤー		サヤ	ガーナ	
ズグロミゾゴイ				ユウノウ		

表３．西表島およびその周辺離島における鳥類方言の比較

和　名	黒島（1972）	八重山野鳥の会（1983）祖納	新城（バナリ）島	祖納・星立（西表島）	古見（西表島）	鳩間島
リュウキュウヨシゴイ		スンキ		スンキ		
アマサギ		アカカラジャ				
カモ類	ガトリャ	カートウリャ	カードウリャ	ガトウリャ	ガードウリャ	ガードゥル
中型のカモ？			ユナマ			
ガン			ブガードウリャ	ウプガトウリャ		
バン（クイナ）の仲間			クビラ	コピス	クビラ	クビラ
バン	クピス	コピス	タークビラ	コピス	クビラ	タークビラ
オオバン？	ピョウマガトリャ					
オオバン			ヌークビラ	アッタコピス		
オオクイナ		ヤンクイラ	ファードウル	ファードウ・ヤンクイラ		ファードゥル
シロハラクイナ			ハラジロコピス			
ミサゴ	タイドウ	ダイドオ		タイドウシュ		
カンムリワシ	マヤダ	マヤダ	ヤマヒジナー	ヤマダン	タカ	タカ
サシバ	タカ		ター	タカ		
トビ			ビーフサー			
チョウゲンボウ		ペンサー		ペンサー	ピャンサー	
ネズミを獲るタカ			ウヤンチュトウリャー	オイザートウリャー		
ウ類	アトウク	アトク	サン	アタグ		
クロサギ						
ゴイサギ	ヨーラシ	ヨーラシ		ヨーラシ	ユーガラサー	ユーガラサー
トラツグミ		アヤブリ		アヤブリ		
カツオドリ	シサチヌ	シサチヌ		シサチヌ		ガッドリー
セグロアジサシ	パンダ	パンダ		パンダアーン		
クロアジサシ	ナニワンガラシ	イシパンダ		ナニワンガラシ		
カモメ類	シカブ					
オオミズナギドリ		アナチコー		アナチコー		ウンケ
アジサシ類						シカーブ
仲の神島の海鳥類	ナニワンググ			ナニワンクグ		
アホウドリ	ウプドリャ			ウプドウリャー		
チドリ類				チドウリャー		
オサハシブトガラス	ガラシ			ガラシ		ガラサー
鶏の卵				トウノ		トゥルヌコーマ
不明						
合計52個	37個	35個	28個	47個	17個	23個

（4）爬虫類

これまで西表島からセマルハコガメやサキシマハブ、キシノウエトカゲ、サキシマスジオなどの陸上に生息する22種（池原他、1984）の他に、ウミガメ類３種を加えると25種の生息が知られている。

爬虫類では13種についての方言名が得られた。この中で生活に深い関わりのある種としては「ヤマミー（セマルハコガメ）」で、カマイ（イノシシ）猟ではこのカメに出会うと縁起が悪いとされ、遭遇した地点からいったん山道の入り口まで引き返して、出直すという風習が見られる。

サキシマハブについては、咬まれないためのまじないとして、道ばたのクロツグの葉を取り、一方を縛ってこれを揺らしながら、「ユラ、ユラ、パーブ、ユラ、ユラ、パーブ」と唱えながら歩くことで咬傷が避けられると言い伝えられている。

サキシマスジオは大型のヘビで３ｍくらいにもなり、肉の量もハブより多いため好んで食用にされたという。なお、本地域では国指定天然記念物で大型のキシノウエトカゲが海岸林で生息している。宮古諸島では本種は食用にされることがあったが、本地域では食用とされていない。

（5）両生類

西表島にはハラブチガエル、ヤエヤマアオガエル、オオハナサキガエル、コガタハナサキガエルなど７種が生息しているが、カエル類の総称的な呼称として「アタウ」、「アブタアー」、「アウダー」の方言名が得られた。また、ヤエヤマアオガエルは「ナタドゥリアブター」と呼ばれ、稲の種子をまきはじめる頃に鳴きだすことからこう呼ばれる。一部は食用とされていたものと思われるが、その詳細については聞き取りできなかった。

（6）魚類

汽水域や淡水に生息する魚類は、西表島エコツーリズム協会編（1994）によるとオオウナギやオオクチユゴイ、タナゴモドキなど15種が知られているが、今回方言名としては不明種を含め４種採録された。海産魚類は含まれていないが、魚類は古来より重要な食糧源としての利用があり、特に海産魚類については伝統的な巻き網漁として、沖合からリーフ内に入ってきた魚の群を網で囲んで捕獲する「ウブアン」あるいは「マキアン」や、満潮時に魚が入り江に入ったところを仕切って、干潮時に閉じこめて捕獲する「プサン」などの漁法があった。また、冬場の大潮ではタイマツ（今日では電灯）を持って、ピーニやイノーに出かけ、魚類やタコ、貝類を捕獲する「イザリ」での捕獲も行われた。

今回の方言名収集は、人間生活との関わりの深い、陸上生物や河川、河口近くの汽水域

で生息する生物に限定したことから、その方言名は少数にとどまっている。したがって海産する生物種についての方言名収集は今後の課題であろう。

（7）昆虫類・土壌動物類・クモ類・その他の小動物

西表島を含む八重山諸島からは渡辺（1979）によるとトンボ類53種、チョウ類97種（内迷蝶45種）が知られ、その他に土壌動物として大嶺（1984）の報告では唇脚網・（ムカデ類）32種、倍脚網（ヤスデ類）21種、池原ら（1985）ではクモ類が119種が知られている。

今回採録できた方言名はわずか９種であり、今後ともに調査し、採録する必要性がある。

（8）甲殻類

汽水域から陸上に生息する甲殻類は、西表島エコツーリズム協会編（1994）によるとウシエビ、ミナミテナガエビ、オニヌマエビ、ノコギリガサミなど39種が知られている。今回方言名としてはその中で16種（総称含む）採録された。

甲殻類は古来重要な食糧源としての利用があり、人との関わりも深い。西表島でもテナガエビ類やガサミ類などは食用として捕獲され、食用に供されている。しがたって、このことを反映して、大型のカニ類やテナガエビ類などに種ごとに方言名が知られている。

特に「ガサン（ノコギリガサミ）」や「チンガニ（モクズガニ）」は重要な食料として識別され呼称されている。また、「ヤクジャーマ節」には、干潟に生息するシオマネキ類が歌われ、それぞれのユーモラスな生態が描写されている。

（9）貝類

西表島の陸上に生息する貝類は、池原ら（1985）によると20科49種が生息しているとされる。一方、汽水域も含め海産する貝類についての種数は、未だその総数については把握されていないように思える。

今回採録された貝類の方言名は９種で、海産する種類や汽水域・マングーブ林に生息する貝類の「キゾ（シレナシジミ）」も含まれているが、陸産貝類では大型のマイマイ類やノッチにすむアマオブネ類、海産のクモガイ類などを中心に食用として利用されるものが多い。今回の調査ではこのことを反映して、食用となる貝類に方言名が付けられ識別されている。やはり、食糧資源のひとつとしての認識していたことが伺える。

宮城（1972）は、八重山地方の食用とされる貝類を39種記録していることから、今回の調査は不十分と思われる。

＜謝辞＞

本報告を行うにあたり、方言名の調査に協力していただいた富里サカイ氏（古見在住）、民俗研究家の海津ゆりえ氏（東京都在住）、西大舛高壱氏（西表島大原在住）、花城広助氏（名護市宇茂佐在住）、パナリ島の歴史に関する情報をいただいた竹富町史編さん室の通事孝作氏に厚く感謝申し上げる。また、野鳥情報の提供をいただいた西表中学校の庄山守氏、西表野生生物保護センターの阪口法明氏、伊谷玄氏、松本千枝子氏、我孫子市鳥の博物館の時田賢一氏、船浮中学校の奥戸晴夫氏の各氏に感謝申し上げます。

＜引用文献＞

天野鉄夫　1975．沖縄県有用樹木要覧．沖縄県緑化推進委員会．

天野鉄夫　1979．琉球列島植物方言集．新星図書．301pp.

天野鉄夫　1980．沖縄西部離島主要御嶽の植物方言名．沖縄県社寺・御嶽林調査報告III．399-432.沖縄県教育委員会．

天野鉄夫　1981．先島諸島の主要な御嶽の植物方言名．沖縄県社寺・御嶽林調査報告VI．283-316．沖縄県教育委員会．

星　勲　1981．西表島の民俗.友古堂書店．282pp.

本田安次　1962．南島採訪記．明善堂書店．433pp.

いらぶの自然編集委員会編　1991．いらぶの自然（動物編）．伊良部町．290pp.

池原貞雄・知念盛俊・下謝名松栄・与那城義春・千木良芳範・島村賢正・日越国昭　1985．動物．西表島天然記念物緊急調査報告書Ⅰ．沖縄県教育委員会．88pp.

池原貞雄・与那城義春・宮城邦治・当山昌直　1984．陸の脊椎動物,琉球列島動物図鑑Ⅰ．新星図書出版．351pp.

Kuroda Nagamich 1923. A contribution to the knowledge of the Avifauna of the Riukiu Islands and the vicinity. published by Author. 293pp.

黒岩　恒　1983．琉陽雑譚．動物学雑誌第51号．

黒島寛松　1972．野鳥の西表名．鳥10号．52-53．沖縄鳥類保護協会．

久野　眞　1988．西表島祖納方言の音韻体系．琉球の方言．72-105．法政大学沖縄文化研究所．

川路則友・樋口広芳　1989．アカヒゲ*Erithacus komadori* の分布ならびに亜種の問題について．昭和63年特殊鳥類生息調査．環境庁．71-88.

加治工真市　1990．鳩間方言の住関係語彙．琉球の方言．51-106．法政大学沖縄文化研究所．

加治工真市　1997．琉球竹富方言の基礎語彙,分野２，動物．琉球の方言．136-148．法

政大学沖縄文化研究所.
西表島エコツーリズム協会編　1994. ヤマナ・カーラ・スナ・ピトウ,（ヤマ・カワ・ウミ・ヒト）西表エコツーリズム・ガイドブック. 自然環境研究センター. 111pp.
環境庁編　1991. 日本の絶滅のおそれのある野生動物. 340pp. 自然環境研究センター.
宮城　文　1972. 八重山生活誌. 城野印刷. 702pp.
名護博物館編　1990. 名護・やんばるの野鳥（企画展図録）. 名護博物館.
大嶺哲雄　1984. 琉球列島の多足類. 沖縄の生物. 日本生物教育会沖縄大会321-335.
沖縄大百科刊行事務局編　1983. 沖縄大百科事典上巻. 沖縄タイムス社. 1014pp.
沖縄大百科刊行事務局編　1983. 沖縄大百科事典下巻. 沖縄タイムス社. 1010pp.
沖縄野鳥研究会編　1986.沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会.
沖縄野鳥研究会編　1993.改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版.
大嶺哲雄　1985. 土壌動物. 西表島天然記念物緊急調査報告書III. 沖縄県教育委員会. 88pp.
尚　景　1918. 琉球産鳥類の方言. 鳥（日本鳥学会誌）2: 58-60.
庄山守　1984. 西表島の鳥類　動物と自然.14(3)22-27.
田代安定（1889）. マックハン蟹ノ説. 動物学雑誌14号.
当山昌直・久貝勝盛・島尻澤雄　1980. 宮古群島の両生爬虫類に関する方言. 沖生教研会誌, 13:17-32.
当山昌直　1983. 阿嘉島の動物の方言名について. 県立博物館総合調査報告書III－座間味村（ざまみそん）－, pp. 23-29. 沖縄県立博物館.
当山昌直　1984. 浜比嘉島の動物方言. やちむん, 8: 53-61.
当山昌直　1987. 伊計島の動物方言. 県立博物館総合調査報告書IV－伊計島（いけいじま）－, p. 35-43. 沖縄県立博物館.
当山昌直　1989. 佐敷町の動物の方言.佐敷町誌,（3　自然）, p. 403-451. 佐敷町.
当山昌直・国吉朝子・神谷保江・翁長文子　1997. 南風原町の動植物の方言. 南風原町史（第２巻　自然・地理編）. p. 645-796. 南風原町.
玉城常雄　1979. 八重山の野鳥.　特別展八重山の自然, 25-32. 石垣市立八重山博物館.
嵩原建二・島村修・加治工真市　1998. 波照間島で記録された鳥類とその方言名について. 波照間島総合調査報告書. 65-86. 沖縄県立博物館.
嵩原建二・池長裕史・金城道男・渡久地豊・金城輝男・庄山守　2000. 沖縄県内において野外観察や傷病鳥の保護及び博物館収蔵標本等により確認された鳥類の記録について. 沖縄県立博物館紀要第26号. 沖縄県立博物館
内田照章　1964. 琉球八重山群島西表島鼠相の特殊性（予報）. 八重山群島学術調査報告

第２集．九州大学海外学術調査委員会学術報告第２号．75-91．九州大学．
安間繁樹　1976．原生林の闇に生きる野生のイリオモテヤマネコ，日本の野生動物６．汐文社．286pp.
安間繁樹　1979．八重山諸島の哺乳類．特別展八重山の自然，p.33-39．石垣市立八重山博物館．
安間繁樹　1986．マヤランド西表島III．野外に出ようその２．新星図書出版．
安間繁樹　1990．西表島の自然誌、幻のオオヤマネコを求めて、晶文社.
山田雪子（述）1992．西表島に生きる，おばあちゃんの自然生活史．安渓貴子・安渓遊也編．ひるぎ社．211pp.
渡辺賢一　1979．八重山諸島のトンボ・チョウ類．特別展八重山の自然，.石垣市立八重山博物館．
八重山野鳥の会編　1983．八重山諸島の鳥類目録．p.28-38．10周年記念誌．八重山野鳥の会．

分類	種名	新城島	鳩間島	祖納	音声表記	古見	備考（食用・毒・用途・用途・留島・渡り鳥等）
植物	植物						
植物	オオタニワタリ	フツンヌフク	フキンヌフキ	フチピ	ɸu̥tʃi˩pi	フクンヌフク、サラムシロ	食
植物	リュウキュウマツ	マチ、マチキ	マチ	マチ、マチキ	ma˩tʃi, matʃi̥˩ki	マツ	くり舟材に利用
植物	ヒカゲヘゴ	バラピ	ワラビ	バラピ	ba˩ra˥p'i̥		食
植物	モクマオウ	モクモウ	モクモー	モクモウ	moku˩mo˥ː		外来
植物	ヤマモモ	ムン、ヤマムン	ムン	ムム、ヤマムム	˩mu˥mu, jamamu˩mu	ムン	食
植物	イヌビワ	カブルーキ	ハブキ	カブリキ	ka˩buri, ka˩buriː˥kiː	カブラー、カブラーギ	
植物	ギランイヌビワ	ヤマカブリ	カブリ		jamakabu˩ri		
植物	フクギ	ポンキ	フクン	フカイキ	ɸu̥kai˩ki	フクンギ	建材・染料
植物	シャリンバイ	トーイツィキ		トゥカチキ	tu̥katʃi˩ki	トゥカジ	染料
植物	モダマ	トールカザー	キンカザ	キーカッツァ	kiːkat˩tsa		
植物	デイゴ	ジホキ	グズキ	ズーキ	˩dzuː˥ki	ズグ	木彫材・毒性
植物	セイシカ	ヤマザクラ	ヤマザクラ	ミキ	mi˩ki	ウブツツジ	
植物	サキシマツツジ	キガゾ	ツツジ	キガゾ	˩kiga˥dzo	ツン	
植物	ツバキ	チバキ	ツバキ	チバキ	tʃi̥˩pa˥k'i̥	カタシ	
植物	グンバイヒルガオ	パマカッツァ	パマカザ	パスカッツァ	p'ḁu̥makat˩tsaː	ハマンガナ、ハマカズラ	
植物	タブノキ	タブキ	タブキ	タブキ、コーガーキ	˩tabu˥ki, koː˩gaː˥ki̥	コーガ、コーガキ	線香の原料
植物	タケ（全般）	タイ	タキ	タキ	t'ḁ˩ki	タキ（竹の子＝タキヌフキ）	食
植物	苦い竹（ホウライチク）竹	ンガダケ	ンガダキ	イガダイ	˩ʔiga˥dai	ンガダキ	食
植物	カンザイチク	ダイミョウダヒ		ダイム	dai˩mu	ダイミョウダキ	食
植物	釣竿用の竹（ホテイチク）	マーダヒ	シブクダキ	チボダヒ、アヤタキ	˩tʃibo˥daçi̥, ʔajat'ḁ˩ki		食
植物	コタイサンチク	マトゥク	マータク	マトゥク	mat'u̥˩ku	マータキ	食
植物	リュウキュウチク	スヌルダヒ	ユチルタキ	シノル	ʃi̥no˩ru	スヌル	食
植物	ゴザダケザサ	ヤマンダイ		ヤマンダキ	˩jamandai	クサンダキ	屋根のユチリ
植物	タイミンチク			ウシタイ	˩ʔuʃi̥˥t'ai		屋根のユチリ
植物	ヤダケ		ユチル	ヤダキ	˩dadḁ˥k'i		浦内にのみ自生
植物	ダンチク			ダードー	˩daː˥doː		魔よけ・ジッチャ～ン
植物	テリハボク		ヤラブ	ヤラブ	˩jara˥du	ヤラブ	有用材・実は食
植物	ヤエヤマヤシ		ヤシ	ビンドー	bin˩doː˥		
植物	クバ		クバ	クバ	ku˩ba	クバ	
植物	サキシマスオウノキ			ダイミョウーキ	dai˩mjoː˥ki	ダイヌキ	薬用・舟材
植物	アダン	アダニ	アダンブラー	アダヌ	ʔada˩nu	アダヌ	有用・実は食・葉の利用
植物	メスのアダン	ミーアダニ	ミーアダンブラー	ミーアダヌ	miːʔada˩nu		
植物	オスのアダン	ビヒアダニ	ビキアダンブラー	ビーアダヌ	˩biˈ˥ːʔadanu		
植物	鉄のようなアダン		カニアダンブラ	カニアダヌ	k'ḁ˩ni̥ʔada˥nu		
植物	アダンの気根		アダナシ	アダヌシ	ʔada˩nu˥ʃi	アダナス	繊維利用
植物	マングローブ		プシィキヤマ	プシキヤン	pu˩ʃikijaŋ	ピンギヤマ	畑
植物	ヒルギ（総称）	プスィキ	プスィキ	プシキ	pu̥˩ʃi˥k'i̥	ピンギ	染料・建材

表１．西表島動植物方言名（方言は石垣・花城採集／音声表記は加治工）

分類	種名	新城島	鳩間島	祖納	音声表記	古見	備考（食用・毒・用途・用途・留鳥・渡り鳥等）
植物	メヒルギ	ビヒプスィキ	ビキプスィキ	ビープシキ	˥bi˥ːpɯʃi̥ki	ビギピンギ	
植物	オヒルギ	ミープスィキ	ミープスィキ	ミープシキ	˥miːpɯʃi˥ˈki̥	ミーピンギ	染料・建材
植物	ヤエヤマヒルギ			マツァプシキ	ma˥tsaːpɯʃi˥ki		染料・建材
植物	マヤプシキ			マヤプシキ	ma˥jaː˥pɯʃi̥ki	マヤピンギ	
植物	ソテツ		シトウチ	シトゥチ	ʃi̥˥tu˥tʃi	シトゥチ	食・毒
植物	サガリバナ			ジルカキ	˥dʒirukaˉki	ザラカキ	実は食・
植物	オキナワキョウチクトウ		ミーフクラキ	ミーシブキ、ミーフクラキ	miʃi˥pu˥ki, miɸku˥raˉki		毒
植物	センダン		シンダンキ	シンダン	sin˥daŋ	センダン	建材・家具材
植物	ガジュマル			ガチバナ	gatʃipˈa̠˥na	ガツパニ	防風林
植物	クチナシ			ヤマフチマ	˥jamaˉɸɯtʃi˥ma		染料・薬は薬用
植物	イトバショウ		イトバサー	タニバサー	tˈa̠niba˥saː	タニバサー	繊維・芭蕉布
植物	クワズイモ		ビロサ	カサヌパ	ka̠˥sanu˥pa	ビールサーヌパー、マーカサヌパー	毒・薬は利用
植物	クワズイモの雄、熱帯系		ビキカサヌパ	ビーカサヌパ	biːkˈa̠˥sanu˥paː		毒・薬は利用
植物	クワズイモの雌、熱帯系		ミーカサヌパ	ミーカサヌパ	miːkˈa̠˥sanu˥paː		毒・薬は利用
植物	ソメモノイモ		クール	モール	˥moːru	クール	染料・薬用
植物	イネ（稲）		イニ	イニ、マイ	ʔi˥ni, ˥maˉi	イニ、マイ	食
植物	コメ（米）		マイ	マイ	˥maˉi	マイ	食
植物	クサトベラ			チピフカーキ	tʃi̥piɸu˥kaˉki		紙代用
植物	モンパノキ		ミーカガンギ	ガンキョウキ	gaŋ˥kjoː˥ki		水中めがね・薬用
植物	クロツグ		マーニ	マーニ	maː˥ni	マーニ	食・繊維
植物	オキナワウラジロガシ		カシキン	カシキ	ka˥ʃiˉki	カスンギ	舟材・薪
植物	々の実			アディンガ	ʔadiŋ˥ga	アディンガ	食・がん具
植物	イタジイ		シンギ	シィーキ	˥ʃiː˥ki̥	シィーキ	舟材・薪
植物	イタジイの実		シィーヌミ	フグ	ɸu˥gu	シィーヌミ	食・
植物	ツルアダン		アダンブウ	ヤンダラー、ヤンダル	jan˥daraˉ, jan˥daˉru	ヤマアダン	食
植物	フトモモ		フドゥン	フードー	˥ɸuˉːdoː	フートー	食
植物	グミ			フッピー	˥ɸupˉpi	クビ	食
植物	ホルトノキ			マツマヤ	ma˥tsumaja	スサズ	食
植物	ヤマヒハツ			ヤントゥフチピャ～	jantuɸɯtʃi˥pjaˉ	ヤマクビ	食
植物	ハスノハギリ		ビンドロマーヤ	トゥカナチキ、ブーブーキ	tu̠kaˉnatʃ jkˈi̥, ˥buːbuːˉki	ビビキ	毒・木彫
植物	イリオモテアザミ		ハマグンボウ	ハマグンボウー	hamagum˥boːˉ	ハマグンボー	食
植物	ハマオモト		サダフカ	フクルー、サディフカー	ɸuku˥ruːˉ, sadiɸu˥kaː	サティフカー	薬用・皿利用
植物	マルヤマシュウカイドウ			スン	˥suˉŋ	なし	食・毒消し薬用
植物	コウトウシュウカイドウ			ビースン（毒）	˥biː˥suŋ		毒
植物	ゲットウ		サミ	サニ	sˈa̠˥ni	サンミ	染料・繊維・防虫
植物	ボタンボウフウ		サクナ	サクナ	sa̠kuna	サクナ	薬用・
植物	チガヤ		ガヤ	ガヤ	ga˥ja	ガヤ	屋根・駕籠
植物	ススキ		ユシギ	ユシキ	juʃi̥˥ki	ユシキ	ほうき・
植物	オオハマボウ		ユナキ	ユーナ	juː˥na	ユーナ	灰利用・防風林

分類	種名	新城島	嶋間島	祖納	音声表記	古見	備考（食用・毒・用途・用途・留鳥・渡り鳥等）
植物	モクタチバナ			アブチァ～	ʔabu˥˩tʃa˦˩˨		実は食
植物	アカギ			アカンギ	˥˩ʔaka˧˥ŋgi	アカンギ	船材・建材
植物	タイワンウオクサギ			パビルキ	˥˩pabiru˥˩ki		建材・
植物	ハマゴウ			フサキ	ɸu˩˧sa˧˥ki		蚊よけ
植物	モモタマナ		クワディサ	クバディサ	kubadi˥˩sa:		実は食
植物	クロガネモチ			ムジキ	mudʒi˥˩ki		鳥もち
植物	イヌマキ		キャンギ	キヤンギ	˥˩kjaŋ˧˥gi	キャンギ	建材
植物	タイワンオガタマノキ			ドゥスヌ	dusu˥˩nu	ドゥスン	建材
植物	モッコク			イゾキ	ʔidzo˥˩ki	イジュキ（ビギイジュ赤、ミーイジュ白）	建材
植物	クワ（桑）		ゴーナギ	コンギ、クゥンギ	koŋ˥˩gi	クァワーキ	実は食
植物	パパイヤ		マンジュナル	マンジュマイ、マンジュミ	mandʒu˥˩mai, mandʒu˥˩mi	マンジュマイ	食・果実
植物	実芭蕉（バナナ）		シマバサナイ	バサ	ba˥˩sa	バサー	食・果実
植物	バナナの実（果物）		バサンナル	バサヌシツ	ba˥˩sanu˥˩ʃittsu	バサヌナリ	食・果実
植物	ミカン		フナブ	フノー	ɸu˩˧no:	フナブ	食・果実
植物	ヒラミレモン（シィクァーサー）		フナブ	クンガニャー	kuŋga˥˩nja:		食・果実
植物	バンジロー（グァバー）		バンスル	パンシル	paŋ˥˩ʃiru	パンスル	食・果実
植物	トウガン		シブル	シプリ	ʃi˥˩puri	シブイ	食・栽培
植物	ヒョウタン		スブル	チブル	tʃi̥pu˥˩ru	チブル	食・栽培
植物	ダイコン		ダイクニ	ダイクニ	daiku˥˩ni	ダイクニ	食・栽培
植物	ラッキョウ		ラッキョウ	ダイッキュウ	daik˥˩kju	ラッキュウ	食・栽培
植物	ヘチマ		ナベラ	ナベーラ	nabe:˥˩ra	ナベラ	食・栽培
植物	ニガウリ		ゴーヤー	ゴーヤー	go:˥˩ja:	ゴーヤー	食・栽培
植物	ニンジン		キンダイクニ	キンダイクニ	kindaik'u˥˩ni	キンダイクニ	食・栽培
植物	ゴボウ		グンボウ	グンボー	gum˥˩bo˥˩:	グンボー	食・栽培
植物	サトウキビ		シンザー	キッツァ	kit˥˩tsa	スンザー	食・栽培
植物	スイカ		スイカ	ヤマトゥグーリャ～	jamatu˥˩gu:rjã:	スイカ	食・栽培
植物	ニンニク		ピル	ピル	p'i̥˥˩ru	ピル	食・栽培
植物	カボチャ		カブチ	カブチャ	˥˩kabu˥˩tʃa	カブチャ	食・栽培
植物	サツマイモ		ウム	ンム	ʔm˥˩mu	アコン	食・栽培
植物	ヤマイモ		ヤマウン	カッツァーンム	kat˥˩tsa:ʔmmu	ウン（コーシャンム、ボーンム）	食・栽培
植物	ホウズキ		ホッカ	グルビャ～	˥˩guru˥˩bjã:		食・野生果実
植物	ノカンゾウ		パンソー	パンスー	pan˥˩su:	パンスー	食・薬草
植物	ツルソバ			スンパン	˥˩sum˥˩paŋ		食・薬草
植物	アカメガシワ			キブシキ	kibuʃiki̥	カサイギ	染料
植物	シマミサオノキ		ダスカー	ダシカ	daʃi̥ka	ダスカ	建材・霊力
植物	タイワンルリミノキ			カンダシカ	kandaʃi̥˥˩ka		建材・霊力
植物	シマヤマヒハツ		ヤンズメ	フクイキ	ɸu˥˩ku˥˩iki:		
植物	トウヅルモドキ		クージー				
植物	オオバキ		カサイパ				

分類	種名	新城島	鳩間島	祖納	音声表記	古見	備考（食用・毒・用途・用途・留鳥・渡り鳥等）
植物	アコウ		ウシキ				
植物	トウガラシ		クース	クース	˥ku˥ːsu	クース	食・栽培
植物	山ミカン？			ヤマフノー	jamaΦu˩no:	アオサミカン	
植物	リュウキュウガキ			ガーキ	˥gaː˥kiʲ		毒
植物	クワノハエノキ			ナーリャンキ	˥naː˥rja˥ŋ˥ki		実・食
植物	不明			クビー	gu˩bi:		ゴザ
植物	不明			イトーナー	ʔitoːnaː		田んぼの雑草
植物	不明			ナイフサ	˥nai˥Φusa		田んぼの雑草
植物	不明			センコーフサ	seŋ˩ko˥ːΦusa		田んぼの雑草
植物	不明			ピカランギ	pikaraŋ˩gi	ピィンギャー	田んぼの雑草
植物	不明（オイシバ？）			ガトゥリァヌパイフサ	gatu˩rjanupai˥Φusa		田んぼの雑草
植物	ハイキビ		ヌザキ	ノザシ	no˩dza˥ʃi	ノザシ	田んぼの雑草
植物	ヒエ		ピー	ピー	˥piː		田んぼの雑草
植物	不明（オオアブラガヤ？）			カンスリフサ	kan˩suri˥Φusa		カミソリのように鋭い刃
植物	オイシバ		イバイムトゥ	イバイフサ	ʔi˩dai˥Φusa	イバイ（イバイムトゥ）	田植えジラー
植物	ノボタン			マラパンカ	marapaŋ˩ka		染料
植物	エゴノキ			シタンキ			カマイバナの人形
植物	シマトネリコ			クバナキ	kuba˩na˥ki		舟の滑車
植物	（麻）チョマ・カラムシ		ブー	ブー	˥bu˥ː	ブー	繊維・
植物	リュウキュウアイ			シマアイ	ʃima˩ʔai	トーアイ	染料
植物	オキナワサルトリイバラ		ヤマクール	マヤーモール（久米島のグール）	ma˩ja˥moː		染料
植物	サンキライ類			サンキラ	saŋkʲ˩ra	サンキラ（ビギサンキラ、ミーサンキラ）	葉利用
植物	アカハダノキ			ヤマヌバンキ	jamanu˩daŋ˥kʲi	ヤマヌバンキ	
植物	ナシカズラ			カシナズ（キーウイの野性種）	kaʃinadzu	ウブズ	食・
植物	トウアズキ			アハダン	˥ʔaha˥daŋ		装飾用
植物	アズキ		アカマミ	アハマミ	˥ʔaha˥mami		食
植物	コーヒーノキ			ケーマ	keː˩ma		食
植物	インドアイ（ナンバンコマツナギ）				˥kabi˥kʲi		染料
植物	アオガンピ		カビキ	カビキ			紙すき
植物	ブッソウゲ（仏桑花）		グソーク	グソウバナ	gu˩soː˥pana	グスクヌバナ	葉液はリンス
植物	コモモ			タモ	˥taːmo		食
植物	リュウキュウコクタン		キダ	キダキ	˥kida˥kʲi	キダキ	実は食・心材は三線
植物	シイノキカズラ			ケーナカッツァ	keː˩na˥kattsa		ブリヨイ大綱つくり
植物	タイワンクズ			ジュウカッツァ	˥dʒuː˥kattsa		野生・綱代用で利用
植物	クマタケラン			ヤマサニ	jamasa˩ni		茎はヤマイギの毒消し
植物	シマクワズイモ			カサフタ～	kasafu˩taː		葉を利用
植物	イバネイモ			セイバンウム	seibaŋʔu˩mu		食・台湾から
植物	ハスイモ			カサムチ	ka˩sa˥mutʃi		茎は食
植物	ツワブキ					ササバナ	

分類	種名	新城島	鳩間島	祖納	音声表記	古見	備考（食用・毒・用途・用途・留鳥・渡り鳥等）
植物	ミズイモ			ターウム	taːʔuˈmu		食・栽培・田んぼ
植物	不明			パイム	paiˈmu		食・栽培・田んぼ
植物	ジャケツイバナ（シロップ）			マヤフス	majafu̥tsu		※山猫の糞の意味
植物	アワ	アー	アー				
植物	モチキビ		キン	キム			
植物	ムギ		ムン	ムン			
植物	ナンゴクワセオバナ			スイ	ˈsuˈi		
植物	不明			マッテヌウジフサ	matˈteˈnuᵊdʒˈfusa		※人の名前に由来
植物	ヤエヤマアオキ			なし※ブリシ（竹富）			祖納／星立海岸になし
植物	リュウキュウヨモギ			ノーバイ	noːˈbai		
植物	ネンジュモ		ジーバマル	ジーフクラー	dʒiːfu̥kuˈraː	ジーフクラー	ラン藻類・食用
	165個						
動物	（哺乳類）						
哺乳類	リュウキュウイノシシ	ウムザ	カマイ	カマイ	kʻa̰ˈmai	カマイ	
哺乳類	イリオモテヤマネコ	ヤママユ	ヤママヤ	ヤママヤ	jamamaˈjaː	ヤママヤー	
哺乳類	家ネコ		ヤーヌマヤ	マヤ	maˈjaː	マヤー	
哺乳類	ノラネコ		ピンギマヤ	ピンギマヤ	piŋgimaˈjaː	ピンギマヤー	
哺乳類	オオヤマネコ？	ヤマピッカリャー		グンズマヤー	ˈguˈndzumajaː	トゥトゥラー	生息状況不明
哺乳類	ヤエヤマオオコウモリ	カブル	カブレ	カブリ	kaˈburi	カブル	
哺乳類	カグラコウモリ	イシャーラ		カスリャ～	ka̰suˈrjaː	カサラー	
哺乳類	キクガシラコウモリ	イシャーラ		カスリャ～	ka̰suˈrjaː	カサラー	
哺乳類	ネズミ	ウヤンチュー	ウヤザー	オイザー	ʔoiˈdzaː	ウヤンチュー	
哺乳類	イルカ		ピトゥー	ヒートゥ	çiːˈtuˈː		
哺乳類	ジュゴン	ザヌ	ザン	ザノ（ザーノ）	dzaːˈno	ザノ	
	11種						
動物	（鳥類）						
鳥類	サギ（シラサギ類）	サン		シルサヤ	ʃirusaˈja	シスザイ	渡り鳥
鳥類	ムラサキサギ			サヤ	saˈja	ガーナ	繁殖
鳥類	ウ	サン		アタグ	ʔataˈgu		渡り鳥
鳥類	カモ	カードゥリャ	ガードゥル	ガトゥリャ	ˈgaˈtuˈrja	ガードゥリャー	繁殖
鳥類	中型ガモ？	ユナマ					
鳥類	コガモ	ピョーマ		ピャンガトゥリャ	ˈpjaˈŋgatu̥rja		渡り鳥
鳥類	ガン	ブカードゥリャ		ウブガトゥリャ	ʔubugatu̥ˈrja		渡り鳥
鳥類	カンムリワシ	ヤマジヒナー		マヤダン	maˈjaˈdaŋ	タカ	繁殖
鳥類	サシバ	ター		タカ	ta̰ˈka		渡り鳥
鳥類	チョウゲンボウ			ペンサー	penˈsaː	ピャンサー	渡り鳥
鳥類	トビ	ビーフサー					迷鳥

分類	種名	新城島	鳩間島	祖納	音声表記	古見	備考（食用・毒・用途・用途・留島・渡り鳥等）
鳥類	ネズミを捕る鳥	ウヤンチュウトゥリャー		オイザートゥリャー	ʔoiˈdzaːˈtʼu̟ˈɾ̥jaː		
鳥類	バンの仲間	クビラ	クビラ	コピス	koˈpisu	クビラ	繁殖
鳥類	バン	タークビラ	タークビラ	コピス	koˈpisu	クビラ	繁殖
鳥類	オオバン	ヌークビラ		アッタコピス	ʔattakopi̥su̟		繁殖
鳥類	オオクイナ	ファードゥル	ファドル	ファードゥリ、ヤンクイラ	ɸaːˈduri, jaŋˈkuira		繁殖
鳥類	ヒクイナ			ウジラ	ʔudʒiˈɾa	ウジラ	繁殖
鳥類	チドリ			チドゥリャー	tʃiduˈɾjaː		渡り鳥
鳥類	ハト全般		パトゥグサ	パトゥナー	pʼa̟tuˈnaː	パトゥ	繁殖
鳥類	リュウキュウキンバト	ヤマバト	キンバト	ギンバト	ˈgi˥mpʼa̟tu	キンバトゥ	繁殖
鳥類	キジバト	マミバト		ヤマパトゥ	ˈjamapʼa̟tu		繁殖
鳥類	キジバト	ストゥドゥーグーク					繁殖
鳥類	アオバト	アウバトゥ	ベーカベー	アウパトゥ	ˈʔau˥pʼa̟tu		繁殖
鳥類	リュウキュウヨシゴイ			スンキ	ˈsu˥ŋkʼi̟		繁殖
鳥類	シロハラ、アカハラ			ブッタァ～	ˈbu˥ˈtaɾ̃		渡り鳥
鳥類	ツグミ			ブッタァ～	ˈbu˥ˈtaɾ̃		渡り鳥
鳥類	トラツグミ			アヤブリ	ˈʔajaburi		渡り鳥
鳥類	リュウキュウコノハズク	ツクホウ、ミンツクグル	スクグルー	チコホー	tʃiˈkoho	チククル	繁殖
鳥類	リュウキュウコノハズク（泣き声で）	マユツクホウ	マヤスクグル	マヤチコー	maˈja˥tʃi̟ko	マヤチククル	繁殖
鳥類	リュウキュウアカショウビン	オッカァロー、コカロー	ゴッカロー	ゴッカル、ゴッカラ～	gaokkaru, gokkaraɾ̃	コッカル	渡り鳥
鳥類	ヒヨドリ	ノドブスケー	フォイダー	ピヨマ	ˈpijo˥ˈma	ピィヤ～	繁殖
鳥類	シジュウガラ						繁殖
鳥類	メジロ	ミルクァー		ミーッシャ～	miːʃˈʃaɾ̃	ミシュトゥル	繁殖
鳥類	スズメ	ミシュドゥマ	カーラヤヌファマ	カーラヤヌグーグゥ～	kaːˈra˥januˈguːgwaɾ̃	カーラヤヌトゥラマ	繁殖
鳥類	イソヒヨドリ			イシピョマ	ˈʔiʃi̟pjo˥ːma		渡り鳥
鳥類	アカヒゲ？	フシュル					繁殖
鳥類	ウグイス	マクスタ		イツフクラマ、パチカイ、ブトゥクイクイ	ʔitsuɸu̟kurama, patʃikai		渡り鳥
鳥類	ツバメ	マラァラ	カジブトゥデマー	マタブルシャ～	matabuˈɾuʃaː		渡り鳥
鳥類	オサハシブトカラス	ガラス	ガラサー	ガラシ	gaˈɾa˥ʃi̟	ガラサー	繁殖
鳥類	ゴイサギ		ユーガラサ	ヨーラシ	joːˈɾa˥ʃi̟	ユーガラサー	留鳥？
鳥類	ヒバリ？（セッカ）	ゲーフケ		チュンチュン	ˈtʃuŋˈntʃuŋ		留鳥
鳥類	キセキレイ			チビフヤァ～ン	tʃi̟piɸuˈjaɾ̃		渡り鳥
鳥類	ズグロミゾゴイ			ユウノウ	juːˈno˥ː		繁殖
鳥類	ミサゴ			タイドウシュ	taiˈdo˥ːʃu		渡り鳥・繁殖・ナニワン
鳥類	カツオドリ（幼）			ッサチヌ	ssatʃi̟ˈnu		渡り鳥・繁殖・ナニワン
鳥類	オオミズナギドリ		ウンケ	アナチコー	ʔanatʃi̟ˈkoː		渡り鳥・繁殖・ナニワン
鳥類	セグロアジサシ			パンダ～	ˈpan˥daɾ̃		渡り鳥・繁殖・ナニワン
鳥類	エリグロアジサシ			ナニワンガラシ	naˈni˥waŋgaraʃi		渡り鳥・繁殖・ナニワン
鳥類	仲の御嶽の海鳥の総称			ナニワンググ	naˈni˥waŋgugu		渡り鳥の繁殖地・ナニワン
鳥類	アホウドリ			ウブドゥリャ～	ʔubuduˈɾjaɾ̃		渡り鳥・繁殖・ナニワン

分類	種名	新城島	鳩間島	祖納	音声表記	古見	備考（食用・毒・用途・用途・留鳥・渡り鳥等）
鳥類	シロハラクイナ			ハラジロコピス	haradʒirokoˈpisu		繁殖・留鳥
鳥類	鶏の卵		コーマ	トゥノ		クマ	食
	53個						
動物	爬虫類						
爬虫類	セマルハコガメ	ヤマメ	ヤマメ	ヤマミ	jamaˈmiˈː	ヤムメー	繁殖・天然記念物
爬虫類	カメ一般	ヤマメ	ガミ	カミ	kʻa̰ˈmi	カミ	繁殖
爬虫類	ミナミイシガメ			ミジンガミ	midʒiŋgaˈmi	※いない	繁殖
爬虫類	海ガメ		カミ	カミ	kʻa̰ˈm̩i		
爬虫類	ホオグロヤモリ	フダツメ	フダツメ	フダチミ	ɸudatʃi̥mi	フンダツク	繁殖
爬虫類	家につくヤモリ	イエフダツミ	フダツメ	フダチミ	ɸudatʃi̥mi	フンダツク	繁殖
爬虫類	キノボリトカゲ	ヤマフダチミ		クースファーヤー	kuːsuɸaːˈjaː		繁殖
爬虫類	キシノウエトカゲ	ヤマフダチミ		ボーナチ	boːˈnaˈtʃi̥		繁殖
爬虫類	イシガキトカゲ	イシノェミーノゴーザ					繁殖
爬虫類	ヘビ（ヤエヤマヒバァ？）	ガラスパオ	ガラサパブ	ガラシパブ	gaˈraˈʃi̥pabu		繁殖
爬虫類	ヘビ（サキシマアオヘビ？）	アオナズ					
爬虫類	サキシマスジオ	トゥーラパオ、トーロパオ	トゥカラパブ	トゥカラパブ	tʻṵˈkaraˈpabu	タクラー	
爬虫類	不明	トゥカラパオ					
爬虫類	サキシマハブ	パオ	マーパブ	パブ	ˈpaˈbu	パブ	
爬虫類	ウミヘビ	インパブ	イラブ				海ヘビ（マァーパブ）
	15個						
動物	（両生類）						
爬虫類	ヤエヤマアオガエル	タナドゥリアブター					
爬虫類	カエル類	アウタ	アウタ	アブタァ	ʔabuˈtaː̃	アウダー	
	２個種						
動物	魚類						
魚類	トビハゼ		チョンチョンメー	トントンミー		トントンミー	食
魚類	不明			ガラブタ		ガラブタ	食・湊の魚
魚類	ツムギハゼ（毒）			ゴナーザン	ʔoˈnaːdzaŋ		毒
魚類	不明			ガラブタ		ガラブタ	食・湊の魚
	４個						
動物	昆虫・多足類・その他						
昆虫類	セミ全般	サンサン	サンサン	ガラピタ～ン	gaˈrapi̥taː̃	サンサン	
昆虫類	イワサキクサゼミ	ゲンダミ	サンサン	ガヤゼミ	gaˈjadzemi	サンサン	
昆虫類	イワサキゼミ			マージヌ	ˈmaːˈdzinu	マージヌ	
昆虫類	チョウ	カービロ		パビル	pabiˈru	パビル	

分類	種名	新城島	鳩間島	祖納	音声表記	古見	備考（食用・毒・用途・用途・留鳥・渡り鳥等）
昆虫類	トンボ	カケズ--		アルチャ～ン／タンピサー	ʔa˩rutʃaɴ̃·tampi̥˩sa	ティンナー	
昆虫類	カマキリ			アッパーザンティリャ	ʔap˩paɪdzantirjaː		
昆虫類	ホタル			ピカラー	pi̥ka˩ra	ピカル	
昆虫類	タイワンカブトムシ幼虫			ブッタンムシ／ミミジャ～ン			
昆虫類	イワサキカレハの幼虫			ヤマイギ（毒）		ヤマンギ	
昆虫類	ゴキブリ		ヤマトクムシ	トービラ	toːbi˩ra	クムシタレー、トービラー	
昆虫類	ヤマビル（やま）		ヤマビル	ピソ、ヤマピソ	pi̥s˩so·jamap'i̥s˩so	ヤマピル	
昆虫類	ヒル（水田に生息する種）		タービル	ピソ、ターヌピソ	pi̥s˩so·taːnup'i̥s˩so	ビル	
昆虫類	ムカデ		ンガサ	モーザー	moːdzaː	ムガザー	
	13個						
動物	甲殻類						
甲殻類	テナガエビ	イエビル	イビル	カーライビ	˩kaː˩raʔibi	サイトゥガー	
甲殻類	海のエビ類	イブズ、イビ	イビ	イーピ	˩ʔiː˥pi̥	サイヤマ	
甲殻類	マングローブ（エビ）			サイマー	sai˩maː	※いない	
甲殻類	ウシエビ			インツァイ	˩ʔin˥tsai		
甲殻類	ヤドカリ（陸）	アマンピツァ	アミチャ	アーマン、アーモ	˩ʔaːmaŋ·˩ʔaːmo	アーマン	
甲殻類	ヤドカリ（海）		スナカアミチャ	サーモ	˩saːmo		
甲殻類	ヤシガニ	ムホン	アコヤー	モーヤン	˩mo˥ːjaŋ		
甲殻類	ノコギリガザミ	ガサメ		ガサン	ga˩saŋ	ガサミ	
甲殻類	ミナミベニツケガニ			ガダリャー	gada˩rjaː	バダリャーカン	
甲殻類	シオマネキ類	カン		サンシンガニ、カイマ(小)	saŋʃiŋgani·ka˩maː	パサンガサミ	
甲殻類	ミナミコメツキカニ	バッタリャーカン、ヤワサカン		イニチキカイマ、ヘイタイガニ	˩ʔinitʃikikaima		
甲殻類	ギダーサカイ			ギサダカイ	gisa˩da˥kai		
甲殻類	ヒルギハシリイワガニ			ピソヤン	pi̥sojaɴ̃	アオンガヤー	
甲殻類	ツノメガニ			パルン	pḁ˩ru̥ŋ	ピティンシカマ	
甲殻類	マングローブのカニ		ミナトガサミ	ンミカイ（赤い）	ʔm˩mi˥kai		
甲殻類	ケガニ（モクズガニ）			チンガニ	tʃi˥ŋgani	アシザイ	
	16個						
動物	貝類						
貝類	貝類全般			ミナ	mina	ミナ	
貝類	タニシ（田）		ターミナ	ターアンピタ	˩taːʔampita	ターミナ	
貝類	ニシキアマオブネ	アマビタ		チキアンピタ			
貝類	シレナシジミ			キゾ	kidzo	ギジャク	
貝類	クモガイ		ヤダンブレ	ヤドゥリャー	jadu˩rjaː		
貝類	スイジガイ			ガドゥリャー	gadu˩rjaː		
貝類	カタツムリ		シダミ	キザン	kidzaŋ	チンダミ	
貝類	カタツムリ（山地に生息）			ヤマキザン	jamakidzaŋ	※いない	
貝類							
	9個						

西表島の遺跡

大 城　　慧

一. はじめに

西表島は竹富島、小浜島、黒島、新城島、鳩間島、波照間島とともに、竹富町の行政区域に入り、八重山諸島中最大の島嶼である。地元では「イリムテイ」と呼称し、さらに古くは（所乃島）、（古見島）とも称されていた。18世紀になって初めて西表島と記録されてくる。島全体が亜熱帯原生林に覆われており、浦内川や仲間川の河口部から上流域にかけてマングローブ林が広がる自然環境となっている。島の大半が国有地で占められ国立公園になっている。また、学術的価値をもつ貴重動植物の生息地となっている。西表島が人間の生活の舞台になるのは、新石器時代前期になってからで、縄文時代後期相当期に始まる仲間第二貝塚（八重山考古学編年上第二期 早稲田編年）を最古とする。歴史時代に入ると西表島に関する古い記録は、15世紀後半に書かれた「李朝実録」の中の金非衣らの祖納での見聞談、朝鮮人漂流記の記事に垣間見ることができる。 それ以前の、島に関する記録をとどめる資料はなくベールに包まれたままで、あまり知られていない。遺跡から採集される遺物を介して、断片的に知るのみである。グスク時代、16世紀初め頃には、八重山統治をめざす首里王府の浸透策に対し、当時の英雄オヤケ・アカハチのもと抵抗するが、王府の軍勢に破れ、以後、西表首里大屋子、古見首里大屋子が配置され、首里王府の配下に組み込まれる。西表島に分布する遺跡の大半が、中・近世の時期に集中しており、東部地区から西部地区の海岸線に近接した丘陵台地や低砂丘地に集落遺跡が形成されているところが多い。特に古見、祖納、高那には古い集落形態を残している。八重山考古学編年上第三期から第四期に相当する遺跡である。

祖納半島を中心とした一帯には、入り江が発達し天然の良港を控え、中世から近世の時期の集落が形成された。その村立ての中心的二人の伝説上の人物を排出した地として注目される。一人が慶来慶田城用緒であり、あと一人が大竹祖納堂儀佐という人物であった。

今回の総合調査は、短期間での日程であることから、過去の調査によって確認されている個々の遺跡の保存状況がそれ以後、どのようになっているのか。あるいは周知の遺跡内での開発行為による遺跡破壊がないか。さらには新たな遺跡の発見がないかということに調査の主眼が置かれた。従って、主として表面踏査からの調査に終始しており、発掘調査を中心とした考古学的調査は出来なかった。

以下、主要な遺跡について概要をまとめてみたい。

二. 西表島における考古学研究史

戦前の調査

八重山諸島における戦前の考古学的調査は石垣島を中心に各離島を含めて比較的早くから行われた足跡がある。しかしながら、その多くが考古学的手法による本格的な発掘調査によるものではなく、表採的な資料収集調査にとどまっている。西表島もその一つで、明治期に辿る。1889年（明治22年）に田代安定が古見部落での調査を実施している。田代は、植物学研究を始め地理、歴史、言語、民俗と幅広い分野にわたって多くの論文や調査報告を行っている。考古学専門家ではなかったが、古見で採集された陶磁器類の資料を初めて紹介し、曲玉、壺、古茶碗等を、「琉球西表島古見ノ土器」[註1] として発表している。

現在、古見には古見旧村跡遺跡、古見赤石崎遺跡、古見古墓群が確認されているが、田代の表採資料がどの遺跡からのものかは判然としない。採集された陶磁器等の種類から近世の時期に相当するものと判断される。

1893年（明治26年）には笹森儀助が精力的に八重山の島々を広範囲に踏査している。笹森は旧跡や遺物の報告を行っている。その中で曲玉に関する報告[註2]をだしている。

これらの研究は一専門分野からの調査ではなく、歴史、言語、民俗、考古等、多岐にわたるもので、いわば総合的調査研究が行われた時期である。

戦後の調査

戦後の調査は、発掘調査による遺跡調査や分布調査など、精力的に行われている。

その成果は、多和田真淳によって「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」（『琉球文化財要覧』[註3] 1956年）に報告されている。発見された遺跡は仲間第一貝塚（山城浩・細原徹 1955年）、仲間第二貝塚（多和田真淳 1955年）、西表島大原貝塚（多和田真淳 1955年）、平西貝塚（多和田真淳 1955年）、西表野底貝塚（細原一夫 1955年）、西表島古見赤石遺跡（新城徳裕・山城浩・西大正英 1957年）、西表島大富洞穴遺跡（黒島寛松・多和田真淳 1958年）である。この時期発見された遺跡の大半が、東部地区に集中している。西表島における遺跡分布の基礎的なデータがこの時に整理されてきたと言える。

また、発掘調査は、1959年（昭和34年）に早稲田大学八重山学術調査団の仲間第一貝塚、仲間第二貝塚、平西貝塚がある。1960年（昭和35年）～1962年（昭和36年）には、「琉球列島遺跡調査」の名目によるジョージ・H・ケアの調査が実施されている。調査は沖縄本島から先島の広い範囲に調査を展開している。この時は琉球政府立博物館も調査に参加しており、考古学的調査が実施されている。調査は表面踏査が中心となっており、陶

磁器出土の遺跡がメインとなっている。加えて工芸、民俗、などの調査も行っている。1971年（昭和46年）には、琉球大学による船浦貝塚が発掘されている。1977年（昭和52年）には、青山学院大学による与那良遺跡が発掘されている。1980年代以降は、開発との関連で西表島全域の詳細分布調査[註4]を県教育委員会が実施している。その時、西表島で41ヶ所の遺跡が確認された。その後、追加されて49ヶ所になっている。

また、県立博物館では、1960年から３ヶ年かけて調査された「琉球列島遺跡調査」の再確認調査を実施している。1982年に『沖縄出土の中国陶磁[註5]（上）ージョージ・H・ケア氏調査収集資料 先島編』、『沖縄出土の中国陶磁[註6]（下）ージョージ・H・ケア氏調査収集資料 本島編』としてその成果を報告している。特に西表島においては、西表クーラ墓、古見城跡、古見海岸、西表東部ミチヤリ、ピニシ海岸、祖納海岸からの陶磁器を採集している。完形品は少ないが、青磁碗を中心に明代の時期のものがほとんである。表採された資料はいずれも大形品が多く、器形の復元が可能なものが多い。

1980年代に入ると開発協議に伴う事前の発掘調査が主体となる。発掘調査は、県・市町村の教育委員会が主体となる。調査期間の長期化、発掘面積の拡大など、行政を中心とした緊急発掘調査が増加するようになる。一方、遺跡保存、指定を目的とした調査も行われている。

1988年から1989年にかけては、県文化課による重要遺跡確認調査が実施されており、祖納半島に位置する上村遺跡、1993年～1996年の慶来慶田城遺跡の調査がある。

三. 早稲田大学八重山学術調査団による発掘調査

1959年（昭和34年）に八重山地区を対象とした考古学的調査が、早稲田大学八重山調査団（団長滝口宏）によって行われている。西表島においては、仲間第一貝塚、仲間第二貝塚、平西貝塚が発掘され、1960年（昭和35年）にその成果を発表している。調査の目的は、「八重山地域における編年の確立であり、編年にもとづく各遺跡の文化相の分析的研究であり、最後に沖縄史における八重山文化の意義の把握でなければならない」としている。各貝塚の調査概要は次のとおり報告[註7]している。

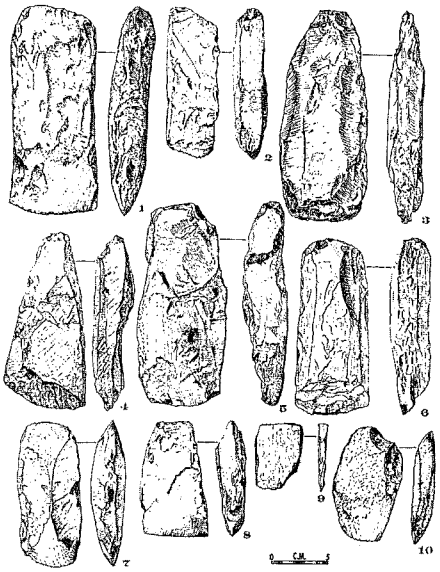
仲間第一貝塚

仲間川河口部に位置する面積約500坪にわたる大規模貝塚である。戦後米軍による本橋梁架設工事の際、発見された貝塚である。夥しい貝殻と石器などの遺物が散乱していたとされている。先年多和田真淳・山城浩によって貝塚の南側地点において、２メートル四方の試掘が行われている。早稲田の調査も多和田・山城の試掘地点にトレンチを設定している。

①貝層は20cm～30cm、その下に混土貝層が厚い箇所で50cm～60cmの堆積となっている。

貝塚の南側（多和田・山城試掘）において厚くなっている状況が確認されたが、工事によって大部分が破壊されている状況であった。

②遺物は人工遺物と自然遺物が出土しており、人工遺物では石器以外のものは発掘されていない。石器は敲石、砥石の他、石斧が出土している。自然遺物は鹹水産貝類が多く、シレナシジミが際だっている。獣類ではイノシシの遺存骨が多量出土した。焼石の出土量が多い。本貝塚は早稲田編年の第一期とし、八重山における最古の遺跡として位置づけている。無土器の貝塚で、土器を有しない文化である。新石器時代の概念の中で無土器文化が存在することについて「太平洋諸島地域[註8]における原始的文化の中には土器を伴わない例を多くあげることができるその理由は、貝類その他自然物の簡単な加工で容器を間に合わすことができること、粘土を得がたいことなど、他から土器がはいっても、大きな魅力を感じづ、技術的に製作するまでに至らなかった」などのどちらかによるものとしている。



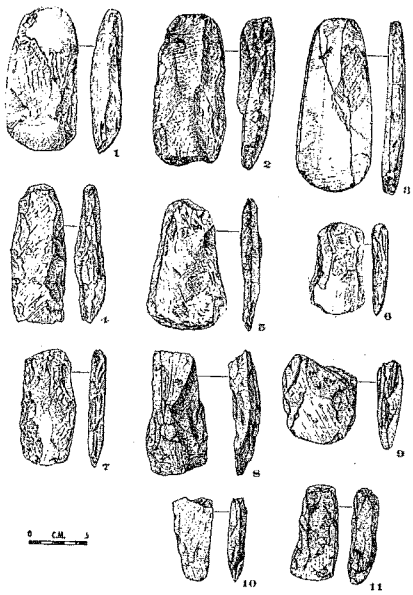
第１図　仲間第一貝塚出土の石斧実測図

『沖縄八重山』より抜粋

仲間第二貝塚

仲間側河口部に接した北方の赤土台地にある。貝塚の大半は破壊されており、調査区の設定に難航したようである。貝塚の一角において２メートル×４メートのトレンチを設定し発掘を行っているが、貝層の保存状態が悪く調査をうち切っている。出土した遺物は石器、有孔貝製品、土器の他イノシシの遺存骨が多量に出土している。

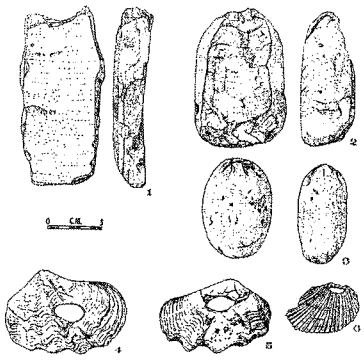
有孔貝製品では、シャコガイに孔を穿つたものが多い。本貝塚から発見された土器は、「波照間島下田原貝塚同様[註9]、八重山諸島域で発見されている土器の中でも最も原始的な段階に位置づけられるものである」としてい



第２図　仲間第二貝塚出土の石斧実測図

『沖縄八重山』より抜粋

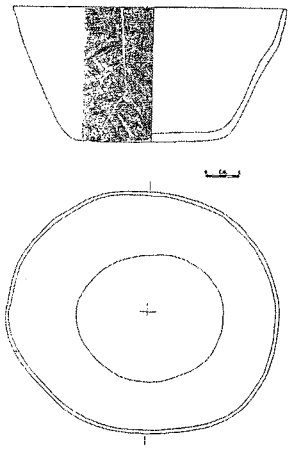
る。下田原式土器と呼称されているものである。早稲田編年第二期。八重諸島域の土器の出自を、第二期に位置づけている。この第二期に生活文化の変容があったものか、地元で製作されたもとしている。しかしながら少量の出土と広い範囲において普及発達していった時期ではなかったとしている。その理由として、いまだ自然物容器で間に合った生活が存続しており、土器を必要としなかったものとして解釈している。



第３図
仲間第二貝塚出土石器・貝製品実測図
『沖縄八重山』より抜粋

平西貝塚

西表島東岸部古見集落近くに位置し、後良川の河口部にある無人の小島である。1955年に多和田真淳によって初めて調査された貝塚である。その後、早稲田の調査では、島の中ほどによった西岸部に小規模のトレンチを下に、黒色土の混土貝層が40～45cmの堆積があり、さらに下層に約30cmの厚さの第二混土貝層、その下に混灰貝層が25～６cmの厚さで堆積していたとされている。



第４図　平西貝塚出土の土器実測図
『沖縄八重山』より抜粋

貝層はイシカゲガイを主体とした混土貝層および混灰貝層が区別されている。人工遺物では、混貝層において、土器が際だって出土しており土器の性格から推して本貝塚が外耳土器文化に属する時期であることが報告されている。(早稲田編年第III期)

四. リチャード・ピアソンによる発掘調査

1971年（昭和46年）～1973年（昭和48年）にかけて、リチャード・ピアソンによる琉球の考古学的調査の一環として船浦貝塚[註10]を調査している。

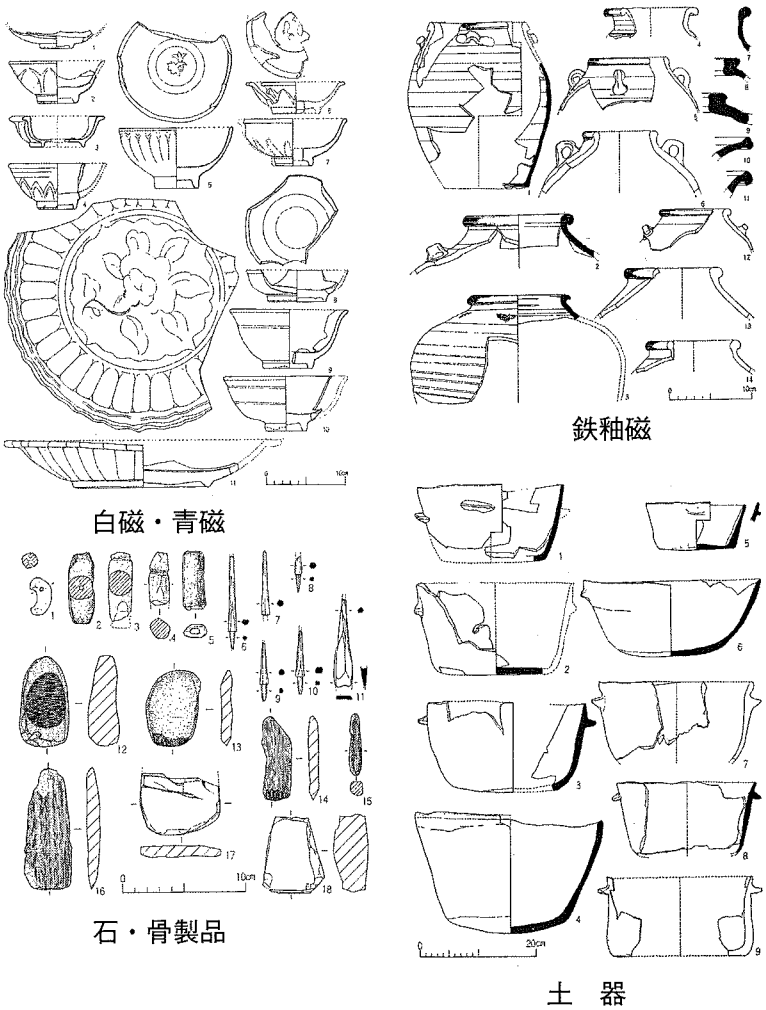
船浦貝塚は船浦湾の北側、海岸から約200メートル、船浦桟橋から約500メートルの石灰岩地帯下の湿地帯に面した砂丘上に形成されている。発掘調査の結果、石器を中心として、船釘や鉄器片が出土している。、土器が一片も出土しない無土器の遺跡である。年代測定の結果、５～７世紀初期とされている。無土器文化の概念から、当時において、本貝塚の編年的位置づけに疑問を呈する向きがあった。(早稲田編年第Ｉ期)。現在では類似する他の遺跡との比較から妥当な数値とされている。

五. 青山学院大学による発掘調査

1977年（昭和52年）には、青山学院大学による与那良遺跡[註11]、1980年（昭和55年）～1981年（昭和56年）には、成屋遺跡[註12]の発掘調査が行われている。両遺跡とも土器、陶磁器が出土する遺跡である。

与那良遺跡

旧与那良村落が位置していた場所、微高地に形成された集落遺跡である。広大な範囲を占める遺跡であるが、幹線道によって二分されている。遺跡の南側には水田がひろがり、北側へ高くなっている。八重山式土器を中心に外来陶磁器が多量出土している。（早稲田編年第III期）

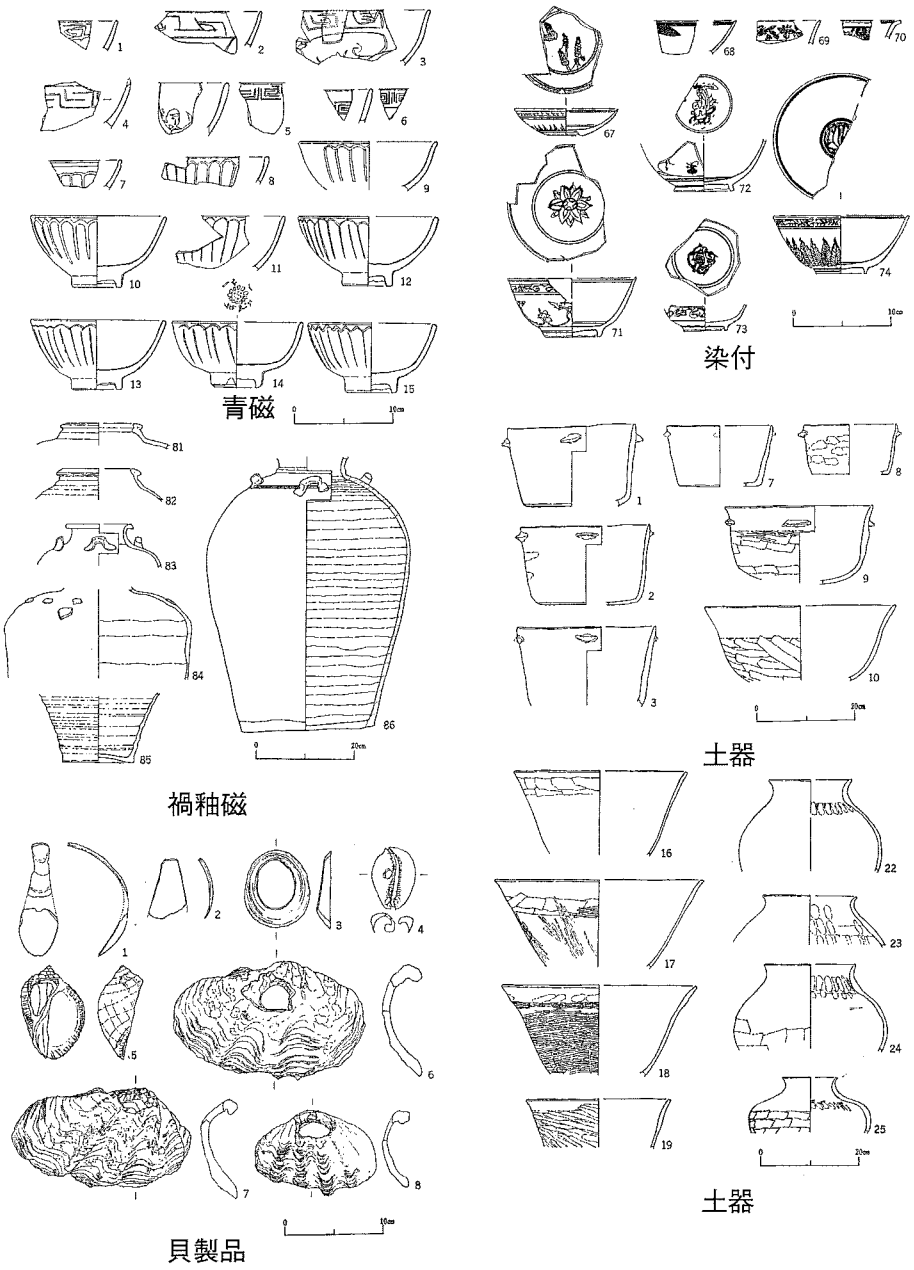


第５図　与那良遺跡出土遺物実測図

（『与那良遺跡発掘調査概報』）より抜粋

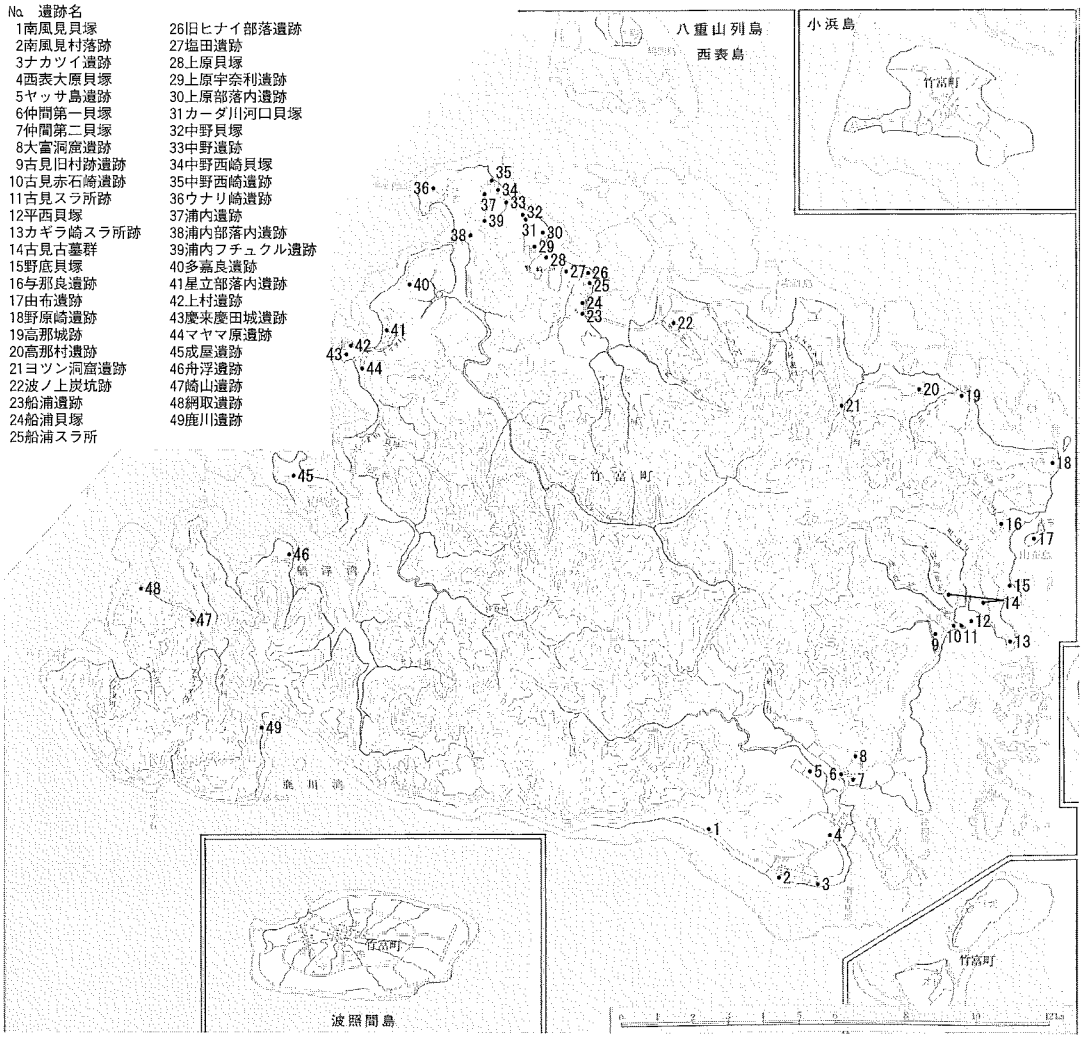
成屋遺跡

西表島西部の白浜集落の対岸に位置する内離島の北東海岸の標高２m前後の砂丘地に形成された遺跡である。10箇所のグリッドを設定し発掘調査を実施している。その結果、溝状遺構と柱穴群が検出された他、八重山式土器、外来陶磁器などが出土している。（早稲田編年第III期）



第６図　成屋遺跡出土遺物実測図

（『西表・成屋遺跡発掘調査概報』）より抜粋



第７図　西表島遺跡分布図（『西表島、船浦スラ遺跡発掘調査報告』）書を参照

六．西表島の遺跡の立地

西表島は、「低地部や段丘面の発達[註13]が狭小で、全体的に起伏の多い山地性の島である」。島の中央部には標高400m余の山々がそびえ立ち、山塊と深い谷によって地形が特徴づけられる。特に南風見から鹿川にかけての南西部においては、急峻な岩肌が海岸近くまでせり出しており、人間の生活を拒む厳しい地形となっている。これまでに確認されている遺跡の大半が、地形的な制約を受けており遺跡の立地に影響を与えている。島の南側から東側にかけては、珊瑚礁が発達しており、その大半が海岸砂丘地や低台地に形成されている。内陸部に遺跡が展開しているのはほとんど見られない。古見や祖納、星立などのように現集落に遺跡がオーバーラップしている場所もある。また。仲間川河口部や海中の独立島に遺跡が形成されている。

1980年に報告された遺跡分布調査の成果から、41箇所の遺跡が確認されている。旧石器時代に相当する遺跡は、未確認のままとなっており、縄文後期相当の遺跡を最古とする。1959年に早稲田大学学術調査団が発掘した仲間第一貝塚（八重山編年第Ⅰ期）と仲間第二貝塚（八重山編年第Ⅱ期）では、仲間第一貝塚を無土器遺跡として、八重山最古の遺跡として位置づけていたが、近年の調査からは石垣島の神田原遺跡（第Ⅰ期）と太田原遺跡（第Ⅱ期）との層序関係、下田原貝塚（第Ⅱ期）と大泊浜貝塚（第Ⅰ期）との層序関係など、Ⅰ期とⅡ期が逆転する現象が確認されている。西表島仲間第二貝塚からは下田原式土器（縄文後期相当期）が出土しており、八重山最古の土器が出土する遺跡として、最古の遺跡に位置づける編年修正案が発表されている。八重山先史時代の編年がこれまでの無土器の時期を第一期とし、下田原式土器を第二期とした早稲田編年が長く踏襲されてきたが、上記の遺跡からの文化層の逆転現象から、これまでの早稲田編年に修正が加えられている。

従来、西表島で確認されている遺跡の大半が、グスク時代の中・近世の集落遺跡となっている。

集落遺跡では古見旧村跡遺跡、高那村跡遺跡、星立部落内遺跡、上村遺跡、慶来慶田城遺跡など大規模な集落が形成されている。

七．博物館総合調査における遺跡の概要

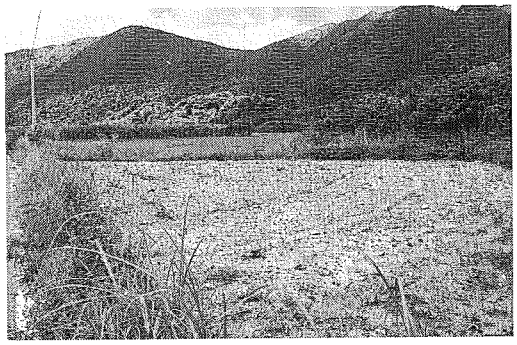
西表島における考古学的調査は戦前の早い時期から開始されたが、島の全域における遺跡の分布状況が把握されたのは、1979年の沖縄県教育委員会による竹富町・与那国町における詳細分布調査である。その成果は『竹富町・与那国町の遺跡－詳細分布調査報告書－』にまとめられている。両町における遺跡の数は113ヶ所、うち西表島で発見された遺跡が41ヶ所である。西表島で発見された遺跡数はその後、増加している。(49ヶ所）今回の総合調査で確認した遺跡の大半は、1979年の調査で発見された遺跡の追調査であった。大方の遺跡の立地、保存状態に大きな変化は見られなかったが、中には開発行為により、遺跡が半壊もしくは全壊したものも見られた。今調査では、新たな遺跡の発見は出来なかった。時間的な制約もあり、49ヶ所全ての遺跡を確認するまでには至らなかった。表面踏査による現状把握に努めた。以下、主要な遺跡について概要を記述する。

西表島東部

南風見貝塚

本貝塚は豊原集落から西方約2.5km距てた、標高約３mの砂丘地に形成された貝塚である。砂丘の北側は湿地帯で、その背後に標高100m前後の山々が東西に走っている。

1979年（昭和54年）の調査では、東西約200m、南北約60mの広範囲において遺物が散布している状況が確認されている。また、地点別に遺物の散布状況が異なり、貝塚の北東部においては、土器が認められないことから、無土器の時期を考えており、南西部では八重山式土器が採集されている。時期差をもった遺跡の存在を想定している。

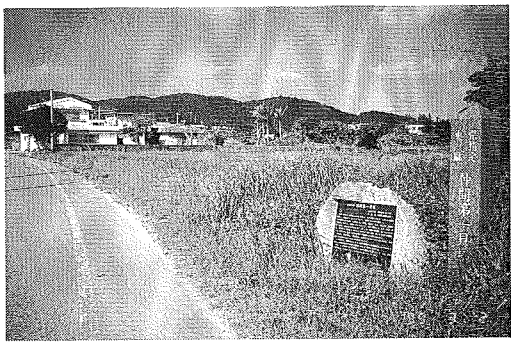


南風見貝塚

現状はキビ畑と牧草地が広がっており、その中にサラサバテイやヤコウガイ等の貝殻が散布している。幾度かの畑地の耕作で攪乱されており、保存状態は良くない。

仲間第一貝塚

仲間川河口部の大富集落側にある。現在の仲間川の橋のたもと一帯に広がる貝塚である。標高５～６ｍの砂丘地に夥しい量の貝が散布している。戦後米軍による橋梁架設工事の際に発見された貝塚であるが、その時点でかなり破壊されている状況にあった。1958年に多和田真淳・山城浩によって試掘調査が行われている。翌年、早稲田大学八重山学術調査団によって調査された。出土した遺物が土器を伴わなず、石器のみが出土したことから無土器貝塚として位置づけている。さらに焼石が多く出土したことから、焼石調理法の存在を想定した。本調査以後、八重山最古の遺跡として編年されているが、1970年代の表面踏査から、時期的に新しくなることが指摘されている。その一つに開元通宝が採集されていることや、出土する遺物や層位との関係からこれまでの年代観に疑問を投じており、第Ｉ期と第II期が逆転することが確認されている。現況は道路の拡幅工事やキビ畑の耕作によって攪乱が著しい。（昭和31年　県指定史跡）



仲間第一貝塚

仲間第二貝塚

仲間第一貝塚の北東方約150m～200m貝塚である。現況はキビ畑が広がる。1979年

仲間第二貝塚

の分布調査の時点で耕作による攪乱が確認されており、地表面に多量の遺物が散乱している状況であった。今回の調査では、さらに攪乱が著しく遺物の細片化が認められた。本貝塚も下田原式土器が出土する時期と八重山式土器、陶磁器が出土する時期が複合した遺跡として捉えている。仲間第一貝塚同様、八重山の遺跡を代表する貝塚の一つである。県指定史跡部分を除き貝塚全体の包含層は必ずしも良好な状態ではない。(昭和31年　県指定史跡)

大富洞窟遺跡

大富集落の北側約500mのところに位置する洞窟遺跡。1979年の調査では、洞窟入り口右側の小ホールには石灰に覆われた人骨が発見されている。テラスの凹地にシャコガイの殻頂部を穿孔した、いわゆる貝錘の集積を確認している。

今回、再確認の目的で周辺の聞き込みをしたが、土地改良事業により周辺地形が大きく変貌していた。土地改良の際、洞窟に生息するコウモリの保護との調整から洞窟の保存問題が問われた遺跡である。現況は生息するコウモリへの影響がでないようにフェンス等が張り巡らされている。

古見赤石崎遺跡

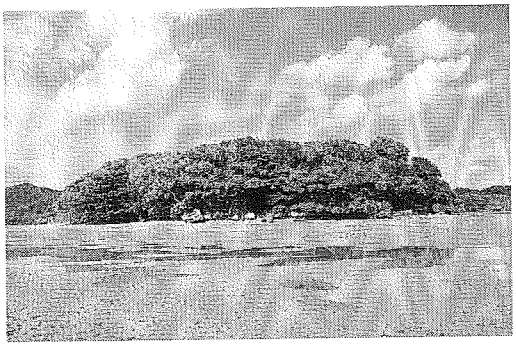
古見集落の東側約350m～400mに突出した標高約10m前後の丘陵とその傾斜地に形成された遺跡である。台地から海岸側には陶磁器や土器、鉄滓、貝殻等が多量散乱しているのが見られる。遺跡内には清原御嶽があり、遺跡の中心をなす。1979年の詳細分布調査以後、大きな現状変更はない。遺物包含層が良好な状態にある。これまで表面踏査で終わっており、試掘調査が必要である。特に台地上には鍛冶場の遺構が残っている可能性がある。海岸には砂岩が露出しているが、砥石として利用した溝跡が見られる。

古見赤石崎遺跡(台地)、古見スラ所跡(海岸)

平西貝塚

古見集落の北東方、約600mの位置に浮かぶ無人の小島で、島全体が遺跡となっている。島は琉球石灰岩から成り立ち海岸周辺に土砂が堆積している。潮の干満によって、古見の赤石崎海岸から歩いて渡ることができる。特に大潮の時には、大きな干潟ができあがる。

島の上部には御嶽がありシロマタの神が祀られている。


平西貝塚

1958年に早稲田大学によって発掘調査が行われた。今回は、干潮時を利用して島全体を踏査した。遺物は全体に散乱しているが、特に西側から南側にかけて、陶磁器、八重山式土器等の大形破片が夥しい量で散布していた。崩れかけた崖面にアラスジケマンガイの集積層が見られた。遺跡全体の保存状況については、人為的な破壊を受けたような大きな変化は見られなかった。(昭和31年　県指定史跡)

与那良遺跡

旧与那良村落があった赤土の台地に形成された集落遺跡である。遺跡の東側には由布島が対峙する。遺跡の南側には水田が広がる。一帯は畑地になっており、低丘陵地に陶磁器、八重山式土器片が多く散布している。1978年に青山学院大学による発掘調査が行われている。鉄製の釣針や骨製尖頭器、鍋型などの土器などバラエテイーに富んだ遺物が多く出土した。遺跡の年代については陶磁器から14世紀～15世紀前半に位置づけている。

高那城跡

高那橋から東南側に約200m距てた海岸沿いの標高30mの琉球石灰岩上に形成された遺跡。三方の崖が険しく頂上に登ることが困難である。石垣等の遺構については確認出来なかった。遺物は海岸側の崖下に陶磁器や土器、貝殻等が堆積している。遺跡の年代については判然としない。城跡と呼ばれる場所は西表島でも高那城跡だけであり、グスク様な立地となっている。本城跡の北側には近世の高那村跡が広がっている。城跡の県道沿いには民間の開発行為により一部埋め立てられている。現在のところ城跡本体への破壊は見られない。

西表島西部

船浦貝塚

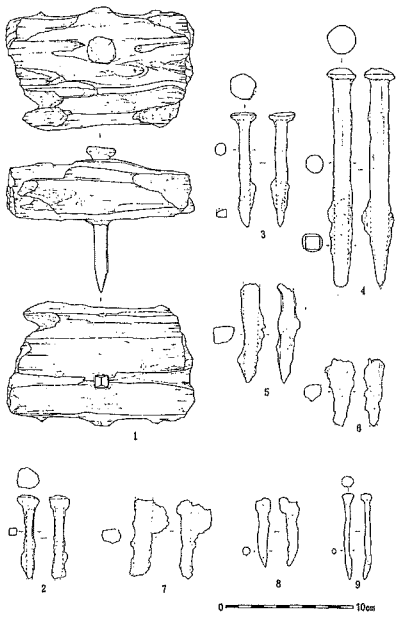
船浦港から南西側へ約500m距てた湾奥の湿地帯に面した標高２～３mの砂丘上に形成されている。貝塚を取り巻く環境は前面に船浦湾が広がり、遠浅の砂泥性が広がる。1979年の分布調査では貝層が約１mの厚さで堆積しているのが確認されている。1971年～1973年にかけてリチャード・ピアソンによる琉球の考古学的調査の一つとして発掘を行っている。石器や貝器、鉄器等の他は土器が出土しないことから、無土器の遺跡として

位置づけられていた。年代測定からは５～７世紀初期の年代値が測定されており、無土器文化の時期が新しくなることが確認されている。同様な第一期と第二期の時期編年が数ヶ所の遺跡で逆転する状況がでており、修正が求められている。遺跡の現状は建築資材やバラス、残土などのヤードとなっていることや、雑木が深く生い茂っていることから発掘調査時の状態を知ることができなかった。

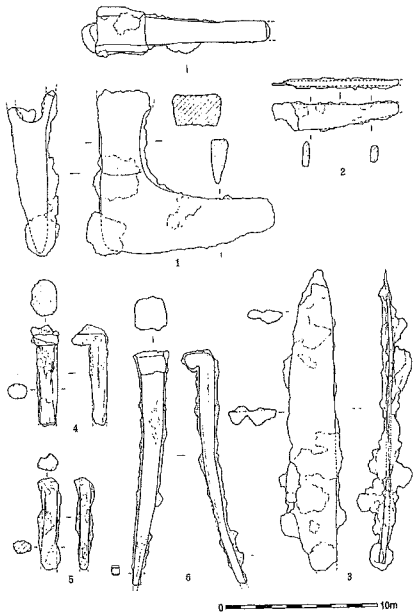
船浦スラ所跡

本遺跡は1978年の「西表をほりおこす会」によって発見された造船所跡である。船浦港桟橋の陸地奥側の石灰岩が広がる一帯に多量の鉄滓が確認されている。一部防潮林が広がる。船浦港の物揚場及び港湾施設用地工事に伴って、1991年に沖縄県教育委員会によって緊急発掘調査[註14]が行われた。西表島では17世紀後半から18世紀前半に造船場が作られる。その役割をになっていたのが、古見のスラ所である。以後、首里王府への上納船の建設が最盛期を向かえる時期が18世紀前半から後半とされている。これまでの和船から

船浦スラ所



鉄製品　船釘



鉄製品　縦斧１, 刀: ２、包丁、3, 船釘４～６

第８図　船浦スラ所遺跡出土遺物実測図

（『船浦スラ所遺跡』）より抜粋

唐船に造船技術が変わった時期とされており、船浦にスラ所が開設される。1748年に臨時的に造船をする。1753年に本格的な造船所として使われ1889年頃まで機能していたとされている。「船浦スラ所の造船は、上原・高那[註15]・鳩間・西表・崎山・波照間・小浜の7ヶ村の百姓で分担し、幕末までこの体制が続いた」とされている。

発掘調査の結果、石列遺構が検出されている。これは古見スラ所にある「波消しの機能」[註16]として考えている。潮の干満を利用した波消しの遺構として捉えている。他に鍛冶炉や炭窯も発掘されている。船浦スラ所の終末期が把握されるなど貴重な調査成果を残した遺跡の一つである。スラ所の発掘調査は全国的にもあまり例がないことから、貴重な調査報告となっている。遺跡の現状は港湾工事により、消滅した感があり、発掘調査時の遺構を見ることはできない。

中野西崎貝塚

中野集落（公民館）から北西に約500m距てた道路沿いの砂丘地に形成された貝塚。無土器貝塚で、過去に10個のシャコガイ製貝斧が採集されている。貝塚は採砂でほとんどが破壊されている。現状では貝塚の位置を把握するのが困難である。周辺地には中野北西海岸に近世の中野西崎遺跡、集落内に中野遺跡、中野貝塚が点在するが、破壊されている状況にある。

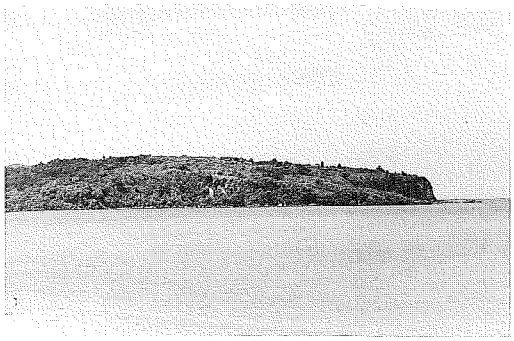
星立部落内遺跡

星立集落内全域が遺跡が形成されていたところである。標高２～３ｍの砂丘地で旧村落遺跡の上に現在の集落がある。集落内からは陶磁器、八重山式土器、貝殻片が散布している。特に屋敷内や石垣の中に遺物が混在している。

星立部落内遺跡

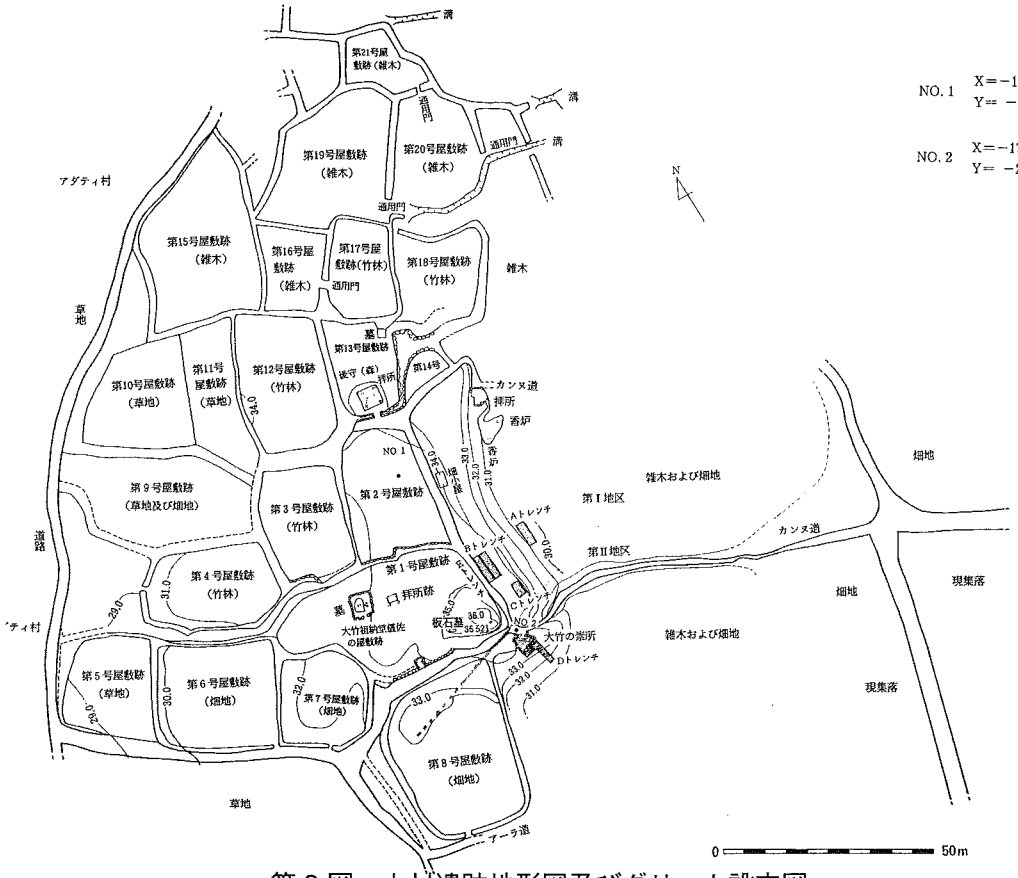
上村遺跡

西表島西部祖納半島に位置する大規模集落遺跡である。沖縄県教育委員会が重要遺跡確認調査として、1987年～1990年までの[註17]３ヶ年間実施した。上村遺跡は1985年に大浜永亘によって発見された遺跡である。広い範囲において、陶磁器、土器、鉄滓等が散布している。調査地区を第Ⅰ地区、第Ⅱ地区と区分しトレンチを設定し発掘したところ、白磁・青磁・土器片が多量出土した。その他に天目茶碗や茶入れ壺の資料も得られている。白磁・青磁資料からは14世紀中頃ものが多い。地区によって時期差が認められるとし、



上村遺跡遠景

大竹祖納堂儀佐の拝所



第９図　上村遺跡地形図及びグリット設定図

（『上村遺跡』）より抜粋

陶磁器全体から14世紀半ばから15世紀前半（第Ⅱ地区）、15世紀末～18世紀（第Ⅰ地区）の時期に形成されていたことが確認されている。陶磁器資料とは別に、出土した遺物の中で、特徴的なものとして鉄滓、羽口の出土があげられる。鉄滓や羽口は鉄との関連を示すものであるが、夥しい量の鉄滓から当時の祖納における鉄器製造の状況が把握されている。詳細な鉄滓の科学分析から鍛錬鍛冶（小鍛冶）を中心とした技術が想定されている。鉄滓

の中にも椀形滓、ガラス質椀形鉄滓、不定形滓、滴下滓、含鉄鉄滓などがある。第II地区とした拝所内からは小形の椀形滓の出土が多いことから、小鍛冶などが主だった技術であったと報告している。このことから上村遺跡において大規模な鍛冶工房跡を想定している。さらに報告書では鉄素材産地を分析した科学成分組成から、慎重論ながら揚子江流域の鉱山を一つの候補に挙げている。また、「鉄素材の成分調整の精錬鍛冶[註18]（大鍛冶）から鉄器製作の鍛錬鍛冶（小鍛冶）までがなされた」と報告している。祖納半島が鉄器製造と供給地であった可能性を指摘している。

慶来慶田城遺跡

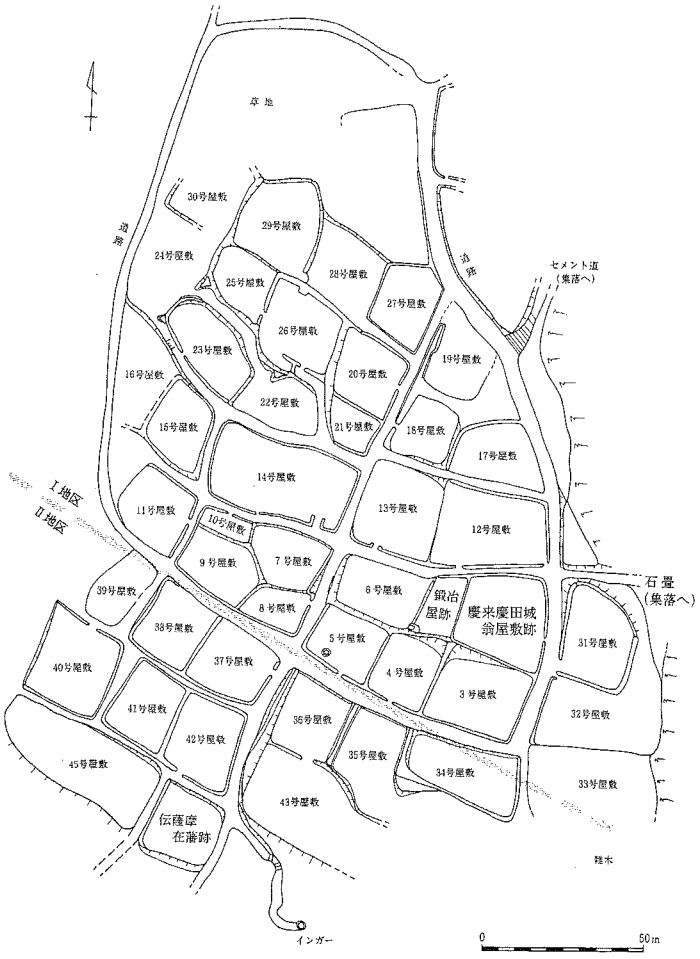
西表島西部祖納半島の南側に位置する「慶来慶田城翁屋敷跡」地周辺をその対象とし、西表島の中世・近世を代表する集落の規模とその生活空間である屋敷内の建物構造、鍛冶などの生産場、近世支配体制の「伝薩摩在番跡」[註19] とされる屋敷等の発掘調査が行われている。沖縄県教育委員会によって重要遺跡確認調査として、1993年～1996年にかけて行われた。調査区は屋敷跡（第I地区）と「伝薩摩在番跡」（第II地区）に分けている。

遺跡が形成された時期は、陶磁器の資料から時代幅がある。「青磁からは[註20]鎬蓮弁文椀や線彫細蓮弁文椀があり、14世紀前半から16世紀」となっている。また、「白磁では玉縁碗[註21]やビロースクタイプ碗を含む13世紀中頃から14世紀中頃」の古手の資料も確認されているが、主体となる時期は15世紀末～17世紀までの資料で占められている。

調査成果からは、遺構ではI地区の「伝鍛冶屋跡」で方形状石組遺構と周辺にピットが確認されている。方形状遺構の中からは人骨も検出されていることから、埋葬施設として押さえられている。人骨は20代から30代の男性とされている。上村遺跡より若干遅れて形成されたと想定されている。本調査では、屋敷の範囲測量図を作成しており、その実体が把握されている。特に「慶来慶田城翁屋敷跡」、「伝鍛冶屋跡」、さらに17世紀中頃に薩摩藩が駐屯していたとされる「伝薩摩在番跡」の測量を入れている。その比較検討した結果、時期差が考えられるとして「上村遺跡」で確認された石積みの整備、配列よりも「慶来慶田城翁屋敷跡」周辺に残された石積み、屋敷前の道等の整備が規格的かつ計画的な村づくりをした跡が見られるとし、「慶来慶田城翁屋敷跡」周辺の石積みや配置状況から伝承通り新しいものと結論づけている。

遺跡全体は国有地（旧陸軍省）で占められており、住宅等の構築物はない。石垣で囲われた旧屋敷跡がそのまま存在し、旧来からの集落形態が残されている場所は他に類をみない。祖納半島全体が、遺跡として包括されている。上村遺跡も含めて早急に史跡指定が急がれる。

慶来慶田城遺跡遠景



第10図　慶来慶田城遺跡屋敷配置測量図

(『慶来慶田城遺跡』) より抜粋

八. おわりに

西表島の遺跡を概観すると、ほとんどが海岸に近い低丘陵台地か海浜砂丘地にあり、集落遺跡によっては内陸部に展開する例もある。東部から西部にかけて同様な立地環境の中にあり、先史時代から中・近世の時期に至るまで前面に広がる珊瑚礁が生活の舞台となっている。八重山新石器時代の中で、西表島での最古の遺跡は下田原式土器と局部磨製石斧が出土する仲間第二貝塚であることはこれまでに述べてきたところである。現在のところ、それより古い遺跡は発見されていない。西表島は八重山諸島最大の島であることから、旧石器時代の遺跡が発見される可能性も残している。下田原式土器は波照間島下田原貝塚から出土した土器を指標とし、八重山先史時代最古の土器となっている。ちなみに下田原貝塚から出土した木炭やシャコガイを素材に、放射性炭素による年代測定[註22]の結果、貝：3660±70yB・P（3550±65yB・P）、木炭：3740±85yB・P（3630±80yB・P）の数値が得られている。仲間第二貝塚が下田原期に相当する遺跡であることはこれまでの遺物の検証から確認されているが、遺跡間によって出土する遺物のバリエーションに変化があり、文化様相の違いも指摘されている。また、土器の型態はその特徴から沖縄本島や九州地域などの、北の文化に求められるものではないとし、南からの土器文化の影響に祖型を求められるとしている。仲間第二貝塚からは、土器の他、局部磨製石斧が大量に出土している。また、下田原遺跡同様にイノシシの遺存骨や焼石が多量出土している。今後の調査によって、八重山先史時代の土器文化の編年体系、あるいはその源流がさらに整理されてくるものと考えられる。

仲間第二貝塚が形成された後の時期に続く遺跡として、仲間第一貝塚がある。無土器文化の中の（仲間貝塚文化）に相当する。年代測定のデータがないので、相対的な年代が把握されていないが、波照間下田原貝塚と大泊浜貝塚の出土遺物の比較検討や立地条件が類似しており、本貝塚の時代的位置づけが可能である。いわゆる下田原期に続く無土器の時期である。ちなみに、大泊浜貝塚ではD－22第６層で1350±75yB・P（1370±75yB・P）、D－22第10層で1770±70yB・P（1720±65yB・P）、G－22第11層では1560±70yB・P（1510±70yB・P）の年代測定[註23]結果が得られている。また、G－22区では第１層から第22層までの層序が把握されており、表土から約3.4mの砂の厚さの中に４～12世紀の文化相が包含されていることが確認されている。今後、同時期の遺跡の年代の比較検討や編年作業における一つのメルクマールになる遺跡と考える。西表島では下田原期に属する仲間第二貝塚が形成された後、その後、長い年月の間吹き上げられた海岸近くの砂丘地に遺跡が形成されるようになる。仲間第一貝塚、南風見貝塚、仲野西崎貝塚が想定されている。この時期、食糧残滓としての貝殻、獣魚骨が多量に出土し大規模な貝塚を形成し、焼石調理を示す焼石遺構が顕著に出土するようなる。そのことから、東南アジアや南方先史文化

の影響下にあったことが考えられている。この時期弥生時代相当期～10世紀頃とされている。出土する遺物や遺構から沖縄諸島とその周辺離島においてみられる、縄文、弥生文化の影響下が及ぶことなく独自の先史文化が展開していった時期である。このように仲間第二貝塚から仲間第一貝塚、南風見貝塚、仲野西崎貝塚、と続く独自の展開を見せた八重山の先史文化が続いた後、グスク（八重山ではスク）時代を向かえる。首長層の台頭とともに、農耕社会の形成・鉄器生産、海外交易を基盤とする古代社会へと発展していく。これまでの海岸砂丘地に展開されていた生活空間が小高い丘陵台地に大規模集落が形成されるようになる。その特徴的な遺跡が慶来慶田城遺跡や上村遺跡、古見旧村跡遺跡、与那良遺跡等の集落遺跡である。これらの遺跡は陶磁器資料から13世紀頃から15世紀頃の時期を中心とした集落遺跡である。上村遺跡の大竹祖納堂儀佐や慶来慶田城の慶来慶田城用緒など、村立てをした人物が口碑伝承として伝えられている。両者とも祖納半島を中心として生活の拠点を築いている。天然の良港をひかえ、海外交易を有利に展開した力のある人物であったと考えられる。その証跡が、大量の陶磁器類と鉄滓の出土である。鉄滓の出土は鉄器製造を意味しており、その当時の社会において強力な影響力を持った人物であったことが想像される。上村遺跡や慶来慶田城遺跡の発掘調査から鉄器生産地とともに供給地として重要な場所であったことが確認されている。しかしながら、鉄材の入手ルートや鍛冶技術の工程、供給地との関連等、不明な部分が多く、これからの研究によるところが大きい。ただ、この時期に祖納半島が、東シナ海交易路の中に位置づけられていたことは確かである。たとえば海洋商人によって、陶磁器や鉄材などが、この地にもたらされた可能性がある。

引用・参考文献

註１．田代安定「琉球西表島古見村野ノ土器」『東京人類学雑誌』10号　1889年
２．笹森儀助『南島探検』　1894年
３．多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概要」『琉球政府文化財要覧』　1956年
４．『竹富町・与那国町の遺跡－詳細分布調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第29集　沖縄県教育委員会　1980年３月
５．『沖縄出土の中国陶磁（上）－ジョージ・H・ケア氏調査収集資料　先島編」沖縄県立博物館　1982年３月
６．『沖縄出土の中国陶磁（下）－ジョージ・H・ケア氏調査収集資料　沖縄本島編』沖縄県立博物館　1983年３月
７．早稲田大学調査団『沖縄八重山』校倉書房　1960年
８．註７に同じ

9. 註７に同じ

10. R.J, PEASON. S ASTO etal「Excavations on kume and Iriomote, Ryukyu Islands」Asin Perspectives. XX（I） 1978年

11. 与那良遺跡調査団『沖縄・西表島与那良遺跡発掘調査概報』 1982年

12. 青山学院大学成屋遺跡調査団「西表・成屋遺跡発掘調査概報」『青山史学』第９号 1987年

13. 新納義馬「西表島の自然環境Ｉ」『西表島天然記念物緊急調査報告Ｉ』沖縄県教育委員会 1983年３月

14. 『西表島 船浦スラ所発掘調査報告－港湾施設用地工事に伴う発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第101集 沖縄県教育委員会 1991年３月

15. 註14に同じ

16. 註14に同じ

17. 『上村遺跡重要遺跡確認調査』沖縄県教育委員会 1991年３月

18. 註17に同じ

19. 『西表島慶来慶田城遺跡－重要遺跡確認調査』 1997年３月

20. 註19に同じ

21. 註19に同じ

22. 『下田原貝塚・大泊浜貝塚－第１・２・３次発掘調査報告－』沖縄県文化財調査報告書第74集 沖縄県教育委員会 1986年３月

23. 註22に同じ

船浮湾の戦争遺跡

大　城　将　保

はじめに

沖縄戦史に占める西表島の地位はあまり大きいとはいえない。「忘勿石」の記念碑に象徴される西表島避難民の戦争マラリアによる犠牲は有名であるが、“日米最後の戦闘”とか“鉄の暴風”といわれる沖縄戦の激烈なイメージと比べると一般の関心はきわめて希薄といわねばならない。

地上戦闘の経過という観点でみれば西表島は無風地帯に近く、それだけに戦史に登場する機会にとぼしく、戦争体験に関する調査研究もきわめて少ないのが実情であるが、今回これを「戦争遺跡」という別の観点から観察してみると、沖縄本島や石垣島とは異なる興味深い資料が少なからず得られた。とくに沖縄最初の軍事施設として昭和１６（１９４１）年夏に中城湾要塞とともに建設された船浮要塞は戦史のうえで重要なエポックを刻むばかりか、史跡としてみると、中城湾要塞がほとんど痕跡さえ残ってないのにたいして船浮の要塞跡は驚くほど保存状態がよく、往時の歴史を知るうえで貴重な史跡として価値が高いと認められる。

史跡保存の立場からする戦争遺跡の調査は、沖縄県教育委員会文化課において平成７年度から開始されている。県文化財保護条例の指定基準が改正されて「戦争遺跡」が史跡として指定される道がひらけたためである。現在は全県的な所在調査の段階であるが、とかく片隅におかれがちな西表島の戦争遺跡についても本格的な調査の照明があてられることが期待されるので、ここでは主要な戦争遺跡と関連資料の存在について紹介しておきたい。

船浮要塞の概要

西表島西部の船浮湾に建設された船浮要塞は、沖縄本島の中城湾要塞とともに沖縄県に最初に構築された軍事施設として歴史的に重要な位置を占めるものである。

置県以来、沖縄県は郷土部隊（連隊）を持たない唯一の県であった。徴兵制度は本土よりかなり遅れて明治31（1898）年から施行され、徴兵事務を管掌する沖縄連隊区が設定され連隊区司令官が赴任したが連隊区に対応する常駐部隊である連隊は編成されなかった。県出身兵は県外へでて第６師団（熊本）管下の九州他県の連隊に入隊するしかなかった。昭和期に至るまでなぜ沖縄だけに郷土部隊が設置されなかったのか理由は明確ではないが、

歴代の沖縄連隊区司令官の報告書や意見書などで見るかぎり、沖縄県民は日支両属の歴史をもつがゆえに皇国臣民としての自覚が低く未だ一人前になってないという軍部や政府の沖縄観が根底にあったことは容易に推察できる。昭和９年の石井虎雄連隊区司令官の意見書「沖縄防備対策」では、日清戦争時の親清派の動きを例にあげ満州事変後の現今の情勢においても沖縄県民が「敵側」に寝返る可能性が否定できないと指摘し、「憂ノ最大ナルハ事大思想ナリ」と断じている。同意見書は、南辺の護りとしての沖縄の軍事的位置の重大さを指摘し、県民に郷土防備意識を植え付けるために義勇隊を編成して軍事教育を徹底すべきだと提言しているが常備部隊の配備にまでは言及していない。沖縄連隊の編成などは時期尚早というより論外といった雰囲気を伺わせる。

常備部隊の駐屯もないぐらいだから防備施設（軍事基地）がないのは言うなでもない。防衛庁戦史の表現をかりれば、今次大戦の直前まで「沖縄県には軍馬一頭（連隊区司令官用）」の戦備しか持たないありさまであった。南辺の防備としては強大な台湾軍が存在し、大艦巨砲主義の観点からはあえて南西諸島の島嶼群に防衛施設を配備する必要を認めなかたのであろう。沖縄本島を中心とする南西諸島が戦略的に重要視されるのは太平洋戦争末期に航空主力主義への転換が差し迫った課題となり、航空基地としての価値が認識されてからである。従って、南西諸島が本格的に軍事化されるのは昭和19（1944）年春になってからであり、一般にそれまでの沖縄社会は軍隊とも軍事基地とも縁のない空白地帯であったとみなされるが、ただひとつ例外的なのが、昭和16（1941）年に建設された船浮湾と中城湾の臨時要塞の建設であった。

奄美大島、沖縄本島中城湾および西表島船浮湾に臨時要塞を建設する構想は大正８（1919）年から計画され、対米有事に際は北海道から台湾にいたる列島線に臨時要塞を構築し敵艦隊および潜水艦隊を迎撃するための海軍作戦の拠点を確保するという戦略的な目的をもつものであった。しかし大正11（1922）年２月に締結されたワシントン海軍軍縮条約の防備制限条項の対象となって建設計画は中止された。日本はその後同条約を破棄するが要塞建設の再開はながく放置されていた。

この間に日本軍部は日中戦争の泥沼化からの脱却をはからんとして国策を南進政策に転換、東南アジア地域への侵攻作戦計画とともに同地域から石油などの軍需物資を運搬する輸送ルートを警備し支援するために臨時要塞建設計画が復活することとなった。

昭和16（1941）年６月、陸軍築城本部の軍用船が仲良港に入港、厳重警備のもとで内離島、祖納、外離島、サバ崎に上陸、要塞用地の接収を開始した。同年７月、臨時要塞建設命令が発せられ、８月に着工した。内離島に12ミリ速射カノン砲２門、サバ崎に38式野砲２門、祖納に38式野砲４門、探照灯などが設置されたほか、湾の周辺に多数の陣地壕が構築された。陣地構築作業には西表西部の住民が動員された。各集落に徴用が割り

当てられるほか、朝鮮人の炭坑夫や学童なども動員した突貫作業の結果10月にはほぼ工事を完了した。

9月には要塞司令部、要塞重砲兵連隊、陸軍病院などが編成されて配備についた。要塞司令部（司令官・下水憲次大佐）と陸軍病院は第1区の内離島におかれた。第2区の祖納には第2中隊、第3区の内離島に第1中隊、第4区のサバ崎にサバ崎守備隊が配置された。

その後若干の配置移動が続き、17年10月には外離島の北端に野砲4門、南端に野砲2門が設置され、祖納の探照灯もここに移設された。

要塞部隊の活動としては、陸軍病院がマラリア防遏所と協力してマラリア対策に乗り出した事ぐらいで特記すべきこともなく、太平洋戦争の戦局の悪化とともに南方輸送路の警備・支援という役割も解消し、昭和19（1944）3月の第32軍（沖縄守備軍）の創設とともに要塞部隊は軍の指揮下にはいり、要塞司令部は解消し、重砲兵連隊は重砲兵第8連隊と改称して米軍の沖縄進攻に備えて石垣島に移動して行った。

要塞は事実上閉鎖となったが後には、沖縄本島の第4遊撃隊から第4中隊（隊長・今村武秋少尉）のゲリラ隊が派遣されてきた。ゲリラ隊は八重山各離島から兵役適齢前の青少年を徴集して「護郷隊」約200名を編成し、敵上陸後のゲリラ戦を想定した訓練を続けていたが、実戦に至らぬうちに敗戦を迎えた。

なお、船浮湾の最奥に位置する船浮集落には要塞部隊とは別に海軍石垣島警備隊指揮下の少数の海軍部隊が配備されていた。震洋艇のものと思われる秘匿壕跡などが残存しているが船浮住民は要塞建設時に全員上原に強制移動をさせられたため目撃者もなく記録も残されていない。

遺跡と資料

中城湾要塞は与那原に司令部と陸軍病院を置き、津堅島と知念岬の砲台が湾を抱きかかえる形で構築されていたが、第32軍の編成とともに軍に編成され、陸軍病院および主力部隊は長期におよぶ激戦の末に壊滅した。同湾は戦後も米軍の要港として使用されたために湾岸一帯は基地整備によって大きく変容し、主要陣地の津堅島はじめ各地の要塞陣地の跡地には往時をしのぶ物的痕跡はほとんど見あたらない。

これに比べて、船浮湾の場合は、普段は訪れる人もなく草木に埋もれて忘れられた存在になっているが、それだけに半世紀をこえた今日に往時の原型をよくとどめている。

筆者が実見した遺跡は、祖納の砲座跡と船浮の海軍施設跡の一部にすぎないが、各所の野砲は石垣島に移設されたためコンクリート構造の円形台座（直径約5メートル）だけがほぼ原型のまま放置されて残っている。近年これらの戦争遺跡を保存しようという気運

が高まり各方面から調査の光があてられつつある。竹富町社会教育課、同町史編集室、県文化課の行政機関のほか石垣金星（県文化財保護指導委員）、池田豊吉（西表館館長）、大田静男（石垣市文化課）氏らの実地調査や聞取り調査や資料収集が進みつつあり、既刊の調査報告書、戦史、文献資料集、写真資料集、資料館展示物などで確認される主なものだけでも次のような戦争遺跡がある。

①祖納上村の砲座跡　4基

②内離島の砲座跡　2基

③外離島の砲砲座跡　3基

④サバ崎の砲座跡　1基

⑤サバ崎の弾薬庫跡

⑥船浮の海軍壕跡

⑦同、海底通信施設跡

⑧同、貯水池および標柱

⑨同、特攻艇格納壕

⑩同、発電小屋跡

⑪同、弾薬倉庫跡

⑫祖納松山家の避難壕

⑬同、粟野家の避難壕

⑭白浜の住民避難所

⑮干立の住民避難所

以上のような戦争遺跡の建設時期や機能や使用例などを特定するうえで文献や写真やその他の関連資料は欠かせないが、近年になってその分野の成果も現れつつある。

①竹富町役場『竹富町史資料集①鉄田義司日記－船浮要塞重砲兵連隊の奇跡－』(2000)

②大田静男『八重山の戦争ーマップで訪ねる八重山の過去・現在・未来』(1996)

③資料館「西表館」展示（池田豊吉館長、2000年開館）

④竹富町史編集室所蔵「鉄田義司関係写真集」

⑤竹富町教育委員会作成「祖納砲台跡実測図」

竹富町史編集室から発行された『鉄田義司日記』は船浮要塞に長年勤務した将校の4年余におよぶ個人日記をほぼ全文収録したもので、船浮要塞部隊の編成から解体にいたる全過程を見届けた貴重な人物の貴重な記録である。〝鉄の暴風〟で壊滅状態となった沖縄本島はもとより石垣島や宮古島でも類似するものは五指に満たない貴重な記録である。この日記が発掘されたのは昭和61（1986）年。当時西表島の白浜小学校で教鞭をとってい

た城間良昭教諭が、教務のかたわら「西表島の戦争」をテーマに調査研究をすすめていたところこの日記の主の鉄田氏にめぐりあい日記を借用したことがきっかけで、鉄田氏の死後日記は出版を前提に城間教諭の手を経て竹富町史編集室に寄贈されたものである。出版構想から実現まで多くの曲折があって年月を経たが、資料集として出版されたこの日記には年数をかけただけの利用価値が多々ある。一つには、昭和16年の太平洋戦争勃発の年からはじまって昭和20年末の武装解除までを網羅するこの日記はそのまま沖縄戦とその前後の県内の動きを反映しており、西表島や石垣島のみならず沖縄全域の戦争体験の経過をたどるうえで年譜的な指標を与えてくれるものである。また、鉄田少尉は兵用地誌の研究のため軍務で八重山各地を巡回する機会があったため戦時下の八重山郡民の生活ぶりをよく観察しており同時代記録として貴重な情報を提供してくれる。さらに鉄田資料には日記のほかに当時の八重山の風物や軍隊生活を記録した写真資料が多数付属しており、戦時中の写真がほとんど見あたらない沖縄ではまれなる幸運というべきである。これらの写真を効果的に活用したのもこの資料集の特色である。軍人の日記をそのまま収録すればきわめて退屈な本になりがちなところ、本巻は日記本文の下段に余白欄をもうけ要所要所で用語解説や写真および写真解説を散りばめてある。このため一般読者にも読みやすいし、欄外の記事や写真を通読するだけでも八重山の戦時生活の模様が伝わってくるように工夫されている。

最後に特記すべきは、巻頭に掲げられた26ページにおよぶ「解説」の部分である。解題的な解説のほかに、日記の記述内容を中心に各年度ごとの記録者の動向と背景となる戦況が簡潔にまとめられていて、これだけでも八重山地方の戦時生活の断面や変遷をたどることが出来る。

大田静男『八重山の戦争』は第１部「戦跡に立つ」、第２部「八重山の戦争」、第３部「資料編」の３部構成になっているが、第１部はガイドブックのスタイルで八重山全域の主なる戦跡が写真と地図と簡潔な文章で紹介されている。船浮要塞についても便利な案内書として利用価値が高い。この小文でも同書を参照した部分が多々ある。

2000年夏に開館した「西表館」は船浮在住の池田豊吉氏が自宅の一角に解説した“手づくりミュージアム”である。西表の自然・歴史・民俗に関するユニークな資料が展示されているが、なかでも池田氏が教職時代から執念をもって調査してきた船浮要塞と西表炭坑に関する資料や図説が筆者には大いに参考になった。

竹富町教育委員会社会教育課が作成した祖納上村砲台跡の測量は地元在住の石垣金星氏らのはからいで電話会社の助成をえて実現したもので、このような実測調査が今後船浮湾全域に拡大されることが期待される。

軍用地問題

船浮要塞に関して忘れてならないのは軍用地問題である。石垣島などの飛行場建設用地の場合は規模も大きく地域住民に目撃者も多く関心も高いが、船浮の場合は時期が古く状況も異なるのでややもすると見落としがちになる。しかし飛行場建設用地であれ要塞用地であれ、いずれも総動員法を適用した軍部の一方的な強制接収であったことに相違はなく今日に至るまで根本的な問題は解決していない。

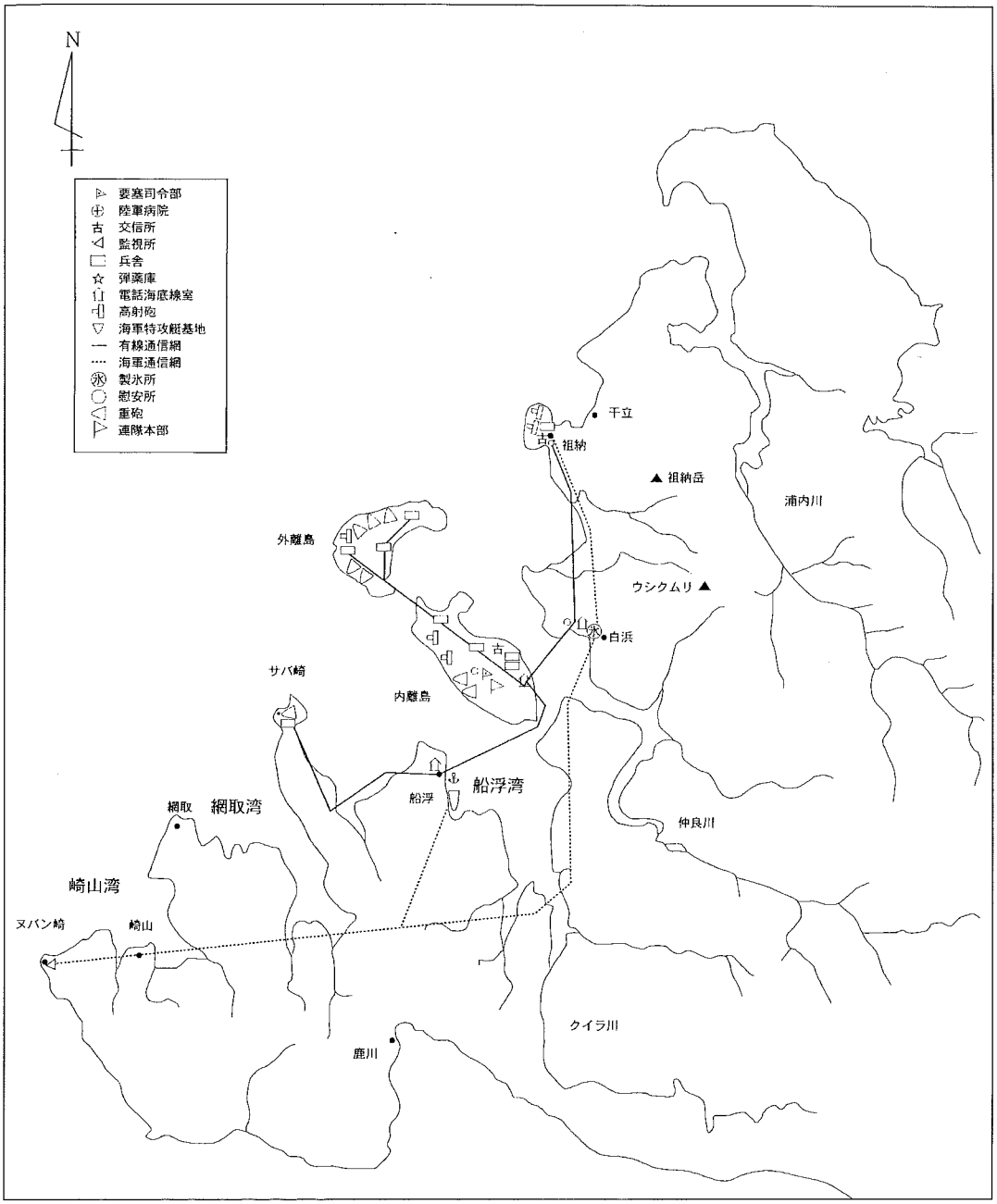
根本的問題とは、元の地主自身が「なっとくして土地を売り払った覚えはない」という一言につきる。実態は強制的な土地接収であったという。

昭和16（1941）年6月5日、陸軍築城本部船浮要塞支部の軍用船が湾内に出現、内離島、祖納、外離島、サバ崎に資材が陸揚げされ県下ではじめての軍事施設を建設するための土地収容がはじまった。要塞建設は軍事機密であるとの理由で村役場への通告もなく、要塞用地の地権者を西表国民学校にあつめて抜き打ち的に収容手続きを開始した。臨時要塞支部長から要塞建設のために用地が必要であるとの説明があり、地権者の応諾を問うこともなく土地売渡承諾書を提出させて手続きはあっけなく終了した。代金は3～4割が現金で支払われただけで、残金は強制的な国債購入にあてられ地権者が手にしたのはわずかな涙金であった。

戦時下のことで「戦争に勝つまでは」というのが一般的な空気であった。しかし戦後になって要塞が解消したあとも土地は帰ってこなかった。帳簿上は国有財産として登記されたままだった。それでも旧地主は自分の土地を耕して誰も疑問に思わなかったが、日本復帰後は国有財産として管理され、耕作者はもともと自分の土地でありながら国税事務所へ賃貸料を納めなければならなくなっている。ある農家では3年に1回約5万円の賃貸料を課されているという。不条理な感を拭い得ない状態である。

祖納上村砲台の一帯は祖納の元島であり開闢神を祀る聖域になっている。村人にとって精神的拠り所であるこの地が戦時体制下の強制接収の結果をいつまでも続けていいものか部外者からみても疑問の残る問題であろう。

船浮要塞配置図



（竹富町役場『鉄田義司日記』より）

西表島癩村設置構想

前　田　真　之

1．はじめに

1907（明治40）年３月18日法律第11号として公布された「癩予防ニ関スル法律」は、1996（平成８）年４月１日に廃止されるまでの89年間、癩の患者にかなりの影響を与えてきた。とりわけ1931（昭和６）年に改正された「らい予防法」３条（「行政官庁ハ予防上必要ト認ムルトキハ、命令ノ定ムル所ニ従ヒ癩ニシテ病毒伝播ノ虞アルモノヲ国立療養所又ハ第４条ノ規定ニ依リ設置スル療養所ニ入所セシムベシ」）は、強制隔離を実施するうしろだてとなり、また社会復帰に向けての規定がないことも相俟って、戦後に於いてすら患者の復帰を遅らせることになってしまった。一方戦後アメリカ統治下にあった沖縄では、1961（昭和36）年に「ハンセン氏病予防法」が制定され、その中で「在宅治療」（８条）、や「福利増進」（15条）、「厚生指導」（16条）の規定[注1]が設けられるなど本土で適用されていた「らい予防法」とは異なる対応が取られてきた。

本稿に於いては、日本の癩予防行政において大きな影響力を持ち隔離政策を推進してきた光田健輔による1916（大正５）年の西表島調査を対象とする。そしてこの調査の八重山地域への波紋が沖縄県の衛生行政にどのような影響を与えたのかという視点から考察を進めていくことにする。

光田健輔の西表島調査については、これまでにも後澤長四朗「西表遭難記」[注2]、原田兎雄「西表島と光田健輔」[注3]、オカノ・ユキオ「癩予防事業史」[注4]等で紹介されており、重複する面もあるが、先述の視点から考察することをあらかじめお断りしておく。

2．光田健輔の西表島調査の歴史的背景

光田健輔が、どのような人物であり、そしてどのような目的をもって西表島調査に派遣されたのかについては、あらかじめその歴史的背景を説明しておく必要がある。そのためにはここで、①1907（明治40）年に公布された「癩予防ニ関スル法律」がどのような内容になっていたのか、またこの法律の下に設置された道府県癩患者療養所には、どのような問題があったのか、②国の衛生行政の課題に対応するために1916（大正５）年に設置された内務省の諮問機関「保健衛生調査会」は、癩の予防に関してどのような答申を行ったのか、③「保健衛生調査会」から光田健輔に委託されたことにはどのような使命があっ

たのか、について紹介しておく。

①「癩予防ニ関スル法律」とその問題点

癩予防ニ関スル法律（以下「癩予防法」と省略）は、「浮浪者の隔離収容」を主たる目的として制定されている。本法案を提案した吉原政府委員によると、癩患者が神社、仏閣、公園等で徘徊し、病毒を伝播することを防止し、取り締まることがねらいであると述べている(注5)。癩予防法３条では「癩患者ニシテ療養ノ途ヲ有セズ且救護者ナキモノ」すなわち浮浪者に対しては、命令により施設への収容ができることを定めていた。(注6) また癩予防法４条では、主務大臣が患者の収容に必要な療養所の設置を命ずることができると定めていた。沖縄では、当時の主務大臣（内務大臣）原敬の命により療養所設置計画を進めていたが、真和志村天久に予定していた療養所設置案が1909（明治42）年12月沖縄県会の反対にあい、沖縄に１カ所、全国に７カ所を計画していた国の療養所案は失敗に終わってしまった。結局全国を第５区域に分けて道府県癩患者療養所（第１区全生病院・第２区北部保養院・第３区外島保養院・第４区大島療養所・第５区九州療養所）を設置することが1910（明治43）年４月に決まった。そして沖縄は1910（明治43）年の内務省令第１号により、九州各県の拠出金負担によって運営される第五区九州療養所に長崎・福岡・大分・熊本・宮崎・鹿児島と共に患者を派遣することになった。しかし1910（明治43）年から1929（昭和４）年までの20年の間に、第５区九州療養所に実際に送られた沖縄の患者は25名にしか過ぎず、1910年に送られた患者は全体のおよそ１％にしか過ぎなかった。(注7) また道府県癩患者療養所開設時の全国の定床数は、トータルで1100床(注8) しかなく、1900（明治33）年の第１回らい調査で全国で33,359人(注9) と記録された患者を収容するには、ほど遠い状況であった。さらに同法が浮浪者を主たる対象としていたため、療養所は浮浪者の収容所という様相を呈し、病気の治療よりも秩序維持に重点が置かれたため、逃走する患者も後を絶たなかった。(注10) このような状況等に対応するため、1916（大正５）年６月に内務省に諮問機関「保健衛生調査会」が設置されることになったのである。

②「保健衛生調査会」のメンバーと答申

保健衛生調査会には、らい予防対策について検討する第４部会が設けられた。この部会には、主査に山根正次代議士、委員に山田弘倫、光田健輔、内野仙一、山田準次郎が選任された。(注11) 委員の１人光田健輔氏は、当時第１区全生病院の院長であった。1916（大正５）年８月４日に開かれた第四部会では、第１號議案として「本邦ニ於ケル癩患者ノ總數、病状、年齢、職業別資産ノ有無等調査ノ件」、第２號議案として「癩患者ヲ隔離スルニ適當ト認ムル土地調査ノ件」が審議され、「右原案の通調査スルコトヲ決議シ患者數等調査表様式ノ作成ハ光田、山田（準次郎）内野ノ三委員に委託セリ」とある。光田健輔

は、この委託により西表島を含めた候補地の調査を同年９月13日以降行うことになったのである。

保健衛生調査会の答申は、調査の翌年の1917（大正６）年に行われたが、その大要は次のとおりであった。

現在の収容施設では、全国の患者数に比べて十分対応できる状況にはなく、らい予防対策は期待できない。全国のらい患者数を一斉調査して、患者の隔離をはかるべきであり、また全額国庫負担により１万名の患者を収容できる施設が必要であるとの答申を行っている。この答申に向けての審議の中で、光田氏は、西表島に施設を設けることを提案している。彼は、保健衛生調査会の発足１年前の1915（大正４）年にも、公立療養所における患者の逃走問題をきっかけにして、らい予防対策の意見書を内務省に提出し、この意見書の中で①完全なる絶対隔離、②療養所の拡張と新設、③ライ病療養区域の設定を提案し、さらに隔離が可能な療養所の最適地として島嶼としての西表島を主張していたが(注12)、この持論を委員会の場でもあらためて主張したため、内務省は保健衛生調査会の答申にむけて、療養所の候補地の敷地選定を彼に委託し、西表島を含めた候補地の調査を行わしめたのである。

３．光田健輔の西表島調査とその波紋

光田健輔が1916（大正５）年９月以降に行った西表島調査については、同行した後澤長四朗による「西表遭難記」がある。そのほかにも、本人が1917年（大正６年）に内務省衛生局に提出した秘文書「保健衛生調査会委員光田健輔沖縄縣岡山縣及臺灣復命書」（以下「復命書」と省略）(注13)と、さらにこの復命書のもとになったと推測される直筆の資料「西表嶋ノ衛生状態」(注14)などがある。ここでは始めに、後澤氏の「西表遭難記」をもとにしながら西表島調査の経過を先に紹介しておくことにする。

①西表島調査の経過

1916（大正５）年８月28日光田健輔一行は東京を出発し、鹿児島経由で９月５日に那覇に到着している。この調査の目的は療養所設置のためであるが、絶対秘密である、と同行の後澤氏に述べている。那覇到着後、醫海事報に掲載された「内務省の命に依り沖縄縣へ療養所設置につき出張」の記事を読んだ新聞記者が面会を求めにくる。

９月13日石垣に到着後、すぐに西表島へ出発、その日から９月24日まで西表島を視察している。八重山炭坑を皮切りに網取・崎山・舟浮・コエラ川上流・租納・干立・浦内・祖納・元上原・高那・古見・仲間屋敷跡・南風見・御座岳・南風見・新城上地・下地・黒島・古見の順で視察している。その間、９月14日には、宿泊した八重山炭坑の別荘に沖縄の新聞が届けられ、赤丸印がつけられた記事「光田氏一行はマラリヤ調査の名のもとに

内務省の命を受け療養所の建設地を視察に来た者である今でさえ他縣に較べ収入も無く此上療養所が出来れば漁業産業は少しも他に送り出すこともできず」を目にしている。西表島滞在中光田氏一行に同行した道案内人宮良玄伴（竹富村役場の書記官）は、彼らの監視をしており、行く先々で彼らの調査目的などを島民に宣伝していたと後澤氏は述べている。また９月19日には、新城島で療養所反対の集会が200名を集めて行われたとの情報が届いている。９月21日には案内人の誘導で御座岳に登頂するが、下山のおり案内人が松明を捨て先に降りたため道に迷い夜中の12時にやっと宿にたどりついたもようである。このいきさつについては、後澤氏は、案内人による計画的なものであったと述べている。琉球新報1916（大正５）年10月21日の安藤八重山島司談には、監視のため役場吏員を随行させたとの証言がある。(注15) その後、一行は25日小浜経由で石垣島に到着している。

９月30日に台湾に出発するまでは、マラリヤによる発熱のため石垣にて療養にあたっているが、その間26日には村会議員７名が療養所設置につき面会を求めて訪問し、さらに光田氏の癩療養所設置につき疑念を有した四カ村の代表が、集会を持つための印刷を急いでいるとの情報が午後には入っている。27日には、竹富村に500名が集合し、その代表である村会議員４名が面会にやってきている。しかし光田氏の病気を理由に面会を断っている。その後30日に台湾向け出発し、基隆から門司・下関を経て東京に戻っている。

以上が９月13日から９月30日までの簡単な経過である。

②西表島調査に見る癩村設置構想

光田健輔が計画した癩村設置構想は、彼の復命書をとおして知ることができる。

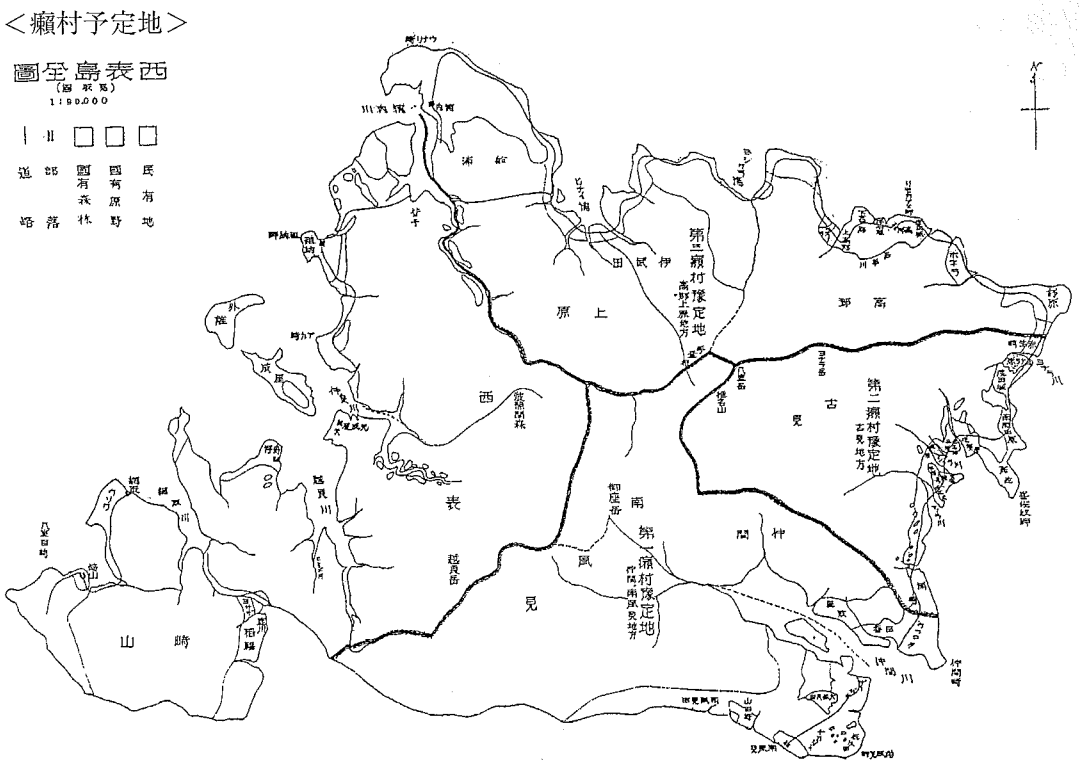
この復命書は128頁で構成されており、その内訳は第１西表島（１．地勢及地質、２．地種目及面積、３．気象、４．交通、５．戸口、６．人情及風俗、７．住民の生活状態、８．教育、９．産業、10．衛生状態、11．収容シ得ベキ人員、12．癩村經營方法)、第２八重山列島全體ノ趨勢、第３鹿久居島、第４長島、第５臺灣ニ於ケル「マラリヤ」防遏状況、第６結論、患者壹萬人収容療養所豫算となっている。これに「西表全島圖」、「風土病患者延人数」、「沖縄縣八重山列島勢一覧表」の３資料が添付されている。

この中で、光田氏の癩村設置構想について語るには、「西表全島圖」と復命書の第１の「収容シ得ベキ人員」及び「癩村經營方法」が大きな意味を持ってくる。

＜癩村予定地＞

下記の西表全島圖を見ると、西表島の三つの地方に癩村予定地が置かれていることが分かる。すなわち仲間・南風見地方に第一癩村予定地、古見地方に第二癩村予定地、高那・上原地方に第三癩村予定地が設定されている。西表でも大きな部落である祖納や炭坑地域

<癩村予定地>



光田健輔の復命書に添付された「西表全島圖」

だけは予定地から外されている。

光田氏は、この３つの癩村で３万人、各村１万人の収容を考えていた。「癩村ヲ作ラシムルニ當リ各人ヲシテ相當ノ地積ヲ與ヘ将来自給自活ノ途ヲ得セシメムトスル」(注16) とあるように自給自足ができるような運営を考えている。

仲間・南風見地方では、千五百町歩の田畑牧場を得ることが可能であり、１万人に付き１人あたり１反五畝が可能であるとみている。古見地方は千四百二十二町歩、高那・上原地方は千八十三町歩が可能であり、これに私有地の買収分と官有山林を含めると十分対応できると述べており、この地域に住む住民の立ち退きは困難な問題にはならないと見ていた。

<癩村予定地への患者の移送>

この癩村設置構想においての一番の課題は、三万人の患者をどのようにして西表島まで移送するのかということである。西表島に送る患者については、比較的健康な者を選抜し、労働に耐えられない者については内地に留め置くことを条件としている。次に移送方法であるが、長い期間にわたる輸送のため、仮収容所を鹿児島に設置し、鹿児島湾から舟浮港

へ直行するルートを考えている。各療養所からの移送人数は、東京から5,452人、青森から2,681人、大阪から3,988人、高松から3,704人、熊本から7,990人、併せて23,815人を基礎にして汽車賃の算定を行っている。

＜癩村における生活単位＞

1癩村に1万人の収容を予定しているが、最小の単位である家族舎を32人で構成する。そして家族舎を313軒置くことにより1万人の収容を可能とする。家族舎はその所属の農場の一部に置き、炊事場、井戸、食堂、便所、納屋、畜舎、薪炭置き場を設置し、家族的な団結のもとに結束できる自治制度を期待している。但しこでの生活の中で男女が一緒に生活することを望む場合には、男子はあらかじめ輸精管手術を行うこと、女子はX光線をあてて妊娠を未然に防止することを条件としている。

＜食料の調達＞

癩村に於いては、自給自足の方法を原則とし、島内生活に慣れるまでの間は米などの必要品は給付し、副食物については所属の菜園等を活用してまかなうこととしている。

＜生産活動＞

癩村における生活に於いては、患者が生き甲斐を見つけられるよう農業に従事したり、家畜を養ったり、漁に出かけたり、山林の経営にあたることを重視している。そしてこれらの生産活動を具体的に試算し、収入と支出の細かな算定を行っている。

＜調査の結論＞

光田健輔は、西表島、岡山県鹿久居島及び長島、台湾の視察をとおして、最後に次のような結論を述べている。

この復命書の中で、岡山県鹿久居島についてはわずか5行、長島についても4行しか割いていず、鹿久居島については「開墾絶望ナリ」、長島については「開墾ニ適スル所ナシ」と述べたことをもとに「到底癩村ヲ設置シ得ベクモアラズ」と結論づけている。一方西表島は絶好の地とは言えないが、設置をなし得る可能性はあると結論づけている。その理由として三点挙げ、第一は気候温暖であること、第二は多彩な趣味を島の環境が与えてくれること、第三は島が周囲と隔絶していることを挙げている。しかしこの三つの利点があるにも関わらず、交通の不便さと風土病の存在という二つの害悪も同時に指摘している。そして最後に「一大英断ヲ以テ茲ニ癩患者ノ楽天地ヲ設ケ患者ヲ該島ニ移住セシムルノ大計ヲ実行セラルルニ於イテハ遂ニ本病ヲ撲滅セムコト期シテ待ツ可シト信ズ」(注17) と西表

島への期待感を表明し、患者１万人収容予算案2,495,101円30銭を提案している。

③癩療養所設置に対する八重山郡民の対応

光田健輔が八重山に滞在した1916（大正５）年９月13日から９月30日にかけての八重山郡民の動きを、今度はマスコミの側から見ていくことにする。

◇名士の意見　［９月13日：琉球新報］(注18)

「癩患者隔離島嶼に関する」という小見出しで、護得久代議士、当間那覇区長、仲浜助役の意見を紹介している。三者に共通するのは、只でさへ他府県に誤解されることが多いのに、癩病患者の収容地にしたらますます誤解されることになるので反対する必要があるという考えである。しかし護得久代議士だけは、700名いるという沖縄の癩病患者の撲滅も講ずる必要があると述べている。９月14日に光田氏らが別荘で目にした記事というのは、この記事であることが予測される。

◇癩患収容所問題　［９月15日：琉球新報］(注19)

「当局に臨む」という小見出しで、「今回八重山出張の真の目的はマラリヤ病調査に非ずして癩病患者隔離島嶼実地調査に在る事は保健衛生調査会決定事項、数種医学雑誌の雑報及び氏の経歴等に照し決して憶測に非ず」と述べ、西表島の産業振興や沖縄に対する歴史的地理的誤解を取り除くためにも、療養所設置を未然に防ぐことが必要であると指摘している。

◇癩病と沖縄　［９月20日：琉球新報］(注20)

ここでは、８月12日付けの医学時報の記事を紹介している。それによると本年８月５日に保健衛生調査会第４部癩病分科会が開かれ、①癩患者の調査を行う必要性があること、②癩予防方法は島嶼に隔離することが良策であり、そのために調査が必要なこと、③光田委員を調査に派遣すること、の３点が決定されたとある。この事実に照らし合わせて見るならば、調査の目的がマラリヤ調査でないことは、一目瞭然であると述べている。

◇八重山郡民大会　［９月28日：琉球新報］(注21)

「郡民出船を拒絶す」「光田氏病床に伏す」西表島から石垣島にもどってきた光田氏は、マラリヤによる発熱のため伏せていたが、その間郡民から種々の詰問を受け、困憊している。また28日には郡民大会が行われたとある。

◇癩患収容地問題　［９月30日：琉球新報］(注22)

ここでは、９月28日に実施された郡民大会の様子が紹介されている。

郡民大会においては、癩病患者収容所設置への反対決議が行われ、各村から選出された委員を上覇させて防止運動をすすめていくことが決定されている。そして県当局に対しても郡民と共同歩調を取ることを要望している。

④光田健輔出発後の八重山郡民の対応

９月13日から９月30日までの光田氏滞在中の動向を新聞をとおして見てきたが、その後の動きも押さえて置く必要がある。９月28日に行われた郡民大会で大浜用要氏が代表として上覇することになったが、10月26日護得久・岸本両代議士、４新聞社の記者、八重山出身の花城・石垣両氏を交えて打ち合わせを行い、収容所設置反対の電報を八重山郡民代表者、両代議士、新聞社それぞれから上京中の知事あてに送っている。

これに対して鈴木知事は11月１日に警察部長あて電報を送り、その中で当局に対して要望を伝えたが、本件はまだ論議もされておらず、決定事項でもないとの回答があったことを通知している。さらに11月20日に帰沖した鈴木知事は、「・・該問題は何等具体的問題に非ず。仄聞するところに依れば光田氏は尚ほ外に有力なる候補地を発見せる由なれば只今の所は騒ぐ程の事にあらざるべし。又其土地の承諾を得ずして収容するも法律上問題なれば愈々実現するには困難に属する事ならん。」(注23) と答えている。その後12月11日には、大浜用要・渡久地政瑚・知念堅　輝・高良隣徳・平良真順の連名で「癩収容所設置に関する意見書」が 提出されている。またこの一連の動きの中で琉球新報は、９月13日から翌年の６月にいたるまで、癩収容所設置反対の論陣を張っている。

４．内務省への調査報告とその取り扱い

内務省への調査報告については、光田健輔氏が、その著「回春病室」(注24) の中で次のように述べている。

「内務省へ復命して『西表島は四時温暖で、相当の廣さがあってクリオン島にも劣らぬ適地である』と報告した。

その時内務次官潮恵之輔氏、衛生局長中川望氏などは、

『西表島のような絶海の孤島で、交通運輸に不便な、マラリヤの流行地などに療養所を作っても、行くものがないであろう。第一職員に困るではないか。仮に君に行けといったら君はどんなに思うか。』

というので私は言下に、

『もちろん喜んで行きます』

と答えたが、君１人行ったとて駄目ではないか、相当多数の職員も必要であり、患者も全國から送らなければならない。アメリカはヒリッピンでクリオン島に全患者を集中したのは属領であるからできたのであるが、日本はそのように簡単に強制隔離を行うことはむつかしい。病者がみな安心して行けるような瀬戸内海か有明湾の風光のよいところに適当の島を選んだ方がいいといわれた。」

光田健輔の回顧からも分かるとおり、西表島を最適地とする提案は見送られ、保健衛生調査会の答申は、患者を隔離し全額国庫負担により１万名をを収容できる施設が必要との結論に達している。そして第四部会では、1918（大正７）年に調査スル事項の一つとして「癩患者ヲ隔離スルニ適當ト認ムル土地調査續行スルコト」を挙げている。しかし内務省は1921（大正10）年以降10年間で患者5000名収容するという方向に軌道修正を行っている。

5．西表島調査が沖縄県に与えた影響

光田健輔が行った西表島調査は、沖縄県にどのような影響を与えたのであろうか。

沖縄県（日比重明知事）は、かつて癩予防法４条（主務大臣が患者の収容に必要な療養所の設置を命ずることができる）の規定にもとづき、療養所の設置計画を進めていたが、1909（明治42）年に沖縄県会の反対に会い、失敗に終わっていた。

それから７年後の1916（大正５）年、光田健輔が行った西表島調査についても、八重山中が大騒ぎになり、この中で癩療養所設置反対運動のために癩収容所防止会[注25]が組織されている。この中の主力メンバーには護得久、岸本両代議士のほかに外間、宮城、知念、金城、玉城、伊波の６県会議員も含まれており、両代議士には内務省との直接交渉の任務が、また県会議員には県会より内務大臣へ陳情書を提出する任務が与えられている。したがって議会対策が必要な当時の鈴木知事が、八重山の住民や県議会の反対を押し切ってまでも積極的に県独自に療養所を設置しようという動きに出ることは考えられず、また国の療養所設置についても当面は内務省の出方を静観するという態度につながったのではなかろうか。そのため1906（明治39）年当時670名[注26]いたと言われる沖縄の患者は、1910（明治43）年から1929（昭和４）年までの20年間、熊本にある九州療養所に送らなければならなかった。しかしこの20年間に実際に送った患者はわずか25名で、残りの99％の患者は恩恵に浴することがなく、十分な対応ができないままであった。沖縄県当局は、1927年以降にやっと県独自で施設を設置する方向に動いていくが、喜瀬案、宇茂佐案と変転し、嵐山事件と呼ばれるハンセン病療養所建設阻止運動へとつながっていく。

注記

（1）上原信雄編「沖縄救癩史」、財団法人沖縄らい予防協会、1964年、186頁

（2）後澤長四郎「西表遭難記」、国頭愛楽園慰安会編「濟井出」1938年、第3号

（3）原田兎雄「西表島と光田健輔」（南島史学会編『南島史学』1989年第33号）

（4）オカノ・ユキオ「癩予防事業史（12）」『愛生』1962年4月号

（5）（1906－7）第23回帝国議会衆議院議事速記録

（6）前田真之「癩予防法と沖縄」『沖縄県立博物館研究紀要』第24号37頁以下で1907年の癩予防法を紹介している。

（7）前田真之、前掲論文、39頁以下参照のこと。

（8）井上謙「癩予防方策の変遷（一）」、『愛生』1960年6月号11頁。

（9）井上謙、前掲論文、5頁

（10）井上謙「癩予防方策の変遷（二）」、『愛生』1960年10月号5頁以下では、大正9年に調査した逃走患者の状況が紹介されている。

（11）犀川一夫「ハンセン病政策の変遷」沖縄県ハンセン病予防協会、1999年、76頁。

（12）光田健輔「回春病室」朝日新聞社、1950年、89頁以下参照のこと。

（13）この資料は、現在東京都東村山市の高松宮記念ハンセン病資料館にある。

（14）この直筆の資料は、岡山市立中央図書館の光田文庫にある。この直筆の文書の構成を見ると、視察の順序どおりになっているところから、この文書に西表島等で収集した他の資料を加えて、復命書がまとめられたと思われる。この文書が復命書になるまでにどのような変更があったのか、また単なる配列変更に留まらず、内容の変更が在るのか否かについては、さらに検討を要する。直筆の「西表島ノ衛生状態」の中のかなりの部分が、復命書になる過程でかなり削られたり、別の項目に割り振りされている部分が出てきている。また「可及的家屋的家屋宅地ノ範囲に於イテ衛生的設備ヲナスニ留メ」の部分は、「可及的癩村落用園ノ範囲ニ於イテ衛生的設備ヲナスニ留メ」に訂正するなど、癩村設置を意識した表現訂正もある。そのほかに「新ニ癩村ヲ起コサントスルニハ在来ノ島民ヲ悉ク立チ退カシメ病原携帯者ヲ根本的ニ駆逐シ去ルヲ最モ得策トス」など癩村設置に意欲を見せる文章もあるが、この部分は復命書では、「収容シ得ベキ人員」の項で、各癩村別にコメントされている。

（15）竹富町史編集委員会「竹富町史第11巻資料編　新聞集成1」1994年、560頁

（16）光田健輔「保健衛生調査会委員光田健輔沖縄縣岡山縣臺湾復命書」63頁

（17）光田健輔、前掲復命書、107頁

（18）竹富町史編集委員会「竹富町史第11巻資料編　新聞集成1」1994年、546頁

（19）竹富町史編集委員会「竹富町史第11巻資料編　新聞集成1」1994年、547頁

(20) 竹富町史編集委員会「竹富町史第11巻資料編　新聞集成１」1994年、549頁
(21) 竹富町史編集委員会「竹富町史第11巻資料編　新聞集成１」1994年、552頁
(22) 竹富町史編集委員会「竹富町史第11巻資料編　新聞集成１」1994年、554頁～555頁
(23) 竹富町史編集委員会「竹富町史第11巻資料編　新聞集成１」1994年、568頁
(24) 光田健輔「回春病室」朝日新聞社、1950年、96頁以下
(25) 琉球新報、1916（大正５）11月19日、『竹富町史第11巻資料編　新聞集成１』567頁収録
(26) 上原信雄編　前掲書、59頁

西表島における戦後宿泊施設の概略史

A brief history of inn in Iriomote Island after World War II

園原　　謙

沖縄県立博物館

KEN SONOHARA

1　はじめに

西表島は沖縄県下で沖縄島に次いで２番目に大きな島である。手つかずの豊かな自然が残されているため、「日本のアマゾン」または、「東洋のガラパゴス」とも称される。

近年の島嶼地域の過疎化現象は顕著で、少子化も手伝って、各島行政担当者は人口の確保に躍起になっている状況下にある。現在、竹富町は西表島をはじめ波照間島、黒島、小浜島、竹富島、上地島、下地島、鳩間島、由布島の９つ有人島を有し、平成12年11月末現在3,634人（世帯数1,763）の人口を擁する。ここ10数年の人口推移をみると、意外ではあるが、過疎化の状況はなく、全体としてはむしろ増加傾向にある。その理由のひとつに、町内最大の人口を擁する西表島の人口増が要因となっていることをあげることができる。『平成10年度版竹富町勢要覧』によると、同島の人口は平成２年度が1,712人（685世帯）に対し、平成７年度には1,893人（782世帯）となっている。人口で181人、世帯数で97世帯の増となっている。また、平成12年度には（平成12年11月末現在）では2,007人、965世帯となり、５年前の平成７年度に比べると人口で114人、世帯数で183世帯の増となっている。

本稿では、過去に同島に旅行者として宿泊施設を利用したり、従業員（ペルパー）として従事した人々の一部がリピーターとして再び西表島に出入りするうちに、同島に移住・定住する傾向にあることが人口増加の要因のひとつであることに着目してみた。その契機を提供するもののひとつである同島内の宿泊施設に注目し、同島における宿泊施設の設置状況や推移について概観し、西表島における宿泊施設の役割や人口増に関わる社会的な要因などについて考察を試みたい。

2　宿泊施設の起源について

我が国における宿泊施設の起源について佐々木日嘉里氏は次のように述べている。

旅館設備の起源は大化改新で確立した駅制により設置された各駅の駅舎、厩舎に始まる

とされる。これは公用の官吏のための宿泊、給食施設であり、私用の旅行では庶民同様、草行露宿のありさまであったといわれる。

奈良時代、僧行基は慈善事業として交通の要所に布施屋を設置し、下層旅行者の無料休泊施設とした。平安時代には、旅行中の病人、餓死者のために悲田処、続命院、救急院なども置かれたが数が少なく、草枕の文字どおり苦しい旅であったことが、『更級日記』『信貴山縁起』などから伺える。院政時代には熊野参詣が盛行し、旅宿が発達した。鎌倉時代には熊野詣で、伊勢詣ではさらに盛んになり、庶民のための宿坊、宿院などの休泊所が現れた。駅制は荘園や海運の発達により衰退していたが、源頼朝が宿駅の制を施し再度発達した。駅には館が設置され、また商業の発達に伴い庶民の宿も営業された。これは木銭を支払い携行食糧の炊事を自ら行うもので、江戸・明治に至っても木賃宿として存在した。室町及び戦国時代、軍事上の必要から駅制は発達し、商業の著しい発達や社寺参詣の流行により庶民の行旅も増え、宿は次第に街村をなし旅籠が発生した。

江戸時代、太平の世になり宿駅制が全国統一されると、交通の往来が盛んになり宿駅は繁栄し、本陣、旅籠などの宿場町が形成された。本陣は、特権者や外国人用の宿泊所で、室町時代に足利義詮が上洛の際「本陣」と宿札を掲げたことから始まるとされるが、機能を発揮したのは参勤交代制以後である。門、玄関、上段の間を備え、経営者は苗字帯刀が与えられた。そのほか脇本陣、御小休本陣などもあり、目的により使い分かれた。しかし、幕末に諸侯の財政破綻、参勤交代制の緩めから衰微し、1870年（明治３）本陣廃止令により廃止された。

一方、庶民の宿舎として発達した旅籠は、「馬糧入れの籠」を意味したものが転じて旅館に用いられ、宿料は湯を沸かす木銭が基準となっていた。17世紀には、旅人が米を携帯する労苦を省き、木銭、米代、宿泊を宿料とするようになった。江戸文化が高度に発展して文化文政時代（1804-30）には旅籠は急速に発達し、宿泊と食事を提供するようになり、飯盛（宿場女郎）を置くところも多かった。しかし明治以後、鉄道交通の発達により駅に繁華街が集中すると宿場町はしだいにさびれ、旅籠は旅館やホテルに変わっていくことになった。

また、西洋における宿泊施設の起源についても以下のように歴史的経過を述べている。

古代エジプト、バビロニア時代には相当範囲の交易が行われており、バクダートとバビロンをつなぐ隊商路には早くから宿泊所が発達していた。ギリシャ時代には、集会や宿泊のための公共施設レスケがあり、のちに外国人宿泊所パンドケイオンも発生した。ローマ時代になると、アウグストゥスにより広範囲な領土統制のため道路網が建設され、駅逓制に従い道路沿いに宿駅が置かれた。これは官吏や軍人の宿泊、物資の輸送などにあてられたが、一般の旅行も頻繁になり民間営業の宿泊所も生じた。例えば、厩のついたスタブル

ム、内風呂をもつデウェルソリウム、下級階層者用のカウポナ、飲食店と酒場を兼ねたタベルナ、一品料理店を兼ねたポピナなどの宿屋がみられた。しかし中世に入ると、交通は殆ど途絶し、宿屋も衰退した。唯一、庶民の巡礼が旅行活動となり、僧院や修道院が無料宿泊所にあてられていた。十字軍遠征が始まると、大量の物資や行軍が往来し、営利的宿屋も発達し始めた。当時は食物、燃料、寝床などは宿泊者自身が用意するのが一般的であったらしい。ルネサンス期に宿屋は興隆を迎え、インとよばれる酒場を兼ねたものが現れ現代のホテルの原形となった。17世紀半ばに駅馬車が現れると、旅行者は増え、19世紀半ば、産業革命の結果、鉄道交通が発達すると新たな旅行動態が生まれ、これに伴い近代的施設をもつホテルが急速に発達し、現代都市における大規模なホテルの起源となった。

3 法律に規定される我が国の宿泊施設

戦後、わが国には宿泊施設に関する許認可を扱う法律として旅館業法（1948年）、国際観光ホテル整備法（1949年）が制定された。この法律でいう「旅館業」は４つの営業形態に分かれて規定される。すなわち、ホテル営業、旅館営業、簡易宿所営業、下宿営業である。ここでは、ホテル、旅館、民宿・ユース・ペンションといった簡易宿所についてその起源や営業形態などの特徴を記しておきたい。

①ホテル

近代設備と、行き届いたサービス機能を備えた高級宿泊施設のことで、我が国では旅館業法と国際観光ホテル整備法によって、ホテルは洋式、旅館は和式と一応区分されているが、明確にホテル、旅館の名称を区別する法的規制がないため、和式旅館でホテルの名をつけているのも多く、名称だけでは区別できない現状にある。

そもそもホテルの語源は、宿館、豪邸や公共の建物をさした古いフランス語hostelからきており、フランスのベルサイユにオテルhôtelとよぶ宿泊施設が現れたのは18世紀後半であったという。hostelからｓ音が消えたホテル（フランス語ではオテル）という語が高級宿泊施設の汎称として用いられるようになったのは、この頃と見られている。

日本では1688年（元禄１）長崎から江戸へ入るオランダ人を宿泊させるため、江戸本石町に洋風の旅館長崎屋が建てられたのを、ホテルの嚆矢とする説と、純洋式ホテルとして1868年（慶応４）東京築地に開業したホテル館（築地ホテル館）が最初と考える説がある。築地ホテル館は約２万３千平方メートルの敷地に103室を備えた。1878年（明治11）箱根に建てられた冨士屋ホテルが成功を収めリゾートホテルの先駆けをなし、1890年には東京に帝国ホテルが建設された。同ホテルは創設当初はルネッサンス風の木骨３階建てであったが、1923年（大正12）アメリカ人建築家ライトの設計によって全面的

に立て替えられ、日本を代表する都市ホテルとなった。これらホテルは庶民に届かない富裕階級や外国人のための高価な宿泊施設であった、とされる。

日本のホテルの大衆化は、1964年（昭和39）の第18回オリンピック東京大会を契機として起こったホテル建設ブームが大きく寄与したといわれる。高度経済成長政策による日本人の富裕化にも支えられ、ホテル業は順調な発展をとげ、70年代、80年代と三度の建設ブームを経て、地方都市、観光地にも多くのホテルが開業し、料金は低価格化にも成功し、大衆の宿泊施設との地歩を固めるに至った。

②旅館

旅行者が料金を払って食事・宿泊する施設。原則として客室の構造及び設備が和式のものが旅館とされる。

旅館は和式の構造及び設備を主とする施設を設け、宿泊料を受けて、人を宿泊させる営業で、簡易宿所営業及び下宿営業以外のものをさしている。営業許可は、都道府県知事が与える。許可基準には、旅館の設置場所、構造、設備などの諸点が規定されているが、地方によって差異がある。旅館業法施行令による旅館の基本的設備基準では、客室の数は5室以上であり、和式の構造設備による客室の面積は7平方メートル以上となっている。また、洋式の客室を全体の3割までもつことができるが、この場合、洋式の客室の面積は9平方メートル以上の規模がなければならない。設備として、原則的に洗面所、便所、浴室、防火、換気、採光、照明、防湿、排水などが整備される必要があるが、近接して公衆浴場がある場合には、入浴設備がなくてもよい。国際観光ホテル整備法による旅館とは、外国客の宿泊に適するようにつくられた施設であり、ホテル以外のものをさし、いっそう高度な規定がある。旅館施設は、このほかに建築基準法、消防法、労働基準法、食品衛生法、公衆浴場法などの法規ならびに各都道府県の定める規定の制約を受ける。火災に対する消防設備基準の厳守はとくに重要となっている。

③簡易宿所

旅館業法では、宿泊する場所を多数人で共用する構造及び設備を主とする施設を設けて人を宿泊させる営業でホテル、旅館、下宿以外のものを簡易宿所営業とよんでいる。その宿所の実態は、「民宿」、「ペンション」、「ユースホステル」の名称で親しまれる。

1 民宿

民宿とは、「一般民家が許可を得て副業的に営む簡単な宿泊施設のことで、安い宿泊料で家庭的なサービスを特徴とする」施設と規定される。民宿は本来的にその生業にあったのではなく、冬季のスキー場や夏季の高原、海水浴場などで宿をとれなかった利用者側が、

一般民家に頼み込んで一夜の宿を借りる形から始まった、といわれる。

営業は都道府県知事が公衆衛生の保持と、風俗を乱さないことを条件として許可するが、設備の規準は客室の延べ面積が33平方メートル以上であることが第一の条件で、その他についてはホテル、旅館に比べて規制も緩やかである。大別して季節民宿と通年民宿があるが、季節民宿はスキー客や海水浴客を対象としたものが多い。

民宿の魅了は、宿泊料が免税点（1984年現在5,000円）以下で設定されているため、きわめて安く泊まれること、自宅を提供した家族が接客にあたること、農漁業を兼業しているところでは、自家用の新鮮な魚貝、野菜が家庭的な味付けともてなしで食膳に供されること、などである。しかし、民宿の増加とともに、これを専業とするのも増えているので、かならずしも民宿本来のよさに出会えるとは限らない。

2 ペンション

ペンションとは、もともとは家庭的な小ホテルのことで、ヨーロッパでは主として住居の空き室を利用し、副業的に家族が経営した簡易な食事付きの宿泊施設であったが、現在では家庭的なよさを残しながら殆ど専業化している。我が国では1972年（昭和47）の日本ペンション協会設立以来増え始め、ホテル形式のサービス・設備と安価な宿泊料が好まれて、急速に発展してきた経緯がある。大別して都市型とリゾート型に分類でき、リゾートを中心に国内で約2,200軒が営業しており、ほぼ半数が日本ペンション協会、日本ペンションオーナーズクラブ、日本ペンション連盟など10団体のいずれかに所属している。

3 ユース

「ユース」とは、本来的にはユースホステルのことをいう。この施設は青少年が健康な野外活動をするために簡易質素な宿泊施設としてのホステルを活動拠点として、積極的に自然に親しむ運動をいい、狭義にはその宿泊施設をよぶ。20世紀に入り、ウォルフ・マイネンによって始められたワンダーフォーゲル運動と結合して、1909年リヒアルト・シルマンがユーゲントヘアベルゲ（青少年宿泊所）の建設運動を始めたことから世界に広まり、1987年現在53か国に建設され、日本では1951年（昭和26）日本ユースホステル協会が結成され、公営・私営を含め488（1986）の施設が全国に建設されている。ユースホステルには旅行ホステルと休暇ホステルがあり、後者はさらに、夏季、冬季、週末、都市など、利用形態によって分けられる。ホステリングは、ホスピタリティ（親切心）を基調にして奉仕と友愛の精神で自主的に協同生活を行いながら秩序と規律を守り、国際性をもった活動をしていくことが中心である。ホステル内の活動はすべてセルフサービスである。

4　西表島の宿泊施設の現況について

以上の宿泊施設の歴史的経緯や現在の法律上で規定される宿泊施設の形態を踏まえて、西表島の宿泊施設の現況をみてみよう。同島の宿泊施設の情報を提供するヤシガニNET作成のホームページ（平成12年末）掲載されている施設をもとに、筆者が調査した施設を加えると、表１のとおり45の宿泊施設が西表島にはある。その収容人数の総計は1,231人になる。また、旅館業法に規定される宿泊施設の種別毎の内訳では、ホテル３施設、旅館４施設、法律上は「簡易宿所」と呼ばれる民宿25施設、ペンション11施設、ユース２施設がある。

この一覧から圧倒的に民宿が多いことがわかる。民宿の収容人員の総数は、675人、ペンション246人、ホテル107人、旅館105人、ユース98人となっている。民宿は収容人員数においては全体の57％を占めている。次ぎにペンションが20％と続く。

各集落の宿泊施設の設置状況は図１の西表島の集落毎宿泊施設設置状況図（注１）のとおりである。この図から西表島を東部と西部に分けた場合、宿泊施設が西部地区に多く東部地区には少ない実態が浮き彫りになる。

筆者は、2000年１月18日から20日まで２泊３日で西表島の宿泊施設実態調査を実施した。時間の範囲内で個々の施設を訪ね関係者に質問した。また、後に電話で補足調査を行った。調査内容は次のとおりである。①創業年、②部屋数、③最大収容人員、④従業員数（オーナーを含め）、⑤繁忙期のヘルパー数、⑥建物の構造、⑦その他客層の傾向などである。筆者が直接の聞き取りや電話による調査結果を表２・集落毎宿泊施設一覧としてまとめてみた。

この一覧から創設年に注目して作成したのが図２である。戦後西表島における宿泊施設の設置状況を５年間隔でまとめてみたものである。70年代前半と80年代にかけて、多くの宿泊施設の設置状況が確認できる。この図から日本復帰を契機に沖縄の秘境・西表島の宿泊需要は高まったことが伺え、その結果として来島者に対する宿所の供給状況を把握することができる。

宿泊施設の種別ごとの創設状況をみると、旅館が先行していることが分かる。また、簡易宿所を代表する民宿は、72年の日本復帰を契機に拡大していく傾向もみてとれる。ペンションという宿所形態は80年代に設置されはじめる。そして、大きな資本力が求められ高級なイメージをもつホテルという形態は80年代後半から90年代前半にかけて設置される。

表１　ヤシガニNET作成のホームページ掲載等の西表島の宿泊施設（平成12年末）

民宿（25件）

No	宿泊施設の名称	住所 沖縄県竹富町西表島	電話番号 (09808)	収容 人数	備　　考
1	民宿パイナップル館	上原10-171(西部)	5-6408	45	ホームページで紹介
2	民宿あけぼの館	上原397-1(西部)	5-6151	25	ホームページで紹介
3	民宿南風荘	南風見201-37(東部)	5-5356	16	ホームページで紹介
4	民宿ヒナイビーチ	上原870-91(西部)	5-6254	45	ホームページで紹介
5	民宿さわやか荘	上原10-448(西部)	5-6752	38	ホームページで紹介
6	民宿カンピラ荘	上原545(西部)	5-6508	30	ホームページで紹介
7	民宿マリウド	上原984-14(西部)	5-6578	36	
8	民宿西部荘	上原870(西部)	5-6257	13	
9	民宿サンゴ荘	上原572-1(西部)	5-6367	8	
10	民宿きよみ荘	上原872(西部)	5-6251	30	
11	民宿うえはら館	上原559(西部)	5-6516	60	
12	民宿まるま荘	上原527(西部)	5-6156	18	
13	民宿ミネイ館	上原870-3(西部)	5-6506	20	
14	民宿おやかわ荘	上原330-2(西部)	5-6466	20	
15	民宿ふるさと荘	上原10-199(西部)	5-6750	10	
16	民宿うなりざき荘	上原10-172(西部)	5-6146	60	
17	民宿星砂荘	西表657(西部)	5-6150	30	
18	民宿ふくぎ荘	西表635(西部)	5-6353	17	
19	民宿ふなうき荘	西表2458(西部)	5-6161	23	
20	民宿かまどま荘	西表2463(西部)	5-6165	20	
21	民宿池田屋	南風見201-116(東部)	5-5255	15	
22	民宿大原荘	南風見201-70(東部)	5-5155	15	
23	民宿なみ荘	南風見201-60(東部)	5-5257	30	
24	民宿みどり荘	上原572-5(西部)	5-6526	39	※
25	民宿鳴海荘	西表614(西部)	5-6164	20	※

ペンション（11）

26	ペンションBUFF	上原397-1(西部)	5-6407	15	ホームページで紹介
27	ペンションふあなはうす	上原984-1(西部)	5-6715	16	ホームページで紹介
28	ペンションくまのみ	上原870-95(西部)	5-6255	18	ホームページで紹介
29	ペンションわいるどふぁー夢	上原661(西部)	5-6653	30	
30	マリンロッジアトク	上原750(西部)	5-6356	14	
31	ペンションイリオモテ	上原750(西部)	5-6555	16	
32	ペンション星の砂	上原289-1(西部)	5-6448	22	
33	ペンション住吉荘	上原10-186(西部)	5-6358	22	
34	ペンションなかまがわ	南風見仲29-37(東部)	5-5407	12	
35	マリンペンションたいら	上原564(西部)	5-6505	30	※
36	VILLA UNARIZAKI	上原750(西部)	5-6464	27	※

ホテル（3）

37	プチホテル・マヤグスクリゾート	上原10-544(西部)	5-6190	12	ホームページで紹介
38	西表アイランドホテル	西表634(西部)	5-6001	60	
39	西表ココナッツヴィレッジ	上原397-1(西部)	5-6045	35	

旅館（4）

40	旅館金城	西表1499(西部)	5-6351	21	ホームページで紹介
41	みはらし旅館	上原870(西部)	5-6537	30	
42	竹盛旅館	大富36-5(東部)	5-5357	24	ホームページで紹介
43	あずま旅館	南風見201-146(東部)	5-5268	30	ホームページで紹介

ユース（2）

44	ユースみどり荘	上原572-5(西部)	5-6526	32	ホームページで紹介
45	ユースいるもて荘	上原870-95(西部)	5-6255	66	ホームページで紹介

※筆者が調査して追加した施設

表２　集落毎の調査宿泊施設一覧

大原

	名称	種別	創業年	部屋数	収容人	従業員	ベルパー	構造	摘要
1	池田屋	民宿	1986年	7	15	3	0	木造・RC造	官公庁関係者、大学生（7-8月）
2	大原荘	民宿	1977年	5	15	1	0	RC1F	旅館業から移行
3	なみ荘	民宿	1974年	12	30	2	0	RC2F	1996年改築、7-8家族連れが多い
4	南風荘	民宿	1982年	8	16	2	0	RC2F	
5	あずま旅館	旅館	1969年	12	30	2	2	RC2F	４月－８月夏場を中心に多い
	合　計			44	106	10	2		

船浦

6	西部荘	民宿	1973年	5	13	1	0	RC2F	素泊、ゴールデンウイーク、顧客が多い
7	マリウド	民宿	1985年	13	36	2	5	ブロック・トタン	夏場の常連客が多い
8	ヒナイビーチ	民宿	1993年	16	45	2	2	RC2F	夏場ヘルパー雇用
9	ふあなはうす	ペンション	1989年	7	16	2	1	RC2F	冬場１月～２月休、顧客多い
10	ペンションくまのみ	ペンション	1984年	6	18	1	—	RC1F	
11	いるもて荘	ユース	1976年	17	66	1	5	RC2F	
12	みはらし旅館	旅館	1964年	14	30	1	1	RC2F	72年に現在地に移築。当初は民宿を設置。
	合　計			78	224	10	14		

上原

13	カンピラ荘	民宿	1972年	20	30	2	7	RC2F	常連客、フリー客が多い
14	うえはら館	民宿	1966年	27	60	2	7	RC2F	1972後改装、家族連れや合宿・修学旅行客
15	きよみ荘	民宿	1972年	20	30	1	3	RC2F	家族連れが多い
16	サンゴ荘	民宿	1979年	3	8	1	0	RC1F	
17	まるま荘	民宿	1982年	9	18	2	1	RC1F	県外ヘルパー２人が現地で結婚した。
18	ミネイ館	民宿	1982年	9	20	2	1	RC1F	
19	わいるどふぁー夢	ペンション	1989年	7	30	3	1	RC2F	20年前にカンピラ荘に滞在したことから虜になる。
20	マリンペンションたいら	ペンション	1975年	12	30	2	2	RC2F	合宿、
21	ユースホステル西表島みどり	ユース	1974年	11	32	2	3	RC2F	
22	みどり荘	民宿	1974年	15	39	2	1	RC1F	レンタカー業も兼務
23	西表ココナッツヴィレッジ	ホテル	1994年	12	35	2	3	RC2F	
	合　計			145	332	21	29		

住吉

24	うなりざき荘	民宿	1970年	20	60	5	1	RC2F	ダイバー顧客が多い、１月から２月OFF
25	さわやか荘	民宿	1988年	15	38	2	3	RC1F	ダイバー顧客、夏場の家族連れ
26	パイナップル館	民宿	1981年	16	45	2	2	RC1F	ダイバー客多い
27	ふるさと荘	民宿	1988年	4	10	1	0	RC1F	
28	住吉荘	ペンション	1968年	7	22	2	1	RC2F	祖母の代から民宿業を営む。85年に改築
29	ペンション星の砂	ペンション	1980年	17	45	5	10	RC1F／2F	
30	マヤグスクリゾート	ホテル	1994年	2	12	3	0	RC2F	
31	VILLA UNARIZAKI	ペンション	1999年	12	27	2	5	RC1F	ダイビング客多い。
	合　計			93	259	22	22		

祖納

32	ふくぎ	民宿	1988年	5	17	1	0	RC2F	素泊まり
33	星砂荘	民宿	1972年	11	30	1	1	木造・RC2F	
34	鳴海荘	民宿	1997年	5	20	1	1	RC2F	
35	西表アイランドホテル	ホテル	1986年	22	60	6	5	RC3F	7月～９月シーズン、大手旅行代理店と提携
	合　計			43	127	9	7		

船浮

36	かまどま荘	民宿	1969年	4	15	1	0	RC2F	
37	ふなうき荘	民宿	1977年	5	20	1	0	RC1F	常連客のみ。夏休み期間中のみ営業
	合　計			9	35	2	0		

大富

38	ペンションなかまがわ	ペンション	1987年	5	12	2	0	RC1F	9割以上が他県からの旅行者
39	竹盛旅館	旅館	1961年	10	24	2	1	RC2F	創設当初は民宿、83年改築、97増築、研究者が多い
	合　計			15	36	4	1		

浦内

40	ペンションイリオモテ	ペンション	1981年	5	16	2	0	RC1F	
41	MARINNELODGEアト	ペンション	1987年	6	15	2	2	RC2F	80年頃からダイビングブームが始まる
	合　計			11	31	4	2		

白浜

42	金城旅館	旅館	1977年	7	21	1	1	RCF2F	夏場のリピーターが多い。夏場はヘルパー雇用

中野

43	民宿あけぼの館	民宿	1982年	7	25	3	0	RC	教員など公務員の客層が多い
44	おやかわ荘	民宿	1980年	8	20	3	1	RC2F	
45	シーサイドペンション・パブ	ペンション	1995年	5	15	1	1	RC2F	
	合　計			20	60	7	2		

図１　西表島の集落毎宿泊施設設置状況

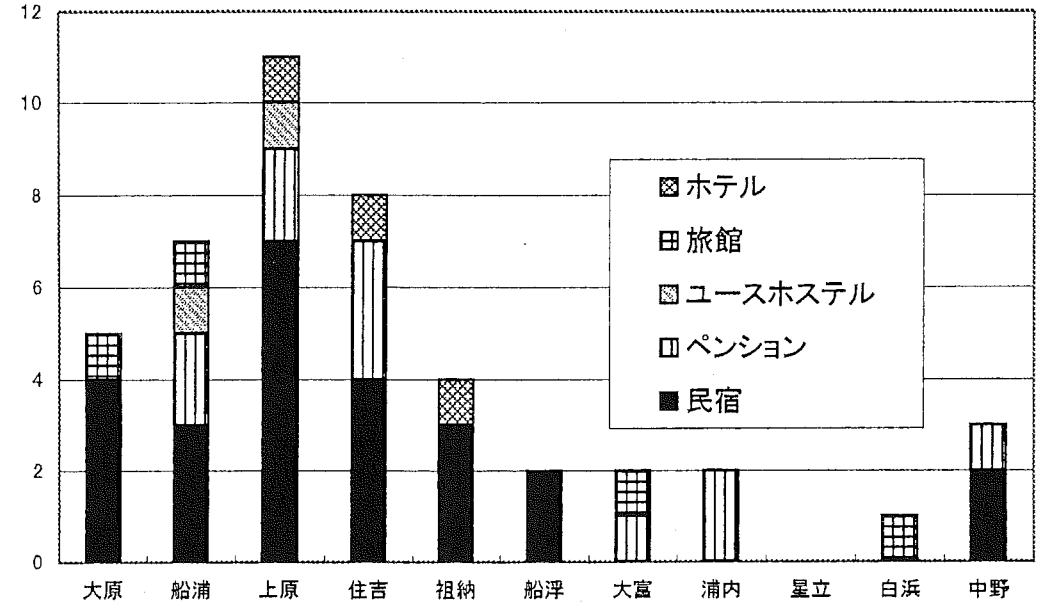


図２　年別宿泊施設設置状況図

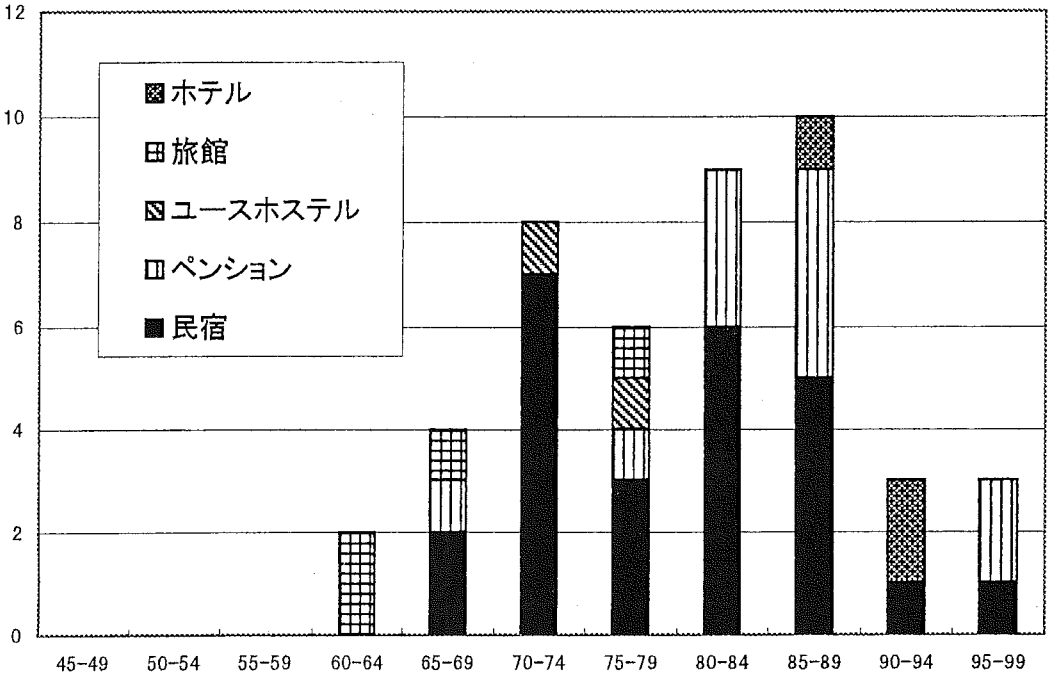
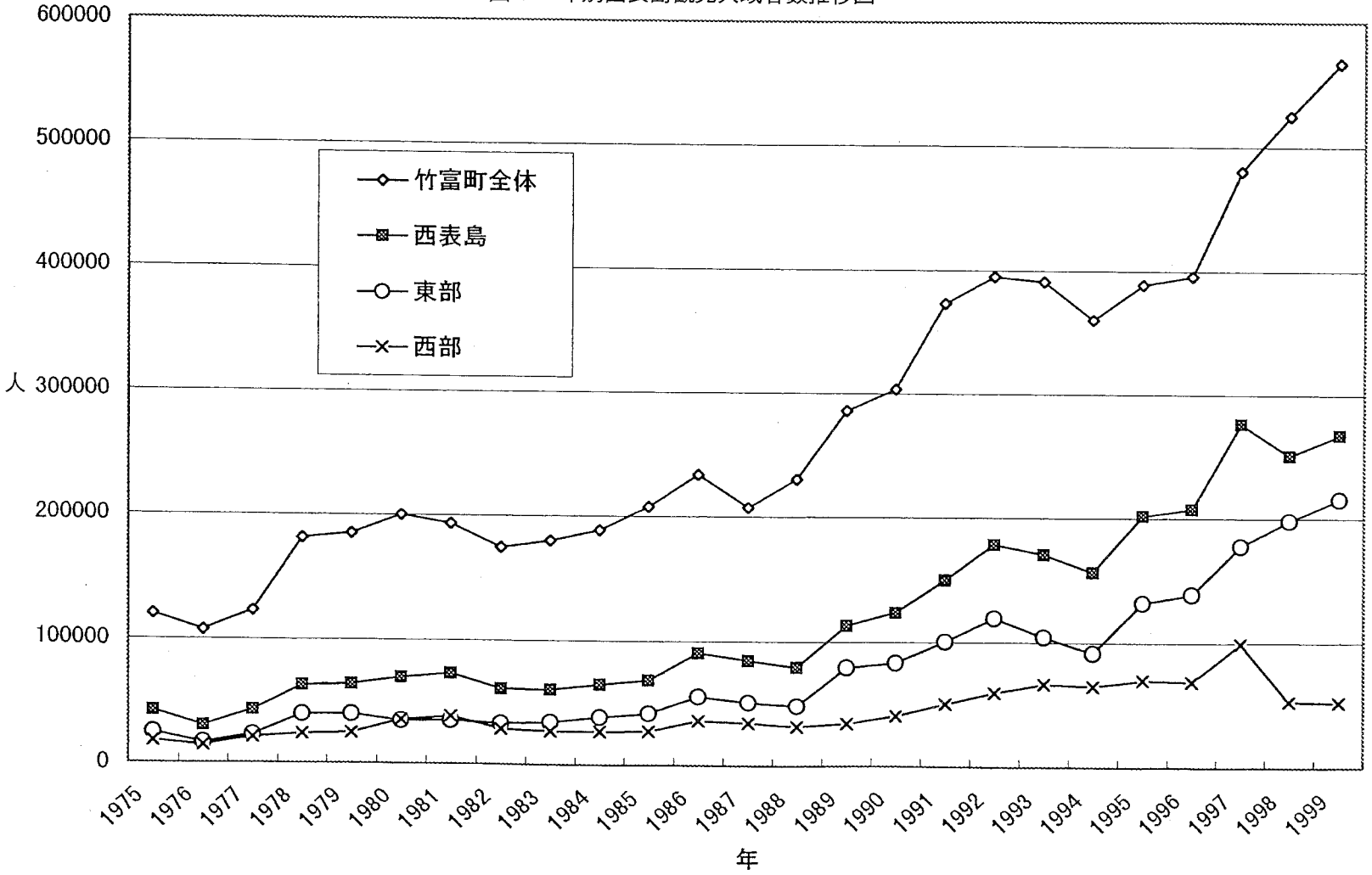


図３　年別西表島観光入域者数推移図



5　観光入域者数と宿泊施設設置の相関関係

竹富町役場企画課提供の資料に基づく統計資料によって作成したのが、図３の年別西表島観光入域者数推移グラフである。統計資料が75年からしかないのが残念であるが、西表島の観光客入域者数は、1975年（昭和50）の42,125人から、1999年（平成11）には267,503人に推移し、25年間で６倍強の伸びを示している。ただし、この観光客入域者数は石垣港から西表島へ渡った乗船者数が基数になっている。生活路線であるため、観光客数をどの程度の比率で算出するかは、モニタリング調査によるものと思われるが、この数値は乗船者数の４割を観光客と規定したものだという。25年間を経過した今日、島民の生活動態の変化や観光客そのものの増加が顕著であることなどの指摘があるため、観光客と島民との乗船客数比率の見直しが検討されているようである。そこでは、従来の観光客比率４割を７割に上方修正する可能性も指摘されている。そのように考えると、1999年を例にとった場合、観光客や島民を含めた西表島航路の延べ利用者数は約66万人で、うち７割を観光客として換算すると、約46万の数値が算出されることになる。

図３では、竹富町全体と内数としての西表島の入域者数、さらにその内数として島内の東部、西部の４つの指標に注目した。竹富町は９つの有人島があるが、統計の対象となっている島は、竹富、西表、小浜、黒島、波照間、鳩間、新城（上地）の７島である。そして、これらの島には石垣間で定期船が就航しており、各島１海港で対応している。ただし、西表島の場合は東部・大原の仲間港、西部の船浦港があり２港となっている。

西表島の観光入域者数は、75年の統計開始以来順調に増加傾向にあることがわかる。その線と同調して東部大原の仲間港の利用者数も増加している。一方、西部の船浦港はほぼ横這い状態になっている。これは、船浦港が北風の影響を受けやすく、10月から３月にかけての６ヶ月間、定期便に欠航が相次ぐためである。この指標は東部と西部の港の利用者の傾向を把握するために呈示した。

さて、ここで西表島観光における観光客の動態について検討しなくてはならない。同島の最大のみどころは、秘境といわれる大自然にある。観光の主要目的はダイビング、登山、川遊覧、動植物の研究などといったものといわれる。

西表島観光にとって、もっとも大きな障害は観光客が石垣島を拠点として動く旅行形態にある。石垣島は、八重山諸島の海上交通の要所であり、大規模資本によるホテルなどの宿泊施設が整備され、交通・生活の上でも利便性が高い地政的特性を有する。したがって、個人客を除く、団体客は利便性の高い石垣島を拠点に動く旅行形態をとらざるを得ない状況が生じる。従来、西表島観光は石垣島からの「日帰りツアー」として位置づけられてきた経緯がある。その背景には、観光客を受け入れるための受け皿、すなわち宿泊施設の絶対量の不足があげられてきた。その問題の解消には、観光客の需要に対応する宿所などの

ハード部分と観光産業のソフト部分の確立が急がれていたのであった。

復帰後の西表島観光は、受け皿づくりである宿泊施設の整備により、日帰りツアー形態の解消を図ることが当面の目標として掲げられてきた。そのことが今日のような宿泊施設の増加につながった一因である。しかしそれでも、宿泊施設の1カ所あたりの収容能力の限度などにより、この問題は十分な解消にいたっていない現状があり、依然として石垣島を拠点とする八重山観光の本流は変わらない。

6　西表島のエコツーリズムの実践

今回調査対象とした宿泊施設45カ所のうち、半数近くの経営者が島外の人々であった。ある県外出身の経営者は、西表島の魅力についてつぎのように語ってくれた。

20数年前新婚旅行で石垣島にきた。そして西表にも渡った。元々釣りが趣味であったことが、より一層海の虜にしたという。豊かな自然が西表への移住を決意させたという。2年で資金を稼いで、大富集落に移住した。趣味を生かし漁業に従事したという。同集落は戦後大宜味村、竹富あたりからの移住者が多かったことから大宜味の「大」と竹富の「富」を結んで集落名称にしたところであった。多くの移住者によって形成された集落であるため「合衆国」と地域の人々からは呼ばれている。それゆえ、他県出身に対しても同じ移住者の立場で、開放的でおおらかに受け入れてくれたという。土地の人々の相互扶助により随分と助けられたという。そして、土地譲渡の話が舞い込み、土地を求めて簡易宿所営業（ペンション）を営むことになったという。他島とは違う西表島の魅了について、山があり、川があり、海があり、そのすべての自然が豊かであり、人々が素朴で温かいことを挙げてくれた。

また、ある経営者は、中途半端な都会よりは、時代をタイムスリップしたなつかしさがあり、ゆったりした時間の中で「人間らしい」生活感をとりもどすことができる島が西表島であると、移住の動機を語る。

今回調査した宿泊施設に従事する主たる人々は、90人であった。家族経営が主であり、夫婦で従事していることが多い。また、夏季を中心とした繁忙期には、28施設で80人程度の従業員（ヘルパー）を雇用している。定職化を避け、自由業としてのフリーター指向の若者には、大自然の中に身を置き、旅行者感覚で宿泊施設に住み込み3食付きで、若干の日当付の仕事は大きな魅力のようである。ヘルパーの殆どが県外出身者である。民宿に宿泊したり、ヘルパーとして西表島で生活した彼らの先輩の中には再び同島に戻り、民宿を創設している人も少なくない。また、地元の人によって経営される民宿の二代目に西表に魅せられた県外出身者が嫁いでいる事例も少なくない。宿泊施設を通しての西表島の旅行・生活体験が、彼らの人生進路を大きく左右する契機をつくったといっても過言では

なさそうである。このことが西表島の人口を増加させている要因のひとつと考えられる。現在の人口は、2007人であるが、この数値は住民票を伴う数である。ヘルパーの中には住民票を異動しない人々もおり、実態としての人口はその数をはるかに上回るものと思われる。

近年、エコロジーということばが頻繁に用いられる。元来は環境と生物との相互関係を調べる学問である。この用語は、19世紀のドイツの生物学者ヘッケル（1834-1919）による造語である。80年代からは環境破壊や資源枯渇の問題が鋭く認識されるようにいたって、この用語は自然科学の領域を越え、人間の生存条件を考える上でも不可欠のことばとなった。観光事業、集合的に観光客をもちいる場合、英語では「ツーリズム（tourism)」ということばを用いる。訪問先（観光地）の自然環境や破壊することなく、その土地固有の自然・生活・文化などの資源を持続させていくような旅行の概念がエコロジカルなツーリズムを意味する言葉として「エコツーリズム」として80年代から欧米で使われるようになった。今日では自然保護と観光、そして地域への経済還元を同時に成立させる新しい旅として、世界的に注目されている。

1996年（平成８）西表島にもエコツーリズムのノウハウを紹介する機関「西表島エコツーリズム協会」が国内で初めてに創設された。地元の協会会員は現在39カ所を数える。運送業、飲食業、ダイビング業、土産品業、宿泊業など異業種間の結合である。地域興しのユニークな活動実践などが認められ1999年度（平成11）の「地域づくり自治大臣表彰」を受賞した。

同協会が発行した『ヤマナ・カーラ・スナ・ピトゥ西表島エコツーリズム・ガイドブック』には、エコツーリズムの体験の方法が次のように記される。

傷つけることなく自然と親しむ方法を土地の人に聞くことからはじまります。どの地域にもそれぞれ、自然と接し方を示すルールがあります。入っていい場所、採っていいもの、歩き方、触れてはいけないものなど、土地の人々が自然と関わってきた歴史の中で得た知識の結晶がある。それらルールを知り、尊重して行動することがエコツーリズムの第一原則です。

同書は、エコツーリズムは地域固有の自然環境、そこに生きる土地の人々の文化や歴史を追体験して共有するための謙虚な姿勢と尊敬の念で接することが肝要であることを語っている。

7　まとめにかえて

筆者が西表島を訪問したのは、今回で３回目である。１回目は20年ほど前の学生時代であった。その時は、山中のホールのような施設を宿として、集団行動の中で浦内川の散

策を経験したように記憶している。２回目は1995年（平成７）で、県教育委員会の「県内所在染織調査」事業の一環で西表島の古い集落である古見や星立、祖納に伝わる無形民俗文化財に関わる衣裳や舞台幕などの調査で伺った時である。星立集落では、戦前製作されたと思われる日章旗がクロスで描かれた紅型舞台幕が確認できた。しかし、この幕は日章旗部分が墨消しされていた。戦前の教科書の墨消しは聞いたことがあるが、舞台幕の墨消しは初見であった。戦前から戦後にかけての歴史的価値感の転換を語る重要な歴史資料といえるものである。祖納、星立集落には、1991年（平成３）に国指定重要無形民俗文化財に指定された伝統的祭祀「節祭」がある。確かその時は、日帰りで石垣島に宿を取ったと記憶している。

そして今回初めて西表島の民宿を体験した。同時代的で観光ガイド資料になりがちであるが、西表島の戦後宿所の実態を記録したいと思ったことが本稿の目的である。西部地域が民宿が多いので、古くて、その土地に詳しい主が経営する民宿に宿をとった。私が訪ねたのは１月中旬で閑散期ではあったが、その民宿にはヘルパーが男女１名ずついた。２人とも県外出身者で男性の方は２年ほど従事しているとのことで、将来は西表島居住の夢を抱いていた。もう一方の女性は、関東の出身で３月までを過ごすとのことであった。約６ヶ月間の雇用であったようだ。

①西表島における民宿の社会的役割

西表島の宿所を代表する民宿とは、「一般民家が許可を得て副業的に営む簡単な宿泊施設のことで、安い宿泊料で家庭的なサービスを特徴とする」施設と規定される。民宿は本来が民宿業であったのではなく、冬季のスキー場や夏季の高原、海水浴場などで宿をとれなかった利用者側が、一般民家に頼み込んで一夜の宿を借りる形から始まったことから民宿という呼称の由来になった。それが、その家庭的なよさを売り物に、専業化して現在の民宿営業が始まった。

今回の調査に基づく限り、西表島では旅館の設置がその他の宿泊施設に先行した。1961年大富に竹盛旅館が戦後最初の本格的な旅館業を始めている。また、西表島の宿泊施設を代表する簡易宿所「民宿」は上原の「うえはら館」が66年の開業という。復帰後、これらの宿泊施設がその後創設される多くの宿泊施設の先導を担った。

西表では現在でも11月15日から翌年の２月15日の４ヶ月間イノシシ猟が解禁がなされる。以前ほどは獲れなくなったようであるが、それでもイノシシ料理が食膳を飾る。今朝とってきたばかりの海の幸が夕食に供される大自然の恩恵がある。西表島の民宿は、その本来的な長所である自家用の新鮮な海の幸や山の幸が食膳に供され、家庭的な宿泊施設として人気をあつめ、島の魅力を伝える媒体としての社会的役割を担っている。また、旅行

リピーターの発掘、あるいは西表島移住への契機を与える機関のひとつとしての機能を有している。

旅行は非日常的行為といわれる。日常からの離脱が旅の大きな魅力である。が、旅の持つもうひとつの魅力は、人あるいは自然の、一期一会の新たな出会いの可能性にあるかもしれない。その日常にもっとも近い宿所の形態が、民宿やユースホステルといえる。民宿には気取らない島の人々の日常生活そのものがあるからである。旅行者はその日常に触れて、土地の人々との間で一時の歴史的・文化的な追体験を行うことができる。旅行者はその土地に対する大いなる理解者となるのである。宿泊施設のなかで、とりわけ民宿はエコツーリズムの理念を以前から実践してきたといえそうである。そして、旅行者として民宿体験者のうち、島の虜になった人々が再びもどってきて、自ら民宿を創設したりしている。彼らこそは島の風土を愛した意味で、エコツーリズムの達人といえるかもしれない。

現在、西表島の宿泊案内は、インターネットを通じて多くの情報を入手できる。西表島丸ごとの情報が世界中から即座に入手できるのである。旅行者の入域者数は断然増えることが予想される。エコツーリズムのジレンマについて、西表島エコツーリズム協会会長の竹盛洋一氏は「西表島の観光においてマスツーリズムとエコツーリズムのゾーン（エリア）分けが必要である」と語る。大勢に適した観光形態、小回りのきく個人に適した観光の仕方があっていいという。その共存にたいする体制づくりが必要である。

②エコツーリズムと総合的学習

西表島エコツーリズム協会ができて５年の歳月を経たという。エコツーリストの受け皿づくりの目処がつきつつあり、そのユニークな地域づくりの実践が自治省に認められて大臣表彰を受けた。国内で初めてのエコツーリズム協会設立に多くの注目と期待が集まっている。平成13年度からは西表の自然・文化に精通したエコツーリズムのためのガイドの養成を図りたいという計画もある。

竹富町は「日本最南端の大自然と文化の町」を標榜している。自然を保全することが観光の大きな資源であることは自明であるが、それを大切に保全・保護し、手をかけて守り育てていくという理念を持った人々を養成することも「マンパワー」という大きな資源である。そのためには、島の大半を占める国有林を管轄する旧林野庁や自然保護地域を所管する旧環境庁の国の機関をはじめ竹富町、西表島の人々が問題意識をもって議論し、エコツーリズム、マスツーリズムなど旅行者の需要や自らの日常生活を豊かにするための長期的ビジョンを描くマニュアルづくりが早急に求められる。

今日、大量輸送が可能になりマスツーリズムが隆盛を究めている。集団旅行の典型的事例は修学旅行である。しかし、一方で個を尊重したパーソナルツーリズム（注２）があ

り、近年の修学旅行は４，５名でタクシーを利用し、自由にテーマ設定した修学旅行も増えつつある。

文部科学技術省は平成14年度から「総合的学習」の本格導入を開始する。この学習は教育内容の拘束はなく、学校の実態に即した学習活動の実践を推進することができる。学校現場の教員が自主的・主体的なテーマを設定し横断的・総合的な取り組みが可能になるという最大の利点がある。被教育者である児童生徒は自らの興味や関心に基づく課題を学ぶことができる。また、地域社会にとっても、地域の歴史や文化などの特色を生かし、伝承者や後継者を育成する契機を提供することができる。総合的学習制度に対応した総合的学習版のエコツーリズムの実践例が発表されるのは時間の問題であろう。

③沖縄観光の試金石となる西表観光

沖縄は日本復帰して28年を経た。国の高率の補助事業によって、道路、港湾などの社会資本は充実してきた。これまでに投じられた国費は10数兆円を越える。沖縄県は現在観光産業を県政の重要施策として位置づけ基盤整備を行っている。72年の復帰以後、75年の国際海洋博覧会や国民体育大会などの全国大会の誘致などを通して、沖縄観光は受け皿としての宿泊施設の確保を至上命題として、国内外の大型資本による宿泊施設が整備されてきた経緯がある。『沖縄県福祉保健行政の概要』等の資料に本県に登録される宿泊施設数は表３のとおりである。

表３沖縄県の宿泊施設状況

	ホテル	旅館	簡易宿所	総計
2000年	252軒	810軒	522軒	1,585軒
(平成12)	室数（20,597室）	室数（10,241室）	室数（ 3,110室）	室数（33,948室）
	収容（49,717人）	収容（24,724人）	収容（12,875人）	収容（87,321人）
1977年	129軒	832軒	348軒	1,309軒
(昭和52)	室数（――――）	室数（――――）	室数（――――）	室数（――――）
	収容（20,951人）	収容（21,200人）	収容（10,975人）	収容（53,126人）
1972年	50軒	820軒	27軒	897軒
(昭和47)				

復帰時の1972年と1977年と2000年の３つの年で比較できる統計上の項目は施設設置数しかない。その表３からみると、ホテル件数が復帰当初の設置数50施設から海洋博覧会開催（1975年）後の77年には129軒の2.6倍に増えている。さらに、2000年と比較する

と、28年間で５倍に増加している。旅館の設置に関しては、72年当時の820軒から2000年には810軒と減少している。民宿に代表される簡易宿所は復帰当時の27軒から522軒と19倍の驚異的な伸びを示している。収容人員に注目すると、1972年当時の収容人員を77年の収容人員から類推し、１軒あたり平均収容人員を40人とした場合、897軒で35,000人程度の収容人員であっただろうと推測される。現在の沖縄県における宿泊施設は、復帰当時のそれの約2.5倍に拡充され、宿泊施設というハード面は一定の確保がされてきているといえそうである。

21世紀はIT時代で、個人はありとあらゆる分野の大量の情報を容易に入手できる時代になる。バーチャルリアリティをどこでも体験することができるのである。そのような時代の中で観光は、人間個人が自らの感性に基づき自然の流れや変化を感じとることができるアナログ的手法でもってのみ体験することができるものであり、決してデジタル化の仮想の世界では経験できないものである。そして、旅行形態は大型化ではなく、むしろ小型化であり、個性化するのではないだろうかと考えられる。マニュアル化されたホスピタリティではなく、宿に息づく生活感からにじみ出るホスピタリティが求められよう。

本稿では戦後の西表島における戦後の宿泊施設の概要をまとめてみた。時代の少子化傾向の中にあって、西表島の人口は今後どのように推移していくのであろうか。21世紀の西表島観光やその受け皿となる宿泊施設はどのような発展をとげていくのであろうか、興味が尽きない。心温まる宿所を拠点にして旅人と自然、そして島の人々との間で育まれる、究極のツーリズム—エコツーリズム。恵まれた自然という資源の保全を図り、土地の人々をはじめ旅人の意識の啓発を図ろうとする西表島のエコツーリズムの試みは、自然・歴史・文化を付加価値とする沖縄観光の成否を占う試金石になる。

謝辞

調査にご協力いただいた西表島の宿泊施設の関係各位及び西表島エコツーリズム協会（会長竹盛洋一）に厚く御礼を申し上げる。また、竹富町企画課、八重山保健所、沖縄県薬務衛生課・福祉保健政策課の資料提供に感謝申し上げる。

注１　『ヤマ・カワ・ウミ・ヒト西表島エコツーリズム・ガイドブック』（1997年・西表島エコ・ツーリズム協会編）111pの関連機関一覧から筆者が集落ごとにまとめたもの。

注２　「マス」（団体）に対比する意味での個人旅行という意味で「パーソナル」ツーリズムという説明用語を用いる。

参考文献

『全国民宿ガイド』日本交通公社出版事業局編

『最新民宿ガイド』山と渓谷社編

『ヤマ・カワ・ウミ・ヒト西表島エコツーリズム・ガイドブック』1997年　西表島エコ・ツーリズム協会編

『日本交通史概論』大島延治郎　1946年　吉川弘文館

「旅館」佐々木日嘉里『日本大百科事典』2001　小学館

『町制施行50周年記念平成10年度版竹富町制要覧』1999年 竹富町役場

『福祉保健行政の概要』（平成11年版）2000年　沖縄県福祉保健部

西表島祖納・星立の節祭（シィチィ）

當　間　一　郎

1、はじめに

沖縄の各地には、年間を通して多くの祭りが実施されている。今日では、以前といくらか変化してきているが、中心部分を大切に行いながら、継続されている。

沖縄本島北部では、国頭村字安田に継承されているシヌグ、国頭村字比地に伝わるウンジャミ、大宜味村字塩屋のウンジャミ等が、多くの人たちに知られており、沖縄本島南部の知念村字久高のイザイホー（平成２年は中止になる。それ以前の昭和53年。昭和41年、昭和29年は実施）も、よく知られている。宮古本島では、ウヤガン、ミャークヅツ、ンナフカ、ユークイ、ヤーマスプナカ等、多良間島のスツウプナカ、八月踊り等、八重山諸島のプーリィ、タントゥイ、キツガン、マユンガナシ、ドナンマツリ、シィチィ等は、地域を代表する祭りである。それに沖縄全域に見られる綱引、ハーリー等、沖縄の歴史と文化をはぐくみ、そして地域性豊かな祭りが多く存在している。

これらの祭りのもつ意義は大きい。沖縄は農耕社会が長く続き、永々と繁栄してきたので、農作儀礼を強力につつみこんだ祭りが多い。山の幸・海の幸に感謝し、村落共同体構成員の健康を喜びあうことを内容とするのが多い。過去一年間豊穣であり、健康で過ごせたことへの感謝を、全面に打ち出しての喜びの行事が、祈りをともない、敬虔かつにぎにぎしく行われるのである。

沖縄の祭りを見ながら思うことは、心をこめて感謝、祈りの部分を、ノロやツカサ、そして両者を支える女性祭祀者たちが、いちずに取り組んでいる姿のすばらしいことである。本土各県の祭りを、テレビ等で見ていると、すべて男の神職、つまり神社の神主等がつとめているのに対して、沖縄では、古代から琉球王国時代、そして今日まで女性司祭者が懸命に神事をとり行なって、五穀豊穣と村落共同体構成員の健康をかちとってきたのである。この祭りの形態が、沖縄の文化の特質にもなっているように思われてならない。

今回、とりあげる西表島祖納と星立（干立）の節祭（シィチィ）は、1972・３年（昭和47・８）に調査して以来、20数年を経ている。祖納、星立のムラのたたずまいにも、世（ユー）を迎える格好な地にあり、海のかなたから豊かな幸が届きやすい向きにもなっている。以前は、今日のような護岸はなく、白砂が風により動くごとに、美しい砂浜をみせてくれる。世（ユー）の寄りやすいムラへの境界であった。

しかし、近年、海岸線が護岸で整備されて、海から直接に押し寄せる大きな波を、せきとめる形になってしまった。とくに、祖納の前泊海岸は、立派に整備されて、マルマボンサンからのムラへのはいりが、強力な形でせきとめられる形になってしまった。そのような状況の中で、祖納や星立の節（シィチィ）は、毎年、行なわれてきている。

私は、第１回調査の報告を「西表島祖納の節祭り」として、1974年（昭和49）６月１日発行の『カラー沖縄のまつり』（月刊沖縄社）の21ページから26ページに掲載した。その時のカラー写真担当は、フリーカメラマンの友利安徳氏であった。その後も何回か両ムラの節（シィチィ）を見に行った。

毎年、３日間の盛大な祭りで、第１日目はトゥシィヌユー（平成10年10月17日付の「お知らせ」には、「19日、シチ（年の夜）、公民館作業」）とあり、保存会報告書には「家庭行事」と明記されていた)、第２日目は世乞い（平成10年10月17日付の「お知らせ」には、「20日、世乞い」とある。世願いともいう。比嘉盛章氏が1940年に『南島』１に書いた論文（後述）には、「節踊」とある)、第３日目は、以前にはトドメ（止留式）と聞いたが、西表民俗芸能保存会報告には、「カラクセ」、(平成10年10月17日付の「お知らせ」には「21日、大平井戸儀式」とある。)、1940年の比嘉盛章氏の論文には「トドメ(止留式)」とあるといわれて、３日間の感謝行事である。

西表島の祖納、星立のシィチィについての調査報告や考察等は多い。前述した沖縄の代表的な祭りについての学会報告は多いが、なかでも、西表島の両字のシィチィの取材は、研究者やカメラマン等の記録が多い。研究者による調査報告、考察の代表的なものを列記する。それらの報告書等からも大いに学び、参考にしたことを記しておく。

古い報告、考察としては、前記した比嘉盛章氏の「西表の節祭とアンガマ踊」(『南島』１、1940年８月、台北南島発行所）があり、喜舎場永珣氏の「節祭に関する記録と古謡(祖納)」(『八重山古謡』(下）所収、1970年９月、沖縄タイムス社）がある。そして近年では、石垣博孝氏の「西表租納のシィチィ（節祭)」(『八重山文化』第２号、1974年12月、東京八重山文化協会)、石垣博孝氏の「西表干立村のシィチィ（節祭)」(『琉大史学』第８号、1976年２月、琉球大学史学会)、石垣博孝氏の「西表租納村のシィチィ（節祭)」(『石垣市立八重山博物館々報』創刊号、1977年３月)、石垣博孝氏の「西表島の節祭」(『奄美沖縄民間文芸研究』第21号、1998年７月、奄美沖縄民間文芸研究会）がある。

なお、地元では、1978年（昭和53）に『国選択無形民俗文化財記録作成西表島租納星立の節祭（シチ）の芸能』(1979年２月、西表民俗芸能保存会＜会長那根武＞が発行されている。その他にも、多くの研究者が現地へはいり、報告していることを記しておく。

2、節祭（シィチィ）のはじまりと背景

「シィチィ（節祭り）」については、1713年に首里王府で編纂された『琉球国由来記』巻21の「年中祭〔祀之〕事」に、次のように記されている。

七八月中に己亥日節ノ事

由来。年帰シトテ、家中掃除、家蔵辻迄改メ。諸道具至迄洗拵、皆々年縄ヲ引キ、三日遊ビ申也。

また、1731年に首里王府で編纂された『琉球国旧記』附巻之11の「風俗」には、次のように記されている。

八月

毎年。七八月間。八重山人民。謹己亥日。盡掃二房屋一。並洗二去諸器塵埃一。而三日為二抜河戯而遊焉。

さらに、18世紀初期にまとめられた『八重山諸記帳』の「島中旧式」に、次のように記されている。

七八月中己亥日節仕候是は年迎として家内外掃除仕家蔵之辻を改芝を結若水を取浴申候也

この３点の文献の記録から見ると、古くから西表島では、シィチィ（節祭り）が行われていたことはよくわかる。しかし、それがいつごろかということになると、上限がはっきりしない。前述の比嘉盛章氏の「西表の節祭とアンガマ踊」では、次のようにのべている。

伝説によれば節祭は西表の開祖たる、慶来慶田城用（ゲライケタグスク）緒と云ふ人が創始したものである。思ふに創始と云ふのは恐らく誤伝であらうが、少なくとも慶来慶田城といふ人が幾多の改善を加へたことは事実であらう。慶田城家の系譜によれば初代用緒と、２代用庶の生死年月日は不明となつてゐるが、３代目用尊以下の生死年月日は明白に記載されてゐる（慶来慶田城由来記参照）。今３代目用尊の生年を起算点として慶田城家の世代数で割つて見れば、慶田城家の１世代は平均32年余になる。これによつて溯ると、初代用緒は、今から470～480年頃に活躍した人物と推定される。曽つて喜舎場永珣氏が慶来慶田城は長禄元年の生れであると考証されたが、それは大体に於いて当つてゐると思ふ。果して然らば西表現存の節祭は470～480年来の伝統であると云へるが、その歌謡などから考へて見ても、それは500年以前のものであつても、決してそれ以後のものではないと思はれるのである。

比嘉氏の確かな起算論といえよう。1940年時点での考察であるので、それから60年余を加えて考えることが必要であろう。

那根武氏（西表民俗芸能保存会会長）は、『西表島租納・星立の節祭の芸能』（1979、２月）で、「５芸能の由来」として、次のようにのべている。

今から約500年前から西表島の租納部落に節祭が伝承保存され、この節祭は農作物の豊作に感謝を捧げ、来年の五穀豊穣と住民の健康と繁栄を、天地の神々に祈願をする古風な神儀式である。この節祭は西表の一ヶ年の諸々の行事を総合して租納部落の前泊海岸、当日はこの浜を“船元の御座”と呼んで洗い清められた砂浜の上で節祭を挙行したのが、節祭の起源となっている。

この両者の起源は、年代的にはほぼ同時期をおさえている。比嘉盛章氏は、前述のあとに土地の古老たちの２・３の異なった考え方のあることを紹介している。その１つは、「節祭は今夏の豊作と民衆の幸福生活とを神に感謝し、更に翌年の豊作を祈願する神事である。故に節祭は又「結願（きちぐわん）」の祝をも云ふ。所謂結願とは従来の祈願を解き、更に祈願を掛けることがある」。その２つは、「節祭は下半年の『世乞（ゆく）ひ』である。新春二月に上半年の作物の豊穣を祈つた如く、八月に又下半年の世乞ひをなすのである。往古われわれは１年間に２度の正月を行ひ、２度年を取つたのである。節祭はその第２正月を迎へる意味である。故に俗間では節祭を「正月小（ショウグヮツグヮ）」と云ひ、癸亥の日を「年の夜」と呼び、翌日は早朝に「産水（すでみづ）」を掬むのである」。

その３つは、「然かるに一方に於ては又云ふ。八九月の交に節祭を行ふのは海上遠くの蓬来郷から、ミロク世界報を招来する意味の一般的世乞ひである。それは必ずしも下半期の幸福生活とか或は来年の豊作を祈るとか、そんな特定的のものではない。節祭に特に「舟漕ぎ」が重視せらるるのも即ちこの故である。あの舟漕ぎは遠く海上から「うしま世」を乗せて来る意味である。」と紹介している。そして比嘉盛章氏は、「ここに於いて節祭の本質と由来が那辺にあるかは甚だ明瞭を欠き、今日の私達には何んとも判断のつき兼ねることである。」と結んでいる。

比嘉氏は、続けて沖縄本島の八九月に行なわれている祭りと比較して考察を深めている。それを紹介すると、次の通りである。

私が西表の節祭の踊を見たその場の感じを云ふならば、それは沖縄本島地方に於いても等しく八九月の交に行はれる、かの臼太鼓（ウシデーコ）やシノグ踊によく似てゐる。就中、島尻那の南端なる摩文仁村字米須の八月遊びに一層よく似ている。その歌謡の曲節と云ひ、舞踊の形式と云ひ、両者はいみじくも相近似してゐる。但し摩文仁村の八月遊びには旗頭、獅子、ミルク等の出し物がなく、若い女性達が老人の指揮に従ひ、二重円陣の団体舞踊を演じてゐるのみであつた。そして又その演舞も月のない晩に暗いアシビナー（遊び庭の意）の隅で、コッソリと物静かに行はれてゐたやうに記憶する。然るに西表のそれは白昼に然かも全民衆の総出場の下に、極めて大規模に又可なり派手に行はれてゐる。即ちそのだし物も男子の舟漕ぎ、女子のアンガマの外に、ミロク踊、獅子舞、棒踊等があり、その行事の盛大さには格段の相違があるやうである。尤も旧暦八九月の交に、女性

を中心として臼太鼓やシノグ等の行はれることは、沖縄本島の田舎でも規模の相違こそあれ一般的である。思ふに西表の節祭を始め八重山地方の節祭は、沖縄本島の八月遊びと同系統に属する行事ではあるまいか。

長い引用になったが、この1940年代における比嘉氏の結論は、沖縄本島の臼太鼓やシノグ踊等と西表あるいは八重山各地の節祭とは、同系統であるということである。この比嘉氏の考察に対する賛成、あるいは反対論については、寡聞にして知らない。今日、糸満市字米須のウスデークは、ムラの女性たちによって継承され、普及がはかられているが、西表の節祭との「歌謡の曲節」「舞踊の形式」等については、比較考察は進んではいないといえる。比嘉氏のこの論文からすると、その当時も今日でも、シィチィ（節祭）の3日間の内容と、とくに2日目「世乞い」の演目は、ごくわずかの出入りはあっても、大半は同じようだ。沖縄本島の八九月の「アシビ」との比較考察は、今後の課題といえよう。

西表のシィチィ（節祭）の創始者について、慶来慶田城（用緒）とする説があるが、このことについても、比嘉氏は、異論をとなえている。すなわち「創始者を慶来慶田城となす説には多大の疑問が生ずることになる。蓋し沖縄本島の八月遊びは慶来慶田城の時代よりも遥かに上代から行はれ、決して室町末期以後のものではないと思はれるからである。ただ西表の節祭の形式が慶来慶田城の手により、創始に近い程の改竄が加へられたかも知れぬと云ふことは、彼の人物手腕力量から見て云ひ得る事であらう。」とのべている。そして、この件については、「後日更に研究してみることにして」と、節祭（シィチィ）の諸行事紹介を行なっている。

喜舎場永珣氏は、「節祭に関する記録と古謡（租納）」の巻頭で、

「節祭」は古代沖縄のお正月に当たる。すなわち陰暦の八月であったと思われる。節祭のことを沖縄本島ではシバサシ（柴差祭）と称えていたが、そのわけは「シバ」と称する「ヤブニッチィ」の枝を、ところによっては桑の枝に薄木（ススキ）の穂を添えて軒に差し、宅地内の樹木や諸道具等にも「チカラ芝」等を添えて差したから「シバサシ祭」と称していた。八重山ではシチィ（節）と称して1年中の年中行事のはじめ、すなわち正月と称していた。八重山最大の年中行事であった。早朝に水を汲んで甕に入れて庭に置き、これを浴みて「若返える」と称していた。あるいは「年をとる」とも称していた。年とは正月でもあり、あるいは五穀のよく実ること。後世になって年を世とも称して「世願い」ともいっていた。（後略）。

とのべている。喜舎場永珣氏は、1914年（大正3）の教職勤中に「爬竜船の競技」の「審判官」を命ぜられたと記している。そして総括として、節祭は「絢爛たる絵巻を見るかのようであった。」と述懐しておられる。

筆者は、この西表の節祭りは、かなり古くからの歴史のある伝統祭祀だと考えている。

西表の英雄であった慶来慶田城用緒が創始したと伝わる話は、大いに検討する必要があると思う。創始を地域の英雄等に結びつける話は多い。比嘉氏や喜舎場氏の見てきた内容をとりこんでの、今後の考察が大切であると考えている。

3、節祭（シィチィ）の内容

今回の調査は、1998年と1999年の２回続けて行なった。その時の３日間の行事内容を紹介しておく。

第１日目　1998年（平成10）は、10月19日（旧暦８月29日）。1999年（平成11）は10月14日（旧暦９月６日）。この日をトゥシィヌユー（年の夜）という。また、ウブシクミ（大仕込み。最後のリハーサルであろう）ともいう。

各家では、屋敷の内外を掃除して、海岸に打ちあげられた小石（ザラングー。砂利。）をそれぞれに運んできて、屋敷にまき、玄関や一番座敷から順にまいて家内をきよめる。そしてシチカッチャー（テリハカニクサ）を山からとってきて、家の中柱に結ぶ。また、農器具や家財道具、刳舟、門柱等にも結びつけ、魔除け祓いとする。なお、家の内外に小石（砂利）をまく時は、次の祓いのことばをのべる。

ムニガザリ（祓い<清め>のことば）

トドイ、ドードウー

スナヌ、シクラ、ナナフキ、ヤーフキ、ウブパマ、ナガパマ、フキアギタル、ザラングーシ、キユヌキチニチ、ヤ、キユムバ

ヤナムヌヤ、フカナシ、ヤ、カザシ、ウチチキ、トーリ、トードウ

ああ尊し。海の底から七吹き、八吹き、大きい浜長い浜に吹きあげられた、小石（砂利）で今日の吉日、家を清めるから、悪いものは外に出し、家の神様は落ちついて下さい。ああ夢し。

（『西表島租納・星立の節祭の芸能』）

此ヌ屋敷内　悪ナムヌ　シティムヌ

入ラシ給ンナ　家人衆ヌ健康　有ラシ　給り（石垣博孝「西表島の節祭」）

なお、各家の主のことばとして、「ムリカザリ（家長のことば）があることが、『西表島租納・星立の節祭の芸能』に紹介されている。

第２日目　1998年（平成10）は、10月20日（旧暦９月１日）。1999年（平成11）は、10月15日（旧暦９月７日）。この日を世乞い、世願いという。

1998年10月20日にくばられた「節祭（しちぃ）世乞い行事日程」には、次のように記録されている。

午前５時　　１番ドラにて『世乞い吉日』の告示。

午前７時　　２番ドラ。朝作業にて旗頭（３旗）を揃場（スリズ）に立てる。
10時50分　役持ち及び芸人全員スリズに集合。
11時40分　※スリズの儀式開始（船頭、ミルク、フダチィミの各組の順。）
11時50分　１番旗出発。船頭は船元へつくと旗振りを伴い前泊穀御嶽へ参拝祈願。
・船頭（マスサイ）、旗振り（供物）持参の事。
12時５分　２番旗とミルク行列、３番旗とアンガー行列の順序で出発。
12時30分　舟浮かべの儀式。１番旗、２番旗、３番旗とも浜下り整列。
※開会宣言。平成10年節祭世乞い行事の開会。
12時30分　１番旗を先導にピヨーシ（ヤフヌ手）にて舟子入場。
12時40分　２番旗にてミルク行列入場。船元の御座に着座。
12時50分　３番旗にてアンガー行列入場。船元の御座に着座。
午後１時　※閉会式次第
全員ニライカナイへの礼拝、公民館長あいさつ。神司祭詞。
午後１時50分　ミルク神の座とぅりむち。
午後２時　男子狂言並びに棒芸。
午後２時50分　座とぅりむち（舞踊奉納）。
３時15分　婦人アンガー（巻踊り）。
３時45分　※舟くいの儀式開始。船頭世乞い宣誓の辞。舟の抽選。
４時35分　男子アンガー（舟子巻踊り）。
５時　獅子舞い（清めの儀）。船頭祝賀の舞。
５時10分　※閉会の辞。男子芸人全員整列。全員ガーリー。
５時15分　ミルク節にて座立ち。１番旗、２番旗、３番旗の順にてスリズへ。神司、チヂビ方は座とぅずみ。館長謝礼の辞。
※全員スリズ（公民館）の集合後、世乞い行事収納の儀をなす。

1999年10月15日にくばられた祖納の節祭（しちぃ）ユークイ行事日程」には、次の通りで進行した。

午前５時　１番ドラにて「ユークイ吉日」告示。
午前６時　２番ドラ、朝作業にて旗頭３旗をスリズに立てる。
午前７時40分　節祭役持ち及び芸人、スリズへ全員集合。
午前８時40分　スリズの儀式開始（船頭・ミリク・フダチミの順に）
午前８時50分　１番旗（ガヒャカシラ）スリズ出発・船頭・旗振り・船頭は船元へ着くと旗振りを伴い前泊穀御嶽へ参拝、ユークイの祈願。
※船頭はマスサイ、旗振りは供え物を持参。

午前９時５分　２番旗（シバカキ）とミリク行列・３番旗（ナギナタ）とアンガァー行列の順にスリズ出発。（約15分で船元へ至る）
※各御嶽神司・チヂビは船元の御座に着座・船頭旗振りは祈願を済まし舟浮かべの儀式に備える。
午前９時25分　舟浮かべの儀式（船頭、舟子全員）
―開会宣言―
午前９時30分　１番旗を先頭にヤクヌティーにて舟子、船頭入場。
午前９時40分　２番旗を先頭にミリク行列入場、船元の御座に着座する。
午前９時50分　３番旗を先頭にアンガァー行列入場、船元の御座に着座する。
午前10時20分　ユークイ儀式（舟くい）開始。
※ひきつづき「舟くい」へとはいる。・総責任者の挨拶。
・舟子代表ユークイ宣言、舟子の抽選。
午前11時10分　開会式。ニライカナイへの礼拝。公民館長挨拶。神司祭祀。
12時（正午）　ミリク神の座とぅりむち。
12時30分　婦人アンガァー巻踊り。
１時（午後）　男子狂言。ひきつづき棒芸。
１時50分　座とぅりむち（船元の御座）
※奉納舞踊。
２時20分　男子舟子アンガァー巻踊り。
２時40分　獅子舞（船元清めの儀式）。
２時50分　閉会挨拶（※男子芸人全員整列）。※ミリク神ミリク節にて立座ふ。
※１番旗を先頭にスリズへ帰る。芸人全員揃スリズの座とぅずみ儀式をなす。
※神司・チヂビは船元の御座にて「座とぅずみ」の儀式をなす。

２ヵ年の世乞い行事日程を見たが、干満による開始時刻の変更のみで、この日の順序は、ほぼ同じと見てよい。このプログラムで呼び方が以前と異なるのは、「節（シチイ）のアンガァー」が、「婦人アンガァー」となっていることであろう。

スリズ（揃所＝公民館）での出発前の厳粛な儀式、スリズから前泊海岸の船元までの1番旗（旗頭の文字は「尊農」）のあとから舟子達が続く。船元に入場すると、舟子達による「ヤフヌティー」（櫂の手）の演技がある。1998年は８名ずつの２列に太鼓２人、２列の中に１人がはいっての勇壮な櫂さばきを見せる。（1999年は10名の２列であった）祖納が男子全員で演ずるのに対して、星立では女子も出て演技する。
「ヤフヌティ」が終ると、２番旗（旗頭の文字は「租納」を先頭に、ミリクの行列が入

場する。その次に３番旗（なぎなた）を先頭にアンガァーの行列が船元にはいり、船元は一段とにぎやかになる。２ヵ年とも好天気で、世（ユー）を乞うのにふさわしい行列であった。全員が船元に至り、船元の座につく。すぐに舟浮かべの儀式がはじまる。２人の船頭の相図で舟下ろし（進水式）がある。

ヤフヌティが終ると、舟の抽選があり、各舟に船頭と舟子が乗りこむ。祈願舟クイがあって、マルマボンサンを１周して、いよいよ勝負になる。舟漕ぎが終ると、桟敷席で伴の婦人たちがうたうミリク節にあわせて、ミリクが大団扇をゆっくりと動かしながら踊る。浜では、アンガァーの踊りである。この踊りが祭りの中心になる踊りという。フダツミ２人を先頭に入場する。列の後尾には２人の音取りがいて、アンガァー踊りをリードする。

２人のフダツミのコスチュームは、クバ笠をかぶり、その上から黒朝衣（チョキヌ）をかぶり、右手に扇子をとじたまま持つ。アンガァーのコスチュームは、黒のスデナに白のカカンを着、頭に長巾（ながさーじ）をしめ、背中に長く垂らす。紅白のザイを持つ。アンガァー踊りは２重の円をつくって行われる。内円はフダツミ２人と音取りの２人がはいり、外円はアンガァー達がならび、美しい踊りを見せる。歌は「今日ぬ誇らしや」「五尺手拭」「ぐぐば」「舟」の４曲構成になっている。

次に、男子狂言が演じられる、まず「パチカイ」（早使い）が１人で演じられ、「ルッポー」「リッポー」「キッポー」と続く。いずれも大きな声で幸先きよいことばをのべる。その唱えや動きはたくましいかぎりであった。そのあとに舟子達が旗頭をとりまき巻踊りがある。そして最後に船元を清める獅子舞がある。すべて演目が終ると、１番旗を先頭にスリズへ戻る。そして関係者全員でスリズの座とぅずみの儀式を取りおこない、すべてを終了する。一方、神司やチヂビは船元の座で「座とぅずみ」の儀式を行なう。

星立の３日間も祖納と同様の内容で展開する。すなわち、第１日目がツチノトヰ（己亥）でトゥシィヌユー（年の夜）である。祖納と同様。各家では屋敷の内外を掃除して、海岸から砂利（小石）を運び、屋敷にまき、玄関から１番座、２番座と家内にまいて清める。シチカッチャー（テリハカニクサ）を家の内や農器具等に結び、魔除け（祓い）とする。お嶽ではチカサ（司）が清掃後にシチカッチャーを柱や鳥居に結び、祈願をする。その夜は、スリズで明日使用する旗頭や獅子舞、ミリク面、オホホの面などを点検する。

第２日目は、カノエネ（庚子）で世乞いの日である。まず、ムトゥ御嶽や星立御嶽等で祈願がある。その後に、前の浜でヤフヌティー（櫂の手）が、舟子達やアンガァー達により行われる。前列がアンガァー、後列が舟子という２列での櫂の演技である。ヤフヌティが終ると、舟を浮かべる。舟漕ぎは、２回行われる。（1998年10月20日の記録である）スリズから結願祭をやるとのアナウンスがあり、星立御嶽で「かぎやで風」、「ふたで村」、「干立トゥバラーマ」の３曲が奉納された。

次に節祭（シィチィ）の芸能として、「シィチィのアンガァー」や「早使い」、「川平早使い」、「牛追狂言」があり、「棒」が演じられた。少年２人の３尺棒、一般男子の６尺棒、ナギナタとカマ等、元気な棒であった。ミリクを先頭に袖持ち、ミリクヌファ、アンガァー、トゥウチが続く。ミリク行列の最中にオホホが出て、大きな振舞いをし、人目をひく。ミリクの動きと対照的な動きを見せるオホホである。このオホホについて、星立に２、３のエピソードがあるが割愛する。最後は「獅子舞」で星立御嶽は清められた。２頭獅子でイビの前でチヂビから盃をいただき清め所作で、世乞い行事をしめた。

なお、星立の旗頭は、１番旗が「東」と書かれ、２番旗が「星立」、他にとらの絵に「干立」と書かれた小旗が、世乞いの日に立てられていた。

４、おわりに

生活様式はかわっても、毎年の祭祀として盛大に行われているのは、たのもしいかぎりである。年により３日間の日時には異動はあるが、常に五穀豊穣と村落共同体の全構成員の健康であることへの感謝と願いの心を、行動で示しているのは、すばらしいことである。祖納や星立の他にも、節祭（シィチィ）を行なっているところがあるので、これからも継続してもらいたい。

祖納（西表民俗芸能保存会）と星立（星立民俗芸能保存会）は、「西表の節祭」として、1991年（平成３）２月21日付で、国指定重要無形民俗文化財として指定されて以来、ますます自信と誇りを持って、毎年の節祭を盛大に実施している。両字はウヤムラ（親村）とファームラ（子村）の関係にあり、２日目の世乞い行事と３日目の大平井・上の井での水恩感謝祭（『西表租納・星立の節祭（シチ）の芸能』）が、ほぼ同時刻からはじまるので、見学者、調査者から両方を１度に見ることのできない不便さはある。世乞いは、その日の潮の干満により、時間を設定せざるを得ない面もあるので、今年は祖納、来年は星立という計画でしか、調査は完了できないという状況である。

沖縄各地には、その地域の歴史と文化を反映する、特徴的な祭祀がある。その大半を時間をかけて見学してきたが、「西表の節祭」（指定名称）は、みごとな構成と演出でくりひろげられる祭祀といえよう。比嘉盛章氏の論文に、この祭祀は「一番盛大且つ賑やかな行事」といわしめ、喜舎場永珣氏は「絢爛たる絵巻を見るかのようであった」と目をみはらしめた、カラフルかつ勢いのある祭祀なのである。

なお、両字の各踊り等には多くの歌がうたわれているが、前述した比嘉盛章氏、喜舎場永珣氏、石垣博孝氏、西表民俗芸能保存会（那根武会長）の論文や報告書等に、くわしく紹介されているので、割愛した。1998年（平成10）10月19日から３日間と1999年（平成11）10月14日からの３日間、じっくり見せてもらい、強力なエネルギーとパワーを得たことを特記しておく。

西表島におけるカキィ（魚垣）について

A note of "KaKii" or stone fence for catcing a fish in iriomote Island

仲　底　善　章

（沖縄県立博物館）

YOSHIAKI NAKASOKO

(Okinawa Prefectural Museum)

1　はじめに

魚垣との初めての遭遇は、高校１年の入学早々、中学校の頃の同期生と連れだって、石垣島一周のサイクリングの途中であった。石垣島の東海岸、宮良湾沿いに自転車を走らせている時のことである。突然、私の視野に潮の引いた珊瑚礁の干潟に、点々と円弧を描く石垣の線であったり、干潟を横切るがごとく点在したり、沖に向かって点在する石垣の線であった。

その後、教師として西表島の船浮での勤務、石垣島の明石での勤務を経る中で、その石垣の囲いが魚を獲るためのものであることを知るようになった。

今回の西表総合調査の機会に、西表島に点在しているカキィ（魚垣）の現在の様子とその分布について調査をした。以下、西表島のカキィ＝魚垣について、目測や歩測や島人から得た情報をもとに報告する。

2　カキィ＝魚垣について

調査からカキィについて、（１）遠浅の干潟に多く見られる。（２）河口に広がる遠浅の干潟によく見られる。（３）カキィは珊瑚礁の広がる干潟付近にはあまり見られない。（４）所々に魚が逃げ込むためのクムリ（潮溜まり）を作ってある。（５）稲作が行われていた地域の海岸によく見られる。のことがわかった。

稲作は古遥に歌われているように、人頭税の物納物として栽培されていた。耕地の乏しい鳩間島や黒島、竹富島・新城島の人々は、西表島に水田を開墾しての通い耕作をしていた。

このような稲作づくりは昭和50年代まで行われていたとのこと。カキィは稲作づくりの期間、作業の合間に潮時を見て、食料の魚を捕獲する施設として、水田の近くの遠浅の干潟に作られたようである。

鳩間節の中に「マイヌ　トゥーユ　ミワタシバ　イクフニ　クルフニ　ウムシルヤ（前の渡を見わたすと　行く舟　来る舟の様が見事だ）」「マイヌ　シミシキ　ウムシルヤ　アワヌ　シミタティ　サティミグトゥ（稲を積み重ねて素晴らしいことよ　粟は積みて立てさても見事だ）」や、「インダ　フクパマ　シザバナリ　フノーラ　カラヌ　マシスジーヨ（伊武田　福浜　下離りは、船浦よりも立派な土地である。）」の一節がある。

また、新城島の民謡、離レマヌ前ヌ渡節にも、「ハナレマヌ　マイヌトウ　ハテルマヌマイヌトウ（新城島の前の荒海よ　波照間島の北の荒海よ）、マイヌドウヌ　ネヌラバシカマドヌ　ネヌラバ（前の荒海がなかったら　仕事（大原へ）をする為の渡りがなかったら）イトハユティ　チィカイス　ヌヌハユティ　オハラス（糸を張った海上でお供いたします　布を張った海上で走らします）」一節がある。これらの古謡はいずれも、通い耕作の様子を歌ったものである。

鳩間島は珊瑚礁の島である為、水田を作ることは困難であった。その為、人頭税納入の手段として、対岸の西表島の伊武田、福浜、下離での稲作を強制させた。その為、鳩間島の人たちは、稲作づくりの期間には西表島に渡り、田圃近くにタズクヤ（田宿屋）を建て、2～3泊して耕作をしていた。

新城島も珊瑚礁の島のため、田圃をつくることが出来なかった。そのため、対岸の西表島の大原地区にある田圃を耕作するために、海を渡って行き、納税の為の米作や役人の俸禄田を開いて耕作していた。そのことをシカマドウ（シカマ渡）とよんでいた。

同じく竹富島伝わるマザカイ節には「イキヤヌ　スミヤンドゥ　ナグヌ　ユヤンドゥナカマ　クイダ（如何なるわけで　どんな理由で　仲間村に移ったのか）　ウハラダ　ミナグチヌ　ユヤンドゥ（土地の肥えている大原田やミナグチ田があるから）ウフマシィヌ　ナガマシィヌ　ユヤンド（大きい舛田　長い舛田があるから）」と歌われ、竹富島から西表島の仲間村に移り住んだことを詠んだ一節がある。この歌に歌われている仲間村のウイカ田（役人の俸禄田）は明治30年頃まで、竹富島の仲筋の金城山多が耕作していたという伝えがある。

西表島のカキィの所有については、鳩間島の島民が所有するカキィは、西表島のニシ崎からユツン川にかけて、竹富島の島民が所有するカキィは、西表島の野原崎から高那に点在する。また、由布島から古見付近は黒島、大原付近は新城島の人たちのカキィが点在する。

何故か西表島の西部地区、特に浦内川から崎山湾にかけての西南の地域では広い干潟が広がっているにもかかわらずカキィをほとんど見ることはできない。この要因についてはまだ不明である。祖納を中心としたこの地域には浦内川や仲良川流域の遠くの水田に泊まりがけでの稲作づくりの形態があった。人々はそうした田に田小屋（シコヤ）を建て、炊事や寝泊まりができるようにしていた。

3　西表島におけるカキィの分布図

西表島におけるカキィの分布図

4　各カキィの位地とその形状

（1）　仲間川河口付近

図番号　①　・カキィの名称：イシャブザのカキィ

・所　有　者：大浜（通称イシャブザ）

・構　　図：直接歩測できなかったので、正確な距離は出せない。大浜博起さんの話によれば、約200m程の長さとのこと。近くには戦後まで新城島：上地島の方が通い耕作の為に寝泊まりをおこなった15～16戸の小屋からなる集落ソディ村があったとのこと。

図番号　②　・カキィの名称：不明

・所　有　者：不明

・構　　図：聞き取りの結果、図②のようであるとのこと。

図番号①

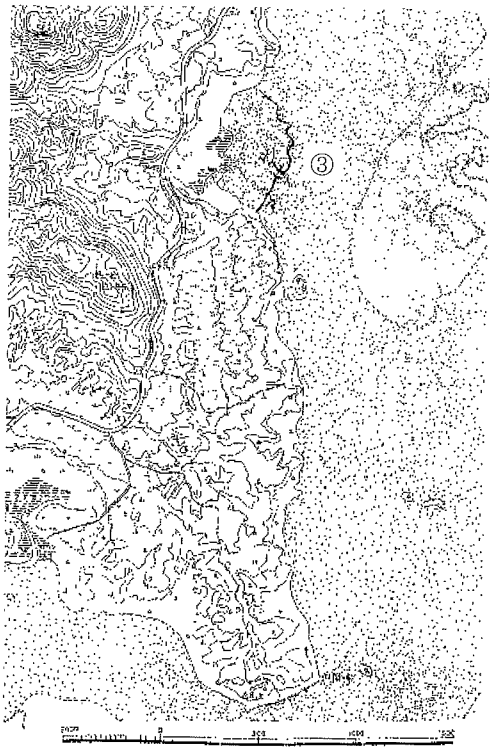
（２） 赤伊田川河口付近

図番号 ③ ・カキィの名称：トイラカキィ

・所　有　者：山里さん？

・構　　図：図点アはほぼ直線に伸び、歩測で250歩（175m）の長さ。図点イの口の広さは歩測40歩（30m）、図点ウは歩測175歩（87m）の石積み。

図番号③



（3） 前良川河口付近

図番号 ④ ・カキィの名称：不明

・所　有　者：トーヤ（與那覇）さん → 垣花さんへ（元営林署職員那覇在住）？

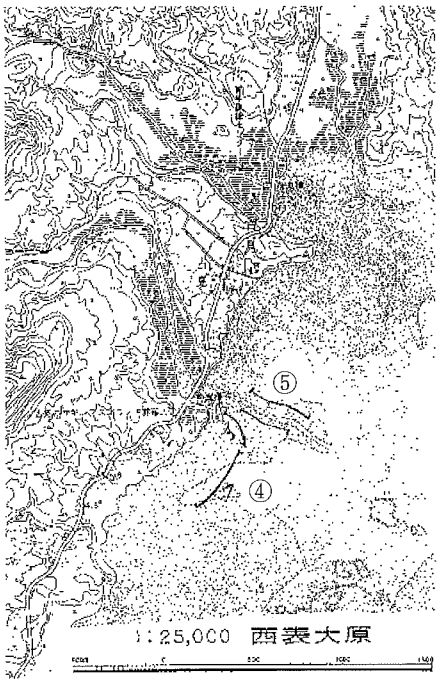
・カキィの構図：前良川河口の小島から、図アのように歩測250歩（175m）に伸びる。図イの口は歩測36歩（25m）開いている。図ウは歩測450歩（300m）でほぼ直線状に伸びている。

図番号 ⑤ ・カキィの名称：不明

・所　有　者：トーヤ（與那覇）さん→垣花さんへ（元営林署職員那覇在住）？

・構　　図：前良川河口の水路に沿って、図のように伸びる。カキィの跡なのか？、川の流れで石が垣になったのかは不明である。

図番号④



図番号⑤

（4） 後良川河口 ～ カサ崎 ～ ヌスク盛

図番号 ⑥ ・カキィの名称：不明

・所　有　者：トーヤ（與那覇）さん→垣花さんへ（元営林署職員那覇在住）？

・構　　図：後良川河口を、図のように伸びる。カキィの跡なのか。道路の石積みか不明である。

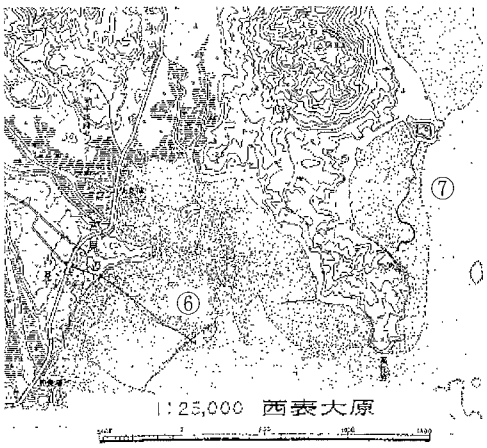
図番号 ⑦ ・カキィの名称：ヌスクカキィ

・所　有　者：竹富島の宮良さん → 田房さんへ

・構　　図：ヌスク盛からカサ（嘉佐）崎に図のように伸びる。現在、西表島で実際に使われている唯一の魚垣である。歩測で1170歩（820m）所有者は古見在住の田房敬助である。田房さんからの聞き取り調査はできなかった。

図番号⑥

図番号⑦



（５） 野原崎南付近

図番号 ⑧ ・カキィの名称：不明

・所　有　者：仲本さん　？

・構　　図：図のように歩測で785歩（550m）で伸びる。垣の口は目測で200mほど開いている。

図番号 ⑨ ・カキィの名称：不明

・所　有　者：不明

・構　　図：非常に小さい垣で、西表島では１番小さい垣ではないだろうか。図のように歩測で250歩（175m）で伸びる。

図番号⑧

図番号⑨

（6） 野原崎西

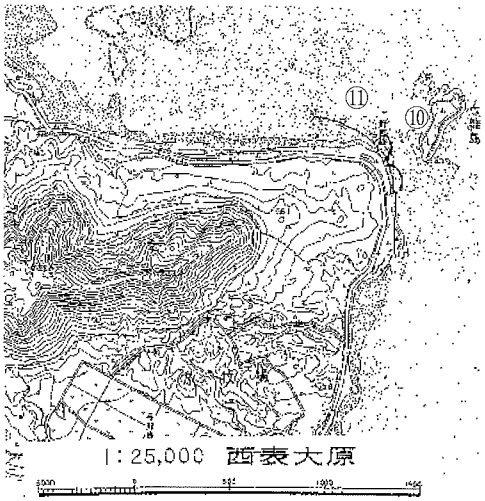
図番号 ⑩、⑪ ・カキィの名称：不明

・所　有　者：不明

・構　　図：図⑩のカキィは歩測で360歩（250m）である。図⑪のカキィとセットになっている。カキィの口は野原崎で広がっている。

図⑪のカキィは歩測で600歩（420m）で、カキィの口の広さは小島まで、ほぼ150mでした。

図番号⑩



図番号⑪

（７） ホネラ川河口付近

図番号 ⑫ ・カキィの名称：不明

・所　有　者：不明

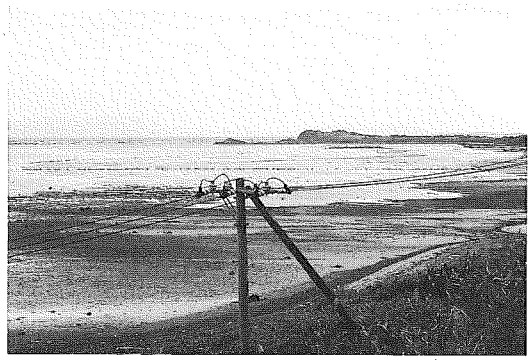
・構　　図：図⑫の図点アのように海岸から、歩測400歩（280m）で沖に伸びる。図点イの口の広さは歩測48歩（28m）である。図点イから図点ウ、エの口を経ての長さは、歩測1202歩（840m）でした。

図点ウ、エの口の広さは歩測80歩（56m）、100歩（70m）でした。

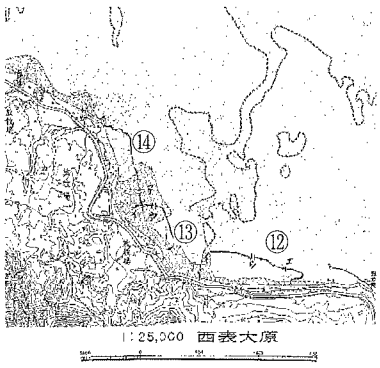
図番号 ⑬、⑭ ・カキィの名称：不明

・所　有　者：不明

・構　　図：図⑭のカキィは全長、歩測1056歩（740m）で図点アの口の広さは歩測40歩（28m）である。石積みは図点イの場所で交差をしている。図⑬のカキィの全長、歩測729歩（510m）で、図点ウの口の広さは、歩測40歩（28m）でした。



図番号⑫



図番号⑬

図番号⑭

（８） ユツン川河口付近

図番号⑮、⑯　・カキィの名称：不明

・所　有　者：不明

・構　　図：図⑯のカキィの全長は図⑮のカキィとの接点で歩測835歩（490m）でした。図⑮のカキィの全長は、図点イを通って図⑯のカキィとの接点で歩測169歩（120m）、その後の図点エまで歩測390歩（273m）でした。図点アの口の広さは歩測15歩（10m）、図点イの口の広さは歩測７歩（５m）、図点ウの口の広さは歩測40歩（28m）、図点エの口の広さは歩測100歩（70m）でした。

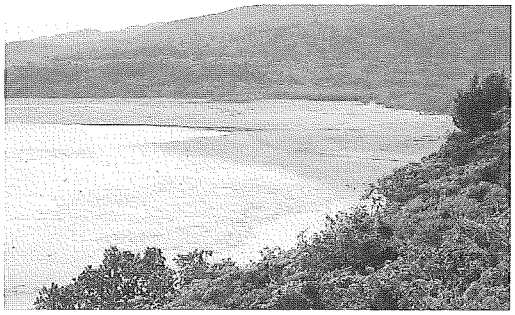
図番号⑰、⑱　・カキィの名称：不明

・所　有　者：不明

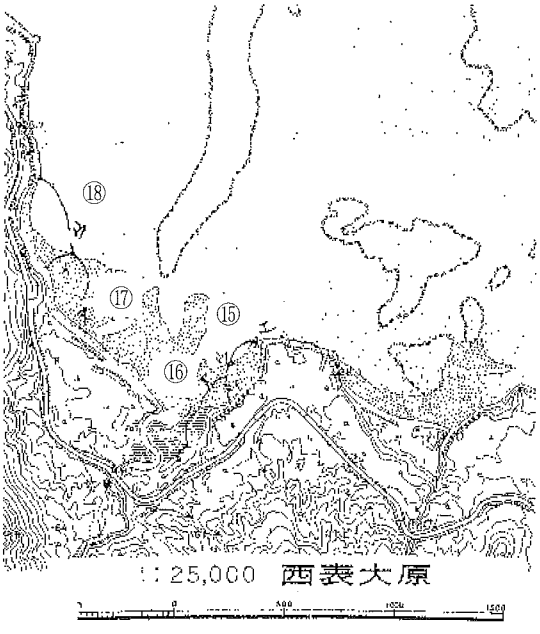
・構　　図：図⑰のカキィの全長は図⑱のカキィとの接点イから、歩測で278歩（1340m）で、図点アの口の広さは歩測100歩（70m）した。

図⑱のカキィの全長は、図点ウを通って図⑰のカキィとの接点で歩測900歩（630m）でした。図点ウの口の広さは歩測30歩（21m）でした。

図番号⑮．⑯



図番号⑰．⑱



（９） 大見謝川河口付近

図番号⑲　・カキィの名称：サキインダーのカキィ？

・所　有　者：不明

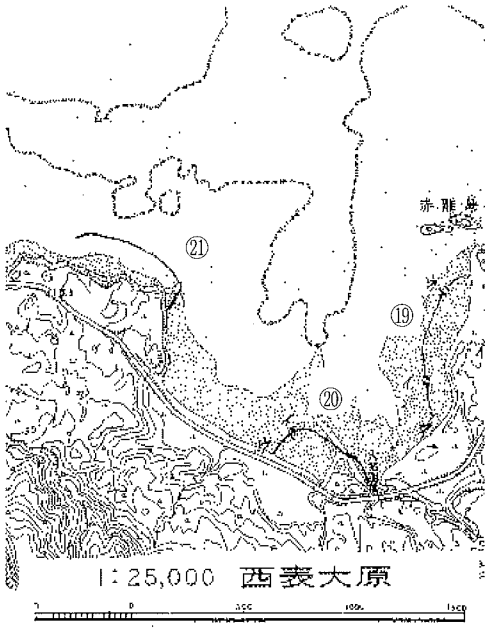
・構　　図：図⑲のカキィの全長は、図点アまで歩測で805歩（563m）で、図点アの口の広さは歩測５歩（４m）でした。図点イの口の広さは歩測60歩（42m）でした。図点ウの口の広さは歩測30歩（21m）でした。

図番号⑳　・カキィの名称：ゲーダのカキィ？

・所　有　者：不明

・構　　図：図⑳のカキィの全長は、大見謝川の水路より図点イまで、歩測で1000歩（700m）で、図点イから図点ウの岸までは歩測220歩（155m）でした。

図番号⑲



図番号⑳

（10） クーラ川河口付近　～　インダ（伊武田）崎

図番号㉑　・カキィの名称：トマダのカキィ

・所　有　者：不明

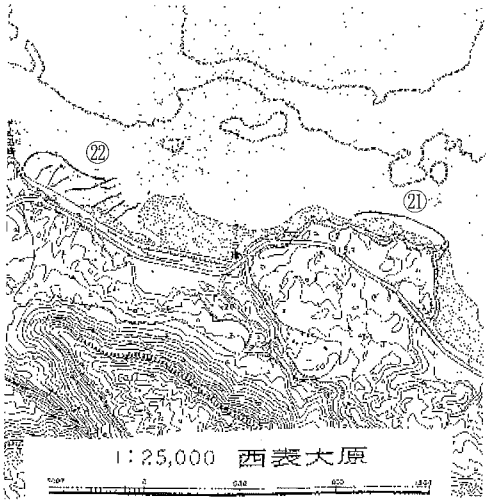
・構　　図：歩測のデータはなし、目測で図㉑のとおりである。

図番号㉒　・カキィの名称：不明（鳩間島大城さんが詳しいとのこと）

・所　有　者：不明　　〃

・構　　図：歩測できず、目測で図㉒のとおりである。

図番号㉑



図番号㉒

（11） インダ（伊武田）崎　～　船浦湾付近

図番号㉓　・カキィの名称：トマダのカキィ

・所　有　者：不明

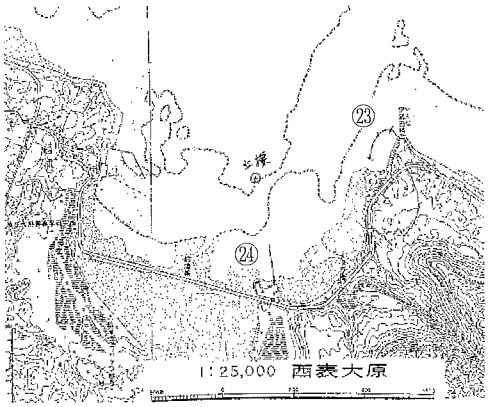
・構　　図：インダザキ（伊武田崎）から鳩離島向け、目測で20m沖に伸び、その後、45°で左に50m伸び、岸にそって150m伸びる。歩測できず。

図番号㉔　・カキィの名称：ナカシのカキィ

・所　有　者：鳩間島の吉川家、松竹家、寄合家の共有

・構　　図：海岸から鳩離島向け、立標線上に伸びる。途中で石垣が切れているので距離は不明である。

図番号㉓



図番号㉔

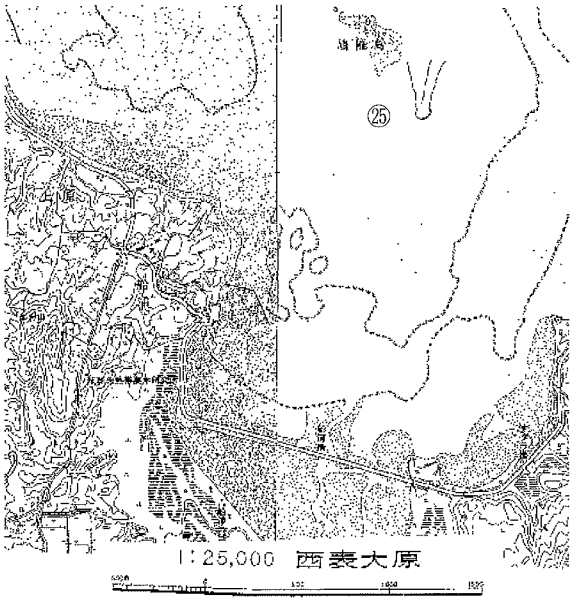
(12) 鳩離島付近

図番号㉕　・カキィの名称：ハトバナリのナカセのカキィ

・所　有　者：鳩間島の慶田城家、上原家の共同所有とのこと。

・構　　図：歩測しての調査をすることができなっかたので、位置や大きさは不明である。聞き取り調査による場所と大きさを図示する。

図番号㉕

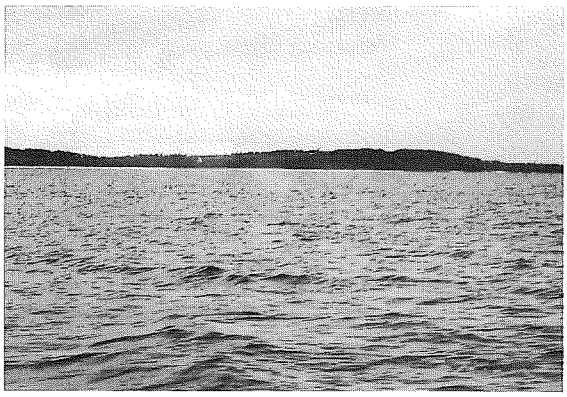


（13） ニシ崎付近

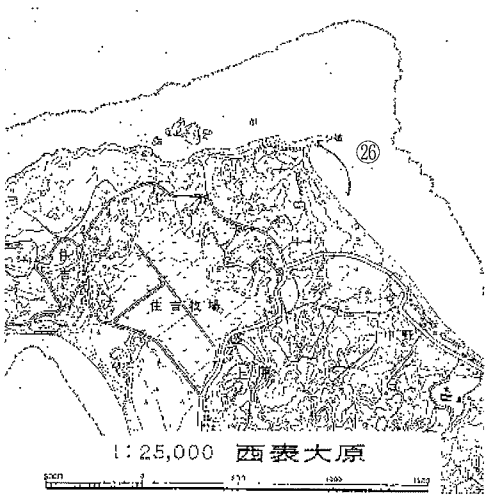
図番号㉖　・カキィの名称：ニシミジダーヌ（西水田の）カキィ

・所　有　者：鳩間島西原家

・構　　図：ニシ崎から海岸に沿って、ほぼ直線状に仲野集落向けに伸びる。歩測できなかったので距離ははっきりしないが500ｍぐらい。



図番号㉖



図番号㉖

5　おわりに

カキィの調査については、宮古島研究、第４号佐渡山正吉氏「イノーの民俗」は、宮古におけるイノー内におけるカキィの分布について、宮古島の狩俣、西平安名崎の東海岸と伊良部島と下地島間に広がるカタパルイナの２ヶ所に集中的に存在するとのことをあきらかにしている。

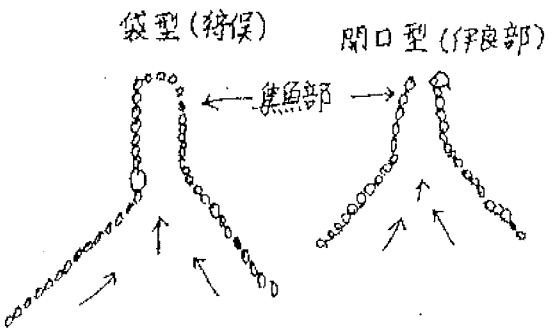
カキィの構造は、海岸から干瀬に向かって狭くなり、先端は袋になっている袋型のものと（狩俣地域）先端がだんだん狭なり、先が開いている開口型（伊良部地域）とがある。それに対して、八重山地域のカキィのほとんどが湾になっている河口近くに多く、海岸から沖の方に仕切るように蛇行して延びている。

多い込まれた魚の採取は、宮古では、潮が引くのを見計らってカキィの先端に魚を追い込み、門口で目の細かいサディ網で小魚をすくい取る方法をとる。それに対して八重山では、カキィの蛇行した所にクムリ（潮溜まり）を作ったり、カキィの付け根にクムリ（潮溜まり）を作って魚を閉じ込め、銛や網を使って魚を採集する方法をとっている。

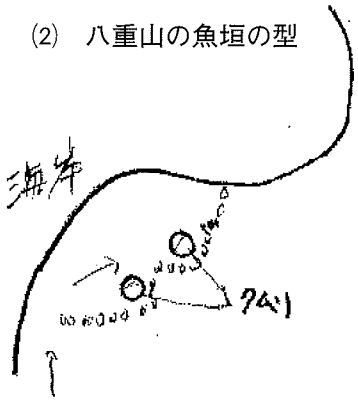
今回、西表総合調査の一環として、カキィの調査の機会を得ましたが期間が短く、調査としては不十分であったため、調査の対象がカキィの所在場所と規模についての調査に限定された。カキィの所有者の特定とその活用法等について今後の課題としたい。

今回の調査にあたっては、鳩間島在住の通事力氏、鳩間島出身で上原在住の冨里保夫氏、古見在住の冨里元西表営林署職員舟浮義雄氏、新城島出身の大浜博起氏の世話になった。紙面を借りて感謝申し上げます。

(1)　宮古の魚垣の構造、２種の型がある



(2)　八重山の魚垣の型



参考文献

竹富町立鳩間小学校百周年記念誌：同編集委員会

日本のいちばん南にあるぜいたく：楠山忠之著　情報センター出版局

八重山民謡誌：喜舎場永洵著　沖縄タイムス社

宮古島研究第４号　イノーの民俗：佐渡山正吉

節祭の衣装考

伊　波　悦　子

はじめに

琉球弧の24度線上に点在する竹富町の島々の中でひときわ大きい島である。秘境と言われるほどの原始林、太古の歴史をまだ引きずっているかの如く、20世紀最大の発見と言われたイリオモテヤマネコの出現は、その歴史の古さを証明しているようである。そんな未知の島に調査に入るのはおこがましい気がした。出発まえに沖縄県教育庁の調査した西表島の染織品を調べると８点あることがわかった。

116	木綿花色地松竹梅波文様紅型踊衣装	古見	大正末
118	木綿花色地松竹梅鶴亀流水文様紅型踊衣装	古見	大正末
119	苧麻白地トラ絵手描き旗	干立	明治（写真19）
120	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	古見	大正末
121	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	干立	昭和初
122	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	干立	大正末
353	芭蕉紺地平織衣装　チョウジャンギヌ	古見	
354	芭蕉紺地平織踊衣装　シズカキ	古見	

調査テーマを見つけるため大原に船を降りた。そして西表北岸一周道路沿いの村々を立ち寄ってみた。その中から祖内・干立には年中行事として「節（シツィ）」が執り行われ、平成３年、「国の重要無形民俗文化財」に指定された事に注目した。

1　竹富町西表の概要

西表島の古い記録は15世紀後半に書かれた『李朝実録』の中の朝鮮人漂流記である。そしてその後の近世にいたるまでの間は伝説の時代である。シマ建ては祖内が古くそこに二人の英雄がいた。一人は大竹祖内堂儀佐（写真１）であり、もう一人は慶来慶田城用緒（写真２）である。この二人の人物については『琉球国由来記』『慶来慶田城由来記』にでてくる。1500年八重山支配をめざす中山王府にたいし、英雄オヤケアカハチを先頭に抵抗を試みるが敗れ、西表首里大屋子、古見首里大屋子が任命され、王府の支配下に組み込まれた。その後首里王府時代の1636年薩摩から「宗門改め」命ぜられひとりのこらず把握され、そしてこの人口調査にもとづいて翌1637年人頭税施行される。また人口増

加が伴って崎山村、上原村ができ、寄百姓という形の強制移住が行われ、百姓の生活はきびしくなっていくのである。それ以降マラリアが猛威をふるい多くの悲劇をうみ村々は廃村へと追いやられた。また石炭を産する県内唯一の島として1885（明治18年）より始まる〈西表炭坑〉の哀史は今なお人々の記憶にとどめられている。

2　祖内・干立の神行事「節祭」

節替わりに行われる祭り。収穫の感謝と来る年の豊作を祈願する南島の正月儀礼である。『琉球国由来記』巻21に次の記録がある。〈七八月中ニ己亥（つちのとい）日節の事由来、年帰シトテ家中掃除、家蔵辻迄改メ緒道具至迄洗拵、皆々年綱ヲ引キ三日間遊ビ申也〉。1700年代初期の記録である。旧暦７，８月中の己亥の日におこない、年帰し、年の折目として家の内外を洗い清め、年綱を張って３日間遊ぶ、とある。近年は８，９月の己亥の日を選んでいる。生活様式の変化によりシツィ儀礼は殆どの村で姿を消した。この様な中で今なお大きく年中行事に位置づけされている所は西表祖内・干立（星立）と石垣島の川平である。祖内・干立両字では３日間行われ、１日目は年の夜で家屋内外の清掃をし、テリハカニクサなどを柱や家財道具に巻き付ける（写真３）。また海から砂利を採るってきて家の内から外へと播いて祓いをする。そして新年を迎える準備をする。２日目は正日といい、未明に若水を汲み、定められた浜へ集い、旗頭を立て（写真４）、船漕ぎ、棒技、獅子舞、ミリク（弥勒神）の行列、アンガー踊り（節アンガマ）などをして過ごす。３日目は村の井戸へ感謝の儀礼と諸芸能のやり納め〈止済（とうどう）ミ〉の日である。

3　節アンガマ

祖内・干立（星立）に伝わる芸能の一つで、豊穣を招来する世乞い踊りの集団である。祖内では、前泊浜で二重の円陣を組んで〈今日ヌフクラシヤ〉〈五尺手巾〉〈ググハ〉〈船〉の４曲を歌い踊る。内円陣は黒朝（注１）の被衣をかぶったフダチィミ２人と太鼓を打ちながら歌う音取り２人で構成され右回りをする。外円陣はスディナ（注２）、カカン（注３）の衣装に青布で鉢巻きをした女性アンガーたちからなり、歌に合わせて所作を行いながら左へ廻る。星立村では御嶽の境内で行いトゥチと呼ぶ男女２人から成る内円陣が、外円陣をリードする。

4　祭りの衣

①ミリク（弥勒神）の衣装（写真５，６，７，８,）　採寸は（調査カード１）

ミリクおこしは、公民館におかれたミリィクの面を49歳の生まれ年の男性が着装することにより、いわゆるミリク神に変身する。その世話役の古老が一人いる。いった

ん変身すると食事も用をたすこともできない。「ミリク節」の演奏の中、左右から袖持ちに添われながら、左手に杖右手でうちわを振り行列は進んで行く。黄色の着物、白衣の長襦袢、黒の丸帯、白手袋、白足袋、うちわ、杖をもつ。

（写真７，８）は平成６年以前に着ていた古いもので祖内公民館に保管されている。和装仕立てで寸法を見るとややゆったり縫われている。単衣で肩当てと居敷き当てがある。袖は二重になっている。それは扇を持って踊る時袖口が目につくので二枚仕立てになっているのだろう。

★現在のミリク衣装について

＊制作年代　平成６年

＊予算　文化庁補助事業にて製作

＊補助金　40万円

＊制作者　紅露工房：石垣昭子

＊原材料　絹

＊原材料生産調達　紅露工房にて養蚕から絲つくりまでしたものを使用（写真９）

＊染料　クチナシ

②タナシ（藍型衣装）船頭の衣装について（写真10、11、12）採寸は（調査カード２）

船頭は一番旗と共に出発し、前泊ウガンで司から力酒を受ける。そして舟子と一緒に「ヤフヌ手」の武芸を披露する。

衣装はタナシ（注４）（藍型の着物）、白襦袢、股引、白黒縞脚絆、兵子帯、タスキ、入道頭巾、ハチマキ、六尺棒を持つ、タナシを尻まくり

タナシは松竹梅鶴亀流水文様藍型である。文様の部分には墨で隈取りがなされている。寸法をみると琉装の普通サイズである。古いのはざっくり織られている。

★タナシ（藍型衣装）について

＊製作年代　昭和63年～ 平成６年

＊予算　毎年生まれ年に当たる皆さん方の寄贈により製作１着20～40万円

＊原材料　苧麻：地元調達

＊布製作　紅露工房：石垣昭子

＊型染め　金城盛弘（金城紅型工房／小禄在住）

③婦人アンガマ：フダチミ衣装について（写真13）

白カカン、麻タナシ、クバ笠に黒朝をかぶり、扇を持つ

古いクルチョーは公民館に保管してある。（写真15、16）採寸は（調査カード３）

琉装で仕立てられ布巾いっぱい使われている。それはすっぽり被るためであろう。襟もいっぱい使い耳もそのままである。そしてトンボの羽のように透けるほどうすく織

られているのである。

★フダチミ衣装について

＊製作年代	平成７年
＊予算	文化庁補助事業にて
＊補助金	40万円（２着）
＊製作者	紅露工房：石垣昭子
＊原材料	苧麻：糸の調達は宮古島
＊染料	アカメガシワ

5　節祭りその他の染織物

★紅型ウチビ（頭巾用ふろしき）（写真17）

＊製作年代	平成元年～平成６年
＊予算	地元寄贈による（４枚製作）
＊布製作	紅露工房：石垣昭子
＊原材料	苧麻
＊紅型染	金城盛弘

★紅型舞台用幕について（写真18）

＊製作年代	昭和27年
＊製作者	城間栄喜（城間紅型工房）と推定される。

（当時西表祖内で病院を開業していた仲里朝貞氏が在職記念として寄贈したものである仲里氏は首里崎山出身であることなどからの推測である。）

★旗頭用旗（写真４）

＊製作年代	平成３年
＊予算	文化庁補助事業　705,550円 ３旗分新調する
＊旗用布製作	紅露工房：石垣昭子
＊旗デザイン	石垣金星
＊原材料	苧麻：旗の縁部分など一部木綿使用
＊旗染めと製作	寿屋

（注１）黒朝　王朝時代の礼装のときの表衣。袍の一つで、三司官以下諸士が着用。黒の朝衣の意で藍袍とも書く。藍で何度も染めたきわめて濃い紺で黒に近い。

（注２）スディナ　八重山で明治後期まで女性の礼装用として用いられた着衣。着丈は

ほぼ身丈の長さ、カカンより少し短めで、脇はあく。正装の軽装としてカカンと着た。

（注３）カカン（下裳）　王府時代の婦女子の下半身用うちぎ。礼装用。上半身用のドゥジンと対をなす。長いスカート形で腰回りに５ミリぐらいの襞を細かくよせ、上部両端に長短２本の腰ひもがついている。右腰で両端を深く違えて前方で結ぶ。

（注４）タナシ　王府時代士族以上の男女の夏の正装用表衣。田無は当て字。上流では美田無という。士の霊装用表衣は夏冬とも式服であるクルチョーであるが略装の時は夏は田無を着用する。明治以降、和装に改める男子がふえるにつれて、男子の田無着用は希にしかみられなくなり、そのため田無は女物と思われるようになった。

おわりに

３カ年の調査期間があり、２回西表島へ渡った。１年目（10年度）は島の様子とテーマ探しで島を訪ねた。手ごたえのあるものであった。南風見田の浜から波照間島が見え、強制移住とマラリアの悲惨な歴史を、忘勿石の碑に学んだ。古見の三離御嶽をくぐり樹高15メートルにもなるサキシマスオウノキの群生を見た。台風のせいか大木が倒れているのが目立ちこの先が思いやられた。石垣金星氏のサバニに乗って内離島を抜け廃村の舟浮や網取に上陸した。ニッパヤシの群生、炭坑あと、旧村内を見てまわる。そして祖内に宿をとり、祖内の節祭が今なお厳かに執り行われていることがわかった。そして２年目に細調査をしようと計画を立てた。

２年目には節祭を実際に見ようと思ったが、その日に講座と重なり不可能となった。その前に調査に行くことにした。祖内に着くと公民館が立派に新築されていた。のぞくと机とテーブルしかなかった。さっそく祭りの衣装を調査したいと公民館長に申しでた。快く引き受けてくれた。しかし公民館建設で道具一切引っ越しをしており、何がどかにいったのか、何がどこに片付けたのかわからないという。一部保管してある衣装を調査した。

それは祭りの中心となるミリクのあでやかな黄色の衣装、船頭の藍型の衣装、フダチミの顔を隠さなければならなかった伝説の黒朝の衣装である。その祭の衣装に触れるのはもったいないような荘厳な気持ちになった。

また、チカ（司）の衣装（写真20）をぜひ調査したいとお願いしたが、祭の時だけしか出さないとのことである。調査するとしたらその前後しかない。それは次回調査することにした。（しかし12年度は調査費がうち切られ不可能になった。）

夜になると公民館では祭りの稽古がはじまった。冷房のきいた部屋ではアンガマ行列の婦人達が太鼓を打ち、紅白のザイをふって踊る。庭では男たちがヤフヌ手（ピヨーン）、すなわち櫂の武芸を特訓している。三線、笛が行列をリードする。子どもたちはまわりで

見ている。時はゆっくり流れ、王府時代から平成の現在まで受け継がれている。

節祭が「国の重要無形民族文化財」に指定されて、衣装、小道具など年々整備されていることが目の当たりにわかった。そして区民一致協力して実施されている事がわかった。

今回の調査にご協力頂いた石垣金星・昭子さん、祖内公民館長をはじめ祖内区民のみなさまに心から感謝いたします。

参考資料

沖縄大百科　沖縄タイムス社
神々の古層９　比嘉康男　ニライ社
南島情趣　本山佳川
八重山文化３，５　東京・八重山文化研究会
新琉球史近世編　琉球新報社
沖縄の染織　沖縄県教育委員会
南方文化の研究　河村只雄

写真　1　大竹祖内堂儀佐屋敷跡

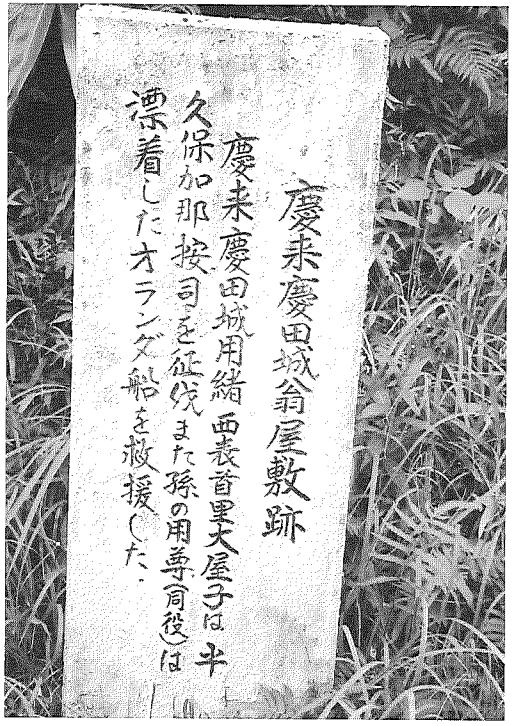


写真　2　慶来慶田城用緒屋敷跡

写真　3　テリハカニクサを柱や門に巻く

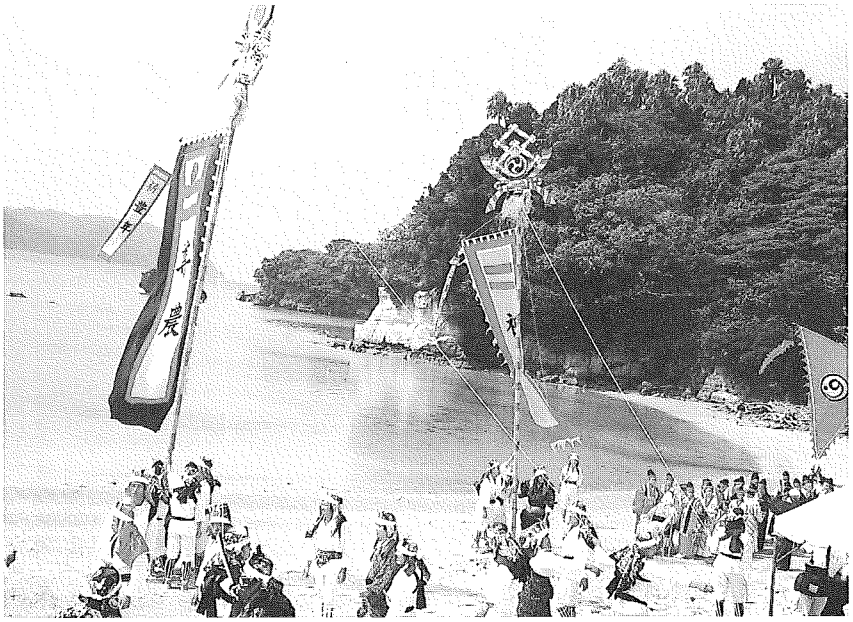


写真　4　祖内の旗頭

写真　5　ミリクの面

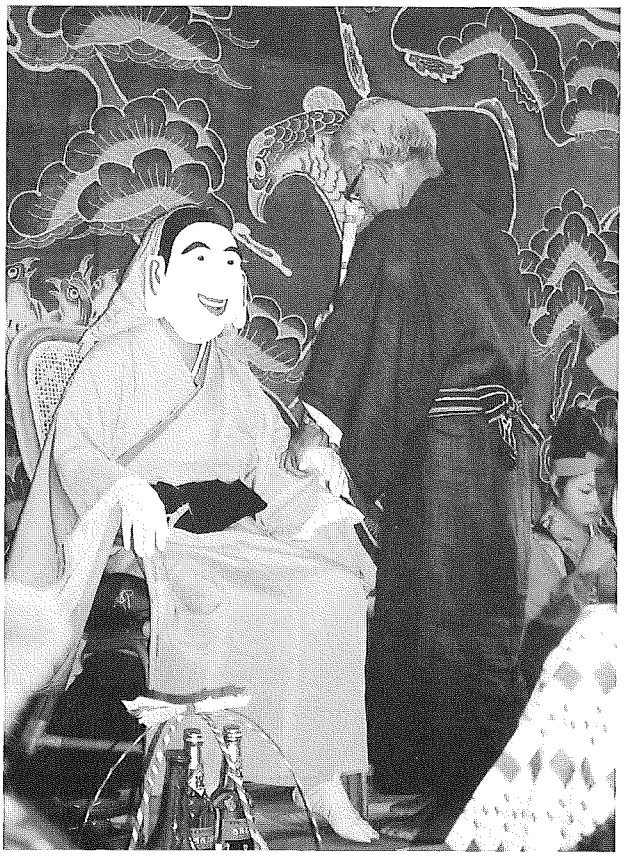


写真　6　ミリク神に変身

写真　8　ミリクの衣装文化庁補助事業

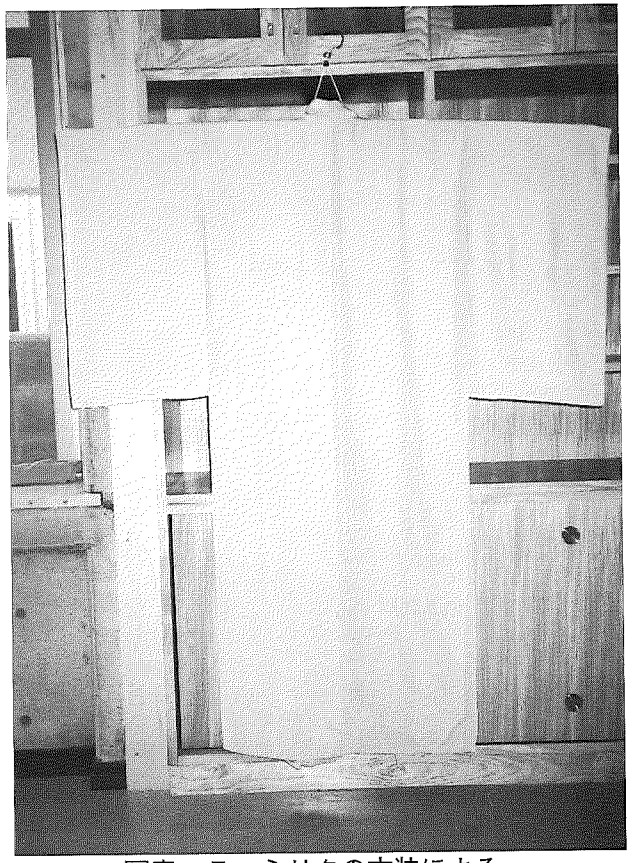


写真　7　ミリクの衣装による

写真　9　紅露工房にて養蚕のようす

写真　10　タナシの着装（船頭の姿）

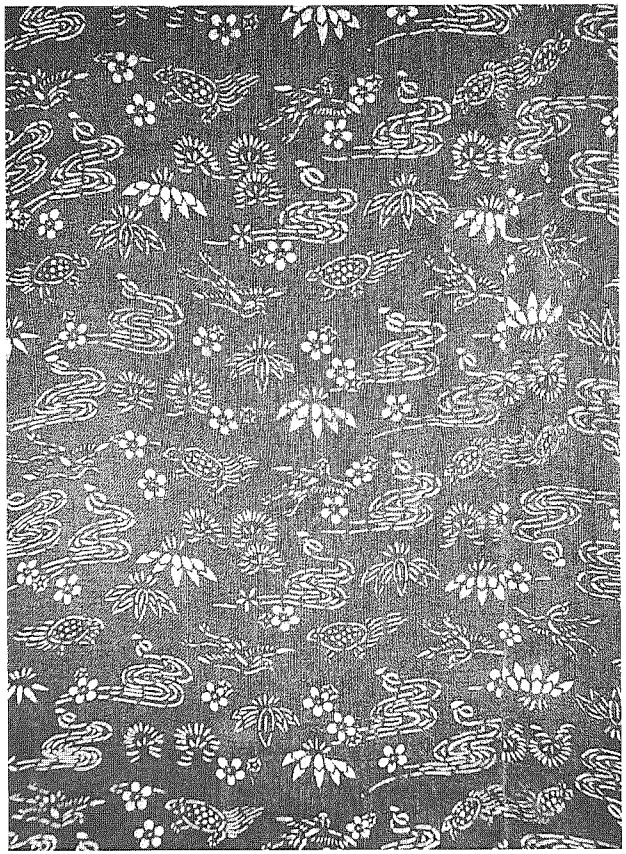


写真　12　タナシの部分

写真　11　タナシ

写真　13　フダチミの衣装

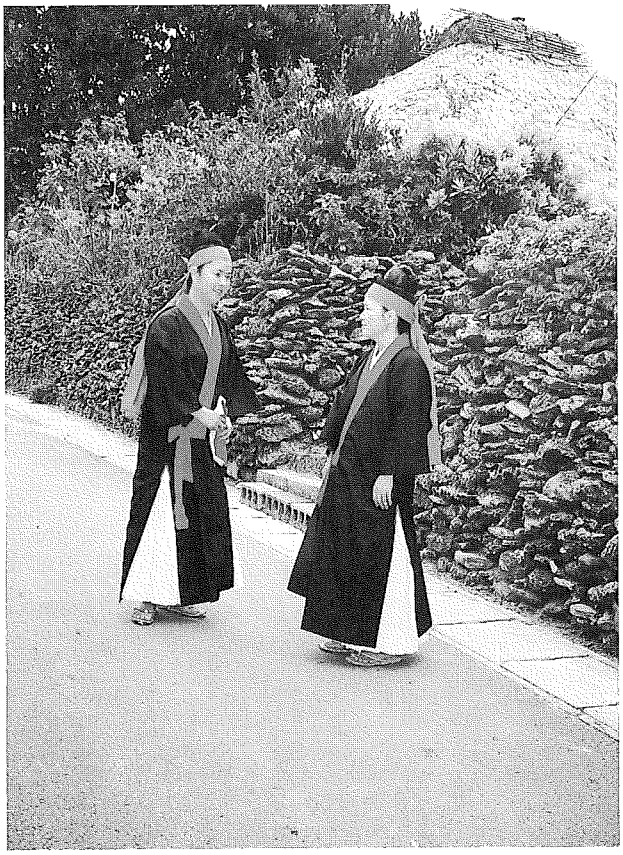


写真　14　アンガマの衣装

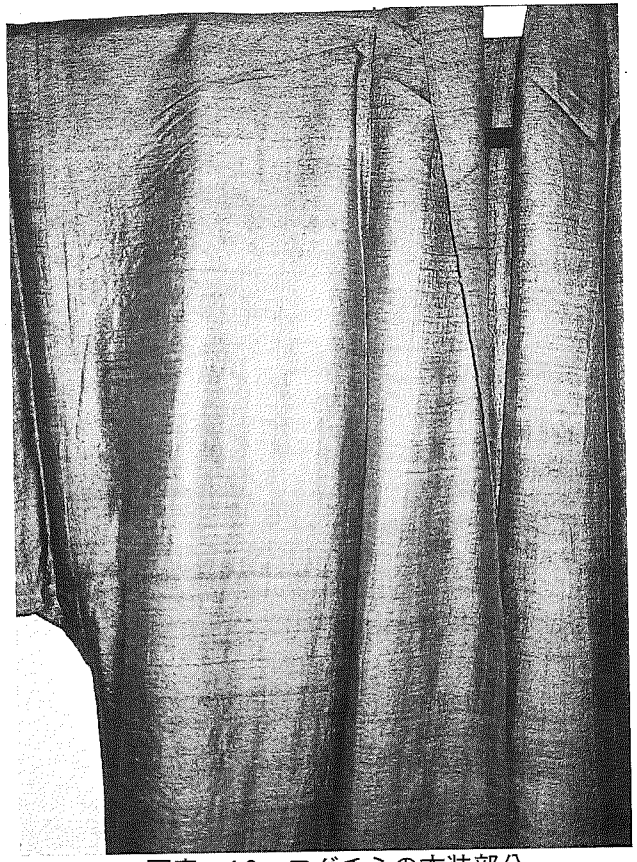


写真　16　フダチミの衣装部分

写真　15　フダチミの衣装

写真　17　紅型ウチビ（星立）

写真　18　紅型舞台用幕

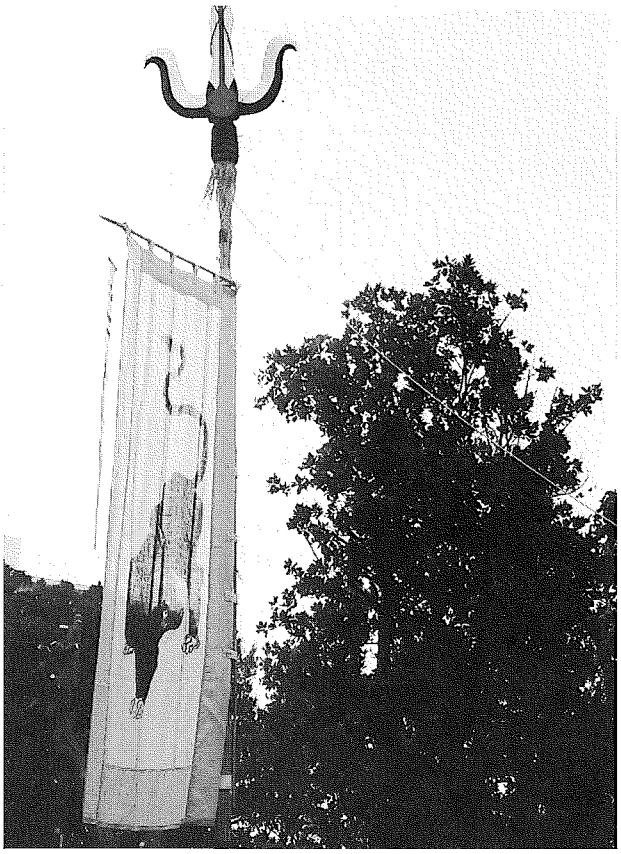


写真　19　苧麻白地トラ絵手描き旗

写真　20　星立のウガン・チカの衣装

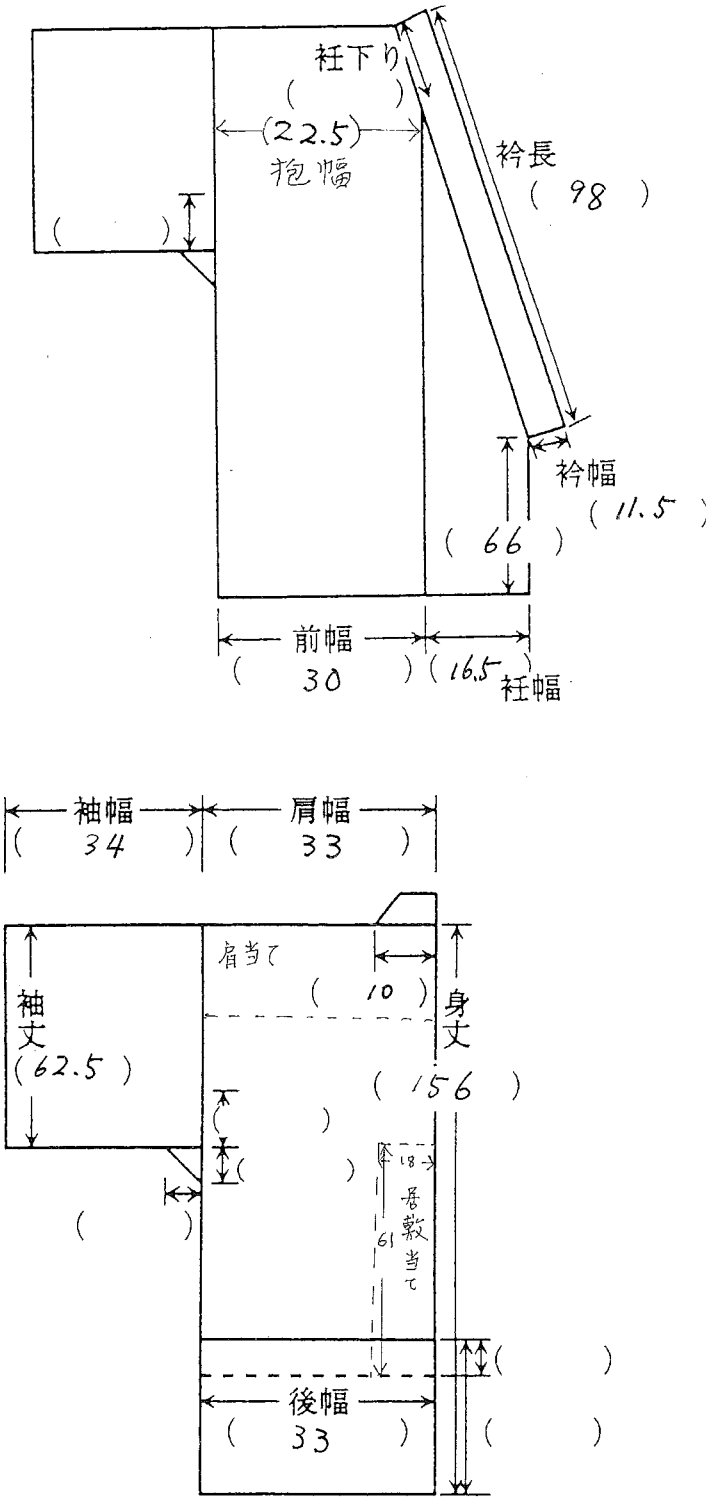


図１　調査カード（ミリクの着物）

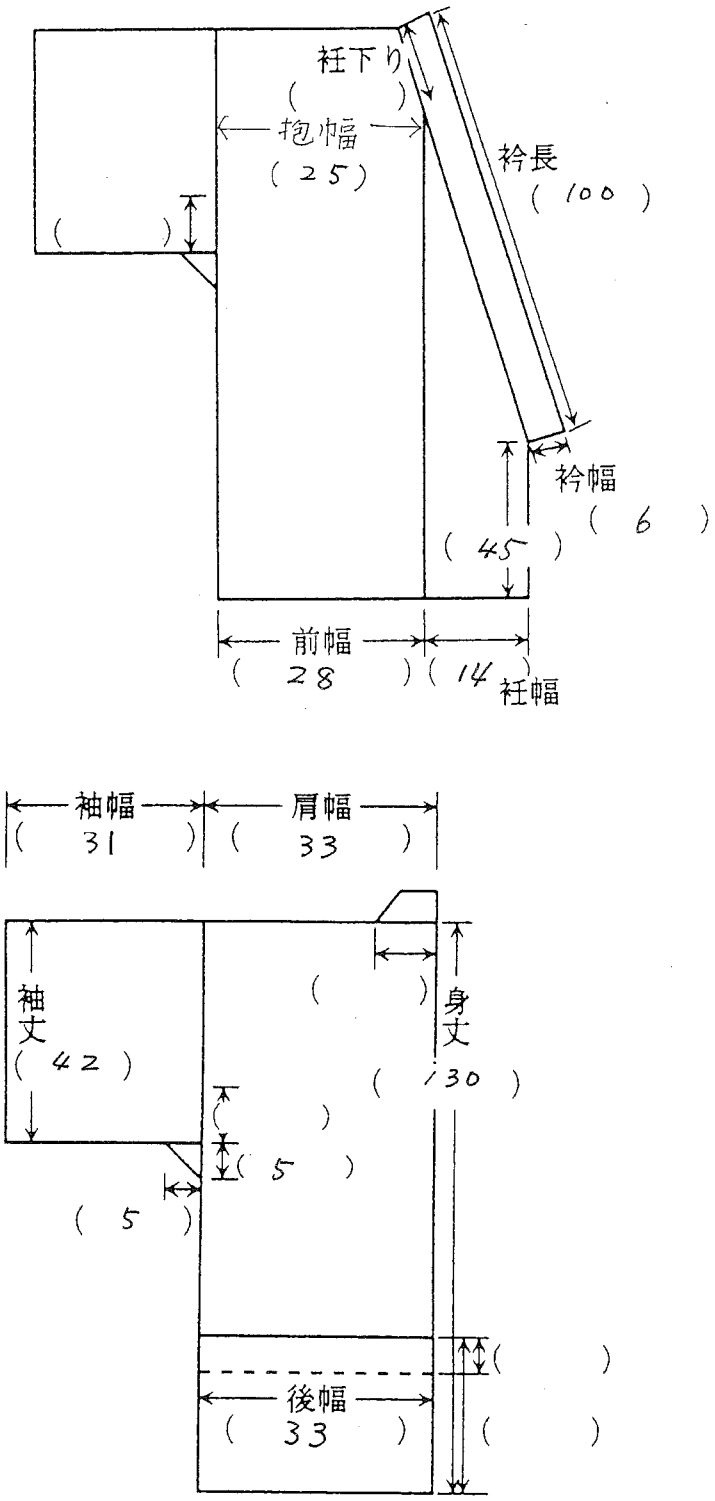


図２　調査カード（タナシ）

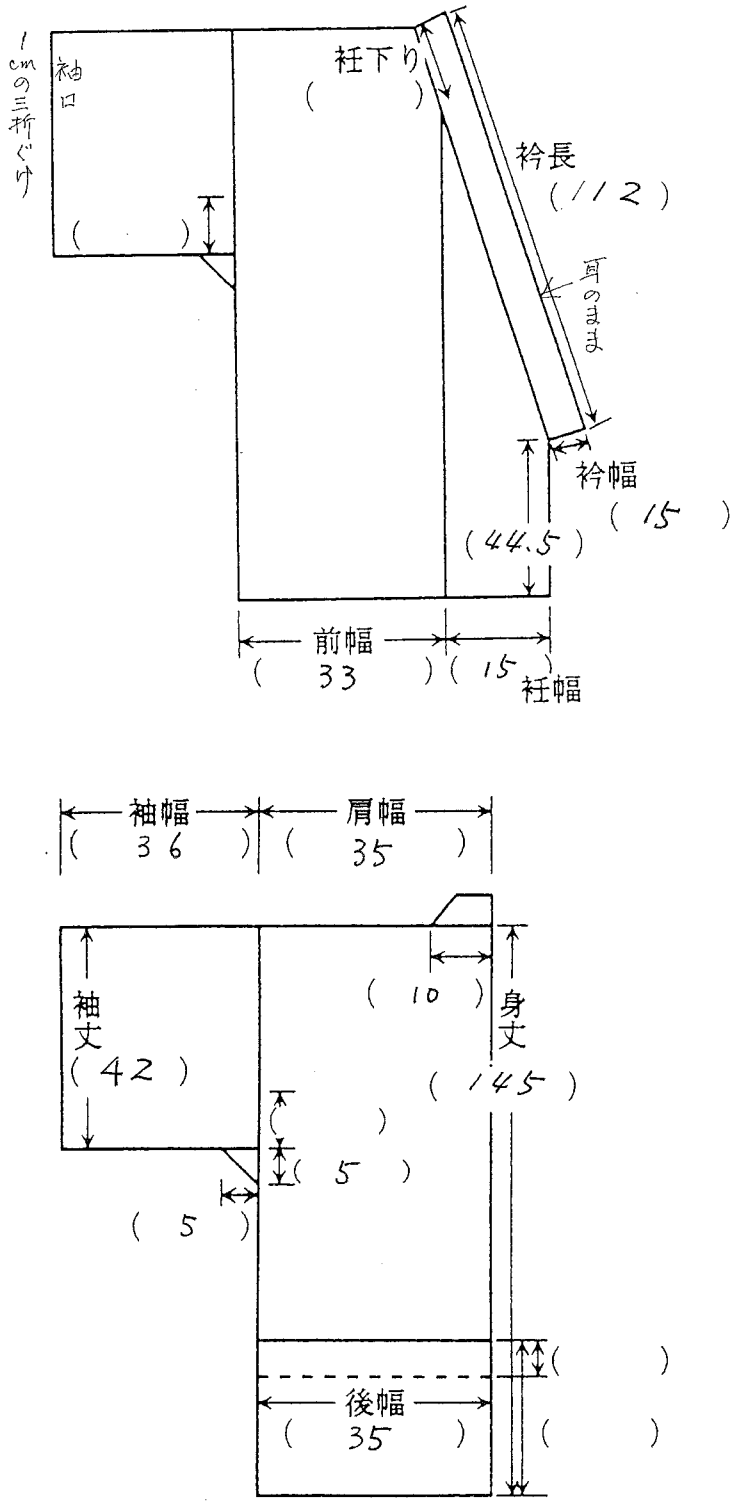


図3　調査カード（クルチヨー）

戦前期（大正期～昭和初期）における西表島の織物（聞き書き）

與那嶺　一　子

はじめに

沖縄には伝統的に続く特徴的な織物が数多くあり、その多様性についてはクローズアップされてよく紹介されている。しかし、特殊な例ではなく、産業ベースに乗らず、普段行われていた糸作りや染め、織りといった作業については見失われがちである。

今回の調査では、戦前期における西表島の織物について、その素材、染材、織りの道具などを中心に聞き取りを行った。西表島の東部（星立、祖納）と西部（古見）では織物状況も異なっており、島が長く二つに別れていた歴史を示してくれた。話者は明治末から大正生まれで、戦前期の様子を聞き書きというかたちで報告する。

西表島の織物の概要

首里王府時代の記録（註１）を見ると、貢布として、苧麻（上布）、芭蕉、木綿の織物があったこと、藍染が行われていたことなどが分かる。

明治に入り貢布の制度が解かれた後については、殆ど記録が無い。今回の聞き取りから戦前期まで苧麻と芭蕉から糸を取り、布とする作業は続けられていたことが分かった。また、東部には炭坑があり、手軽に布を買い求められる状況があった。明治生まれの話者の母親が織物をしていた頃（大正期）あたりから、東部では織物をする人が少なくなっていたと思われる。また、高機の導入は戦後になる。現在は、石垣金星、昭子夫妻による西表の素材を生かした新しい織物がある。一方西部では、同じ頃、上布、芭蕉などが織られ、戦前（大正期か）に高機が竹富島から普及している。古見の集落では今でも芭蕉や苧麻の糸作りが何人かによって行われている。

布が現在のように買う物となる以前は、各地域で自家用あるいは換金用に織られていたはずであり、今回の調査からも自家用に布を織っていた戦前期の様子が理解できた。

今回、快く調査をお引き受け下さった西表島の話者の皆様と石垣夫妻に誌面をかりてお礼申しあげる。

凡例

○聞き取りは質問形式で行われたが、忠実な逐語的再現は行わず、整序の手続きを加えながら、問わず語りの形に構成した。

○文体は各々の語り手の口調に合わせた。方言語彙または民俗語彙として扱った言葉には、原則として表音的な仮名標記を施した。

○語り手の方々の芳名には敬称を略した。集落名は本人が現在居住している所である。

○聞き取り調査は、1998年８月19日、20日、2000年３月７日に行われた。

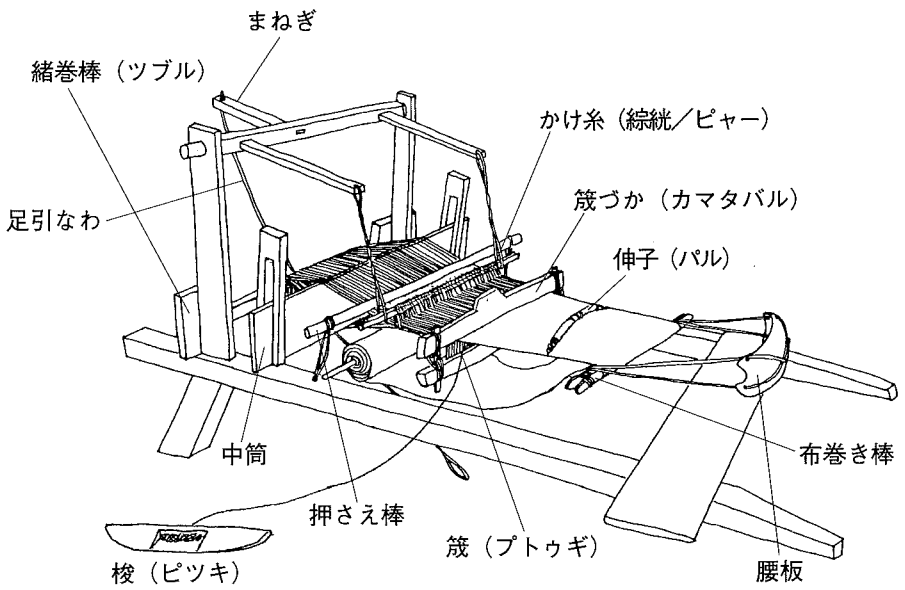


図１　地機

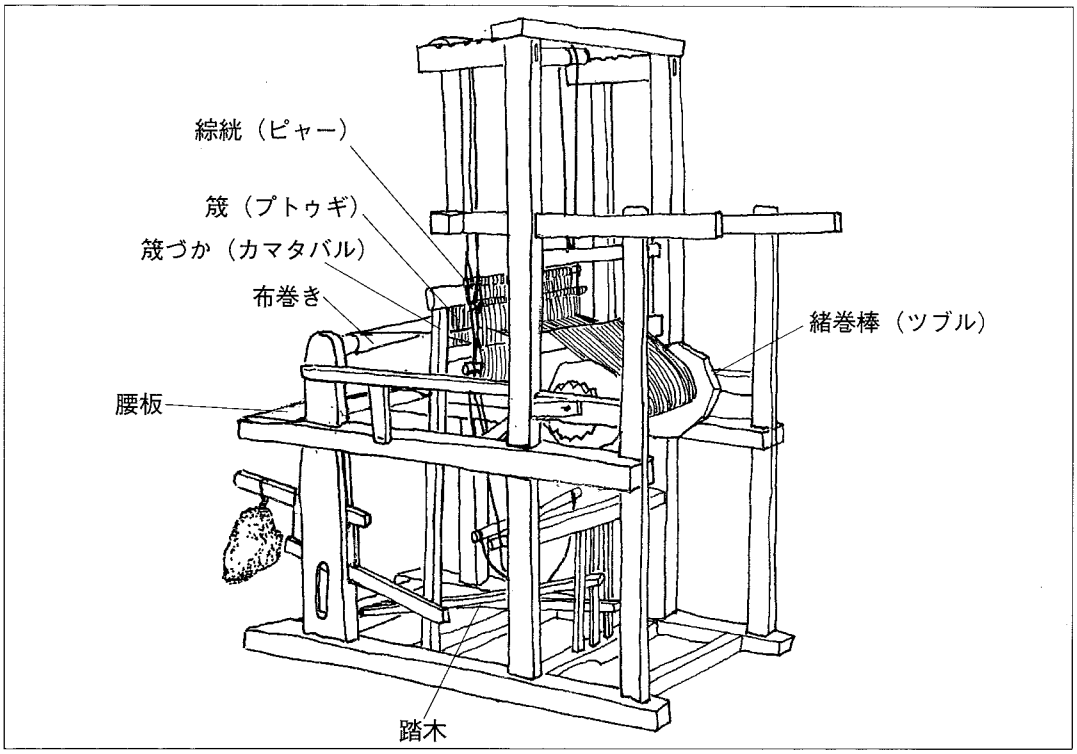

綜絖（ピャー）
筬（プトゥギ）
筬づか（カマタバル）
布巻き
腰板
緒巻棒（ツブル）
踏木

図２　高機A

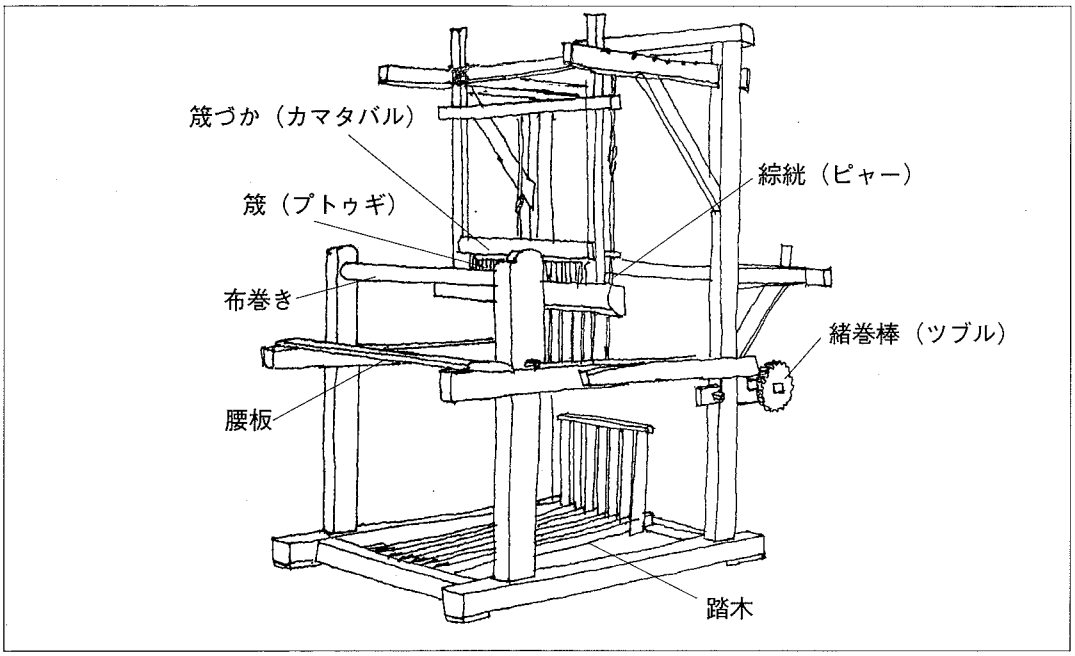

筬づか（カマタバル）
筬（プトゥギ）
布巻き
腰板
綜絖（ピャー）
緒巻棒（ツブル）
踏木

図３　高機B

聞き書き１（新城寛好：大正11年／星立）

星立で生まれて、星立で育ちました。

母親がちょっと機織りをしていました。芭蕉（註２）を織っていたんじゃないかな。母親の名前はナヘマ、明治28年か29年生まれだったと思います。

木綿もやったんじゃないかなと思います。木綿の紡ぎガナでやったものが、母が亡くなった後で残っていました。

芭蕉は、自生のを採っていたんでないですかね。自分の畑じゃなくてですね。

木綿の畑はちょっと覚えていないですね。巻いたのはあったけれど、買ってきたかどうか分からないですよ。買ってきたとしたら、やっぱり石垣じゃないですか。そう言えば、昔、蒸気船が白浜に入りました。取り寄せてくれる人がいたかもしれないですね。

ブー（苧麻／写真１・註３）もやっていたんでないかね。畑は自分の屋敷内にありました。

残された箱の中には藍染めの糸なんかありました。藍染めは覚えていませんけど、藍畑は山の中にありました。親父から「ここが藍の畑だよ。こんなんだよ。」って言われた所があるんだけれど、今、行ってみたらもう荒れていました。山の中にりっぱに石垣が積まれてあって、藍の畑や茶畑があるんですよ。あそこだよと言われたけれど、今は何もかも生えていて分かりません。

蓑は編んでから泥に浸けました。そのままのと泥につけたのと寿命が違うらしい。色づけのためもあるらしい。

写真１　苧麻

聞き書き２（新城トヨ：大正13年生／星立）

ばあちゃん（姑／新城ナヘマ）はうちが嫁に来たころ（昭和18年、新城寛好に嫁ぐ）まで、芭蕉を織っていたよ。戦前、星立で、うちのおばちゃんほど機織りする人はいない。終戦直後までですよ。82歳で亡くなりました。

ばあちゃんは地機（ジバタ／図１）でしていらした。あれからもう、地機もあまりやらなくなって。

戦争中だったんでないかね、最後は自分が績んだ芭蕉で織って。あれが、ばあちゃんが機織した最後さ。経も緯も芭蕉だったよ。

木綿糸があったんだよね。糸と言っても、ウタラ炭坑（註４）から持ってきて、織っていたんですよ。あれはシルケット（註５）って言っていました。芭蕉だけでは足りないって言って、縞糸に使ったりしていたんでないかね。

昔は、星立でも蚕を養っていた。春ウとか夏ウとかありました。とにかく繭はほとんど石垣にやっていた。繭から糸を取りはしたけれど、あまり上手ではないから。屑繭とかは、炊いてから布団の中に使ったさ。紡いで糸（紬のこと）にすることは教えられなかった。もう、あれから戦争だからね。

藍は「沖縄藍」とか言っていたかね。「琉球藍」とが言ったはずね。インド藍はやっていなかった。

染めるのにクール（註６）とヒルギ（註７）を使っていた。クールは赤っぽい茶色だった。クールは何かヒルギとはちょっと違う色。ヒルギはちょっと濃いな。ヒルギは網染めたり、昔の船の帆を染めたりした。フクギ（註８）とモモ（註９）も使った。フクギは黄色を染めた。黄色の濃いものは桃皮。昔はスオウの木（註10）も使っていた。染めて着てはいたが、色がね。

そうそう、うちが染めたのは、泥に埋めたさ。

15ヨミの整経するとしたら、ひとヨミは40本。15ヨミは40本×15で、一幅に600本。

ばあちゃんはカシカキキー（図４）を使って整経していた。キーボーは糸巻くもの。

石垣に棒入れて、糊付けしたり、糸張ったり（図５）。それは、カシタビと言っていたけど。もう名前なんか分からないね。

模様は無地じゃなかったかね。残っているはずですよ。

地機は戦前まではあったけど、戦争中なって、もう使えなくなってね。おじいさんが大工して、地機作って、ばあちゃんが織っていらした。地機の足なんか、チャーギでちゃんと作ってあったさね。

道具はもうどの家にも無いはず。戦争の時に、使ったり燃やしたり、捨てたりして。

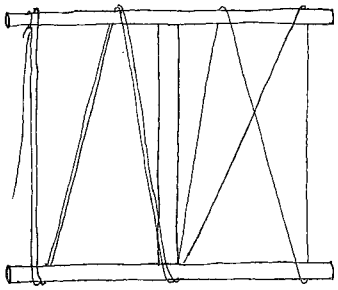


図４　工型の道具（カシカキキー・ピナシ）

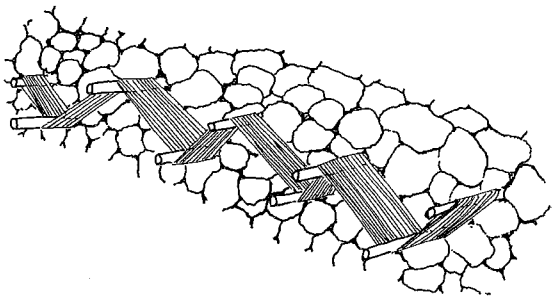


図５　糊付けで経糸を引っ張る

ばあちゃんがやっていたから道具があったの。私が来てからもやっていたからさ。これは地機と言っていた。機織りは好きではあるけど、忙しかったからさ続かなかったね。

地機と今の機（高機）と何が違うのって聞いたら、足が違う。筬とか杼とかは、買ったり作ったりした。うちは姉さんの所にあるものを使った。ばあちゃんのものはクロキだった。杼は細長くてピと言っていた。筬はブドゥシ、綜絖はピャと言っていた。綜絖を掛けるのをピャカキと言うさね。

布は出来上がって布洗いした。布晒しと言って、海で洗って、また真水で流して。一回ぐらいしかしなかったんじゃなかったかね。

芭蕉の洗濯はシーカーサーでする。普通の洗濯の時にさ、芭蕉はシーカーサーですると上等と言われた。

聞き書き３（那根弘：明治44年生／祖納）

祖内で生まれて祖内で育ちました。戦役行って、終戦後、帰ってきたんですけどね。

母親（那根トヨ／明治20年頃の生まれ。私が24、５歳の頃亡くなる）が機織りをしていました。昭和の初め頃（昭和21、22年）までは織っていたと思います。

こちらはもう芭蕉が原材料の主なもので、その他はもう綿ですね。木綿も織っていました。木綿の畑はありませんが。芭蕉は今でも野生のものがたくさんありますからね。

それから絹、絹織りもあったですよ。蚕を飼いましてね。それで糸を取って、父親の羽織を織っていた。私の記憶では、長男までは織ってあげたと思うんです。私は三男です。

蚕は繭を育てるためのものです。石垣に送っていました（註10）。むこうに送る場合には、小包にして送っていたと思うんですが、はっきり覚えていません。大正７、８年頃のことですね。家で使う分を残して、それで羽織などを織ったと思うんですよ。この頃は蚕を飼っていた所がたくさんありましたよ。いっぱい飼いました。蚕の糸を取る時は、座繰りでやっていました（図６）。他から教えてもらったと思うんですがね。

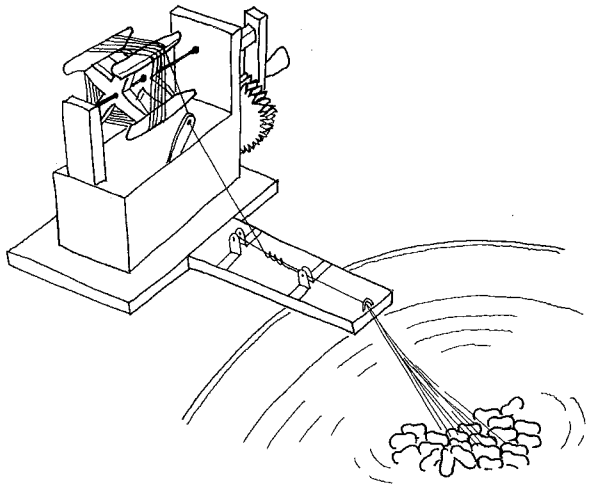


図６　座繰りによる糸取り（繭）

木綿は、那覇とか、外から仕入れしてきてね。シルケットとかそういうものですね。　ブーもやっていました。ええ（ブーの畑は）屋敷内ですね。（刈り取りは）２回から３回位じゃな

いでしょうかね。

芭蕉は自分で使うものは、使う分は取ってきて・・。幹の上の分と下の分は省いて、真ん中の分、そちらが非常に良いそうですよ。ひと皮ふた皮程剥いて、その次の皮がいいようですね。また、真ん中のほうはジャーワイですからね。おそらく繊維は使えない。ひと皮かふた皮か剥いで、家へ運んできて、大きなかめに適当に束ねてですね。そしてそれを薪で炊いたんですよね。その後、削ぐんですよ。その時は、包丁か竹で削いで、干して適当に乾かすんです。陰干しですね。そして適当に乾燥したときに、手で細かく、こうまた、手の爪で裂いて、それを手で、捻りながらじょうずに繋いでゆくんですね。繋いだ芭蕉は竹で作った籠に入れました。籠の名前は覚えていません。

子どもの頃だからあまり記憶していませんが、糸は竹の管に巻いていました。経糸はヤマ（糸車）で撚糸します。

もう昔はジーハタ（地機）ですからね。地機の骨組みはイヌマキだったと思います。チャーギです。堅くて長持ちして丈夫ですからね。お袋は高機までは使っていましたよ。杼の事はピーツキ。

整経は、カシカキの踊りでやっているようにしていました。

竹富、石垣と違って、こちらでは織り手が少なくなったということは、炭坑の影響があると思います。炭坑は祖納、白浜そのあたりにありました。こちらの炭坑は石炭の層がものすごく厚いそうです。個人の経営でやっていたのは、昭和13年、終戦前までありました。大正の初め、炭坑景気が出まして、機織りの難儀を考えると、まあ、炭坑に行けば、どんなりっぱなものものでも入ってきますからね。そういったこともあって、こっちの機織りが早くに途絶えたんじゃないですかね。

炭坑の販売所。あそこから、買って来るんですよね。それがもうりっぱな反物など、自分の気に入る反物などが買えましたから。金儲ければ、安く良いのが買えるということで、これで途端に機織りが下火になってしまった。食料品なども入ってきますからね。

聞き書き４（那根フミ：明治41年生／祖納）

ばあさん達が使っていた機織りは地機（ジーパタ）。父の母親がやっていた。

ヤマ（糸車）は、織物するとき、糸を巻く時に使うさ。ヤマは回るでしょう。フダ（竹管）に糸巻く時に、ばあさんがよくこうしてブンブンブン回して、次は引っ張っては、ザーッと回して。この頃、子どもだから、自分でもできると思って、「させてごらん」って言ったけど、糸がもつれたり、ゆるくなったりしたら、織る時にできないからって言われたことがある。

織る時には、水か何かに浸けてから、つぎつぎにね。今日はこれだけって、水に濡らし

ておいてから、織るんですよ。

芭蕉の糸を繋ぐのは、戦前、隣組で教えてもらった。ただ、糸に出しただけで、機織りはしていない。機織りってのは自分の道具を持っていないとできないから。あるって言っても何軒しか、こういうの持っていないし。

糊浸けて広げて、石垣に引っ張るのは、今日はカシバイするって言っていたね。

聞き書き５（吉峰セツ：大正13年生／古見）

戦前は、こっちも東部といっしょですよ。うちの母方のばあちゃん（大底イントゥ）なんかの時代は、ブー（苧麻）をやったり芭蕉をやったりしていた。母（吉峰オナリ：明治35年／寅年生）は、戦前、少しづつやってたんですけど、ブーや芭蕉ばっかしというのは無かったですね。シルケットとかと混ぜて織っていたと思います。いや、母のものでブーだけで織ったものがありますね。シルケットは白い糸で染めた糸ではない。母が織っていた頃から売っていた。

戦前にはちょっと母のものをいじってはいたけど、私自身が当時は織物をやる歳ではないのに。織物は母から習った。学校で習ったということはありません。

＜糸について＞

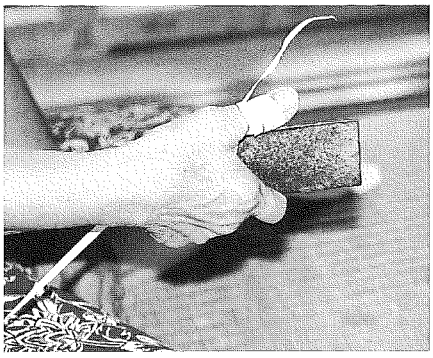


写真２　ブーピキアッカイ

糸はブーが中心ですね。あの頃、ブーは自分達で育てていないですよ。山にある山ブーを使いました。１月頃から２月、３月頃までの間に一年間のものを採っていたみたいですよ。湿気のある所に、毎年取るから、毎年生えてね。私は、ばあちゃんといっしょに採りに回っていたから分かるんですよ。開発センターあたりは、今はキビがありますが、あの時分はもう、ずっとブーがありましたよ。ゴッカロウってあるでしょう。アカショウビンね。あれは赤いでしょう。あれが鳴くと、ブーも赤くなってダメだって言われました。あれが鳴く時分は、３月以後ですので、「これは採らない」とばあさんが話していました。今は、ブー畑は、たいがいお家の周囲ですね。40日で採っています。

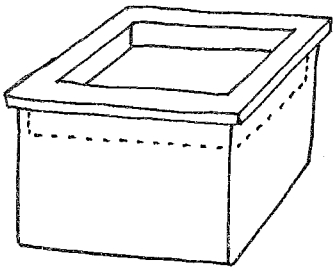


図７　スクイ

ブーは苅って来て、削いで糸にします。しごく道具は今もありますよ。これはブーピキと言います。道具は、アッカイと言います。ブーピクアッカイですね。芭蕉もブーもこれでやりました。アッカイは元々は貝だった。その後、

鍋の破れでやったんです。今もう、カンジャーヤーで作ってくれる。

昔はね、マーニの葉っぱを、親指に巻いて、ブーをうつむかせてチャーっとアッカイでやると、皮がスーッととれて繊維だけ残る（写真２）。これを二回ぐらいやるんです。今はマーニーは巻かない。今は手袋。

繊維になると干してピス巻きする。丸く巻くのはピスと言う。

バタピキという方法があるさ。ぐるりと繊維を巻いて輪にして米の汁に浸ける。杵で白米にしたものを水に浸け、酢だちしたものにしばらくブーを浸けるんですよ。そしてトントントンとやると、白くなる。それをスクイ（図７）の蓋の上に置く。そのままだとカラカラなるので、青い葉（フーツと言う）を乗せておいて、その後、ブーを績ぐ。スクイは四角い箱で蓋がポンと落ちるようになっている。落とし蓋のようになっている所に、今日績むぐ分を巻いて置いて、そこに葉っぱを乗せて湿らせて、績いだのはスクイに入れる。でも、たくさんバタピキを用意すると、米に湧く虫（ツヌムシ）がつくさ。

昔は芭蕉でもブーでも、糸の繋ぎは結ばない。こっちはね、こうして撚る。きれいに撚ったら抜けないよ。緯糸と経糸はやり方が違うさ。経は特に多く撚る。経は１本の糸を裂いて、一つは長く、もう一つは短くして、継いでいく。またこれが１本になって（図８／写真３）。

経糸の場合は、ヤマで撚る。緯糸はやらない。経糸はこうブンブンやるさ。

芭蕉は灰汁で炊いて繊維を取る。まず、灰汁を炊いて、そこに芭蕉をそのまま鍋に入れる。どんどん炊いて、丁度いい時に、たらい下ろす。そして、くわず芋の葉っぱで被せて、しばらく置いておく。30分以上かな。それから、こんど水で洗う。次にアッカイで繊維を取るさ。

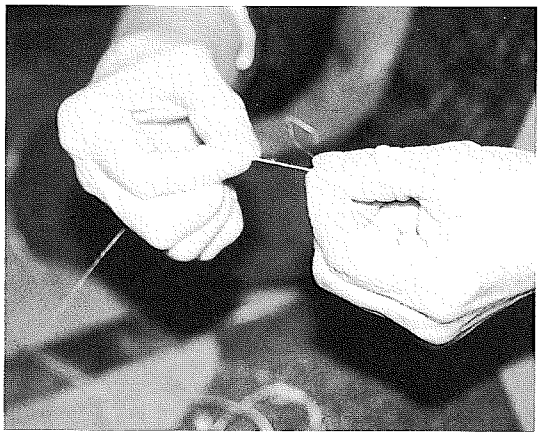


写真３　糸積み

芭蕉もブーと同じ継ぎかた。芭蕉も績だ

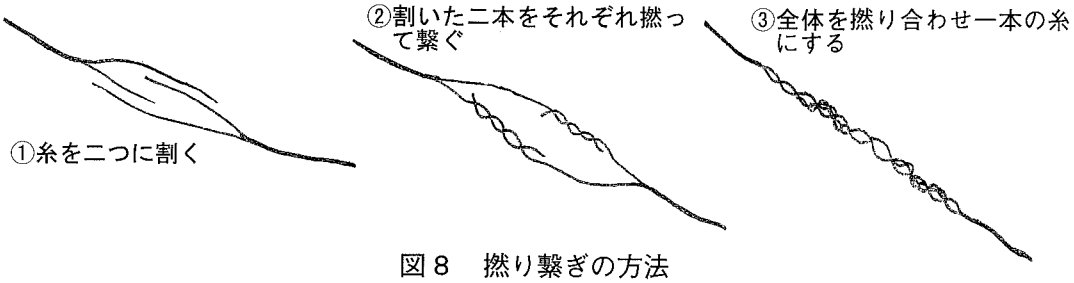


図８　撚り繋ぎの方法

ら、スクイに入れて、経糸を一反分くらい績いで、それをブーン、ブーンって、ヤマ（糸車）で撚糸します。経にする糸と緯にする糸の績ぎは同じですけど、緯にするのは、はずれてもいいんですけど、同じ績むぎ方でも経にするのはものすごく、きれいにね、引っ張っても抜けないようね。

昔は家造りの時にね、年寄りが五、六名集まると、ブーを績がせていた。茅葺き家とか、新しい家を造る時にはね、そういう習慣があったんですよ。お年寄りがいらっしゃる時は、ブーは準備しておいて、それぞれに渡すんです。五、六人が作るので、二日か三日ぐらいで、一反分ぐらいはあるさね。

母は養蚕もしていました。あの頃はもうどの家でもやっていた。繭出しがほとんどです。竹富に持って行きました（註12）。ここには養蚕組合はない。昔の家は茅葺きで広かったからね、一番座の畳を取って、そこにね棚（養蚕棚）を作って。戦前の事ですよ。

ザクリを持ってきて、紡いだのは竹富で。糸にして一反織ったのがあるさ。

写真４　フクギ

繭はほがしたもの（蛾が出たもの）を炊いて真綿を取りました。釘を四角に打って繭を炊いて、これを引き伸ばしてね。何枚も重ねて、綿を作りました。布団やちゃんちゃんこの綿に。

（機ごしらえ）は戦前は、母が全部やっていた。巻くときに手伝いはするけれどね。

＜染めについて＞

藍染めがありました。藍は二種類あった。葉が小さくて、種が豆みたいになるの（註13）と、葉っぱが大きく細長くて野菜みたいに低いもの（註14）と。豆の生るものは丈が高くなります。あれは何でしょうね。聞いたんだけど覚えていない。「トウ藍」とか「台湾藍」とか言っていたようです。藍はばあさん時代はやっていたんですけどね。葉の小さいものをよく使っていた。もう一つのものはあまりみない。母は藍の固まりを買ってきて、やっていたみたいです。

藍は葉っぱを伐ってきて、浸けて、まあ何日か置いてから、発酵しますよね。石灰を入れて。うちのばあさんが、甕にやっているのを見て、あまり女は近づくなとか言ってさ。やっぱし若い女は不浄のものと、今は近づくな言われたさ。生葉で染めるってのはしないですね。昔の家の茅葺きはちょっと軒が長いから、その軒下に置いていてやっていたけどね。

茶色はクールで染めて、黄色はフクギ（写真４）の皮。以前はウッチン（註15）もやっ

ていたけど、これはちょっと色が飛びますね。桃の皮も使います。

昔はマングローブは染物にも使った。船の帆も染めたりして。着物の糸もこれで染めた。メヒルギで皮が厚いものは染物用。皮が厚いので染まりが良い、オヒルギはね、皮が薄くて青っぽい。これは薪や物干し竿に使う。

終戦後、大和から来て、ヒルギをエキスに固めてね、内地に出していた人がいた。石垣のに住んでいて木村と言う人だった。上布の染料ではなかったですね。

シャリンバイ（註16）、フクギ、ヒルギ、クール、ヤマモモの皮。他にはあまり使わなかった。ヤマモモは薄黄色。スオウの皮も使っていた。これはクールより少し紫がかった色になる。でも、それはあまり使わなかった。

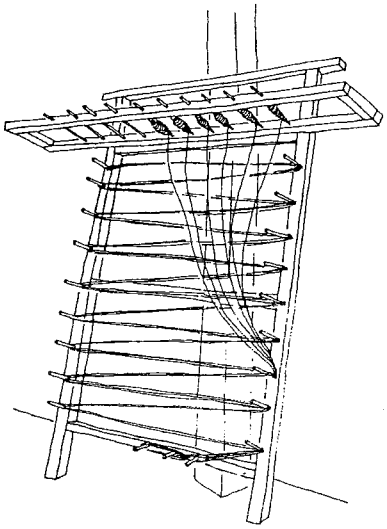


図９　枠型の整経台

染めは、糸を濡らしおいてから染める。そして、媒染（註17）して、２、３回染めるさ。媒染は灰汁に浸けたりしました。泥にも浸けましたよ。田圃に持っていってね。こっちの田圃はよく浸かるとか、そういう風にやっていましたよ。

灰汁は、昔はカマドの灰です。たいがいガジュマル。ユウナの灰が良いと言われた。藍に使うのはね、ガジュマルの灰でしたね。

終戦後はね、イカの黒でも染めていた。色々やっていたみたい。母の頃は、ビンに入った化学のものはなかったね。

＜織りの模様について＞

戦前の模様は、経縞が多かったな。絣もやってたみたいですよ。そうね、絣入れて、色んな柄あったよ。矢絣みたいのがあったりね。タテシマ、アカシマってよく織ってたさ。経縞のタテシマ。アカシマは男の人なんかの十字の星の形の絣のもの。

絣は小かせにしてやっていたはず。私はこれはやっていない。小ガセ作りの道具は、ピナシ（図４）でやっていたんでないかなと思いますよ。カセ用の短いものがあった。

絣は芭蕉上皮があるでしょう。あれを枯らしたもので巻いて作りました。

＜道具について＞

昔は経糸を整えるものは、ピナシって言って、手がついて、長さを測ってどんどん巻いていたね。私はやったことはないけど、ばあさんなんかがやっているのを見た。大小ありました。小さいのは染めのカシを作るため。大きいのは布の経糸用。

立て掛け方式の整経台（図９）は、これは母の時代からありますね。明治の終わりぐ

らいから使っていたと思いますよ。

地機はズーパタ。パタムンとも言いますね。母は上布を織るようなシマバタ（高機A／図２）を使っていた。ジーバタは小母さんがやっていた。ヤマトバタ（高機B／図３）になる前は私も使っていました。この機は（筬塚が上から）下がっているので、慣れるまで難儀でした。

母の兄嫁が竹富の人で、あの人が古見に来てから皆高機になったんです。それから地機から高機に代わったそうです。

杼はピッキ。黒木で作られた長いものでした。筬はプドゥキ。巾を張るもの、あれはパルと言う。あぜはアジ。男巻きはツブル。筬塚のことをカマタバルと言う。

綜絖は糸で自分で作った。ピャと言っていました。整経してきたものに四角い箱を置く。箱には棒を入れてあって、糸を巻いてきて、終わると棒をポンってはずして。箱にね、あぜみたいに掛けてやったらしい。

註１）

＊「与世山親方八重山島規模帳」（乾隆33年）より芭蕉植付様之事

＊「翁長親方八重山規模帳」（かん豊７年）

＊「冨川親方八重山御用布座公事帳」より

一諸事勤之事／一諸道具之事／一御用布取納之事／一御用布調方之事／一諸御用布櫃並布丸之事／一御用布取納尺之事／一諸帳出日限之事／一勤星取立様之事／一定布ならび御用布名定之事／一御用布貫ふとき目ならび長定之事

＊「冨川親方八重山島諸村公事帳」より

一藍遣人之儀御用布かせ貫取調部染調方相働候也／一布晒人之儀御用布織取次第干晒方相働候也　－略－

＊「冨川親方八重山島農務帳」（同治13年）

農事手入之事／藍仕立ならび製法之事／芭蕉植付様之事

＊「沖縄縣八重山嶋統計一覧略」（明治25年／沖縄県立博物館蔵）

註２）バショウ科の多年生大型草本。イトバショウ（学名：*Musa Lukinenisis* Makino）の事

註３）和名：カラムシ。学名：Boehmeria nivea Gaundich, f, viridula Hatusima
方言：ブー（八重山地方）、ウー

註４）大正８（1919）年に丸三鉱業が宇多良地区を中心に採掘させた炭坑のことか（P79 星勲『西表島の民俗』友古堂書店　1981年２月）。

註５）シルケット加工のこと。JIS繊維用語：セルロース繊維製品をカセイソーダの濃厚

液で処理し光沢などを与える加工

註６）ヤマノイモ科の蔓性多年生草本。塊根は多量の暗赤色の色素を含み、八重山上布の染料に用いられる。学名：*Dioscorea cirrhosa* Lour.

註７）マングローブ林を構成するヒルギ科の植物にはオヒルギ、メヒルギ、ヤエヤマヒルギがあり、染料として使われたものはメヒルギ（ヒルギ科の常緑小高木。学名：*Kandelia candel*（L.）Druce）である。

註８）オトギリソウ科の常緑小高木。

和名：フクギ。学名：Gracinia subellipticaMerr

註９）楊梅。ヤマモモ科の常緑高木。学名：Myrica rubra Sieb. et Zucc.

註10）王府時代に染料として使われていたスオウは「蘇木」の文字で文献には現れる。しかし、この植物は沖縄では育ちにくく（P193（27）與那嶺・山田「吉濱家文書『紬関係書類』より九題」沖縄県立博物館2000年）、南方からの輸入品が使われている。

ここで言われるスオウはサキシマスオウ（アオギリ科の常緑大高木。学名：*Heritiera littoralis* Dryand.）のことである。

註11）八重山における養蚕は、1815年、粟国島から石垣善全によって蚕種と養蚕法が伝えられたことが初見と言われているが、それはうまく浸透せず自然消滅している。その後、明治27年、八重山島役所時代の勧業主任中島兼次郎が郷里の鹿児島から蚕種を取り寄せ養蚕を指導したのが八重山養蚕業再興となる。大正14年頃から昭和５年頃にかけて全盛時代を迎える。昭和６、７年頃、繭値の下落を契機に、郡農業会を発足させ、製糸会社瑞泉社に加入し普通蚕に原蚕飼育を始めたり、繭乾燥場を設置するなど働きがある（P90宮城文『八重山生活誌』昭和47年）

註12）竹富島においては、明治34年、鹿児島より中座政太郎（竹富島巡査）が蚕種を持って来たのが、養蚕の始めとなる。繭のまま御倉蚕糸工場へ販売されている（P37『沖縄民俗　第10号』琉球大学民俗研究クラブ　1965年）。

註13）タイワンコマツナギやナンバンコマツナギなどの植物から採れる藍のこと。インドアイの名で知られる。

註14）蓼藍のことか。

王府時代の文献資料には「唐藍」「島藍」と二種類の藍が確認される。これについて、深石隆司氏は唐藍はリュウキュウアイ、島藍は蓼藍ではないかと述べている（「島藍・唐藍考」沖縄タイムス誌　2000年１月11日～14日４回連載）。筆者も波照間調査（平成９年）の際に豆科植物による藍以外に、「トウエー」があったことを聞いているが、琉球藍を示すものとして考察した。しかし、リュウキュウアイと

して確認してはおらず、波照間の藍も蓼である可能性もある。また、与那国調査（1988年）の際にはリュウキュウアイは育ちにくく、蓼藍は育ちやすいとの回答を得ている。

註15）鬱金。ショウガ科の多年生宿根草（学名：Curcuma Longa L.）

註16）オキナワシャリンバイ。バラ科の常緑小高木。*Rhaphiolepis indica* Lindl. var. insularis Hats.

註17）媒染とは繊維への染料の染着を媒介することをいう。木灰はそのアルカリ成分が、田泥は鉄分が媒染剤としての役目を果たす。

西表島のパナリ焼

瑞慶山　　昇

はじめに

平成10年度から平成11年度にかけて、西表島のパナリ焼について調査を行った。パナリ焼はその土味や焼き、素朴な形態などの魅力から愛好家が多く、八重山を代表する焼物としてよく知られている。パナリ焼は県内外にかなりの数が現存しているものの、その起源についてなど多くがほとんど分かっていない。今回の調査は西表島のパナリ焼の確認を目的として行った。

調査地域

調査は主に大原で行ったが、祖納や上原でも所有している方がいるとの情報があり、確認調査を行った。また古見の海岸にパナリ焼の欠片が、多数散乱しているとの情報もあり調査を行った。その他にもパナリ焼に関する幾つかの情報があったが、残念ながら全てを調査することは出来なかった。

大　原

パナリ焼の名称が、八重山でパナリと呼ばれる新城島からきていることや、新城島で大量のパナリ焼の欠片が確認されていることなどから、新城島でパナリ焼が焼かれていたことは確かである。大原は新城島から移り住んだ人達の集落である。そのためパナリ焼を所有している方がいる可能性が高いと考えた。調査の結果、竹富町離島振興総合センターに、二点のパナリ焼が保管されていた。また個人で所蔵されている方が幾人かおり、三点が確認できた。いずれも所蔵するに至った経緯は不明であった。大原の方の話では、数年前まで庭先でパナリ焼の壺や、火取などが普通に見られたとのことである。現在見られなくなった理由は、もともと低温焼成によるもろい土器質であるため、風化し破損して捨てられたためだと考えられる。大原では合計五点のパナリ焼を確認した。その他にも二点のパナリ焼を所有している方がいたが、直接確認することはできなかった。また、近年まで所蔵していたパナリ焼を、那覇市在住の収集家に譲った方がおり、那覇市でそのパナリ焼一点を確認できたため、西表のパナリ焼として図版に掲載した。

古見の古墓群

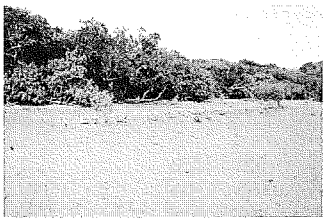
1980年に沖縄県教育委員会が発行した、沖縄県文化財調査報告書第29集「竹富町・与那国町の遺跡」によると、後良橋北西の山林中の古墓群で、大きな石灰岩を方形に積み上げ、石灰岩の蓋石をのせたミヤーカ形式の古墓が数十基存在していたが、開発青年隊の訓練所建設で大部分が、破壊されてしまったとのことである。また、同様の古墓群がカサ崎近くにもあるが、牧場建設でかなり破壊されているとある。それらの古墓からは、パナリ焼等が副葬品として見つかっている。大原在住の方で以前に十点近くのパナリ焼を所蔵していた方の話しでは、古見に住んでいた方が工事のため、カサ崎近くの古墓を壊したところ、パナリ焼が出てきた。その中のパナリ焼数点を、譲ってもらったとのことである。沖縄県立博物館が1984年に発行した「沖縄県の考古資料（土器）目録」に、その方の所蔵していたパナリ焼のリスト、及び写真が掲載されている。写真に掲載された二点は、「底に穴あり」の記載があり、副葬品に使用されたものと考えられる。おそらく牧場建設工事で壊された古墓から出たものであろう。出所が明確な数少ない貴重な資料である。今回の調査では、残念ながらカサ崎近くの古墓群の現状を確認することは出来なかった

祖　納

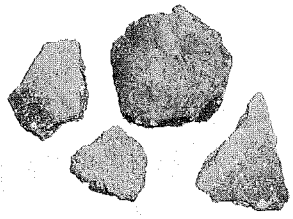
祖納の集落の近くに、早稲田大学調査団（1960年）発表の八重山遺跡編年表で、第三期に属する上村遺跡がある。沖縄県教育委員会が過去に発掘調査を行ったところ。土器や陶磁器片に混ざって、パナリ焼の欠片が発掘されている。それは上村遺跡に暮らしていた人達が、パナリ焼を使用していたことを示している。このことから、上村遺跡に隣接する祖納に、パナリ焼が残っている可能性があると考え、調査したところ二点が確認された。しかし残念ながら、二点とも所蔵するに至った経緯を明確に知ることが出来なかった。上村遺跡に関連するパナリ焼であるかどうか不明である。この地域では十分な調査時間がとれず、他にも所蔵している方がいるとの情報があったが、確認することができなかった。

古見の海岸

沖縄県文化財調査報告書第29集「竹富町・与那国町の遺跡」によると、古見集落から平西島へ突出した丘陵とその傾斜地に形成された遺跡で、外来陶磁器や土器等が海中まで散布している。これが古見赤石崎遺跡である。とあることから古見集落の海岸に見られる土器片や陶磁器片は、古見赤石崎遺跡の遺物の一部であると思われる。海岸には近世の陶磁器片に混ざって、赤褐色の土器質の欠片が散乱する。土器と思われる欠片は、中央が黒っぽく両端が赤褐色で胎土に大量の混入物があり、パナリ焼の特徴と一致している。



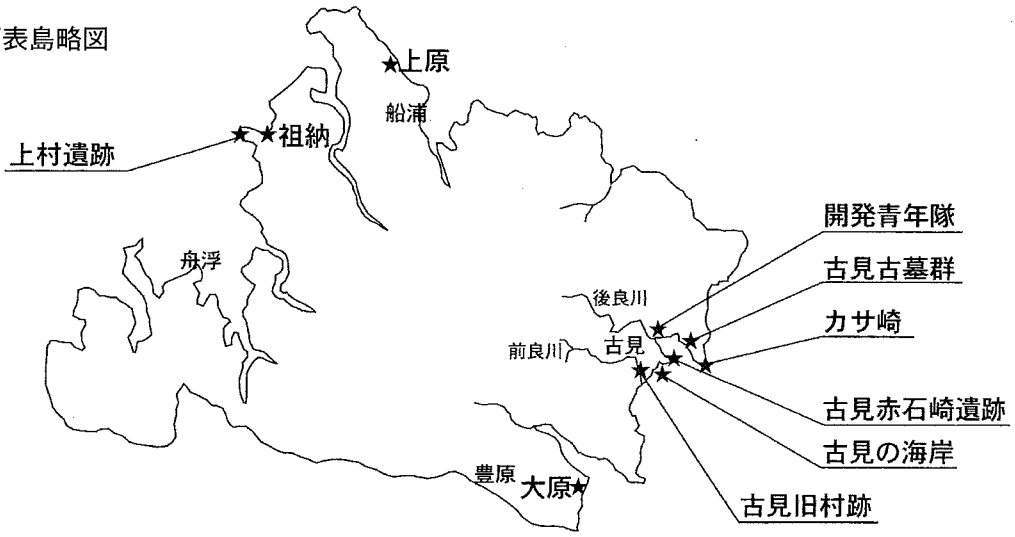
古見の海岸。岸近くに土器や陶磁器片等が散乱している。



表面採取されたパナリ焼きと思われる欠片。

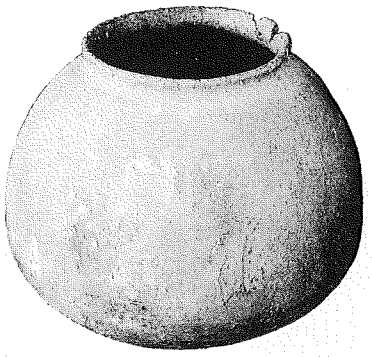
欠片の断面。白い混入物が大量に含まれている。

西表島略図



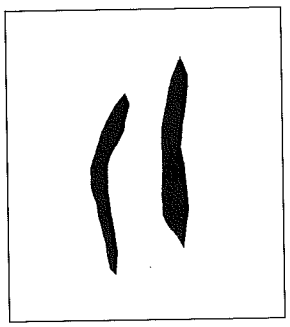
資料図版

本報告書では個人所蔵者への配慮から、個人の氏名及び住所は明記しないこととした。以下、西表島で確認できたパナリ焼（那覇市在住の収集家が、近年西表島から収集した資料１点を含む）を図版で紹介する。尚、判のある資料は拡大写真と図で示した。



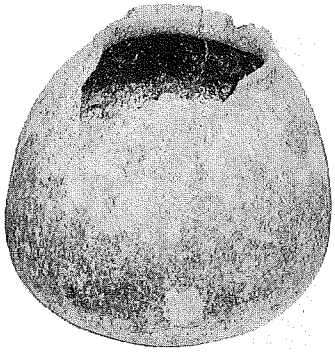
資料１．パナリ焼壺

器　高：28cm
最大径：34cm（胴部）
備　考：判有り、底に約５cmの穴有り。叩き等により成形後、へら叉は指を使って撫で仕上げ。底部は丸く削りとられている。胎土に混入物多数。全体に白い石灰質付着。回転台を使用したものと思われ、薄く丁寧な仕上げである。口の部分の小さな欠けと胴の小さな剥離（焼成時にできたものかもしれない）以外は良好な状態である。個人所蔵。



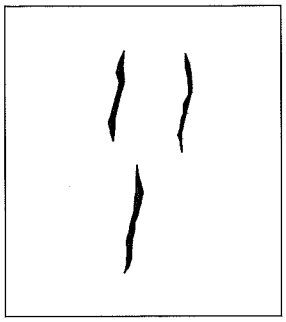
資料２．パナリ焼壺

器　高：30cm
最大径：30cm（胴部）
備　考：判無し、底部が約18cm大に破損している。口縁の一部破損。底部は丸く削り落とされている。荒めの土を使用しており、内部は撫で仕上げされている。混入物が多く表面からもはっきりと見える。赤褐色。竹富町教育委員会所蔵、竹富町離島振興総合センター保管。



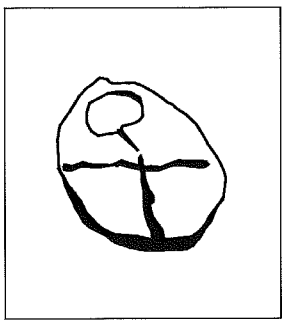
資料３．パナリ焼壺

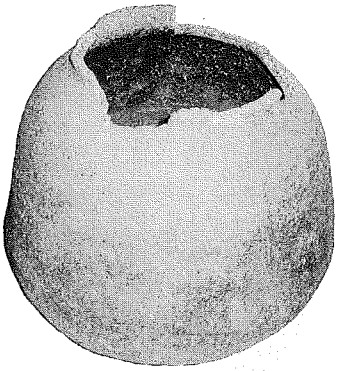
器　高：28cm
最大径：32cm（胴部）
備　考：判有り、口縁部の一部破損。底に約１cmの穴有り。口縁部分から底の中央部分にかけて、細いひび割れ有り。叩き等で成形後、へら叉は指を使って撫で仕上げ。底部は丸く削られている。荒めの土を使用、厚めで重い。口縁部の破損箇所断面から、混入物の量の多さがわかる。表面は黒っぽく胎土は赤褐色。個人所蔵。



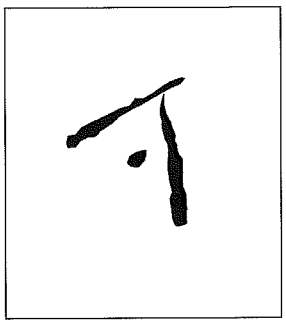
資料４．パナリ焼壺

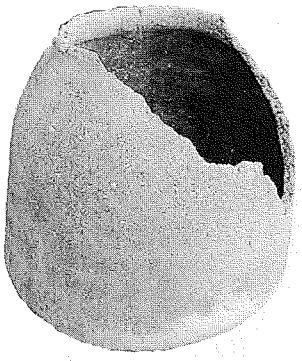
器　高：25cm
最大径：31cm（胴部）
備　考：判有り、底に約１cmの穴有り。口の部分から底の中央部分までひび割れ有り。成形後へら叉は指を使って撫で仕上げ。底部は丸く削り落としてある。荒めの土を使用、厚めで重い。混入物が多く、器物表面は混入物が剥がれ落ち、無数の小さな穴となっている。個人所蔵。



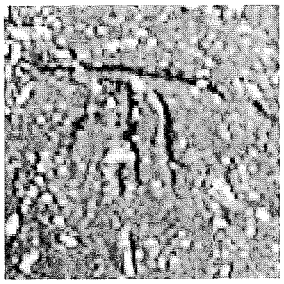


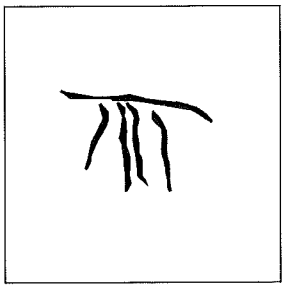
資料５．パナリ焼壺
器　高：27cm
最大径：31cm（胴部）
備　考：判有り、底に約１cmの穴有り。口縁部の一部分破損。叩き等で成形後、へら叉は指を使って撫で仕上げ。底部は丸く削り落とされている。荒めの土を使用、厚めで重い。混入物が多く赤褐色。個人所蔵。

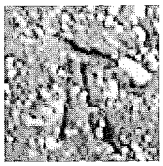




資料６．パナリ焼甕
器　高：39cm
最大径：36cm（胴部）
備　考：判有り（二箇所）。内部は撫で仕上げ。底に約２cmの穴有り。口縁部から胴部にかけ大きく破損。成形後、へら叉は指を使って丁寧に撫で仕上げられている。底部は丸く削り落とされている。細かな土を使用、薄く軽い。混入物が多く赤褐色。底部に白い石灰質付着。個人所蔵。

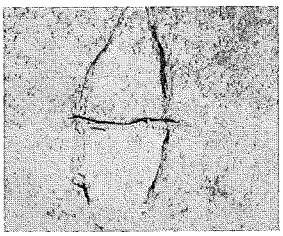


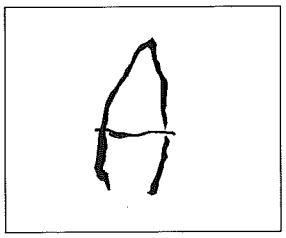


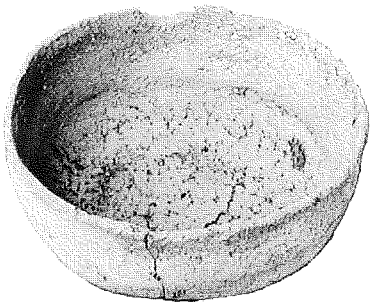


資料７．パナリ焼甕

器　高：40cm
最大径：30cm（胴部）
備　考：判有り。底に約1.7cmの穴有り。口縁の一部分が小さく欠けている以外は破損がない。細かな土を使用し内部は撫で仕上げで、底部は丸く削り落とされている。回転台を使用したと思われ、口縁部から胴部へかけて滑らかな曲線が見られる丁寧な仕上げである。混入物が多い。表面に薄く白い石灰質が付着している。胎土は赤褐色。竹富町教育委員会所蔵、竹富町離島振興総合センター保管。



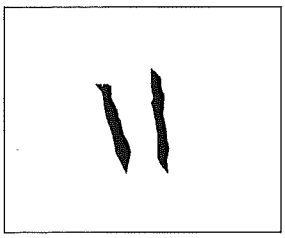




資料８．パナリ焼浅鉢

器　高：15cm
最大径：34cm（口縁部）
備　考：判なし。底に約0.7cmの穴有り。口縁の一部が欠けている。口縁部から胴の部分へひび割れが縦に入っている。底に約４cm大の破損部分があり、さらにその箇所から底の中央へ細いひび割れがのびている。荒めの土が使用され、内外とも指撫で仕上げであるが、表面はあまり丁寧には仕上がっていない。個人所蔵。

資料９．パナリ焼鉢
器　高：28cm
最大径：34cm（胴部）
備　考：判有り、底に修復の跡と見られる箇所がある。口縁部分はやや楕円形で、内側はかなり光沢がある。破損箇所は見られない。内部は撫で仕上げで底部は丸く削り落とされている。混入物が多く器物は厚く重い。大型のパナリ焼で、赤褐色。個人所蔵。



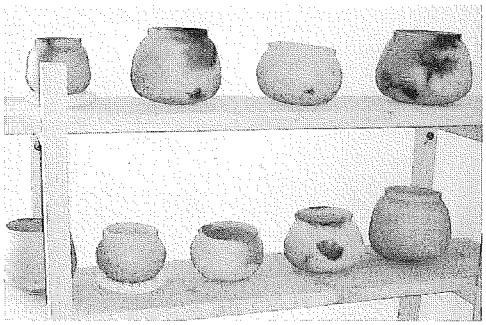
資料10．パナリ焼鉢
器　高：35cm
最大径：44cm（口縁部）
備　考：判無し、口縁部分が胴の回りより大きく作られている。部分的に光沢がある箇所が見られる。破損箇所は見られない。内部は撫で仕上げで底部は丸く削り落とされている。混入物が多く、胴中央よりやや下部に、帯状に白い石灰質が付着している。大型のパナリ焼で、バンドゥガーミ（水瓶）に使用されていた。どっしりとした重量感が感じられる。個人所蔵。

おわりに

これまで幾人かの研究者や陶芸関係者達が、パナリ焼の復元を試みてきた。彼等の努力によって、パナリ焼の成形方法や焼成方法などが、しだいに明らかになりつつある。西表島では、現在大小四つの窯元があり、それぞれ特色ある作品を制作している。その中にはパナリ焼に魅了され、試行錯誤を繰り返しながら現代のパナリ焼制作に、情熱的に取り組んでいる陶芸家もいる。今回の調査では、過去に沖縄県が行った調査資料をもとに、西表島に残るパナリ焼の現状確認を行ったが、時間の制約等もあって細かな調査を行うことが出来なかった。

西表島の陶芸家によって制作された、現代のパナリ焼。

「西表焼青烽窯」



「ひぬかん陶房」

〈参考文献〉

石垣市立八重山博物館「石垣市立八重山博物館所蔵目録～第三集～陶磁器I（パナリ焼）」1995年３月

沖縄県教育委員会・沖縄県文化財調査報告書第10集「沖縄県の遺跡分布」1977年３月

沖縄県教育委員会・沖縄県文化財調査報告書第29集「竹富町・与那国町の遺跡」1980年３月

沖縄県立博物館「沖縄県の考古資料（土器）目録」1984年３月

沖縄タイムス社「沖縄美術全集　１陶芸」1989年11月

やちむん会「図録　沖縄の古窯」1979年10月

西表島総合調査報告書

発　　行　2001年3月30日
編集発行　沖　縄　県　立　博　物　館
〒903-0823　那覇市首里大中町1-1
TEL (098) 884-2243
FAX (098) 886-4353